

魔法少女リリカルなのは
は 紺碧の姫

mom

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

リージョンを飛び越え、リリカルなのはの世界に迷い混んだ、一人の少女が紡ぐ物語
サガフロンティアを知っていると、分かりやすいかもです。

「小説家になろう」で投稿していた魔法少女リリカルなのはStrikers 紺碧の
姫に改変を入れたものです。最後まで頑張りたいです。

目次

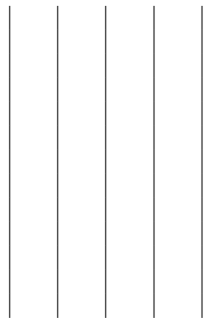
衝動 再來 開幕 一步 思慮 騎士 挨拶 覺醒 邂逅 二人 少女 序章

133 118 97 83 75 62 48 35 23 17 6 1

開戰 母子 複製 分岐 恐惶 地下 休暇 姐姐 和解 焦燥 死神 策士 訓練

398 376 361 347 331 311 298 278 257 234 214 190 145

死 解 迷 吉 零
別 明 路 凶 姉



489 477 454 434 413

序章

無機質な地面を蹴り、息を切らせ、ただひたすらに逃げる少女がいた。碧色の髪を靡かせ、ただ必死に逃げることだけを考えて。警鐘のように打ち続ける心臓に鞭を打ち、走り続ける。追手はすぐそこまで来ている。少女はただ逃げ続けた。千載一遇の機会。私はここから逃げ出したい。その一心で少女は走り続けた。

「アセルス様!! 追手が迫っています。ここは私が食い止めますので」

アセルスと呼ばれた少女が振り返ると、笑みが視界に飛び込んできた。見る者誰もが、心を奪われる、美貌、そして暖かな笑みを携え、白い薔薇を纏った乙女。

「白薔薇!! 何言ってるんだ、一緒に逃げないと白薔薇が!!」

「アセルス様、私のことはお構いなく。それよりも早くお逃げ下さ…白薔薇が一緒じゃないという意味がない!!」

白薔薇と呼ばれた乙女の言葉を遮り、アセルスは手を引き逃げ続ける。二人で逃げないという意味がないのだ。あの場所から逃げ、そしてこれからのアセルスを支えになれるのは白薔薇しかない。白薔薇を引つ張りここから逃げる為のシツプと落ち合う予定の崖へと向かい走り続けた。

「いない！騙されたんだ！」

周囲を見渡すが何もなかった。ただあるのは希望を一切打ち砕くかのような仄暗い闇と崖。そして追い打ちのごとく彼が現れた。

「イルドダウン！アセルス様ここは私が。」

追手として現れたイルドダウンと呼ばれた者はアセルスの教育係として、戦闘訓練に携わっていた。そしてアセルスは一度も勝つことはできなかった。勝てるはずがないと分かっている。でも一人で逃げ出すのは嫌だった。それなら一緒に戦ったほうがいい。

「嫌だ、私も戦う!!」

そんな気持ちを守るかの様に彼は言葉を投げかけた。

「おままごととはそれぐらいにしていただきましよう。さあ、手間をかけさせないでください。」

「責任は私にあります。罰するなら私を、イルドダウン」

「それは主上が御決めになることです」

「あそこに戻るぐらいなら、ここから飛び降りてやる！」

「アセルス様！」

崖に向かい走りだし、追いかけてくる二人を気にも留めず私は漆黒の闇へと身体を投

げた。戦うと決めればかりなのに、心が気圧されてしまっていた。それに白薔薇を傷付けたくない、なによりあの場所に戻りたくない気持ちに人生への諦めが勝ってしまった。

「アセルス様!!」

「あの小娘!!」

二人の声が聞こえる・・・でももう関係ない。もうすぐ楽になれる。そうやって意識を手放しかけた最後に見たのは白い薔薇と碧の髪。そうして意識を手放した。

海： 波の音が聞こえる。どうして?ここは一体どこなんだろう。疑問が次々と頭を駆け巡り次に眩しい光に包まれた。

「アセルス様!!やっとお目覚めになれましたね」

「やっとか、全くいつまで寝るつもりだ小娘」

「私は小娘じゃない!アセルスだ!!…って私生きてる…」

死んだと思っていた私にすれば一体どうなっているのか見当もつかない。思考を無

理やりまとめ問いかけた。

「そういえば……ここは何処？それに白薔薇はともかく、なんでイルドウンまで!？」

「それは私が答えます、アセルス様」

「アセルス様が崖から身体を投げた直後に、私とイルドウンは追いかけてました。気を失っていたアセルス様に追いついた時、私達は黒い霧のようなものに包まれました」

「そして気が付いたらここに居た訳だ。分かったかアセルス」

白薔薇、イルドウンの説明は終わり、周りを見渡してみた。

「周囲には他に何か?」「いえ、何もありませんでした。人の気配は当然ありません」

溜め息混じりに項垂れた。どうやら無人島のようなようだ。それにここは「フアシナトウル」ではない。このような場所は無い。海それに太陽……

「シユライクに帰ってきたみたい」

薄い期待を込めて呟く。しかし現実はそのなりに甘くない。

「ここは我等の知る世界ではないな」

私には彼の言っている意味が理解できなかった。

「リージョンの中にこのような世界は知らん。あくまで予想だが、違う世界に飛ばされたのではないか?」

「それに黒い霧の件もある」

イルドウンの言っていることは一理あるはず。でも今はこの状況をなんとかしない
と。私は白薔薇に視線を向ける。白薔薇も首を縦に振った。この見知ら場所に來るま
では、お互いは敵同士とも呼べる状況にあった。だけど今は、そんなことは関係なかつ
た。いや、もともとからそうだったことは無かったのだろう。

「とりあえず、ここから脱出しないとね」

運命は動き始めた

少女

闇に飲まれて放り出された島の搜索を始めて半日。自然に溢れたこの島に機械的な物など存在するのだろうか——そんな考えを振り払い、脱出の方法を模索し続ける。

「イルドウン」

「何だ」

「そういえば、イルドウンって空間を移動することができたんじゃないかなかった？」

「残念だが、もう試してみた。何故だか分らんが、力が使えん」

「白薔薇も？」

「残念ながら…アセルス様」

現状を打破できる光を見つけたと思った矢先にまた闇に覆われてしまい、やりきれない自分を慰めるように呟く。

「はあ…イカダでも作ってみる？」

「止めておけ」

即答で却下された…

「じゃあ、イルドゥンは何か方法はあるの？」

怒気を込めてアセルスは問い詰める。

「何を怒っているのだお前は。今はそれよりも島の把握だろう」

「さつきからそれしか言っていないよ。ちゃんと考えてるの？」

焦るアセルスはただ我儘に近い怒りをぶつけるだけだった。

「アセルス様、落ち着いてください。今はイルドゥンのおっしやる通りです」

白薔薇に説得され渋々納得。不貞腐れていると不意に白薔薇が隣にやって来た。

「アセルス様…今夜は…」

可憐な姿からは到底聞けないであろう甘美で妖艶な言葉の不意打ちを食らったアセルスの顔は紅く染まってしまった。

「ななな…白薔薇、何を言っている…」

「冗談です…アセルス様」

唇に指を当て、微笑を浮かべる白薔薇に動揺を隠せなかった。

「おい、何やってる。早く行くぞ」

イルドゥンがイラつきを抑えながらこちらに声をかける。

「白薔薇姫様、お戯れは程々にお願ひします」

「なつな、何を…」

「……しまった。動揺が抜けていなかった。二人に揃って笑われるアセルスはただ自分を恨むだけだった。」

島は案外狭く、半日程度で探索することができた。さて……これからどうするのか。そんな思考にアセルスは耽っていた。

「アセルス!!上だ!!」

その声に反応し、頭上を見上げる。虫のような奇声と共に何か落ちてきた。

「潰される」

思考よりも先に身体は動いていた。座っていた流木は跡形もなく吹き飛び、舞い上がった砂と共にアセルスに吹き付けた。

「……っ痛、一体何?」

砂塵が収まるとそこには必死に逃げてきたあの忌まわしき世界にいた化け物だった。

「大きいサソリ!?!」

「アセルス様、あれはデスポーカーです」

「デスポーカー?初めて見たよ」

「焦るなアセルス、訓練は十分積んできたはずだ。嫌という程な」

「イルドダウンに散々やられたからね」

「今回は一人で戦え」

思いがけない提案に思わず声が裏返りそうになった。それだけ予想外な言葉を投げ掛けられているのだ。

「えっ、一人で？」

「当たり前だ。私はあのと時敵として居たからな。当然だ。それに白薔薇姫様の手を煩わせる訳にもいかんからな」

「イルドダウンが勝手に決めるな。白薔薇、一緒に戦ってくれ」

困った顔でお願いするアセルスを放っておくことは流石に出来ないようで、「イルドダウン……ごめんなさい」と言いたげな白薔薇が会釈をイルドダウンに。

「分かりました、アセルス様」

「ありがとう！白薔薇！」

満面の笑みを浮かべ喜ぶアセルスには思わず素敵でしたと感想を述べる白薔薇。その横では悪態を吐くイルドダウン。

「まったく、白薔薇姫様はアセルスに甘すぎる」

そんなボヤキを背に受け私達は魔物へと対峙する。

「さて、アセルス様。参りましょう」

イルドウンから貰った小振りのナイフ「ボーイーナイフ」を構えた。白薔薇は後ろでサポートを担当してくれている。誰かが後ろで控えてくれることが、こんなにも気持ち悪くさせるのかと……どこか嬉しそうにアセルスは対峙する。

「行くぞ、化け物め」

正面からデスポーカーへと駆けだし距離を詰めに掛かる。ただ無謀にしか見えない行動だが、これにも思惑は備わっている。

「見える！遅いよ」

イルドウンとの訓練が活きているのだろう。時間にすれば2週間足らずの期間でここまで出来るようになったのは、彼のおかげでもある。

なぎ払われた尻尾を空中へ回避すると同時に落下を利用して斬りかかる。

「はあああ！」

裂帛の気合のもとに斬りつけるがまるで金属と金属が奏でる高い音と同時に、ハサミ

にナイフが受け止められていた。

「くっ……いつ……今まで戦った奴よりかなり固い」

動きが見えているが、金属の様に硬い相手は経験が無かった。ナイフが通用しない相手にどう対処すべきかの判断が下せない。ナイフ以外は体術を齧った程度で格闘なんて通用しない。

今の私の方では――

「馬鹿者！ 戦闘中に考えに耽る奴がいるか」

イルドウンの叫びも空しく、気付いたときにはアセルスの目前まで毒針が無数に展開していた。

これは避けられない。盾など持っている訳もなく、反射的に身構え、目を閉じてしまった。来るべき痛みへの恐怖から少しでも遠ざかるために。だが、それはいつこうに來ず、代わりに何かが割れる音が聞こえた。

「硝子……？」

目の前に突如現れた薄い硝子が砕け散り、その破片は魔物へと飛翔していく。硝子片

は次々と刺さり、魔物は奇声をあげ退いた。

「間に合って良かったです。アセルス様、お怪我はありませんか？」

陽術 スターライトヒール。暖かい太陽光に包まれ、傷が治療されていく。

「ありがとう、ところであの硝子みたいなのは白薔薇が？」

「あれは硝子の盾、妖術の一つです。アセルス様もお使いになれますよ」

なんか便利そうだけど、術は苦手なんだよね…ってそれどころじゃない。

「ただ斬るだけじゃあの甲殻は破れない。表面が硬いのなら…」

硝子が刺さった為だろう。デスポーカーは激昂している。ハサミや尻尾を振りまわしアセルスに襲いかかる。思考に耽ってしまった愚行に今一度度冷静になり、攻撃を避け、化け物の観察を始める。

「多分、あの甲殻の継ぎ目なら…ナイフでも」

どんな硬い殻を持っていても、間接に当たる部分は柔らかいはずだと。判断を下せば後は一気に間合いを詰めた。この一瞬の詰めに反応できていないと。

「そこだっ!!」

継ぎ目を狙いナイフを突き刺した。

はずだった。

突き刺せなかった。

急に揺れる奇妙な感覚に行動が中断され、驚いて正面を見れば尻尾とハサミが地面を激しく打っていた。

「デスポーカーが得意とする「グランドヒット」

激しい揺れと衝撃がアセルスの身体を支配し昏倒寸前まで追いやった。視界がぶれる。よほどの衝撃だったんだろう。

「アセルス様!!!」

白薔薇の声が遠くに聞こえる。

「ちい、やはり無理があったか。そろそろ助けんとまずいな」

白薔薇、イルドウンの心配を背に何とか持ちこたえた。ただ、このままでは敗北は必須。揺れる視界と纏らない思考を無理やり直す。

……考える。あいつは近づくとき今の攻撃で反撃してくる。なら気付かれなければいい。もっと速く速く。

「速く、あいつに突きたてればいい!!」

砂を蹴り、アセルスは駆けだした。ダメージは抜けてはいない。でも止まれない、もつと速く、速く駆け抜きたい。

だが空しいかな。こちらの思惑に気付いたのか、魔物はハサミを大きく振り上げている。

「くつ、白薔薇姫、回復はまだですか!？」

「もう少しで…詠唱が終わります。…アセルス様」

気付かれた。でも止まれない。あの攻撃にはもう耐えられない。だから……

「もつと速く!!!」

その言葉と同時に強烈なイメージが沸き起こる。強烈なイメージは行動に影響を及ぼし、アセルスの体得していない動きへと昇華させた。

「はあああああ」

疾風迅雷とはまさにこのこと。振り下ろされるハサミの付け根を吹き飛ばし反対へ突き抜ける。

一閃

言葉が消えるよりも速く、アセルスは事を成していた。的確に継ぎ目を狙い、ナイフを突き刺すということを。

「凄い…アセルス様！あんなに怪我なされているのに」

「血から逃れることはできんのだな」

ナイフが刺さることにアセルスは笑っていた。笑っていたのだ。何故……こんなに笑ってるの？

楽しいからだ。楽しい。楽しいんだ。

そう楽しいから…

血しびきを浴びながら、また一つ、また一つ、デスポーカーの身体をはね飛ばしてい

く。もはや原型が分らない。私が着ている服もさらに染まってしまった。化け物の血の色に。

「終わりだよ」

そういつて首をはね飛ばし、同時にナイフも折れた。この相手に最後まで耐えたことが不思議だ。

派手な奇声を最後に血を噴き出し、デスポーカーはその場に絶命した。

「アセルス様!!」

「アセルス」

二人がこちらに向かってくるのが見えた。二人が見えたことで緊張の糸が切れてしまったのだろうか、アセルスは意識を失った……安堵と謎の昂揚感と共に。

二人

「第1管理世界クラナガン」

古代遺物管理部 機動六課

疲れを感じさせるが、どこか満足そうな彼女は居た。

「とりあえず、地盤はできたわけや！これから頑張るで〜!!なあリイン」

「はいです！はやてちゃん」

八神はやて、そしてユニゾンデバイスであるリインフォースII。二人とも笑みを浮かべている。

「騎士カリムの予言を地上本部が信用してへんからな。私達でなんとか自由に動ける部隊を作りたかったんや。それに、なのはちゃんとフェイトちゃんとの約束もあるしな！」

「はやてちゃん…最後の眼つきがいやらしいですう」

「そんなことないよ〜リイン。心配しすぎや」

はやての手の動きに心配が隠せないリインだった。

「さて、部隊もできたことやし、あとはFWを何とかせなあかんのやけど……」

手元にある資料を再度見直す。大々的に人材を集めるわけにはいかん。優秀な人材が周りに居てくれて感謝してる。でもFWが足りていない。

時間は少ないけど、育てるしかない。

「リイン。この4人の資料を、隊長達に渡しておいてくれるか？」

「了解ですよ。はやてちゃん」

そう言つてリインは飛び出していった。まだまだ幼いが私の大切な相棒だ。資料を片づけ、席を立とうとした時だった。

EMERGENCY EMERGENCY

緊急事態を告げる警報が鳴り響く。

「グリフィス君!! 一体何が?」

八神はやての副官を勤めるグリフィス・ロウランに緊急通信で呼び掛ける。

「部隊長、首都南西の無人島に強力な魔力反応を確認しました。解析では転移魔法の一種までとしか解つてはいません。どうやら魔法のタイプが異なるみたいです」

異なる? 疑問を浮かべるも問題解決の為に指示を飛ばす。

「ヴァイス陸曹にヘリの準備を。あとシグナムに現場に向かつてもらう。すぐにそつち
に上がるから、グリフィス君、よろしく」

「こつちも準備できてますよ。隊長」

「了解した。主はやて」

「了解です」

本当に優秀で助かるわ。思わず笑みがこぼれるが、すぐに気を引き締める。

「機動六課の慣らし運転や！頼むで！みんな」

「了解!!!」

—— 殺せ ——

「えっ!?何??」

—— 殺せ ——

「一体…何?」

アセルスは恐怖と混乱に支配されていた。心と意識に殺意が語りかけてくる。なん
で?そういうえば魔物と戦った時も…

「私は殺すことに、喜びを感じた事なんかない!!私
は人間だ!!」

叫ぶと同時に私は意識を回復した。周りは暗い。どうやら気絶していたようだ。

「アセルス様…大丈夫ですか？ ひどくうなされてましたが」

「白薔薇…うん、大丈夫」

額の汗を拭い返事を返す。同時に違和感にも気付いてしまった。

「あれっ？血が…付いてない」

「お前はもう人間ではないので。人と妖魔の血を持つ者。つまり半妖だ」

「違う!!私は人間だ!!」

認めたくない。半妖だなんて。信じたくない。私は訳のわからない恐怖から逃げ出したかった。なのにその恐怖を半分持つているなんて…

「いい加減にせぬか。この小娘が!!」

私の胸に熱いモノが込み上げてくる…何か刺さっているのだと気付くには時間が必要なかつた。

心臓へのアンテイクの様に刺さるナイフがアセルスの終わりを意味するならばどれ程楽なことだろうか。

「イルドゥン!!」

分かつてはいるが、それでもやりすぎではないのかと言いたげな白薔薇の呼びかけをかき消すように、倒れ込むアセルスに声をかけた。

「これくらいで死ぬような身体ではもうない。いつまで寝ているつもりだ」

死んではない。それに流れ出す血の色…

「紫の血なんて…おかしいよ…」

現実から目を背けたくても、事実は変わらない。アセルスは死んではない。そして血の色は赤ではない、紫だ。

「私、これからどうなるのかな…白薔薇。どうなっちゃうんだろう？」

弱弱しく語るアセルス様に悲しみを覚えしました。ですが、あの方の血を受け継いでしまったからには、この宿命からは逃れることはできません。それならば、アセルス様を、強く、気高い、慈愛に満ちた姫へと導かなくては。

「アセルス様、白薔薇は一緒です。今は我慢せず泣いてくださいませ」

白薔薇に身体を預け、泣いた。ただ悲しくて、理解できなくて。望んだわけもないのに、無理やり巻き込まれて。そして今は見ず知らずの世界で命掛けの戦いをしたばかり。理不尽な想いにただ泣いただけだった。

「自分の立場に気付いてもらいたいものだな」

イルドウンはそう呟くと、どこかに行ってしまった。ただ、その場の雰囲気嫌ったのではなく、明確の目的を見出していたからだ。

《白薔薇姫様、どうやら何かこちらに向かってきています。私は確認に向かうので、その泣き虫な姫をよろしく頼む》

《わかりました。アセルス様は任せてください。イルドウンも気をつけて》

《私とて油断はしない。剣の腕は錆びてはおらん》

《あの3人の中でも、剣はイルドウンが一番でしたからね。頼りにしています》

思考を飛ばし、軽いやり取りを終えるとその足取りは大地を蹴りあげるそうして「宵闇の覇者」は闇に消えていった。

邂逅

今回が私達、機動六課の実質的な初任務というわけだ。現在、現場に出ることができないのは、高町、テスタロツサ、ヴィータと私しかない。幸い、現場の確認が主な任務であり実質、私一人というわけだ。

「俺つちのこと忘れないで下さいよ。姉御」

すっかり忘れていたことは気にしないでおこう。しかし、こんな無人島に魔力反応とは…何もなければよいのだが。

「ヴァイス陸曹。私が先行して現場の状況確認を行う。連絡があるまで手前で待機だ。」
「了解しました！今、ハッチ開けますぞ」

ゆっくりと開くハッチの先には闇が広がっている。もう日も暮れたのだろう。

さて…仕事だ。

「ライトニング02 シグナム出る!!」

闇夜の空に身体を預け、しばらくの自由落下を楽しむ。そして彼女の持つ紫に輝く魔

力に包まれた。

「行くぞ!!レヴァンティン」

「Jawohl」

アームドデバイスであり相棒のレヴァンティンに声をかけ、騎士甲冑を纏う。騎士そのものともいえるバリアジャケットだ。

準備を終えた彼女は島へと飛翔した。

上空から島を見下ろす。島自体は広くはない、むしろ狭い部類に入るだろう。

さて、どうしたものか…幸い月は出ているものの視界は良いとはいえない。島に降りて搜索するしかないのか…。

「苦手だが、この際仕方がない」

そういうと、魔力を込め、魔法陣を展開する。広域のエリアサーチを行うわけだが、あくまで何があるのか分るわけではない。魔力の波を打ち、それにより魔力反応を確認しようというのだ。

「レヴァンティン」

魔法陣にレヴァンティン突き刺すと、島を覆うように魔力の波が広がって行く。水

面に波紋が広がるように。するとすぐに反応があった。

[Entdeckung]

どうやら発見したようだ。数は…3か。状況は把握できた。そうして島に降り立った。

[Gefahr]

降りた瞬間、デバイスから唐突に危険が告げられた。

「あれは機械か？無粋な物だ」

そんなボヤキを吐きながら、イルドゥンは飛来する者に向かっていった。今は夜。闇が支配する夜こそ彼らの日常的な場といっても過言ではない。森の中を颯爽と駆け抜け、視界が開けようとした時だった。彼は急に身体を隠し、気配を殺した。

「なんだ、今のは？」

思わず口に出してしまう程の奇異感。何か感覚のない何かが身体をすり抜けていった感覚に危機感を覚える。

「これは……」

この世界には魔術のようなものが存在しているのか？ 思考を巡らすなかでも、緊張感と警戒は解かない。気配も完全に消している。「宵闇の覇者」は伊達ではない。思考を巡らせたその刹那：

来たか!!

彼は気付いた。この疑問をもたらした本人である、シグナムの姿に。

もうその場所には居ない。疾風の如く、彼は駆けた。アセルスなど比ではない。音も立てず、砂地であろうとも、足跡も残りはしない。「宵闇の覇者」たる彼は斬りかかったのだ。

妖艶に輝く「妖魔の剣」を手に。

「ほう…あれを止めるとはな、少しはできるようだな」

一撃で決めるつもりだった。いや、決まるはずだった。だが眼前の敵である彼女は生

きている。

シグナムはレヴァンティンの警告に瞬時に反応し、攻撃を防いでいた。彼女の騎士としての経験、そして烈火の将としての力だろう。

「貴様!!いきなり何をする!?!」

困惑と怒りに満ちた声だシグナムは問いかける。

「貴様か?不快な魔力を打ち込んだのは?」

「不快とは失礼ではないか?それよりも貴様、いきなり斬りかかるとはどういうことだ」
やはり魔力:魔術があることを彼は確信した。つまりこの世界も少しばかりは似ているところがあるのかもしれない。ファシナトールに戻る方法も探さねばなるまい。思考をまとめると次の質問に答える。

「敵と判断したからには情けなど一切ない。それに不意打ちなど当然だろう」

「貴様に騎士道などという考えはないようだな」

剣と剣が激しくぶつかり合う。火花を散らし、お互い譲らぬ鏝迫り合い。顔と顔が密着する程の距離で視線が交錯する。

「くっ…押されているのか」

「どうした、娘。その程度か?」

剣を打ち払うとそのまま斬り払い、彼女の騎士甲冑を切り裂いた。

はつきりとした痛みを感じる。斬られた胸に手を当てる。生温かく、ぬめつとした感触。

「血か…」

どうやら私を殺す気のようなのだ。あの剣はデバイスなのか分らんが、どうやら殺傷設定であることは間違いない。

ふっ…どうやら本気らしい。

「ふっふっ…はっはっは…」

高らかに笑い声をあげる。久しぶりに胸が高まる。死合だ。死合ができる。私の心は湧き上がる感情を抑えきれなかった。

「レヴァンティン…殺傷設定。 カートリッジロード」

「J a w o h e r」

カートリッジを装填。すぐにロードされ薬莢が排出される。デバイスを通じて流れ

込む魔力に昂揚感を抑えきれず、痛みも忘れ眼前の相手の命を刈り取りに。さあ、存分に楽しもうではないか。死合を!!

「Schlangeform」

「はあああああ」

剣を振るうと鞭の様に剣が伸び、撓る。正しくは連結刃であるが。縦横無尽に軌道を変え、相対する彼へと押し寄せる。

「やるな、その騎士よ。ただの魔術使いではなかったか」

迫りくる連結刃に彼は動いてはいない。ただ高速で軌道を変えて襲い来る刃を交わし、打ち払う。

「どうした、こんなものか?これでは掠り傷さえつけることはできんぞ」

胸躍らせるようなことを言ってくれる。このような強者に会えたことに感謝せねばな。戦闘狂の一面を持つ彼女は今をただ楽しんでるかのようだ。

「ならば、これでどうだ!!」

連結刃を砂地へぶつけると、砂を巻き上げ、視界を奪った。

「ほう、少しは考えたな」

イルドウンもまた同じであった。アセルスの教官を務めるくらいで、自分以上、または同等の剣を扱う者と戦うことがなかった。彼も飢えていたのだ。シグナムみたくな

強者を。

「だが視界を奪った程度では何も変わらん!!」

実際に、シグナムの位置は掴めていた。妖魔の中でも上位に位置する彼になら容易いだろう。だが、彼女として無策ではなかった。

「Schwertform」

いつのまにか連結刃は元の剣に戻っていた。そして機械的な音と同時にカートリッジが二発分ロードされた。

「はあああ!! 紫電一閃」

シグナムが持つ「魔力変換資質 炎」レヴァンティンに烈火の如き炎を纏い、なぎ払った。

両者の剣が再度交錯する。だが…拮抗することはなかった。魔力が上乘せされた攻撃に流石の彼も耐えることはできなかった。

「ぐはっ…」

口から息を強制的に漏れる。剣で防御したとはいえ、そのまま吹き飛ばされてしまった。

「はあ…かはっ」

内臓系にダメージを負ったのだろう。口に溜まった血を吐き出す彼の前に、剣は振り

下ろされた。

「終わりだ」

まるで噴水のように。

彼の首から上がぼとりと砂浜に落ちた。

そして周りには青い血を撒き散らして。

「ふふふ…勝った!!!勝ったぞ!!!」

狂気乱舞。まさしく今の私はそうだ。強者との死合に勝ったこの喜び。何物にも代えがたい至福。シグナムは久しぶりにむさぼっていた。

「甘いな…狂気に飲まれた騎士よ」

なにが起こったのか。彼の死体が急に消えた。そして私の首筋に痛みが走る。

「妖魔の剣よ。力を解放せよ。ブラッドスレイ！」

イルドウンが生きていることを理解したと同じく腕力感に襲われる。まるで血を吸われているようだ…

「最後まで油断しないことだな。私の罠に貴様はかかっていたのだからな」

いったい何をされたのか見当も付かない。ただ、この状況はまずい。血を吸われているのだ。このままでは、意識を…

そんな危機感は無駄に終わり、急に私は自由となった。

「はあ…はあ…」

息が整わない…相当吸われたようだ。さらに彼をみると傷が癒されていく。

「悪いが、回復させてもらった。しかし、貴様人間ではないな？」

いきなり核心に触れられ唾然とする。何故分かったのだ？

「貴様の血は人間の血ではなかった。それに魔力を感じる。あとっておくが、私は吸血鬼のような類いではないからな」

こちらの考えを見透かされたような答えだった。思考を読む能力を持っているのかもしれん。

「さて、恨みはないが死んでもらおうか。せめて名前でも聞いておいてやる。名前はなんだ？」

「烈火の将がシグナム」

「では、さらばだシグナム」

剣が首を撥ねようとしたその時だ。

《イルドウン!!アセルス様が!!》

イルドウンの動きが止まった。私はその隙に距離を取った。

「最後まで油断するなと言ったのはそちらではないのか？」

彼に言い放つも見向きもしない。何かあったのか？

「シグナムとかいったな、少々まずいことになった。貴様に協力してもらいたいことがある」

殺されそうになった相手に協力を申し込まれるとは思ってもいかなかったのだろう。

彼女は前のめりに倒れそうになっていた。

「なにを急に言い出す。私達は敵同士だぞ」

「だが、そんなことは関係ない事が起きているのだ。人数が足りん。それに貴様の力ならば役に立つ」

上から言われていることに怒りを感じながらも、私は答える。

「そんなこと信じられん」

「早くしないと、この世界が終ってしまいかもしれんぞ？それでもいいのか？」

冷静になれ。私の任務はなんだ…。そうだ。思い出したか？烈火の将 シグナムよ。

「分かった。協力しよう。ただあとで貴様たちを連行する。いいな？」

「好きにするがいい。我らとて知りたいことがあるからな。それよりも行くぞ」

彼は駆けだした。私も飛翔し、追いかける。

「後で再戦だ!!!次は絶対に勝つ」

くつく… 戦闘狂の騎士め… まあ我も間違いではないがな。

「いいだろう。二度と戦いと思えんまで叩きのめしてやろう」

戦闘狂の二人は闇夜に溶け込んでいった。

覚醒

白薔薇に抱きつき、泣いた。もう30分くらいは泣いていたのだろう。認めたくない現実を認めなくてはならない。そんな現実と、まだ覚めない悪夢なのではないか。そんな淡い希望に私の心が揺らいでいた。

「いやだよ……こんなの」

「アセルス様……」

イルドウンもどこかへ行ってしまった。私に呆れたのだろう。それに彼は敵だったはず。

様々な感情に心を揺さぶられ続ける。なんで私が……なんで？

「(……)これは」

白薔薇が驚いている。何かあったのかな？疑問を抱く私にもその答えはやってきた。

「あ、がああ……がああ。」

声にならない言葉と共に嘔吐してしまうアセルス。白薔薇が驚いていた疑問の「答え」が私を抜けた瞬間から私はこうなのだ。

「アセルス様!!大丈夫ですか?!しっかりなさってください」

かなり焦っている白薔薇の声は届いてはいない。代わりに聞こえるのはこの声だ。

「力が欲しいか?半妖の姫よ」

何を言ってるの? 力? 一体何の力? それよりも私はこの運命から逃げ出したいの。

「力があれば、逃げ出すことだってできる。どうだ姫よ。力は欲しくないか?」

心が揺れた。なんとか理性を保とうと必死だった。でも後は簡単だった。逃げたい。もういやだ。逃げたい。逃げたい。逃げたい。そうだ。欲しい。力が。力が。力が。

今を受け止めたくない幼い心にこの誘いは甘美な蜜。理性など意味を成さなかった。

「力が欲しい!」

「良からう。だが契約の代償は頂く。それは…お前の人間としての寿命を貰う。」

今の私にはそんなことは関係なかった。そう力を欲する私には。そんなこと関係なかった。

「そんな安い代償、貴様にくれてやる。さあ…私と契約だ」

「よからう、後で後悔しても遅いぞ。ならば呼ぶがいい。我が名を。」

「我が名は」

——幻魔——

私は手を伸ばした。紅い光の中に。そして現れたのだ。契約した剣……幻魔が。

アセルス様に異変が起きてかなり時間が経ちました。今は少し落ち着いてはいますが、苦しそうです。今の私には看病することしかできません。アセルス様……

「……」

アセルス様が何か呟いたことに気付きました。しかし、私には何を呟いていたのかは聞き取れませんでした。ですが、それは最悪な形となつて分かったのです。

「があああ、ああああああああ」

咆哮と共にアセルス様の容姿に変化がありました。髪の色は緑から紺碧へと。紅い瞳は紫紺へと。

「妖魔化」

私は気付きました。アセルス様が妖魔の力を解放したのだと。そしてあの御方の血に目覚めてしまったということも。異変はもう一つありました。アセルス様が持っているあの紅い剣です。

「もしかして……あれは……！」

すぐにイルドウンに連絡を取っていました。

《イルドウン！アセルス様が、妖魔の力を》

《何故だ？アセルスは妖魔の力はまだ使えないはずだが》

《先ほどの魔力か何かがかきつけかけでしょう。半妖のお体になられてから月日は浅いです。それに魔力とは無縁の生活をされていらつしやたので》

《魔力に妖魔の力が誘発して目覚めてしまったか。わかったすぐにそちらに戻る》

《それと、イルドウン。アセルス様が紅い剣を持ってらつしやるのですが、もしや…

》

イルドウンから緊張感が感じられました。どうやら予想は当たったようです。

《白薔薇姫様、もしや妖魔では》

《やはりそうですか：イルドダウン！それであれば大変です。アセルス様を止めなければ!!》

《くっ…急いで戻ります。白薔薇姫様、決して無理はなさらず》

《なんとか持ちこたえますから。イルドダウンも早くお願いします》

そういつて会話を終了した。

私だけでどのくらいもつでしょうか：正直心配です。

思いを語ると同時。アセルス様は斬りかかってきたのです。

この世界に終わりをもたらす存在。可能性が目覚めてしまった。今はただ止めなければならぬ。

「遅いぞ、シグナムとやら。時間は待つてはくれん」

「貴様に吸われた血と傷で魔力が乱れているせいだ。それにまだ名前を聞いていない」

そんな彼女に鼻で笑う。なんてくだらない。まあこれも一興だな。

「イルドダウン」

そう告げた。

「イルドウン…わかった。しかしイルドウン。先ほど言っていた世界が終るということだが、どういう意味だ？」

彼女の問いかけに笑いながらも冷静に答える。

「誰も逆らえなくなる。ただそれだけだ」

「どういことだとも言いたそうだ。だが今はそれどころではない。言葉が現実となつてしまう前に。」

「この先だ！行くぞ」

そういつて二人は夜の道を抜けるのだった。

「白薔薇姫!!」

間に合ったようだ。なんとか持ちこたえてくれていた。

「イルドウン！来ないかと思いましたよ」

肩で息をする白薔薇姫を見ると、その大変さがよく分る。あの小娘がここまで追い詰めるとは。

「イルドウン？この方は？」

「今、説明する暇はありませんが、名はシグナム。アセルスを止めるために協力を頼みま

した。現地の出身だそうです」

「シグナム様、よろしくお願いたします」

深く礼をする白薔薇。

「こちらこそ、よろしく頼む」

なかなか礼儀正しい二人だ。なんて言っている場合ではない。

「シグナムとやら、よく聞け。あいつの眼は見るな。そして気圧されるな。それだけだ」
「眼を見るな? どういうことだ? 分かるように説明しろ」

だがその言葉は空しく響くだけだった。

「がああああ」

狂ったように叫び、かつ正確に斬りつけてくる。その場にいた全員は散開した。

「速い!! イルドウン以上だ」

シグナムの率直な感想に少し怒りを感じていた。

「あれは、あやつの本래の力ではない。あの剣と血のおかげだ」

正直な感想を言えば、シグナムの言っていることは正しい。今のあれには追いつけん。なんとか隙を作らねば…

眼前で鬼神の如く暴走する少女。でたらめな強さだとすら感じる。だが、それでこそ戦う意味があるものだ。

「レヴァンティン」

相棒であるレヴァンティンにカートリッジをロードする。

「さあ、来るがいい。烈火の将がシグナム 推してまいる」

連結刃を持って私は仕掛けた。無限の軌道は少女を追い詰めていった。

「はあああ、斬り裂け!!」

連結刃は彼女を絡め捕ったかのように見えた。しかし紺碧の姫は眼前に迫っていた。

「なっ!!」

思わず声が出る。

疾風迅雷

「稲妻突き」は躊躇なく放たれた。シグナムの顔面を突き刺す不意の一撃。真つすぐ突き立てれる幻魔は確実に死を予感させた。

「Schwertform」

「まだだ、はああああ」

経験が命を救った。眼前の切っ先にレヴァンティンの切っ先を当て、軌道を変えた。

刃を滑らせ、肉薄する。頬に傷を負うが、首から上が飛ぶことが避けられただけマシである。

「なんて速さだ、ぐう…華奢な体のどこにこんな力が」

ぎりぎりとして押し込まれる罅迫り合いのなか、私は失態を犯したのだ。

「馬鹿者!!眼を見るな!!!」

イルドウンの言葉を忘れていたわけではない。そこまで私が追い詰められていたのだ。

「か、身体が、動かない…」

眼を見た瞬間、身体が自由が奪われてしまった。それが私が彼に負けた原因でもあったのだが。眼前の少女が高く跳びあがり、落下してくる。紅い剣…幻魔を振り下ろしながら。

動け!!!動かなければ…死しか残されていない。

「舐めるな!!!」

烈帛の気迫と私はレヴァンティンを振り上げる。激しい金属音が静寂を打ち消し、またしても火花を散らす戦いへと変わった。しかしそれも一瞬だった。

空虚を舞いレヴァンティンが砂に突き刺さる。何とか防ぐことができたのだが、力で無理やり持つて行かれたのだ。そして今の状態と言えば……ガラ空きだ。

少女の攻撃は終わってはいない。振り下ろされた幻魔が横に払われた。

一撃目で相手の行動を封じ、二撃めで止めを刺す……「天地二段」

ただ技と呼べるほどの美しさはなく、ただ凶暴なまでの力に屈する形になってしま
う。

負けた。一日に二人に負けたのだ。そう烈火の将は思ったいた。私は死ぬのだな。私が生きてきた時間など所詮あつという間だった。私が生きてきた中で、一日に二度も負ける事など経験がなかった。それ故に、プライドは軋みをあげた。

「夢き守り手、硝子の盾よ」

生きていた。何故生きているのか理解できなかつた。そして次に感じたのは頬への痛みだ。

「騎士よ、貴様の務めはなんだ？ そんなに容易く諦めてよいものだったのか？ まだ負けてはいない。負けとは死だ」

立ち上がり、レヴァンティンを引き抜く。その言葉は軋む心を鎖で無理やりにも繋ぎとめる。心にもう一度火が燈る。そうだ負けてはいない。まだ生きている。

「そうだな、レヴァンティン！」

最後のカートリッジ2発分をロードする。そして業火がレヴァンティンを包んでいく。猛々しく、彼女の心の火を現すかのように、美しく、儂くもあった。

イルドウンから作戦が説明される。

「我と白薔薇姫様で陽動をかける。シグナムには幻魔を引き飛ばしてもらおう。アセルスから放れれば、暴走も収まるだろう」

「了解した」

やるべき事は至極簡単。だが、それ故に難しい……だが、今はそうとは思わなかった。

颯爽と駆け抜ける私の後ろで魔力を感じた。

「ミラーシエイド」

詠唱が終わると、何人ものイルドウンと白薔薇そしてシグナムが現れた。幾多の幻影を作り出す「ミラーシエイド」。理性が残っていても破るの難しい。アセルスは近寄るダミーをただ斬っているだけだ。

幾多の幻影に紛れ込み、ついに私はたどり着いた。

「私に合わせろ!!」

その声を待っていたかのように、イルドウン、白薔薇も距離を詰め、同時に三人の身体が輝いた。

「はあああああ!!!」「幻夢陽光一閃」

恐怖と魔力光によるノックアウト。そして炎を纏った一閃。

「があああああ」

まだ幻魔を手放すことはない。だが今はそんなことは心配ではない。

「私の、いや、私達の勝ちだ!!」

振り切った剣は紅き剣を高々と打ち払ったのだ。

挨拶

「姐さん…大丈夫かな」

1人待機命令を出されているヴァイスは呟く。もうすぐ2時間が経過しようとしている。彼女なら心配することはないとは思いますが、やはり心配なのだろう。そんなもの思いに耽るヴァイスに連絡が届いた。

《ヴァイス陸曹聞こえるか？こちら、ライトニング02 当初の目的は果たせなかったが、重要参考人3名を拘束中。指定ポイントに降下を頼む》

《ポイント座標確認!!了解できあ!!》

こうして久しぶりの出番に燃えるヴァイスだった。

私は今、アセルス様とイルドワンと一緒に「機動六課」という場所に向かっています。どうやらイルドワンとシグナム様の間で何か交渉があったのでしょうか。

膝枕の状態でアセルス様は眠られています。先ほどの戦いで、幻魔をアセルス様から離すことができ、妖魔化を解除することができました。髪の色も緑に、瞳も紅に戻られ

ました。やはりあの方の力は、アセルス様にはまだ強すぎたようです。いまだ目を覚ますことはありません。

「アセルス様……」

私は優しく、髪を撫で、頬に手を重ねました。あの透き通るお顔が……このようになられて……。ああ……愛しいアセルス様。

頬に付いていた血が消えていく……白薔薇によつて。

優しく、だが妖艶でもある。気配、威圧感。圧倒される。

「アセルス様……本当に……素敵です」

彼女は頬から首筋へと口を動かしていく。途中からだるか、イルドウンから念話がる。

《人前では遠慮してください。白薔薇姫様》

思わず振り向くも、私は頬笑みを浮かべるだけ。そのまま、アセルス様と唇を重ねた。

「なっ……何をしている。貴様!!」

寝ている少女にいきなりキスをするとは…

「シグナム様、どうか御気になさらず」

彼女はそういうとまた、唇を重ねていた。

「くっ…不埒な」

「注意はしているんだがな。気にしないでくれ」

彼は私にそんな言葉を投げかけてきた。納得できる訳がないが、気分を紛らわすかのようにイルドウンへと言葉を投げた。

「そうだ、イルドウン!!聞きたいことがある。私は何故負けたのだ?」

理由が知りたかった。あのととき確かに首をはね飛ばしたのだ。だが生きていたのだ。

「簡単な事だ。私があの小娘、アセルスと戦う前にしたアドバイスはなんだった?」

先ほどの激戦の前を振り返り、彼が言った言葉を直ぐに思い出す。

「眼を見るな、気圧されるな」

「そうだ、眼を見てしまった。貴様は、私と鏖迫り合いになった時に見てしまった。そして私の詠唱した妖術に捕らわれていた」

何故だ!?!彼から眼が離せない、それに…好意を…。

「ファツシネイション。これが貴様の敗因だ。幻覚に誘惑。いつかかったのかもわからない。ただ近い距離で相手の眼を見ねば、効果はないがな」

彼が指を鳴らすと、効果は解除された。気持ちも大丈夫だ、身体も動く。

「こちらの世界にはそんな魔法は存在せぬ。貴様達はどこから来たのだ？」

「アルハザードとでも言っておくか」

私とヴァイス陸曹は声を同時に出す。

「アルハザードだと?！」

「くつくつ…冗談だ。教えてもらったものだ、アルハザードという名前は」

「冗談が過ぎるぞ!!!今、三人とも拘束中の身だということは忘れないでほしいな」

「これは失礼。君の主、八神はやてと話がしたいのでな、つい冗談をヴォルケンリッターの将よ」

驚きのあまり声がでない。何故、主はやてを知っている?それにヴォルケンリッターまで!?

「なに不思議がつている?すべては貴様が教えてくれたことだ」

「なっ?!そんなことは…だいたい貴様には何も話してはいないではないか!!」

焦りと怒りで私の思考は混乱している。一体何故だ。

「その答えを教える義理は私にはないのでな…それに着いたぞ。「機動六課に」

この男…一体何者なのだろうか。私は武芸においても知略でも負けてしまった。なぜこれほどの機密がこうも簡単に…ともかく今は任務を全うすることが優先だ。

《主はやて、重要参考人3名連行しました》

《了解や、御苦労さま、シグナム》

何か怒りを感じる、なぜだ主よ…

《レヴァンティンを殺傷設定で使ったやろ、シグナム？あとでゆっくりお話しようか》

なんて一日だ。がつくり肩を落とし、私は三人を部隊長室へ連行したのだった。

どこか影を落とす世界から眺める者たち…

「やっと目覚めたか…次の段階に移らねばな」

「奴を投入しろ」

「了解しました」

炎を纏った影が映し出された世界に溶け込んでいく。

「さあ…楽しんでほしいものだな」

そして姿は闇に溶けた。

さて、いろいろ聞きたいことがありすぎて困るんやけどな…

シグナムが連行してきたこの三人から事情を聴いているところだ。ただ今は二人だ。アセルスと呼ばれる彼女は今、メデイカルルームのポッドの中で治療と検査中。そのため、イルドウンと白薔薇姫と呼ばれる二人から経緯を聞かせてもらっているわけだ。

「なるほどな。つまり黒い霧に飲まれたら、あの砂浜に居たというわけやな？」

「ああ、そういうことだ」

私達が感知していたのはどうやらその黒い霧のようだ。ただ二人はどうやら違う世界から来たように感じる。もしかして、次元を超えてきたのかもしれない。そんな疑問を解決するために問いを投げかけた。

「そういえば、三人はどこ出身なん？」

「この眼前の男からは予想通りの答えが返ってくる。」

「この世界、いやこの次元に我らの世界は存在しない。黒い霧に飛ばされたようだ」

やはり…予想通りだ。なら次の疑問は…

「単刀直入に聞くで。二人とも人間か？アセルスって子は人間やろうし、ただ二人は違和を感じるんや。どこか冷たいというか…」

質問に対して、二人は少々驚いていた。

「ほう、気付いていたか。組織の頭は伊達ではないわけだ。確かに我も白薔薇姫様も人間ではない。妖魔だ」

妖魔。聞いたこともない存在であり、この広い世界や宇宙を管理する管理局にさえ情報は存在しない。人間ではないその存在をただ認めるしかなかった。人間と違うところは簡単。彼らの血は「青」かった。

「それと、アセルスは人間ではない」

「……どういうことや!?彼女はどう見ても人間やろ。」

答えの中、部屋の扉が開く。どうやら検査結果を持ってきてくれたようだ。

「失礼します」

そこには白衣を着たシャマルが居た。ただどこか慌てている。

「はやてちゃん、これを」

渡された検査結果に目を通してみた。そして…

「なんや…これ…」

あきらかに人の能力を超えている。さらに血液だ。彼女の血は赤でもない。青でもない。「紫」だった。

「紫ってことはつまり、彼女は…」

「その通りです、はやて様。アセルス様は、人間と妖魔の血を持つ半妖なのです。世界に一人しかいない存在なのです」

あかん…話が急すぎて混乱してきた。だいたい妖魔とか半妖とか言われても困るっちゆうね。

「心の声が漏れてますよ。はやて様」

「あつ…、ま…まあとりあえず事情は分かった。なんとか元の世界に戻る方法を探さんと…とりあえずものは相談なんやけど」

「機動六課の手伝いをしろとでもいうのか？」

「なんで分かったんや？まあそういうこつちや！そのほうが色々調べるにしても便利やろうし」

それに今は、完全な人不足。優秀な人材は是が非でも欲しいところだ。

「断る義務はないな。ただ条件がある。我らは我らで行動させてもらう」

「それなら大丈夫や。よし交渉成立やな。よろしく頼むで。あつ、それと私のことは、はやてでいいから」

「わかった。はやて」

「分りました。はやて様」

新たな人材の確保に成功した。まあ色々面倒事が起きそうなのは気にしないでおう。

アセルスは別に手伝うことには反対ではないだろう。だが気になることがある。

「はやて、その検査結果とやらを貸せ」

私は強引にはやてから奪うと、ある項目を探していた。そしてある項目に目が止まる。

「やはり、伝承どおりか…」

「なんやイルドウンこっちの文字わかるんか？」

「ああ、シグナムに教わったからな」

「シグナムにいつ教わったんや？あんな短時間でか？」

「秘密だ」

話を終わらせ、白薔薇姫に念話を送る。

《やはり伝承通りです。アセルスは、多分…》
《アセルス様…》

アセルスが目覚める前に色々準備はする必要があるな…

「はやてよ、聞きたい事がある。この世界には魔術は存在するのだな？」

「魔術っていうか魔法文化は存在してる。私も使えるしな」

なるほどな。

「武器はどうしている？」

「武器っていうか、デバイスってのがあるんやけどな」

その後、私ははやてから聞けるだけの情報を聞いた。

「あー、喋り疲れた…。そんなところでええか？」

「問題ない。感謝する」

デバイスにも種類は色々あるのだな。ふむつと一つ声を漏らせば次の行動へと移る。

「はやて、シャリオ・フィニーノの会わせてほしのだが」

「なんやまた急にやな、ええで、ちよつと待つてな。」

「よし!!、シャリーか？はやてや。ちよつと部隊長室まで来てくれんか？うん、了解。

すぐ来てな」

そうしてシャーリーがやってきた。

「急ですまんなくシャーリー、ちよつとこの二人が話たいことがあるらしくてな」

「は、はい。(なんか怖いんですが…)」

「あと、はやて。悪いが、話は聞かないでほしい」

そういつて私の聴力は謎の力によって封印されてしまった。

頼みは二つ

一つはアセルス用のデバイスの作成。もう一つは…

「本当に言ってるの？そんなことしたらあなたたちが…」

「かまわん、白薔薇姫も納得している。あの小娘は大事な存在だからな」

「…分かりました。協力します。その代わり二人も協力してくださいね？」

「もちろんだ」

「もちろんです。シャーリー様」

なんだろう……ここ。なにも見えないや。それに水の中みたい。

「貴様の人間としての寿命を頂く」

いつたいたんのことなんだろう……

そうして、深い思考に落ちていく。

「……う……ん」

眼をあけると薔薇が見えた。白い薔薇が……

「白薔薇……」

「アセルス様！ やっとお目覚めになられたのですね」

白薔薇はともうれしそうだ。心配かけたようだ。

「ごめんよ、白薔薇。私はいままでどうしていた？」

「アセルス様はこちらの世界に飛ばされてから、2週間程眠られておりました」

「そんなに……心配かけたね、白薔薇」

私は白薔薇の頬を撫でほほ笑む。そして軽く唇を重ねた。

「アセルス、もういいか？ 話しておきたいことがある」

いつのまにかイルドウンが居た。やっぱり気付けないな。

「それで話したいことって？」

「この世界の事について、それにお前の武器のことについてだ」

私はイルドウンと白薔薇から事情を聴いた。

「なるほどね、分かった。それとこの世界の種族は？」

「前の貴様と同じ、人間が主だ」

「えっ、イルドウン、何言ってるの？私が人間なわけないでしょ？私は妖魔だよ？忘れたの？」

やはり、伝承通りだった。

半妖にしか扱えない「幻魔」

契約の代償として、人間としての寿命を奪う。しかし命ではない。つまりは人間だった記憶。記憶を奪われてしまった。だから自分が人間とも半妖とも思っていない。そう、人間の記憶がないのだから。

「ああ、すまない。忘れていた」

《やはりこうなってしまうました、白薔薇姫様》

《伝承を覆すことはできませんでしたが、まだなにか手段はあると思います。それまでアセルス様をお守り致さないと》

現在、幻魔には幾多のプロテクトを施している。これ以上、アセルスから人間としてのアセルスを奪わせないために。

「アセルス、これからは先ほど渡した、デバイスを用いて戦え。機能は説明したが、自分で実践しろ」

私の手には二丁の銃型デバイスがある。

「リーサルドラグーンⅠ&Ⅱ」

少々大きいが気にはならない。そして待機状態のピアスへと戻した。

「便利だね、そういうえばイルドウンと白薔薇にはないの？」

「必要ないだろう。我にも白薔薇姫にも」

「二人は私よりもどうせ強いですよ!!」

そういつて私は部屋を出た。

「我らに戦う力はもはや存在せぬからな…アセルス」

「アセルス様…一緒にお守り致します」

二人の決意はまだ私は知らない。そして影がここ、機動六課に迫っていた。

騎士

なんか色々あり過ぎで、よう分からんわ……。でもとりあえずみんなに報告と紹介はせんとな。

——機動六課全局員に連絡——

30分後、ロビーで緊急集会を行います。繰り返します連絡します。緊急集会を行います。

「これで、よし」

椅子にかけておいたコートを羽織り、ロビーへと向かう。

「ライン。行こうか！」

「はいです！」

そうして部隊長室を後にした。

アセルスは放送があつたとおり、ロビーへと集合していた。どうやら、この機動六課に協力することになったらしい。そんなこんなで、30分が過ぎ、集会が始まる。

「忙しいなか、急に集まってもらって、みんなごめんな。今回、民間の協力者としてこちらの三名が力を貸してくれることになりました。それでは自己紹介よろしく」

「アセルスです。よろしく…」

「イルドウンド」

「白薔薇と申します。皆様よろしくお願いいたします」

白薔薇は万人が惚れるであろう笑みを浮かべ、深く礼をする。それを見た、男性局員からは、歓声が沸き起こる。

「「「おおお!!!可愛いー!!!」」」

白薔薇は手を振って答えている。なんだろう…すぐくムカムカする。私は叫ぶ集団を睨んでいた。しかし、力に目覚めたこと忘れていた。あの魅惑の君と呼ばれる者の血から…

「「「なんだ…身体が動かないぞ!!!」」」

騒がしい集団はその場に倒れこんでいる。さらに…その横では顔を紅く染める女性局員が居た。

(彼女に見られると、なんだか…ときどきする)

そんな局員の様子を不思議がるアセルスだった。

そんなハプニングもあつたが無事に紹介は終わり、隊長陣と話をしていた。

「よろしくね。三人とも」

「よろしく、分からないことがあれば遠慮なく聞いてね」

「高町なのは一等空尉」

「フェイト・T・ハラオウン 執務管」

スターズ分隊、ライトニング分隊の隊長達。なんだろうこの二人…凄い力を感じる。それに、綺麗だな…。そのなこと思っている矢先だ。

「どこ見てんだ？スターズ分隊副隊長、ヴィータ三等空尉だ。よろしくな」

ものすごい勢いで握手をされてしまった…。なんか子どもだな。

「ガキ扱いすんなよ!!!」

心を読むとは…やるね。そんな少し抜けたことを考えていたりする私だった。

「あとは、謹慎中のシグナムやな」

「主、謹慎を解いてくれ!!!」

自室謹慎中のシグナムから悲痛の叫びが聞こえる。

「駄目や。殺傷設定を使うなんて冷静さが足りてないでシグナム。罰として甘ったるい昼ドラでも見ときや」

「それだけは勘弁……」

そういつて、シグナムに甘々な昼ドラを見せ続ける。この隊長…鬼畜。

そんなはやてから私にこんな話が舞い込んだ。

「あんなアセルス、実はアセルスに訓練を受けて欲しいんよ。アセルスのデバイスとセ
ンスがあれば、どのポジションもこなせるオールラウンダーになれると思うんよ！」

「部隊長みんながマンツーマンで指導してあげるから」

なんかすごい条件を出されたが、私も自分の力を磨きたい。だから私は首を縦に振
る。

「イルドウンも白薔薇も教えてよ！」

二人はそんな私の声に笑みを浮かべ、答えていた。

ちなみに、私のことはアセルスと呼んでもらうことにした。そのほうが楽だから。

「じゃあ、いきなりで悪いんやけど、色々データを集めたいから、訓練スペースに先
行つといてくれるか？」

「分かりました」

ぎこちない敬語で答える私。なんか苦手だな…

ひとり訓練スペースへと向かう私。その途中途中で周りを見渡す。

あつちとは全然違うな…

思考に耽ながらも、訓練スペースに到着した。

「勝手に入っても大丈夫だよね…」

ドアが開き、中に足を踏み入れる。

とくに何かあるわけでもなく、ただ広い空間がある。

「広いけど、なんか殺風景というか…」

—— Caution. Emergency ——

急にデバイスから警告が発せられる。その瞬間、なにか重苦しい空間がこの部屋に充滿するのを感じた。

「なに…これ。とにかく出なきゃ…って開かない!?!」

「どうやらこの空間の影響だろう。とにかく情報が足りない。私は部屋の真ん中へと足を進めた。」

「アセルス様」

「うわあ!?!」

急に白薔薇に呼ばれ、思わず尻もちをつく。：恥ずかしい。

「急に声出さないでよ、白薔薇!!それよりも白薔薇はどうやって?」

「これは妖魔にしか作ることができない結界です。機械などに影響は及びませんが、人間はこの結界に関与できません」

「じゃあ出ることもできるの?」

「入ることは簡単なのですが、出るとなると、結界を張っている張本人を倒すしかありません」

白薔薇との会話により状況は把握できてきた。つまりは妖魔が犯人であると。

「白薔薇姫様、針の城に御戻り下さい。あの御方に逆らうおつもりですか?」

私は思考を止めた。どうやら現れたようだ。

「そんな、逆らうだなんて、誤解です」

「言い訳は、御帰りになってからにしてくださいませしょう」

そんな会話が繰り広げられ、その妖魔は白薔薇を連れて行くこうとする。

「ダメだ、白薔薇！白薔薇に触れるな！」

我慢できない。汚い手で白薔薇に触るな!!白薔薇は私の…

「邪魔する者は殺して良いと言われております」

その言葉と共に、紅蓮の炎を纏った「炎の従騎士」が姿を現した。

「アセルス様！戦うしかありません。バリアジャケットを！」

「分かっているよ、白薔薇!!説明は聞いているから！」

「Standby ready」

「セットアップ」

声と共に真紅のバリアジャケットが展開される。

これって…あつちで作ってもらった服とそっくりだな。などと感傷に浸っていると待機状態のリーサルドラグーンを起動し戦闘体制へと移行する。

「いきなりだけど…やるしかない！」

「白薔薇。援護お願いね」

そういつて間合いを取り始める。

銃型デバイスでありながら複数の形態を備えているこのデバイス。

きちんと扱えるかな……

駆けだすと同時に引き金を引く。打ち出されるのは、実弾ではなく、魔力弾である。甲高い音と共に放たれる弾丸。炎を纏う妖魔は簡単に避ける。そして魔力弾は壁に到達：壁に亀裂が走る。

威力強すぎないかな……これ。

戸惑いつつも、私は二発打ち込む。がそれをも悠々と避けると、騎士は距離を詰め、斬りかかった。

「ヒートスマッシュ」

実戦から遠ざかり、また扱ったこともほとんどない銃型デバイスを使い切れず、一瞬の出来事を咄嗟に判断出来ず回避に移れない。ドラグーンで防ごうとしたが間に合いそうもない。

だが…

「儂き守り手、硝子の盾よ」

景色が砕け、崩れた景色は騎士へと飛翔した。

「助かったよ、白薔薇」

咄嗟のフオローに感謝し体勢を立て直す、後ろで言葉は零れた。

「私は何も…」

声は私には届いてはいなかった。

景色の破片に少しはダメージを負ったようだが、これといった決定打には当然ならず、こちらへと従騎士が歩み寄る。

「さて、白薔薇姫様、覚悟を決めてください」

「黙れ!! 貴様に白薔薇は連れては行かせない」

「ごさかしい娘だ。黙っていてもらおうか」

騎士を中心に熱風が発生し、部屋の中を駆け抜ける。

「ヒートウェイブ」

硝子の盾も防ぐことは敵わず熱風をもろに受けてしまい、そのまま壁に吹き飛ばされる。

「かぁっ……」

あまりの衝撃に肺から息が強制的に吐き出される。そして紫の血と共に。

血が止まらない……どこかやられたかな……

「これでわかったか、小娘!! さぁ白薔薇姫、行きましょう」

白薔薇を連れて行くこうとするあの炎の騎士。そして抵抗しない白薔薇……

何故? 白薔薇? 抵抗しないの? 何故???

一緒に逃げてきたのに……こんな奴に白薔薇を……

いやだ……行っちゃいやだ……白薔薇……

「白薔薇を絶対に渡さない!!!もう一度言う!私の白薔薇に触れるな!!!」

紫紺の瞳そして…紺碧の髪。紺碧の姫としてのある姿に。想いが彼女を突き動かした。

「セーフティリリース」

「貴様は許さない!絶対に!!この世に存在のひとつかけらも残さない!!」

「ロードフルカートリッジ」

「Load Cartridge」

マガジンに装填されていた5発のカートリッジが全てロードされ、乾いた金属音が部屋に響いた。

砲身には小さい魔力弾頭が形成されている。しかしそこに凝縮されている魔力量は半端ではない。

「A firing lock is canceled」

そして引き金を引く。慈悲など微塵も存在しない。

「消えろ」

炎を纏う騎士は言葉を発することなく消えていた。

彼が行動を起こすことに合わせて撃つたのだ。

行動を封じる反応射撃によって放たれた弾丸は、体内に留まると同時に魔力爆発。存在すら無慈悲に消し飛ばした。

大量の魔力塵を排出し、モードが解除される。容姿も元に戻った私は息を切らしていた。身体全体に不快な重さがへばり着いているかのような感触。

「はあ、はあ、」

周りを見ると、結界は解除されている。それに：

「白薔薇…よかったあ」

私は白薔薇に駆けよって行く。しかし……

「白薔薇……？」

彼女は……白薔薇は倒れた。

「白薔薇——————————!!!」

私の声だけが無常にも響きわたる。そしてそれに答えるように、デバイスが光るだけであった。

思慮

「はあはあはあ…」

書類をまとめている最中にもものすごい爆発音と揺れを私のデバイス「レイジングハート」が感知したわけで、こうして訓練スペースへと向かっているところなの。廊下は走っちゃ駄目だけど、緊急時は仕方ないよね。

「マスター、何を言ってるんですか？」

「あつ…なんでもないよ…。ははは…」

なんてやり取りをしているうちに、現場にたどり着いたわけで…

「にやははは…」

ただ乾いた笑いしかでない。壁とか床とか…亀裂は入ってるし、所々、クレーターみたいなののできてるし…

「一体なにがあつたんだろ？」

状況を把握する為、部屋に入ることにした。幸いドアは無事のようにだ。

「マスター、どうやら質量兵器ではありません。汚染物質も確認されませんので、どうやら魔力による物と推測されます」

「分析ありがとう、レイジングハート」

レイジングハートが輝きそれに答えた。それにしても、視界が良くないね…電気系統は完全にいっちゃてるみたいだし。そんななか、部屋の隅で倒れている二つの影を私の視線は捉えていた。

「アセルス!!白薔薇姫!!」

倒れている二人に近づき声をかける。しかし二人からは反応がない。

「レイジングハート、二人はどう?」

「大丈夫です。しかし白薔薇姫は少し変です」

「変ってどういうこと」

「それはあとで話します。それより二人の搬送を」

確かにその通りだ。今は二人の手当てが先決みたい。

《はやてちゃん、フェイトちゃん、聞こえる?》

《聞こえてるで、なのはちゃん》

《こつちも聞こえてるよ、なのは》

《はやてちゃんは、シヤマル先生に連絡お願い、フェイトちゃんは運搬を手伝ってほ

しいの》

《了解や、任せとき!!》

《今、ちょうど向かってるから、待ってて!!》

すぐにフェイトちゃんがやってきて二人を医務室まで運んだ。訓練やってたおかげかな。なんなく運べちゃった。

シヤマル先生はすぐに治療を行った。二人とも消耗が激しかったみたい。二人は、治療のポッドの中。ふと、レイジングハートの言葉を思い出し、聞いてみることにした。

「ねえ、レイジングハート。さっき言ったことなんだけど。変って何が変なの?」

「そのことなんですが、三人がこちらに来られた時の身体データがあるのですが」
そういつてレイジングハートはデータを展開する。

「なのは、やっぱりこのデータ凄いわ。アセルスは魔力量は少ないけど、二人はかなりの量を持つてるよ」

フェイトちゃんが感想を述べているなかレイジングハートは続ける。

「では、先ほどスキャンしたデータをご覧ください」

そうして、先ほどのデータを重ねて表示した。示されるデータに私達は驚きを隠せなかった。

「これって…どうなってるの…」

「それは、私と彼が説明するします」

振り返ると、そこにはイルドウンと、シャーリーが居た。

「レイジングハート、データそのままにしといてね」

「了解しました」

大きめに展開されたデータの前に彼女は立った。

「このデータのことなんだけど…あまり知られたくはなかったの。あまりいいものではないから…」

シャーリーの顔が暗い。まるで後悔しているかのような。そんな感じがする。

「そんなに気にすることなのか？私が代わりに説明しよう。君達にある魔力の元、つまりリンカーコアと呼ばれるものか？あれをデバイスに移植しただけだ」

全くついていけない…どういうこと…私とフェイトちゃんは、ポカーンとしている。さらに説明は続く。

「検査の結果、我ら妖魔はリンカーコアがなくても生きていけることが分かった。まあ貴様らには無理らしいがな。アセルスは半妖ゆえに、魔力が少ない。だから、妖魔たる我らのリンカーコアをアセルスが持つデバイス「リーサルドラグーン」へと移植したのだ」

なんとか情報を整理できた。つまり、レイジングハートが出していたデータで、イルドウンと白薔薇姫の魔力値がほとんどなかったのは、そのためである。

でも、どうやってそんなことを……。その答えもすぐに解決した。

「この移植の提案を受けた時、もちろん断ったは。できるはずないし、なにより死んでしまいかもしれなかった。でもこの二人の知識に、蒐集にシヤマル先生の能力があればそれは可能だったの」

「それに、二人のどうしてもっていう意志に負けたの」

振り返るとデバイス調整槽にリーサルドラグーンが浮かんでいる。

「だからこの子たちに託したのよ、二人の魔力を」

しかし、シャーリーの顔はまだ暗い。

「シャーリー、まだ何かあるんだよね、多分……リスクを背負ってるんでしょ?」

どこか隠すことを止めたようにシャーリーは答える。

「流石です、なのはさん。実は、デバイスに負荷がかかると、お二人に反映してしまうんです」

「だから、こんなデータが出るわけやな」

いつのまにか、はやてちゃんが居た。……いつの間にいたんだろ?」

「さっきの戦闘のデータが回収できたんや。ついでに解析してみたんやけど見てみい、

「この映像」

そういつて先ほど行われていた戦闘の映像が映し出される。

「このシーンよく見てや、アセルスのデバイスから、葉莢が5発分排出されとる。つまりカートリッジシステムを扱ったことない素人がいきなりもこんな量のカートリッジ使こうたら、どないなことになる？」

「慣れないうちにこんなカートリッジを使うなんて…暴発しちゃうよ…」

「でも、アセルスは魔力量も少ないのに、暴発させんかった。センスはただもんやない。けどセンスでは片付かへん。多分、デバイスに相当な負担がかかっている。さらに暴発させんために、デバイスの…二人の移植した魔力を使って制御したわけや」

「そのとおりです、はやて部隊長。アセルスさんはセーフティを解除。それに、カートリッジ5発使用。その膨大な魔力のコントローロールと負荷を、白薔薇姫が受けてしまっただけです」

私は、黙って聞いていた。フェイトちゃんも何も言えなかつた。

「今回は、白薔薇姫様のコアを移植したドラグーンIをメインに使ったから、白薔薇姫様に反映されているが、IIならば、私もしかりだ」

「そこまでして、彼女のために尽くす必要があるんですか!？」

フェイトちゃん…

彼女は沈黙を破り言葉を発した。自分の身を犠牲にする理由が分からなかった。

「我らは、アセルスを守り、鍛える必要がある。それだけだ」

「そんなの理由じゃありません!!」

イルドダウンは何も答えず、ただ頬笑み：長い沈黙を経て答えた。

「アセルスは、我らの世界を変革する可能性のある唯一の存在。それだけだ。だから、アセルスを鍛えるのだ」

そうして彼は部屋から出た。

「納得はまだできないけど、どうやら、みんなアセルスを鍛えるために頑張らないといけないみたいだね」

フエイトちゃんの声にみんなが頷く。今度隊長達で話しくちや。

そんななか、こつそり部屋から抜けようとするはやてがいた。

「どうやら、はやてちゃんは、このこと知ってたみたいだね。」

私は逃げないようにくぎを刺す。

「あつ…：ばれてた?」

「そうじゃないと、全ポジションでできるように鍛えるなんて言わないでしょ?」

「あ、あははは…」

なんとか笑ってごまかすはやてだが、なのは、フエイトの顔は怖かった…

「はやてちゃん…隠しごとはいけないよ…」

「そうだよ、はやて…」

「か、堪忍や…二人とも…なっ？」

「駄目だよ」

「駄目」

いややーーーーー!!!!

二人に、はやては連れて行かれたのだった。

シャーリーから暗さはまだ取れてはいない。語られたことはすべてではないことを知る者は少ない。まだ、語るべきでない事実を残して。皆、解散した。

医務室。そこには医療ポッドに浮かぶ、二人の姿が残されているだけだった。

一歩

白薔薇を連れ去ろうとした、炎の従騎士との戦いから3日。アセルスと白薔薇は目覚めなかった。自分の弱さに怒りを感じ……強ければ、白薔薇が傷つくこともなかった。だから強くならなければならないと……そう願った。

今、私は機動六課の隊長達と、マンツーマンの特訓の最中だ。朝、昼、晩。毎日のように、全ポジションの特訓を行った。正直、大変だ。みんな容赦ない攻撃ばかりだし……。実際のところ、魔力量の少ない私にとっては防御に魔力を費やす余裕などなかった。なので隊長陣の中で参考とするのは、フェイト隊長。

選ぶ道は一つ。回避能力の向上である。高機動、そして見切りを駆使すれば、防御面には心配はない。まあ……多少なりと防御の練習はするつもりだけど。

「はあはあ……なのは隊長、強いなあ……」

そんな感想を漏らす理由としては現在、スターズ分隊隊長の、なのはさんと模擬戦の

「真つ最中なわけである。私のデバイスの基本形態は銃であるため、度々なのはさんとやっっているわけだが…。」

「Accel Shooter」

前方に対峙するなのはさんから、アクセルシューターが飛来する。

「無茶苦茶だ……」

飛来する魔力弾は20発。もちろん防御するつもりはない。

「ルナ、ソル!!迎撃いくよ」

ドラグーンIにルナ、IIにはソルと呼称を付けている。デバイスのコアの色から月と太陽を連想したからだ。静かに点滅を繰り返し、アセルスに答えるデバイスを見つめなおす。

「All right, my master」

「はあああ!!」

シューターを次々と撃ち落とししていく。何度も痛い目にあえば、いやでも覚える。

「やるね、アセルス。じゃあこれならどう？」

急にシューターの速度が上がる。これまでは…やっぱり加減してたんですね。でも、負けたくない。

〔Sonic Move〕

脚に最低限の魔力を込め、そして動きを見切り、回避する。

私は空を飛ぶことができなかった。でも、飛べなくても負ける理由はない。

シューター同士の誤爆を誘い、漏らしたシューターをルナとソルでの撃墜。ついにはシューターは無くなった。

「ルナ、ソル。モード変更。モードブレイズ」

〔Blaze Mode〕

二丁の銃から、名の如き紅き刃が伸びる。

モードブレイズ。近接戦闘特化形態。

複数の武装を準備するならば、一つのデバイスに複数の形態を準備すべきだとのアドバイスから完成したリーサルドラグーン。その形態の一つ……紅き双刃を携えた私はそのまま一気に間合いを詰める。

「もらったあああああ!!!」

[Protection]

寸での所で刃は届かない。淡い桃色の壁のような物で、なのは隊長は守られている。

「アセルス、本当にすごいよ！短期間でここまで出来るようになるなんてー！」

なぜか褒められた。うれしいけど、今はそれどころじゃない。器用なことに、防衛し

ながらも、魔力をチャージしているのは隊長に気付いたのだ。一度間合いを取るべきか……いや、距離はあまり意味がない。遠距離型なら尚更だ。なら……

「()でシールドを砕くよ」

シールドとの競り合いは休憩。双刃を真つすぐ突きつける。そう、これは双剣でもあり、銃剣でもある。カートリッジをロードせずに詰まった魔力を弾丸として放つ。小気味良い音と共に、5発の弾丸を発射する。上下左右に打ち込み、そして中央に最後の一発が撃ち込まれることで完成する十字砲火。

隊長陣最高の防御力を持つシールドは跡形もなく消え去った。だが、それは終焉でもあった。

「まさか、シールドが破られるなんて思わなかったよ。でも、余力は残さないと……後が続かないよ！」

この空間に散らばっていた魔力塵が収束され、極大の閃光としてアセルスを包み込んでいく。

[St arll ight Breaker]

「はあはあ…負けたあ」

連敗はいつになつたら止まるのか。リベンジを誓い私の意識は刈り取られた。

意識を飛ばしたアセルスをシャマルと白薔薇が救護室へと運んでいき、訓練所の片付けをするのはは、先ほどの事を思い出す。びつくりした。まさかシールドが破られるなんて。

「お疲れ様、なのは」

「ご苦労だったな、高町」

「フェイトちゃん、シグナムさん、見てたんですか？」

「はやてが見てこいって。それに私達の教導が活きてるかなって気になったのもあるし。」

「どうだった、高町。アセルスの戦い方は？」

だからか…なんか二人に似てると思つたよ。

「回避力に速度、突破力。それに判断力も順調に育つてると思うの。でも、防御面がね」
「なのはも、そう感じる？私も同じ感想んだけど、ただ私達と話をした結果、防御に魔力は使いたくないって」

「だから、我ら二人が高機動戦闘を教えているわけだ。ただスタミナと魔力のバランスがまだ甘いかな」

そんな話題の中心のアセルスは今は救護室のベットのの上だろうか。

「じゃあ、二人とも、先に医務室に行つて。後で行くから」

「ん、分かったよ、なのは」

「了解だ」

二人の姿が見えなくなると私は膝を付いた。

「最後の一発、貰っちゃったな」

血の味がする…やせ我慢も大変だよ。

「カートリッジのあんな使い方…本当に弾丸だよ…」

そうしてデータをまとめ医務室へと向かった。

「あとで、ばれないように治療しなきゃ…」

アセルスが機動六課に来てから、1ヶ月が経過。最初は戦い方や、魔力の扱いにもかなり慣れたようだ。彼らとの約束もあるが、こちらも組織で動いている以上、アセルスにも、試験を受けてもらう必要がある。囑託扱いだが、上を誤魔化すには、これくらいする必要があるのだ。

さて、今日は試験と階級とかの説明をすることとする。

部隊長報告書

「急に呼び出して悪いんやけど、アセルスには試験を受けてもらわないかんのや。と、い

うわけで、早速試験受けてもらおうで!!」

アセルスには悪いが、そろそろ隠しきれそうにないからな。早くこつちに正式な形で所属させな……」

「部隊長、話が急でいまいち分からないのですが」

「私の事は、「はやて」でええって。まあ資料を渡すから」

そういつて、数枚の資料をアセルスとイルドウン、白薔薇姫に渡した。

「はやて、我らは単独で動く条件を付けたはずだが?」

……ってまだ事情を話さないし、そんな怒らんでも。

「この機動六課は色々問題も山積みなんよ。そこには上には隠してる三人もおるやろ? 加えて、1週間後に査察に来るとか言いはじめてな…本当、なんか恨みでもあるんかいなって話なんやけど」

その話は軽く三人に無視されたようだ。はやての威厳とはなんだったのか。

「この資料を読む限りでは、ある程度自由にするには階級とか軍属といったものが必要になるわけですね?」

白薔薇姫、物分かりが早くて助かります。

「ふーん。それで私は何の試験を受ければいいの?」

「おーその質問待ったつたで。」

やっと話が進むで…：そういつてモニターにデータを展開する。

「今回受けてもらうのは、陸戦魔導師Bランクへの昇格試験や。いままでのデータからみると、多分この試験くらいがちょうどやと思うんよ。ただ戦技のレベルは、遥か上になるんやろうから、色々ハンデを背負ってもらうことになるし、試験が終わるまでは、あくまで他人のふりや」

どうやら納得はしてくれているが、色々不満がありそうな様子だ。

「はやて、まずハンデについての説明。それに受験するこの二人は？それに試験を受けるってどこ所属で受けるの？」

色々と感じづくのが早いな。見込んだだけのことではあるで。

「魔力のランク的には相応なんやけど、それを上回る戦闘技術をアセルスはもつとるから、怪しまれる可能性もある。だから、今回はソルとルナは使用禁止で!!」

三人がめっちゃ睨んでるんですけど…：仕方ないやん…。だからこれ説明するの嫌やったんや。…：あそこで、グーを出していれば。

どうやら、アセルス達への説明をなのは、フェイト、はやての誰が行うのかジャンケ

ンで決めたようだ。大丈夫か、機動六課。

「ま、まあ決定事項やから。それに同時受験者の二人はフロントタイプにセンタータイプや。だから、センターが被るのもなんやから。今回はサポートメインで！」

「戦闘技術はなるべく使うなということか？はやてよ」

あいかわらず、イルドゥンは核心に触れてくるな…

「そういうこつちや。だから、代用品のものを渡すことになってるんやけど…おつ来た来た」

扉が開くと、1人はシャーリーと分かったが、もう一人の初老の男性は面識がないため分からないようだった。イルドゥンを除いては。

「なるほど、時空管理局陸上警備隊第108部隊所属にしてしまうことで問題を解決したわけだ」

なんで、イルドゥンはなんでも知つとるんや？ほら、ゲンヤさんもびつくりしとるやん。

「こいつは驚いた。私は君と会うのは初めてのはずだが？」

「常識では測る事ができないことは、常に存在しているものだ」

「そいつは聞いてみてえもんだ」

何故か馬が合いそうなこの二人…危険すぎる。

「まあ、とりあえず、そのなんだ。俺はゲンヤ・ナカジマ。時空管理局陸上警備隊第108部隊の隊長をやつてらあ。よろしく頼む」

「と、いうわけや。アセルスには、第108部隊に所属していて試験後、スカウトされ、機動六課つて予定になつとるから。それと、シャーリー」

シャーリーが私に新しいデバイスと、カードの様なものをくれた。なんだろう？

「これが、バックアップ用につつたデバイス、通称フォートレス。ストレージですが、アセルさんの防御面や移動に凄く役立つと思います。それと、カードなんですけど、これはイルドウンさんと白薔薇姫さんから、情報をもらつてつた試作品です。今回、作る事ができたのは、剣と盾だけです。それに一回しか使えませんので」

説明をうけたあと、せっかくなのでセットアップしてみることにした。ちなみに監修には白薔薇も参加したらしい…何故？

答えはすぐに分かった。

「フォートレス、セットアップ」

バリアジャケットの展開が完了し、鏡を見てみた。

「これって、白薔薇？」

いつもの紅いドレスではなく、純白のドレス。そして腕と脚には、純白の小手と具足が装着されている。そして白薔薇のコサージュが。

「はい。私も参加したいのですが、私達はロングアーチでバックアップという形になりましたので、是非と思ひまして。お気に召しませんでしたか？アセルス様」

「ううん。全然。白薔薇、うれしいよ」

そういうなり、私達は唇を重ねる。周囲に人が居ようが関係ないことだ。私は白薔薇に感謝しているだけなのだから。

「ゲンヤさん。日常茶飯事やから」

「あ、ああ」

やっぱり誰が初めて見てもそう思うのが当たり前やな。

「うちの娘二人も、ああだったんだが、やっぱりあれが普通なんかね？」

なんとという爆弾発言。ああ、この部隊はどうなるんやろ。だってスカウトする一人つて…はあああ。

「試験日は明日や。よろしくな。アセルス」

なぜかサムズアップで返すアセルス。もういやや。

帰って、ラインやみんなと…やな。

さて、連絡回しとこか。

開幕

時空管理局陸上警備隊第108部隊所属、アセルス二等陸士。これが私の仮の所属と階級らしい。なんか、組織っていろいろ面倒だね。

新暦75年の春。ミッドチルダ臨界第8空港近隣。廃棄され佇むだけの都市のビルから新たな物語は始まった。

魔法少女リリカルなのはStrikerS 紺碧の姫。やっと始まります。

乾いた風が頬を撫でる。アセルスは陸戦魔導師Bランクへの昇格試験を受けるため、スタート地点にいる。私の後ろでは、ボーイツシユな蒼い髪の少女、そしてオレンジの髪が似合う少女が身体をほぐすようにストレッチをしている。

蒼い髪の彼女は、スバルⅡナカジマ。昨日あつたゲンヤ隊長の娘さんらしい。そしてオレンジの髪の彼女は、ティアナⅡランスター二等陸士。スバルとは古い付き合いらしい。

そんなこんなで軽い挨拶を交わした。

「私は、アセルス二等陸士。陸士108部隊所属です。よろしく」

なんかぎこちないな…ほんと苦手だよ。試験が終わるまで我慢我慢。そんなことを思っていたら、見事に二人は食いついた。

「えっ!!お父さん(ゲンヤさん)の部隊なんですか!?!知りませんでした」

まあその反応は正しいです。私は偽りなので。

「目立つのは苦手なんです。それよりも、今回の試験スリーマンセル（三人一組）での試験と伺ったのですが、見たところスバルはフロントアタッカー、ティアナはセンターガードに見えますが、相違はありませんね？」

私の言いたいことにティアナは気付いたようだ。鋭いな、この子。

「お互い、初対面ということだし、スキルを確認したいわけね？分かったわ」

そして3分ほどお互いの能力や、タイプの確認を取った。今回は、はやてにも言われたとおり、スバルがフロント、ティアナがセンター、私がフルバックとなる。ただ、強化系はほとんど使えないのに：はやて：覚悟しといてね。

ティアナが時間を確認する。そしてブザーがなり、空中にパネルが現れた。挨拶をしているのは：ってリイン空曹長ですか。試験監督やるんだ：：少し笑いを堪えながら、説明を聞くことにした。

「おはようございます。さて!!魔導師試験を受ける受験者3人。揃ってますか?」

リイン：：なんか可愛いよ。二人は返事をしそうですね、合わせて返事をする。

「はい!!」

「確認しますね! 时空管理局陸士386部隊所属のスバル||ナカジマ二等陸士」

「はい!!」

「ティアナⅡランスタター二等陸士」

「はい!!」

「それに時空管理局陸士108部隊所属のアセルス二等陸士で間違いありませんか？」

「はい!!」

リイン、ちよつと笑つてる：他人の振りつて難しいよね。

「保有している魔導師ランクは陸戦Cランク、本日受験するのは、陸戦魔導師Bランクへの昇格試験で間違い不是吗？」

「はい!!」

「間違いありません」

二人とも、真面目だね。私は苦手だから、ちよつとうらやましいな。

なんで羨ましいの?…なんか忘れてる…そんな気がする。

何か引つかかるが、今はリインの説明を聞かないと。

「本日の試験を担当するのは、わたくし、リインホースⅡ（ツヴァイ）空曹長です。よろしくですよ」

そう言いながら敬礼するリイン。こちらも敬礼で返す。

「よろしくお願ひします」

さてと、とにかく無事に終わりますように。

上空にヘリが一機。そこには、はやたとフェイトが居た。

「この二人が、はやてが見つつけてきた二人？…はやて！ナカジマ隊長の娘さんだよね？
スバルって」

「そうや、それにティアナって子と付き合いも長くて、相性もいいやろ。それに色々ある
しな！この試験の結果で引き抜くつもりやから」

なのはちゃん、判断頼むで。

さてこちらは、試験の内容の説明中。ここからスタートして、各所に設置されたポイ

ントターゲットを破壊。ダミーターゲットもあるらしいので注意が必要らしい。妨害攻撃はもちろんあるらしいので、気を付けつつ、全ターゲット破壊。制限時間内にゴールを目指すとのことだ。

「以上で説明は終わりますが、何か質問はありますか？」

スバルは何か言いたそうにティアナを見るが、ティアナはスバルを見て「ありません」と答え、スバルも続けた。私もなかつたが、はやてに条件を付けた。それは…

「ばれなきや大丈夫!!」

この約束があれば何とかかなりそうだ……つと、そうこうするうちにライトが染まりそして消える。

「さあ、みんな行くよ!!」

こうして思い思いの試験がスタートした。

最初のターゲットがどうやら前方のビルの中にあるらしい。そうこうするうちに、二

人はビルへと登って行く。おきざりですか？

「アセルス！スバルと先行して叩くから！下のターゲットよろしく」

そういつてスバルはガラスを破り中に入って行く。ティアナの姿も分からなくなつたし。

「二人なら大丈夫だと思ふし：準備運動をかねてやりますか」

「フオートレス、セットアップ」

待機状態（指輪）のフオートレスを機動させる。まだ慣れないな、このバリアジャケットト…

「さて、サーチャーもないし。ばれなきや大丈夫だし…」

そういつて、ポイントターゲットを守るスフィアとの距離を一気に詰める。こちらに気付いたスフィアが砲撃してきたが、すぐにスライディングで回避、そのまま破壊した。すぐさま起き上がると、回し蹴りと、裏拳のコンビネーションによりたちまちスフィアとポイントターゲットはスクラップとなった。

「派手にやりすぎたかな？」

自分に疑問を投げかけながらも、合流ポイントへと向かった。

「二人とも、大丈夫?」

二人とも大丈夫そうだが、びっくりしている。ああ、バリアジャケットか…

「なにそのジャケット…凄く綺麗…」

「関心してる時じゃないよ、二人とも!」

周りを見てみると、スフィアの残骸がたくさんある。二人とも相性はもちろん伸びるうだな。

「ところで次は真上なはずだけど、どうする?」

ティアナに相談を持ちかける。一人で突破は簡単だけど、二人の前ではフルバックだし、色々秘密にしないと。

「集中砲火をなんとか回避したい。だからここはオプティックハイドを使つてのクロスシフトで瞬殺。いい?」

「了解!!」

そういつて二人の姿が消える。オプティックハイドか……結構便利そう。

「二人のバックアップも大変だよ、ほんとに」

アセルスの姿も消え、違う道で上がっていった。

天井にテイアナのアンカーガンからのアンカーが刺さり、下からあがってくる。それにスフィアは気付き、集中砲火を仕掛けてきた。しかしそこにはアンカーガンしかない。そして掛け声とともに、音が近づく。

5

4
スフィアが落ちていく。ローラー音と共に。

3

そして音の正体が姿を表す。スバルだ。スフィアはスバルに気付く。だがスバルは止まらない。そして、カートリッジをロードする。

2

1
スフィアから砲撃が来る。が、彼女は被弾することなく避け、弾く。

そして、おもいつきり踏切、高く跳んだ。同時に魔力スフィアを3発形成したテイアナの姿が。

0。
時は満ちたようだ。

「クロスファイアー」

「リボルバー」

「シューーーート!!!」

彼女たちのクロスシフトで、スファイアは殲滅。

できたかに見えた。しかし、忘れてはいけない。今回はスリーマンセル。スファイアの数も多いのだ。少しの安堵が油断となり、二人は気付かない。そして物陰から今まさに砲撃を開始しようとするスファイアが三体が躍り出た。

「ティアー！危ない!!」

とつさに気付いたスバルはティアナに声をかける。だが二人ともクロスシフトの影響か少し疲れていた。とつさには回避できない。

しまった。やられる…

「秘められし力を解放せん。祖は力の象徴なり。出でよ」

剣のカードに魔力を込め、スファイアに投げた。詠唱が完了すると剣3本がそれぞれスファイアを貫いていた。

「二人とも、油断大敵。だね」

私はオプティックハイドを解除し、二人の前に。試験用だし、出し惜しみは駄目だね。「助かったくありがとうアセルス」

「ありがとう。助かったわ」

「二人のバックアップだからね、気にしないで」

礼を言う二人だが、どうやら剣について聞きたそうだ。

「あの剣は、アセルスの？」

やっぱりか。あんまり答えることできないしなあ……そうだ困ったらこう言えばいいって言われたこと思い出した。

「とりあえず、今は時間がないよ。まあはぐらかすのもだから、簡単に言うとは、他の人たちよと違うんだ。だからね」

納得できないかもしれないけど許してね。二人とも。

「なかなか伸びそうだね。アセルスはともかくこの二人、いい動きしてるよ。」

「そうやる!!フルバックでアセルスも上手いことやってくれとるし、二人とも狙いどおりや」

二人は率直な感想を述べる。そしてこれをモニターで観察していたなのも、どこか嬉しそうだ。

「さて、残すは最終関門だね。大型スファイア。今の二人には難しい相手かもしれないけど。それにはやて、やっぱりやり過ぎじゃあ……」

とても心配そうなフェイト。一体何が。それは、この御方のせいである。

「大丈夫やて!スリーマンセルなら一体なら余裕やろ。だから今回は……」

悪だくみが好きな部隊長八神はやて。大丈夫か機動六課。

「匣に使ったアンカーガンを回収していたティアナの後ろでスバルが「ティアは本番強いなく」って言いながら滑っている。

「うっさいわよ。さっさと片付けて次に行く…はっ!？」

スバルの背後に大型のスフィアを確認した。まずい、スバルが……私は駆けだした。

「スバル!! 防御!!」

間一髪砲撃を回避。そのまま両サイドに走り出した。

「くっ!!」

走りながら、一発スフィアに打ち込む。そのとき、床の隙間に足がかかり、捻挫してしまった。

「くっうう…」

スバルが叫んでるけど、今はそれどころじゃない。身体を回転させ砲撃を回避する。そして壁の隙間からスフィアへの射撃。しかし後で知ったのだが、監視用サーチャーに流れ弾が当たってしまっていた。

このときサーチャーが壊れたため、なのはが動くこととなった。念の為…バリアジャケツトを展開して。

「ティア！」

「騒がないで、なんでもないから」

嘘を付いていることはスバルには分かったようだ。まあ私が見ても嘘だって分かるくらい足首が腫れているんだけど…痛っ。

「捻挫してんでしよう?」

「だから何にもないって。くう…」

やっぱり立ち上がれない。結構重症かな……

「ごめん。油断してた。私が油断してなかったら、こんなことには…」

ったくこのスバルはどうしてこうなんだか……

「ほんとに謝ってばかりね。いつもの事ですよ。これくらい平気よ!」

強がってみたけど、これじゃあゴールは無理ね。なんとかスバルとアセルスだけでも。

「ティアナ。あなたも一緒じゃないと、意味がないですよ。それに、フルバックの役目を果たさない」と

そういつてアセルスは私の足首に手をかざす。見たことのない、法陣が展開される。

「癒しの光よ。スターライトヒール」

暖かい。まるで太陽の光に包まれるような柔らかな光。そして光が引くと、腫れは無くなっていった。

「アセルス……ほんと凄いわね。」

「未熟だから、効果は完全じゃないけど、なんとかやれそう?」

2, 3回足首を動かし、確かめる。少し痛みがあるが、我慢できそうだ。

「心配かけて、ごめん。三人で絶対ゴールするわよ!」

「了解!!!」

《作戦は説明した通り。スバル、こっちはあんまり長く持たないから、一発で仕留めなさいよ》

《任せといて。ティア》

時間がない：行くわよ。瓦礫の影に隠れて、ある魔法を使う。

フェイクシルエツト

魔力をかなり使うけど陽動とかには最適なのよね。

《スバル頼むわよ》

案の定、スフィアはフェイクに反応し、気を取られている。

そして、反対のビルの屋上には、スバルがいた。

私は器用じゃない。みんなみたいには上手くできない。でも、決めたんだ。あの人みたいになるんだって。負けない。強くなるんだ。何かを守る自分になるんだって。

決意を言葉とし、拳を振り下ろす。

「ウイングローード!!!」

拳を床に叩きつけると、魔力光と同じ水色の道がスフィアがあるであろうビルへと到達する。しかしスフィアは気付き、スバルが来るであろう壁に注意を向ける。だが、

ティアナのフェイクにより注意は逸らされた。

《今よ、行って!!》

スバルがカートリッジをロードした音が鳴り響き、突撃を開始する。

「いいいいいくぞー」

ローラーをフル回転させ、ウイングロードを全力で駆ける。そして壁を壊し内部へと侵入した。

「うおおおおお」

スフィアに渾身の右ストレートを繰り出す。しかし、スフィアは防御する。

「おおおおお!!!」

私は構う事なく、拳を付きつける。

気迫とともに、カートリッジが二発ロードされる。そして、指が防御の中に。そして中から防御を破壊した。しかし、スフィアの反撃にをくらい、後ろに回避する。そして二発分がロードされ、法陣が展開される。

「これで、決める!!一撃必倒!!!」

「ディバイン・バスター!!!」

振りぬかれた拳から、圧縮された砲撃が繰り出される。それは易々とスフィアを破壊したのだった。

二人とも凄いな。実力的には、苦しいのに。やっぱり相性抜群だね。ただ、このまま終わらせてくれそうにないんだよね。はやてのことだから。

《二人とも、時間ないから急いで》

そして、駆けだしていった。

ゴールで待つリインはいつ来るのかと、心配している。時間を再度確認し、再度前方を見ると、三人の姿が見えた。

「来たですね。時間もありませんし、大丈夫でしょうです」

しかし、リインは知らなかった。知っていたのは、隊長達だけでリインは知らない。まだ大型スフィアがあることを。

「ティア大丈夫？」

スバルはティアを背負って走っている。やはり足は完全ではなかったみたいで、痛みが再発したみたいだ。とにかく、早くゴールして治療しないと。だがここに最後の罠があった。大型スフィアが背後に現れたのだ。

「やつぱりね。こんなことと思つたよ」

「あわわわ、あれなんですか？」

はやてのやりそうなことは分かつてたけど、これは卑怯だよ、はやて。このさい合格のためには、仕方がないか……それに、リインもパニック起こしてるし。

「二人とも、先に早く。あいつは私が仕留めるから」

「そんな無茶よ、私達でなんとかなったのに」

「今の二人は、満身創痍。はやくゴールすることが先決だよ。大丈夫、絶対に間に合わせるから」

二人をなんとか納得させ先に行かせる。だが、この大型スフィアの様子はおかしかった。この魔力量は……さっきの奴とは全然違う。しかも、私を狙っていない。そう、この狂ってしまったスフィアは、二人を狙っている。

《二人とも、避けて》

二人はどうやら寸前に回避できた。だが、スピードを落とさせるわけにはいかない。

もう一枚を使うしかないみたいだね。ごめんシャーリー。

「秘められし力を解放せん。祖は守りの象徴なり。出でよ」

もう一枚の盾が描かれたカードに魔力を込め、二人に投げる。二人の背後に、盾が出現し、二度目の砲撃を防いだ。

「さて、悪い子にはお仕置きしなきゃ」

壁を蹴り瓦礫の間を縫って三角飛びの容量で、魔力攻撃箇所を破壊する。そして、背後に回り込み、掌をスフィアに密着させる。純白の小手が淡い光を帯びた。

「終わりだよー！」

内部に気を送り内部からの破壊……「短剣」。最近の模擬戦で閃いたものだ。

狂ったスフィアは爆散。やれやれと思いつ時間を確認すると、もう10秒しかない。ゴールをみれば、二人が何故かネットに絡まっている。止まる事考えてなかったのか。

「仕方ないね。私もあの二人と一緒に罰を受けますか」

[Sonic Move]

10秒かつちりに私はゴールし、そのままネットへと突っ込んだのだった。その後、三人そろって、リイン空曹長に怒られたの言うまでもない。それにスバルとティアにも色々聞かれることとなり、まだ誤魔化す必要があったため、大変だった。

でも、スバルとなのは隊長との出会いも聞けたし良かったかな。

《はやて、覚悟しててね》

《ちよつ、アセルス、あれは違うって。あんな強いのも置くわけないやん》

ちよつと本当っぽいけど、まああとでお置きだね。でも、そうなら原因は一体なんなのか。手がかりになりそうな、スフィアを爆散させてしまった、少し抜けた一面をも見せるアセルスだった。

再来

「思ったより怪我はひどくなさそうですね」

治療が終わり、リインはなのはに報告。アセルスの応急処置もあり、こうして軽傷で済んだ。

「アセルスさんも訓練の成果ばっちり出てます。さてと、アセルスさんも含めて説教はしましたし、帰りますですよ」

説教は当然の事だと言いたげに言い終えると、一つ敬礼をして、なのはの前に立った。「なのはさん、以上で報告おわりですう」

「リインもお疲れさま。ちゃんと試験監できてたよ」

嬉しそうに回るリインを見て、なんか疲れも吹き飛んだように感じる。なのはも試験

会場の準備や不慮の事態への対応に気を張り詰めたままで、疲労が溜まっていたようだ。

「にやははは……とりあえず、みんな今日はお疲れ様。試験の結果はまた後日に私から通達します」

二人とも、これからがほんと楽しみだな……。そんな感想を内に試験会場から帰って行く二人を見送り、アセルスと話すことにした。

「アセルス、お疲れ様。どうだった、あの二人？」

「二人ともまだまだ荒いけど、コンビとしては凄く能力高いと思う。それに伸びるよ、かなり」

やっぱりアセルスも同意見みたい。これから教導楽しみだな。

「データも整理できたし、帰ろっか。あつ！まだアセルスのことは秘密だったね」

「なのはさん。気を付けてくださいよ。偽るの大変なんです」

「プライベートでは、なのはでいいよ。アセルス」

そういつて額に軽く Kiss を落とす。あつ、慌てる。なんか新鮮だな……。慌てるアセルス。いつも白薔薇姫といちゃいちゃしてるのに。

「なのは……私には白薔薇が……」

む……なんか妬けちゃうな。私にはフェイトちゃんがいるけど、アセルスにもなんか魅

力的なものあるし……

「なのはさん!!アセルスさん!!惚気てる場合じゃありません!!!もう……先に帰りますですよ?」

心の中では必死に謝るなのはとアセルスにどこか頬を赤らめるリインの姿に二人がまた可愛いと表情が緩むのは必至だった。

「なのはさん、覚えてくれてたんだ。それに、なのはさんに憧れてここまで来たってことも言えた!」

テンションMAX。ティアが絶賛溜め息、呆れてる。ひどいよ、ティア。

「うっさい、スバル。とにかく、最後の暴走の減点痛すぎよ!!もう……落ちたらどうすんのよ!!」

ティアが足を捻挫しなかったら、こんなことには……なんて言えない。絶対。

「きつと大丈夫……だよ」

気にしても仕方ないよね。うん、帰ろう。結構大変だったし、早く帰ろう。止めた足を繰り返り出したそのときだった。

ここに居たか。覚悟!!

どこからか、声が聞こえた。そして後ろを振り返ると同時に、三人の居た場所に、結界が展開されていた。

試験の内容について、フェイトちゃんと会話してる最中やった。訓練スペースにできたあの結界がまた現れたんや。

「フェイトちゃん!あれって、訓練スペースのときの結界とちやうか?」
「たぶん、そうだと思う。でも、なんでここに?」

なんで、こんなところに結界が……こんなところ狙っても仕方ないやろし。いや、アセルス?多分そうだ。アセルスを狙ってる。

「こちら、ロングアーチ00。ロングアーチ、聞こえる?」

「はやてか。どうやらそちらに、従騎士が来たようだな」

従騎士?もしかしてあの結界の正体!?

「我らの元いた世界から、アセルスを倒し、白薔薇姫様を連れ戻そうとする騎士たちだ。このまえば炎の従騎士だったはずだ」

詳しい話を聞いてなかったから分かんかったけど、こういうことやったんか。なるほど。

「その結界に関与できるのは、妖魔だけだ。中には誰が?」

「多分、アセルスとなのはちやんとリインが中に」

モニター越しにイルドウンと白薔薇姫が笑ってる。笑いごつちやないで。

「心配しないでください、はやて様。アセルス様には十分教育しておりますので。それにフェイト様も安心しています」

横を見ると確かに心配してなさそうな、フェイトちゃんが。

「はやて、大丈夫だよ。あの三人なら、そうそう負けやしないよ。オールラウンダーに最強のセンター、そして、はやての大事な家族だつて一緒だからね!」

たしかに。心配しすぎやったな。連絡はとれへんけど、きつと、大丈夫や。

「三人とも、無事に帰ってきてや」

この感じは、前にも経験した。あのときだ。白薔薇を連れていこうとした。あいつの時と一緒にだ。また白薔薇を狙ってるの…？嫌だ。絶対に白薔薇は渡さない。感情がいやでも高ぶる。駄目！抑えないと。少し深呼吸して、気持ちを落ち着かせる。よし、大丈夫だ。

「アセルス、これって…映像で見たのと同じ？」

「多分そうです。奴らは白薔薇を狙って…」

「いや、今回はお前の命を頂く」

「!?!?!」
「?!?!」

「ライオンが慌てるのと同時に、声の主が現れた。」

我は、水の従騎士。お前の命、貰い受ける！

「簡単にそうですかってやられるわけにはいかないよ!!なのは、リイン、力を貸して!!」
「もちろん!!こんなところで死ぬわけにはいかないよ!」

「私もですよ!!」

視線で合図し、三人はバリアジャケットを装着する。ソルとルナは今手元がない。今はフォートレスでやるしかない。

《なのは、リイン。殺るしかないよ》

二人とも、戸惑ってる。多分二人の正義なんだろうな。

《ごめん、二人とも。私が止めを刺すから、二人は動きを止めて!!》

《ごめん、アセルス。こっちは任せて》

《アセルスさん、お願いしますです》

そうして、フォートレスの設定を殺傷に変更する。貴様は塵一つこの世には残さないからね。

「さあ、いくですよ」

古代ベルカ式の法陣を展開するリインは自らも一部ともいえるストレージデバイス「蒼天の書」を開き、相対する。

「フリジットダガー」

リインの眼前に30本以上の水色の短剣が現れる。そしてそれらは、従騎士へと飛翔した。

「小癩な!!!」

従騎士は盾と剣を使い、飛来する短剣を次々に撃ち落としていく。だが、盾に刺さった短剣の周りは名の如く凍結が始まっている。

その攻防から少し距離を置いて、なのはは機会をうかがっていた。

「アクセルシューター、ワンショットで精密射撃。いくよ!!!」

「Acceler Shooter」

普段より大きいアクセルシューターが打ち出される。放たれた弾丸は寸分の狂いもなく、盾に刺さった短剣を捉えた。そして、その衝撃に耐えることのできない盾は無残にも碎け散った。

「おのれえええ!!!」

まさか人間如きにここまでされるとは思わなかったのだろう。怒声と共に、なのはに突っ込んでいく。だが……

「油断しすぎだよ」

なのはに向かつて走る、従騎士の前に宙返りで割りこみ、そのまま角にかかと落とし。あびせ蹴りでそのまま角を折ってやった。あまりに単調な攻撃の為に相手の強さをうかがってしまふ。だが従騎士の名は伊達ではない。怒りを通り越し逆に冷静になった水の従騎士たる敵は水を使うことを始めた。

「水が、やつの周りに……一体なにを」

何もなかった地面から突如、水が湧き出し、従騎士の周りに円状の水溜まりが形成された。

ここまでコケにされたのは、はじめてだぞ、人間ども**!!!**楽には殺さんからな**!!!**」

剣を振り上げると、水溜りから、水球が形成される。そして無数の水球が一つ一つ意思を持つかのように縦横無尽に襲う水撃だ。

狙いはもちろん、ラインだった。だが、考えが単調すぎたようだ。アセルス、そして

なのにも読まれていた。

「リイン、私の後ろに。なのは!!リイン!!任せるよ!!」

気を練り、魔力と混ぜ、障壁を展開するプロテクション。魔力が足りない分、気功で補うことにより、強度や、凡庸性が増した。だがフォートレスを使っている場合しか、この強度は無理だが。

なんとか水撃を防ぐことはできている。だが、水の従騎士は伊達ではなく、プロテクションにもヒビが見える。

「二人とも、早く……」

結界面ギリギリの上空から機械音と共に葉莢が二発分排出される。それは、アセルスが待ちわびていた反撃の始まり。

「チャージ完了!レイジングハート、デイバインバスターいくよ!」

「Divine Buster」

魔力が高密度に凝縮される。そう……高町なのはが得意とするこの砲撃。

「デイバインバスター……」

プロテクションが破られると同時に、桃色の巨大な魔力が従騎士を飲み込んでいく。流石に不意を突かれ、直撃の為、非殺傷とはいえ、意識を刈り取る寸前まで追い込んだ。「逃がしません!! 捕らえよ、凍てつく足枷! フリーレンフェッセルン」

水の従騎士は最大のミスを犯した。ラインの凍結魔法は周囲に水があれば、発生速度は上昇し、強度も増す。水さえなければ、まだなんとかなっていただろうが、一瞬にして、氷檻に固定された。

ぬうう、何たる失態

「へえ、まだ喋れるんだ。でも、言ったよね。塵も残さないって。」

身体の中に確かなイメージが湧き上がる。アセルスには魔力の変換資質があるらしい。だからこのイメージが成り立つのだ。

これでとどめだよ。

右の小手が紅く燃え上がる。

「知ってる? 冷めたものを急激に温めると、壊れやすくなるんだよね。だから、試してみようか。もちろん、貴様でな」

脱兎のごとく駆け、正面に対峙、そして、その加速を利用した、正拳突きを放った。炎

を纏った一撃、金剛神掌は、氷の中の騎士を捉えた瞬間、爆炎を放ち粉々に吹き飛ばした。

「まだ、生きてるなんて、さすが妖魔」

残った騎士の頭を足で踏みつけて嫌味のひとつでも垂れる。

貴様如きに。だが忘れるな。次の騎士が貴様等を……

ばらばらになった身体の他の部分が消滅していく。そして、残るは頭だ。

「では、言っておこう」

私は、二人を見て頷く。そして…

「私達は負けない!!!」

そうして、頭を踏みつぶした。

従騎士が完全に消滅したことにより結界が解かれた。

「アセルスって、この時は、凄く恐いんだね……」

「なのはさん……リインも怖かったです……」

青く染まった純白のドレスに身を包むアセルスは笑っていた。

結界が発生してから、フェイトとはやては、結界近くで待機していた。すると、後ろから、スバルとティアナが来たようだ。

「スバルⅡナカジマ二等陸士とティアナⅡランスター二等陸士だね。フェイトⅡTⅡハラオウン執務管です。今は危険なので、二人とも、下がってて」

「せや、危ないし、怪我しとるやろ。ここは任せといてや!!」

二人ともびっくりしてる。どうしたのかな？

「フェイト執務管!!、それに、八神はやて二等陸佐!!何故お二方がここに？」

ティアナが慌てて尋ねる。そんなに緊張しなくてもいいのに。

「試験を見せてもらってたの。そしたら、急にこんなことになっちゃって」

経緯を説明していると、急に結界が解除され、そこには青に染まり、笑うアセルスと

少し困っている、なのはとリインがいた。

「なのは、リイン、アセルス、無事だった？」

なのはの元へと駆けよる。どうやら無事みたいだ。思わず抱きついてしまった。

「無事でよかった……」

「フェイトちゃん……ごめんね。心配かけて」

リインもはやてのところに飛んでいった。やっぱり怖かったのだろうか？再びアセ

ルスに視線をやると、バリアジャケットが解除されると同時に倒れる姿が目。

「アセルス!!」

なのはが駆け寄り、支える。

「今の戦闘で魔力を使いきったみたい。とりあえず、検査だけでもしないと」

結界中で一体何があつたのだろうか。今は、治療と休憩が必要そうだ。

「スバルにティアナ。試験結果は三日後に伝えるから。アセルスのために時間頂戴ね」

なのはがそう言うと、二人は敬礼して答える。

「了解しました」

「じゃあ二人とも、私達は、アセルスを病院に連れていくから、気を付けて帰ってね」

そういつてアセルスをへりに乗せ、飛び立った。もちろん病院ではなく、機動六課に
だが。

「私達つて乗せてくれないんだね、ティア」

「我慢なさい、スバル」

衝動

激しい渴きと衝動に駆られる様になったのはいつ頃だろうか。仕事や訓練にも手が付かず上の空が続く日々が多くなった。だが、それも日に日に和らいでは来ていると感じる。アセルスが妖魔としての力に目覚めてから今まで、「美しき者」を欲する衝動に苛まれていた。それは二体目の従騎士との戦いの後、六課の医務室でのことだ。

アセルスの看病をしている白薔薇がそれに気付いた。うなされ始めると同時に頬が熱を帯びどこか、苦しくも見惚れるような美しさも感じられた。汗をすつと拭つてやり、手を握り見守つているときだ。

「白薔薇……」

ベッドへと仰向けに倒され、アセルスが白薔薇に跨る。その目はくすんでおり、心が宿つてないかのようにも見えた。ただ頬を上気させ、目の前の獲物を味わう……。獣のように。

「アセルス様……やはり血は争えませぬ。目を覚ました時、このことを覚えてはいない

でしようけれども……」

白薔薇はアセルスの首へと手を回し、アセルスをぎゅっと引き寄せ、耳たぶを甘く噛み、甘い息を漏らしながら、白薔薇は甘美な言葉を漏らす。「アセルス様のお好きなように」……と。

本能で押さえつけていたアセルスの箍は外れ、暴力的とも思える強引さで唇を奪った。白薔薇は素直に受け入れ、成すがままを受け止める。水音が孤独な空間を支配し、場違いな程の美しさを持つ二人は異色の存在だった。

「んん……アセルス様……激しい……」

白薔薇は全て私のものだ。それを証明するかのように、アセルスは無意識の中で、白薔薇を求める。一糸纏わぬ姿で、白薔薇のすべてに自分の存在を植え付けるべく、夢中で貪った。痛みもあるだろうが、それすらも甘美なものとして白薔薇は感じていた。それは逆らえぬ力ではなく、純粋な喜びであり、愛なのだ。

妖魔に性別は関係ない。だから人のような愛は理解できないかもしれない。だが、アセルスは、半妖の身である。それは白薔薇にとつても、また世界にとつても稀有な存在となっていた。それは妖魔の身で知り得なかった感情……。

「はあ……んん……」

身体を振り刺激に悶えながらも、必死にお互いを求める二人。身体だけではなく、それは白薔薇という存在全てをも欲する衝動にアセルスは突き動かされた。妖魔はそう簡単に死ぬような存在ではない。多少の傷などすぐに完治してしまう。そのことを理解しているのか否か、アセルスは白薔薇の首筋に歯を突き立てる。溢れだす妖魔である証……青い血を吸い、喉を鳴らした。これに驚く白薔薇をよそに、口元を青く濡らすアセルスはまた傷口に吸いつき、血を吸いあげる。

「……!?アセルス様……御慈悲を……」

力が入らず脱力した様子で白薔薇は必死に声を紡ぐ。だが、経験したことない痛みや、快楽の波に正気を保つことが精一杯で白薔薇も耐えがたい快感に今にでも意識を飛ばしそうな程だ。だがそれも徒労と終わった。紺碧の姫へと姿を変えたアセルスはその後白薔薇の意識を飛ばし、快楽へと誘い、代わり、残ったのは甘い匂いだ。

ぼやけた意識が少しずつこちらの世界に引き戻される。最近の中では意識失った時間が一番長かったのではないかと思う程、それだけアセルスの心身は極度の疲労を受けていた。だが、無意識での事は一切覚えておらず、自分がいつ自室に戻されたのかも分かってはいなかった。

「……は……そつか。また疲れて倒れちゃったんだ。スタミナ無いな、ほんと」

ようやくはつきりしてきた視界の中、ベッドから起き上がった。起きた時の感じからして辛い疲れは抜けているようだ。そんなとき、タイミングを見透かしたように、携帯端末に連絡が入る。イルドウンからみたいだ。ロビーで挨拶があるから出席しろとのことだ。そういえばあの二人にもあれ以来会ってないしね。

少し身体を伸ばして、自分の部屋に戻りシャワーを浴びる。寝ていた間の世話はよく白薔薇がしてくれていることは話から聞いていたので白薔薇には感謝をしないと。

シャワールームから出て、タオル一枚で鏡の前に立つ。絹のような身体には無数の痣、傷が目立つ。それだけ彼女が過ごしている時間は濃密なのだ。

「さてと、そろそろ行かなきゃ」

しかし肝心なことを忘れていた。そう制服が無いことを思い出す。さすがにバリアジャケットでロビーに行くには少し気が引けるが……それも部屋に戻れば取り越し苦労に終わることとなった。

「白薔薇……」

部屋には機動六課の制服が掛けられていた。私の事をほんとに分かってくれている。そう思うだけで、白薔薇の笑顔を早く見たくなった。

「ありがとう、白薔薇」

素早く制服に着替えれば、鏡の前で身だしなみを整え、部屋を後に。鈍った身体を鳴らすかの様に背伸びをひとつ、気合いを入れた。

「さあ、行こうか！」

部隊長オフィス

真新しい机を指で二度なぞる。ついにこの日がやってきたのだから。隣でリインも喜んでいるようだ。

「えへへ、リインにびったりですう♪」

リインも嬉しそうやな……おっ、誰か来たようや。

機動六課の制服に着替えた、なのはちゃんとフェイトちゃん。うん、とつても似合ってる。

「三人で同じ制服なんて中学校くらいで。なんや懐かしいなあ……」

昔を思い出し、三人で和んでいると、つつい時間を使うようで、フェイトがなのはに切り出す形で会話を終えた。工作上必要なことは例えこの三人の仲であっても疎かにしてはいけないと分かっているからだ。

敬礼後なのはが答える。

「本日、只今より高町なのは一等空尉」

それにフェイトも続く。

「フェイト・T・ハラオウン執務管」

「両名とも機動六課に出向となります。どうぞよろしくお願いします」

はやてもこれに敬礼で返す。

「はい、よろしくお願いします」

少しの間ができ、そしてまた笑みがこぼれる。三人の仲は素晴らしく、絆は深く大きい。それは彼女達が命を賭けた戦いを乗り越えてきたからこそ生まれたのだ。

そうこうしているうちに、ブザーが鳴る。どうやら来客者が来たようだ。ドアが開くとそこには、成長した懐かしい青年の姿があった。

「失礼します。あつ、高町一等空尉、テストタロツサ・ハラオウン執務管。御無沙汰して
ます」

礼儀よく敬礼し、蒼髪の青年は挨拶をする。ただ、二人とも少し困惑していた。が、二人とも気付いたようだ。

「グリフィス・ローランです」

しかし、彼の前の二人は大はしやぎしている。

「うわわ…凄い！凄いやグリフィス君!!すっごい成長してる!!!」

「前見た時は、もっとちっちゃかったのに」

「その節はお世話になりました。今はこの部隊の副官を務めています」

「そうや、アセルスがこつちの世界に来た時にも、グリフィス君はかなり頑張ってくれたんや」

ほんと、優秀な人材や。

「母も元気でやっています。それと、報告よろしいでしょうか。新規のフオワード4名、それに機動六課のスタッフ、それとアセルスさんも揃いました。現在、ロビーに集合しています」

「そうかあ、早かったな。それにアセルスも復調してなによりやな。それじゃあ、なのはちゃん、フェイトちゃん。みんなに御挨拶や!!」

「うん!!」

ロビーでは、はやてやみんなの挨拶が行われている。ただ病み上がりな私には、ただ辛い訳で……あつ、次は私の番かな。

「アセルス准陸尉です。階級とか関係なく接してください」

簡単な挨拶で話を終わる。実のところを言えば、体調がいまいちなのですぐに切り上げることとなった。挨拶が終わり、解散となった後、シグナムとフェイトが一緒に歩いていた。どうやらこの二人は色々あったみたい。そんな妄想している私に、二人は気付

いたようだ。

「アセルス!!もう大丈夫なの?みんな心配してたよ。」

「そうだアセルス、もう身体はいいのか?」

二人とも…心配してくれてたんだ。……ありがとう。

「もう大丈夫。二人とも、ありがとう」

少し照れながらも二人に頬笑みかける。ただ二人は少し赤面していたけど。

「まだまだ、二人みたいにはいかないな。二人とも、また教導お願いね」

強くならなきゃいけないから。守るため、勝つためには……そんな思いに耽っている

と、二人に手を握られていた。

「喜んで!!!」

二人とも…ちよつと怖いよ。

そんなこんなで、時間を潰していると、フェイトがあることを思いだした。

「アセルス、実はフォワードの4名が模擬戦を行ってるんだ。それでね、アセルスにも模擬戦に参加しておいてほしいんだ」

「模擬戦って…隊長達といつもやってるやつ?」

「それもあるけど……アセルスも聞いたことあるでしょ？」「ガジェット・ドローン」。私達はこれとも戦わないといけないの」

ガジェット・ドローン。話には聞いているけど、実際にまだ戦ったことはない。経験を得るためにも戦っておくべきだろう。

「わかった。で、どこで模擬戦やってるの？訓練スペースはまだ……壊したままだし……」
壊した本人は全く気にしない。

「それなら大丈夫！さあ、案内するから！行くよアセルス。リハビリついでに、身体動かそう」

二人に引つ張られながら、アセルスは外に連れ出された。

隊舎の外に移動し、しばらく歩くと眼前には、荒廃したビル群が立っていた。しかし、以前ここはただの人工の土地だったはずだ。いつの間にこんなものができたんだろう。ビル群を眺めながら歩いていると、そこにデータを整理しているシャーリーが居た。

「あつ、アセルス！もう身体は大丈夫？なのはさんも心配していましたよ」

コンソールを操作しながら、シャリーは淡々と話している。どうやらデータを取っている様だ。

「シャリー、なんのデータ取ってるの?」

何気ない疑問だが、これがフェイトがここに連れてきた理由である。

「いま、フォワード4人のデバイスのデータを取っているんです。みんな良く走りますからね。みんないい子に仕上げますよ」

なるほど……だからシャリーが楽しそうなんだ。そういや、私もこの模擬戦に混ぜられないと。

「シャリー、私のデバイスのデータを取っておいて。最近、ルナとソルを使ってなかったから、調整を兼ねてお願いしたいんだけど」

「言われなくてもそのつもりでしたよ、アセルス。妖魔とのデータはありますが、ガジェットの場合はまだありませんから。ドラグーンもしっかり調整しますよ!!!」

頼むよ、シャリー。さて、私も訓練に混ぜろうかな。

「アセルス、頑張つてね! 無茶はしちゃだめだよ」

「アセルス、無理はするな」

やはり、少し心配なのだろう。大丈夫だよ……二人とも。

待機形態のルナとソルに触れる。それに答えるように、二機は光る。久しぶりに使う相棒達だけど……きつと大丈夫!!

「Standby ready」

「セットアップ」

待機中のピアスが銃形態へと変化、同時に紅きバリアジャケットが展開される。魔方陣が消えるとそこには、紅き姫が舞い降りた。

「ふう……やっぱりこれがしつくりくるかな? さてと、みんなに混ぜざらないと」

「Sonic move」

風を切って駆けていく感覚は久しく、気持ちのよいものだった。一歩ずつ速度を上げていき、模擬戦が行われている、ビル群へと向かうのだった。

訓練

フエイトは最近不思議な夢を見ていた。自分と瓜二つな私が話しかけてくるという夢。だがどこかに懐かしさを覚える夢だけに、気にはなっていた。

「やつぱり……あの子なのかな……」

言葉は沈黙に飲まれ、ベッドから立ち上がる。その横には愛しい者の姿が。ふっと頬を緩ませ、シャワーを浴びる為に部屋を後にした。

第一回模擬戦

逃走するターゲット8体の撃墜、または捕獲。これが今回のミッション。スターズの二人や、キャロに迷惑をかけないように頑張らないと。そう意気込むエリオ・モンディアルは愛機のストラーダをギュツと握り込む。どこか緊張しているのか、額には少しの汗が見られた。

「それじゃあ、第一回模擬戦、元気に行こうか!! ミッションスタート」

なのは隊長の合図と同時にターゲットが逃走を開始する。今回のターゲットは、接近

すると攻撃をしてくるタイプらしい。

らしいのだが…

向こうから、スバルさんがガジェットを追いかけながら、魔力弾による撃墜を試みている。しかし、逃走していた4機ともに簡単に避けられていた。

「なにこれ、速過ぎ!!」

確かに、速そうだ。だけど僕だってスピードには自信がある。逃走経路に陣取り、撃墜を試みる。ガジェットからの攻撃を確認と同時に跳躍、ビルを使い三角飛びの要領で回避、そしてストラダーダを振りぬぎ、魔力刃を飛ばす。が、それもひらひらと舞う木の葉のように、簡単に避けられてしまった。

「全然当たらない……」

何度か追いかけて、攻撃を仕掛けるも、すべて避けられてしまった。絶対に当ててやると意気込んでしまい、スバルさんと躍起になって前に前にと追いかけてしまう。それを見かねたティアナさんから念話が来た。しまった……後ろとの距離を考えてなかった。

一度、スバルさんと合流することが先決みたいだ。追撃はあきらめ、一度スバルさんと連絡を取る。

《スバルさん、この先のビルの下で合流します》

《OK、私も向かってるから》

スバルさんもそのつもりだったようで、バックス組との合流を急ぐべきとの判断を取っていた。ミツシヨンの残り時間も少ないので急いで合流地点へと足を進めた。

合流ポイントへの移動の最中、ビルの屋上から、追いついたティアナさんとキャロがガジェットに攻撃を仕掛けているのが見えた。

「ちびっこ、威力強化お願い」

「はい！ケリユケイオン」

[Boost up]

「Barret Power」

キヤロの補助により、ティアナの魔力弾が一回り大きくなった。眼下を走る4体のガジェットに狙いをつけ、強化された4発の弾丸を解き放った。オレンジの弾丸はターゲット目がけ正確に飛来する。だが着弾の寸前、4発の弾丸は打ち消された。

「バリア!?!」

「違います、あれはフィールド系!!」

「魔力が消された!?!」

三者三様の感想、意見を述べる。初見ではびつくりするのも無理はない。困惑する4人になのは隊長からの説明が入った。ガジェットには少々厄介な……魔力を打ち消すアンチ・マギリング・フィールド「AMF」。これがあると、魔力を上手く扱えないとのこと。なので、魔力が関係しているものは影響を受け、阻害されることらしいので……どうやら遅かったようだ。合流前にスバルがガジェットを追いかけたらしく、AMFの影響を受け、綺麗な前方三回転を決め、ビルにぶつかる。足場が消えたのが原因らしい。

「スバルさん……大丈夫ですか?」

「エリオ……なんとか……いたたた……」

どうやら実戦でもこんなやつかいな性質をもった敵を相手にしなくてはいけないと

なると先が暗くなりそうだ。だがこれは思考のトレーニングでもある。予期せぬ状況でも決して諦めず打開策を講じる為の。4人それぞれが生き抜く為に必要なスキルなのだ。

ティアナとキャロはお互いに思うところがあるらしく、閃きの確認をしていた。それをエリオとスバルに通達。

《スバル、あいつらの足どめお願い》

《了解！エリオ、先にあいつらの足止めお願いできる？》

正直、あまり考えがまとまっていなかったエリオは困惑している。だけど、ティアさんがなにか考えてくれてるみたいだし、ここはなんとか足止めをしなきゃ。

《なんとかやってみます》

どうやらこの近くに空中で繋がったビルの廊下がある。それを利用すれば足止めもできるはずだ。幸い、そのポイントはすぐに発見でき、ガジェットが到達する前に用意することができた。するとスバルさんも遅れながらやってきた。

「エリオ・前衛二人で足止め頑張ろ!!」

スバルさん……そうですよね！

「はい!!!」

元気よく返事を返すと同時に、ストラーダにカートリッジをロードさせる。

「ストラーダ！カートリッジロード」

「Explosion」

カートリッジがロードされると、魔力が溢れだす。ストラーダを風車の如く回転させ、勢いのままビルを破壊する。崩れるビルの残骸に、うまくガジェットを巻き込むことができた。

「まだ残ってる!!!スバルさん」

瓦礫から難を逃れたガジェット逃走を続ける。しかし、二度も失敗を続ける者をいない。頭上を越えて逃走しようとするが、そこにスバルが割って入った。力任せに殴りつけ、たたき落とす。だがAMFの影響か、破壊することには至らない。

「なら…」

これまたフランケンシュタイナーよろしくとばかりに、足でガジェットを地面に叩き付ける。そして今度は直接殴りつける。ジワリジワリと装甲を貫通、そして破壊した。

「スバルさん!!すごいです。足止めも成功ですね」

「エリオも良かったよ!」

二人で拳をこつんと合わせる。その瞬間……

5機の新たなガジェットが現れ、そのまま二人を追い越して行った。

「しまった!?!」

その方向はボックス組の方角。早く追いかけてなければ、二人にこの数は多すぎる。二人して疲労困憊のなか、ボックスの二人を援護すべく駆けだしていった。

エリオ達が足止めをしてくれたおかげで、ボックス二人はそれぞれ試したいことの準備ができていた。

「ティアナさん、先に仕掛けます」

ティアナに告げると、幼き召喚士は使役竜「フリードリヒ」に命じる。

「フリード！ブラストフレア」

幼き竜は口元に火炎球を形成していき、いまや限界を迎えたと見るや命令を下す。

「フアアア!!」

真下を逃走するガジェットに火球が迫り、地面に直撃する。その後火球は地面を火の海へと変えた。火炎に巻き込まれたガジェットは耐えることができず、そのまま爆散した。だが全てを爆散させることはできず、数体は上空へ逃げようとする。

だが……

「我が求めるは、戒める物、捕える物。言の葉に答えよ。鋼鉄の縛鎖。鍊鉄召喚、アルケミックチェーン!!」

ガジェットの真下に法陣が展開されると、まるで生きているかのような鎖が現れ…ガジェットを捕えていった。

それを見ていたなのは関心してしまう。器用だなこの子。無機物を召喚……それに無機物操作も組み合わせるなんて。フェイトちゃんも面白い子連れてきたね。

だがその竜召喚士のとなりではさらに、驚くべきことを今まさに成そうとしていた。「射撃型が、射撃が通じないからって引き下がるわけにはいかないのよ!!」

カートリッジをロード、魔力弾を形成する。

「ティアナさん！魔力弾は通用しませんでしたよ!!」

「いいから黙って見てなさい!!」

本命の魔力弾がAMFを抜けるまで……通り抜けるまでの間、本命を保護する魔力の膜を……

イメージ……集中。集中。集中。固まれ……固まれ……固まれ……!!

裂帛の気迫が多重弾殻を完成させる。そして逃げ続けるガジェットに止めを刺さんがため……

「ヴァリアブルシュート!!」

放たれた弾丸はガジェットに着弾するもAMFに阻まれる。しかし、本命を包んだ魔力を無効化する間にAMFを突き進み続け、本命の魔力弾はガジェットを貫通、奥に居

たもう一体のガジェットも貫いた。

「本当はAAランク魔導師の技術なんだけどな……みんな鍛えがいがあるよ」

模擬戦を眺めていたなのはつくづく感心していた。だが、ここでイレギュラーな事態が発生した。これでミッションコンプリートのはずだったが、まだ5機残っていた。当然この5機についての情報は何もなく、慌ててシャーリーを確認をとる。

「シャーリー……この5機は!？」

どうやらシャーリーも慌てているようだが、きちんと情報は伝えるあたりは流石とあったところか。

「なのはさん、これは……新型です。性能はもちろんです、破壊しようとした職員が数名負傷しています。……!?!なのはさん、このままだとバックス二人にエンカウントします!」

新型……機動六課直々に送り込んでくるなんて。それに性能が上がるとなる

……フオワードのみんなが危ない。

「シャーリー!!エンカウントまでの時間は?」

「もう30秒ありません!!それに二人とも疲労してます……」

まずい……このままじゃあ怪我だけではすまない。ガジェットのアMFに自分たちの精一杯を振り絞って、撃破に至った新人達には荷が重い。職員達が突破されたとなれば尚更接触させる訳にはいかないのだ。だが無情にもエンカウントまでの時間は近づいてくる。急いでバリアジャケットを展開し、今飛び立とうとするが……

「シャーリー、データ送信、お願い!」

「準備で来てます。受け取って下さい」

迫る気配に気付き、直ぐに作戦を練り直し、実行する。私が向かうより、この気配の主に託すほうが可能性は十分にあるから。そう判断すれば、シャーリーも分かっていますとばかりに準備を整え、実行に移した。

市街地を駆ける紅い閃光……訓練に参加する為に駆けてきたアセルスに。

《アセルス!!今の状況分かってる!?!》

《なのは隊長、シャーリーから情報は貰ってます。あの5機を止めればいいんでしょ?》

《そう、新型だし、データは何とかするから……全力で破壊して!!!》

《了解》

現在のフォワードの実力では到底太刀打ちできない。疲労しているなら尚更である。だから……紅き姫は全速力で、新型へと駆けて行った。

見えた。あそこにティアナとキャロがいる。二人とも疲弊しきっているよう壁にもたれ掛り、肩で息をしている。そんな状況では当然太刀打ちできない。

《アセルス、AMFに気を付けて!!魔力弾は無効化されるから!》

《了解です。なのは隊長》

AMF……一体どんなものなのか分からないけど、やるしかないね。

《ティアナ！大丈夫？そっちに新型ガジェットが三体向かってる！！殺傷行動にできる恐れがあるから、そこで動かないで！！》

《あなた…アセルスなの？いままで何してたの？それより新型って》

《詳しいことは後で。エンカウント》

軽い念話を終えると、視界に三体を捕捉する。

「見つけた。さあ……いくよ、ルナ、ソル！」

返事の変わりにコアを輝かせる二丁の相棒を構え、魔力弾を放ちながら距離を詰める。AMFがどのようなものか確認の為に撃ってはみたが、情報どおりAMFにより無効化される。それにはティアナが魔力弾は通用しないって怒っているが……

「やっぱり、魔力弾はきついかな……それじゃあ」

ルナ、ソルからロードせずそのまま詰めておいた魔力を打ち出す。小気味良い音と共に2発。トリガーもいつも通りの軽さだ。圧縮された魔力弾は新型へと飛来…そしてAMFを貫通。どうやらこの方法はAMFにも通用するらしい。それを見ていたティアナは驚愕していたが。一体目を撃破した時、向こうからスバルとエリオがやってくる

のが見えた。だが今は二人に話しかける暇もなく……

「次、いくよー！」

モードブレイズ。形態を双剣へと変更する。だがそのまま斬って壊すだけでは意味がない。気合いを込め、魔力を練る。アセルスを中心に少しずつだが、空気の渦が巻き始める。イルドウンに教えてもらったこの技、試す価値はありそうだ。

跳躍……頂点に達したアセルスが振る刃は風を纏った魔力刃と化した。

「二刀烈風剣」

二本の魔力刃は一瞬で目標に到達、4当分に綺麗に切り裂いた。これを見たエリオもまた驚愕していた。

「まだまだだ」

キャロやティアナがいるビルに攻撃しようとする新型が一体。私は躊躇なくスライディングと同時に蹴りあげ、跳躍し、スープレックス（スウィングDDT）。足で掴み、地面に叩き付けた。ここまで3体を瞬時に破壊したの見るや否や、残りの2機が逃亡を図る。だがこちらにも逃がすわけにはいかない。こちらの術が通用するのかデータを取らなくては。

詠唱を開始。紅き法陣が展開される。

「光の焰よ、眼前の敵を焼き尽くせ!!!」

陽術 フラッシュファイア

光の爆炎がガジェットを飲み込んでいくが、魔力の量や資質的なものか、中心にいた一体は破壊することができたが、最期の一体はかろうじて難を逃れていた。

「まだまだ、威力に難ありか…さて、最期はと……」

その声をかき消す轟音と建物を粉碎し、塵として巻き上げ消滅させる。天を貫くかの桜色の閃光がアセルス視界を遮った。見晴らしの良いビルの屋上に陣取りレイジング

ハートにマガジンを再装填するなのは。なのはの長距離狙撃により最後の一体は跡形もなく書滅した。

一瞬の出来事に凍りつくアセルスが我を取り戻すと、ティアナとなのは隊長がいた。

「なのは隊長……危ないじゃないですか!？」

「それはこつちのセリフよアセルス!!! 今まで何してたのよ……ってそれよりも今のガジェットって……」

確かに、あのガジェットの事は気になる。そこになのは隊長が割って入る。

まあまあ二人とも。今は六課に戻ってデータ解析と会議が大切だよ。それに模擬戦だったし、みんな疲れも溜まってると思うんだ。だからこの件については明日ということだ!」

その通りだ。みんな疲れているのが見てとれる。それに私も、病み上がりだ。「アセルスは事務仕事溜まってるからやってね」

……えええっ!?

ショックのあまりに落ち込む私。そう、事務仕事は苦手なのだ。疲れ果てた4人（アセルスの実力を見せられ、落ち込み50%、疲労50%）と事務仕事に憂鬱になっている1人はとぼとぼと帰って行くのであった。

「アセルス!!あとで色々聞かせてもらおうからね!!!」

「そうだよ、アセルス!!!」

「アセルスさん、色々教えてください!」

「私もお願ひします!」

秘密にしていたことが明るみになると、こうなることは分かっていたが……

また、治療ポット送りになるのが怖くなるアセルスだった。

一方

「アセルスの馬鹿ー!!ここまで壊すことないでしょう!!!」

原因は、フラッシュファイア。広域に広がる爆炎によりとところどころが故障している。

「データは取れたけど、修理する側の身になってよー！！！！」

「それになのはさんもー！！！！」

シャーリーの叫びが木霊するなか、第一回模擬戦は幕を閉じた。だが新型のガジエツトの件など、謎が残る一日となった。

「なのはさん、最期、やりすぎでしょう?」

「ちよつと遠かったから力入れ過ぎちゃった」

舌をだしておどけるなのはの姿にどこかドキツとするアセルスは顔を紅く染め、事務仕事をこなすのだった。

「疲れた……」

アセルスが何故こんなにも疲れているのか……それは前回の模擬戦での出来事が原因であるの言うまでもない。みんなには黙ってたからこうなることは分かっていたことだが、模擬戦のあと溜まりに溜まった書類を片付け、睡眠を取ろうとした時、F W4人に捉まり質問攻めにあっていた。

「だから、言ってるでしょ……黙ってたのは悪かったって」

そうこうしながらも1時間以上は捉まっていた。結果だけ言えば、今までのことを話した。妖魔についてはまだ触れていないが。

「最後に！私のことはアセルスでいいから。同じチームなんだし。よろしくね、4人も」

「!!??」

4人がともに顔を赤らめる。そうこの姫は少々天然なのだ。だが本人はこの力に気

が付いているわけもなく……

「みんな可笑しいな……よろしくね」

「よろしく……」

そんなこんなで私はやっと睡眠を取る事ができた。

~~~~屋外訓練場~~~~

「うわあああ……」

フオワード達が間拔けな声を出しているがそれは目の前の出来事が原因である。

「ほらアセルス！そんなことじゃ魔力が持たないよ!!もつと感じて、動いて!!!」

数えるのが億劫になるほどのシューターがアセルスに降り注ぐ。ロールで避けたり、

ビルを三角飛びで駆けあがったりでアセルスは何とか、避けつつ接近を試みるのだが

……

「ほら、回避した後のこと考えてない!!!」

背後の建物からシューターが飛び出してきた。



「くっ、ソル!!!」

「Protection」

シューターを間一髪で防御することに成功したのだが……

背後にチャージを終えた、なのはさんがいた。

「いつの間に!?!」

「アセルス、高速戦も私だってできるんだよ。だからね……」

ものすごい笑みを浮かべるのは。しかしそれを見ているアセルス、そして4人は顔から汗を流す。

「まだまだ訓練不足だよ!!!」

「Divine Buster」

万人が落ちるであろう頬笑みとともに放たれた零距离からの砲撃をアセルスが耐えられるわけもなく

「きゃーーーあぁ」

ビルを4棟突き抜けたところでようやくアセルスが止まった。

……この訓練何？

フオワード達の早朝訓練の休憩中に行われていた、アセルスとなのはさんの模擬戦。ただ模擬戦と言えるのか分からないくらいにやられっぷりだった。

「さあ、みんな！早朝訓練のラスト一本。みんな頑張れる？」

「はっ、はい!!!」

内心、みんな冷や汗なはずだ。そのせいか、顔が若干ひきつっている。

「よし！じゃあラスト一本!!シュートインベージュンやるよ。5分間完全回避か、私に一本入れることができれば終了。みんな頑張ろう!!」

今さっきのことを思うととてもじゃないけど、5分間避け続けるなんて無理だよ。それにみんなも同じ意見だったみたい。

「みんな、聞くまでもないけど、なんとかして一発入れるわよ!!目標2分以内。分かってってアセルス、大丈夫なの？」

あつ、アセルス。あんだだけブツ飛ばされてたのに、タフネスだね。

「なんとかか……でも私も避けきるの無理。だからティアの意見に賛成だ。それに借りは返

さないとね……」

ルナとソルを構え、笑みを浮かべるアセルスを見て全員は思ったに違いない。

凄く怖いよ……アセルス。

「ほら、話はここまで、来るわよ!!全員、散回、完全回避!!」

「了解!!」

なのはのシューターが飛来するのをかわきりに、ラスト一本がスタートした。

まずは、スバルとティアナが仕掛ける。

ウイングロード……蒼き魔力道が無尽に展開される。滑走したのはさんへと迫る。そしてちょうど反対側のビルからティアアとの同時攻撃を行う。しかし、その攻撃はシューターによって防がれた……ように見えた。

シューターが二人を正確にとらえた瞬間、二人は霧散した。

「シルエツト…やるね」

単純な攻撃は通用しない。そこでシルエツトを用いて陽動をかけることにしたのだ。そして本命のスバルはというと……

「でやあああ——」

頭上から一気に滑りおりそのまま殴りつける。だが相手はエースオブエース。簡単に防がれてしまった。

「うん、スバルもティアナも悪くないよ。二人ともいいコンビネーションだね」  
褒めてもらったのは嬉しい……がなにかに気付き、とつさに後ろに飛び退く。そこにはシルエツトを攻撃していたシューターが先ほどいた場所を高速で通過していた。

これといった作戦もなく、いったん後退して、なんとか機会を伺わことに切り替え、すぐさま行動を開始する。しかし前に出過ぎていたスバルはシューターに追われ、辛うじて逃げているといった状態だ。

《ティア、援護お願い!》

《スバル、出すぎよ!!こっちの身にもなってよね!!!》

シューターに追われるスバルを援護すべく、カートリッジをロードしようとしたその時だった。

「ジャムつた?!こんなときに」

急いで薬莖を取りだし、新しいカートリッジと交換し、すぐに撃墜する。ただスバルが「援護まだー??」って叫んでいたけど気にしない。

《ごめん、こっちは失敗しちゃった。エリオ、キャロ、アセルス、後は任せるわよ》

《3人ともお願いね!!》

《わかったよ》

「エリオ、キャロ、やるよ!」

「はい、アセルスさん」

「やりましょう」

手はずはこうだ。アセルスがなのはさんを追い込み、キャロがエリオにブースト、そのままエリオが突撃する。うん、なんて簡単なんだろう。

「アセルスさん…あの…」

エリオが凄く心配そうに話しかけてくる。そんなに心配かな？

いえ、貴女からでているオーラが恐いんです。

「二人とも、スバルとティアナが撃墜される前にけりをつけるよ。私がひきつけるから、後はお願い」

「なんとか頑張ります」

「了解です」

やっぱり緊張してるみたい…エリオやキャロなんて戦うような年齢じゃないよ……

いいえ、貴女のオーラにビビってるんです。

なのはさんが接近してくるまで、時間がない。……そうだ。キャロに近づくと、首にかけてある紫紺のペンダントを外し、キャロにかけてあげる。

「これは……？」

キャロが不思議そうに首を傾げている……うん、可愛いよ、キャロ。

「向こうの世界で作ってもらった物なんだけど、キャロにあげるよ。お守り代わりに持っていてくれたらうれしいな」

かけてもらった、ネックレスを見て、少し考えた後、服の内側にしまった。

「アセルスさん！大事にしますね!!」

満面の笑みを浮かべて、頭を下げて感謝していると、そこに、シューターが割って入ってきた。

《へえー、そんなことしてる余裕あるんだ…》

エリオとキャロの心の汗は滝のようだろう。死の宣告が突然やってきたかのように感じるこの一言。しかし、俄然やる気な方がここに1名。そう、アセルスである。

「さっきの借りは返させてもらおうよ」

回避したシューターをすぐさま撃墜すると、一気に距離を詰めていった。それを見ていた二人はというと……

「あははは……」

笑っていた。

二人は予め打ち合わせしたポイントへ移動することとなった。シューターに気を配りながら移動になると思われたが、完全にアセルスさんに引きつけられた形になっていて、無事に移動することができた。

そのころ……

「シューーーート!!」

ざっと見て20はあるであろうシューターがアセルスを撃墜せんがために、飛来する。さっきは回避して失敗したけど、次は全部撃ち落とす!!!



「ルナ、ソル、いくよ!!」

発砲音と共に、射撃が開始される。精密射撃と反応射撃を繰り返し、なのはへの牽制とシューターの撃墜に全力を注ぐ。切れそうになる魔力をカートリッジで補い、次々とマガジン交換を行っていく。そのさまはまるで円舞曲。可憐に捌ききると、周辺はまた荒野を彷彿させる程、破壊されていた。

また、怒られる。こうなったら……

「なのはさんに八つ当たりだーーーーー」

とんでもない発言と共に、ブレイズへと変更し、なのはさんに斬りかかる。

激しい魔力のぶつかりあいにより、魔力が火花のように飛び散る。紅と桜が散るさまはどこか風情のあるものの様に感じられる。

「アセルス、また強くなったね!」

「また、私が怒られるじゃないですか!?!」

「まあまあ、アセルスが悪いんだし」

「なのはさんの馬鹿ー!!!」

縦に切りつけ、回転と同時になぎ払うように切りつける二刀十字斬。だが、やはり最強と謳われるシールドである。ただ押し込む程度にしかならなかった。

「八つ当たりは駄目だよ、アセルス!!」

なんだかんだで、またチャージを終えている。やばい……そう本能が告げる。

「Divine Buster」

またしても、桜色の巨大な魔力に飲まれていった。

そこには荒廃した土地しか残らなかった。

「ふう、やり過ぎちやったかな…!?!」

「Warning」

レイジングハートの警告とともに、焰を纏った、矢が飛んできた。

「これは、避けないと、抜かれちゃうな…」

ギリギリ、回避すると、飛来した方向を見る。そこには先ほどまで戦っていたアセルスがいた。

「シルエツト…二回使うとは思わなかったよ」

ティアナがギリギリ間に合ったようで、上手く事が進んでいる。あとは、もう少しでエリオ達のところに追い込める!!

モードアサルト

「シグナムさんを参考にやってみただけ、うまくいくとは思わなかったよ」

ルナとソルはグリップで連結し双刃の形態を取っている。それは弓として運用することも可能になっている。魔力の弦によって今すぐにでも、魔力矢を放てるのだ。

「これで、私の役目は最期だよ。はああああ」

右手に魔力を集中させる、焔の矢を完成させる。

弦を引き、そして放つ。

ソルとルナがこんなに高性能だなんて……感謝しなきや。

回避したばかりの、なのはさん目がけて、さらに、もう一発撃ち込む。予想通り、なのはさんは回避し、予定通りのポイントまで、誘導できた。

後は頼むよ……二人とも。

アセルスが追い込むと決めていたポイントで、事が起こるまでの時間を待つエリオと、キャロ口について出番の時が回ってきた。どこか緊張を解そうと身体を動かす二人にはやはりあどけなさが感じられた。だが、二人の瞳には立派な意思が輝いていた。

「来たっ!!!キャローお願い、」

「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士に、駆け抜ける力を」

「Boost up Acceleration」

詠唱が完了すると同時にストライダーから推進力を得て突撃を開始する。アセルスさんが引きつけてくれたおかげで、まだこっちに気付いてない。

「でやああああー!!!」

完全に不意を突いた形となつて、なのはさんに激突することとなつた。しかし……隊長の肩書、ましては「エースオブエース」は伊達ではない。

ほぼ無意識に近い状態で、防御に成功していた。「そんなん?!」と言葉を漏らすもなんとかシールドを突破しようと試みそのまま数秒間の均衡が続くも、それは空しく終わり、爆発によつて終わった。

よほどの衝撃だったのだらうか、体勢を立て直すのが、後ろへ滑つてしまった。タイミングは完璧だったのに、まさか防がれるなんて……。土煙でまだなのはさんの姿は確認できていない。ただ油断せずに前をただじつと見ていた。

《エリオ!》

《外した?》

アセルスさんやティアナさんからの念話も来る……そして土煙の向こうになのはさんの姿が見えた。

「なっ、無傷?!」

驚くしかなかった。完全に不意打ちで、キャロの補助も使ってたのに……。咄嗟のシールドでさえ抜くことができないなんて。軽い絶望さえも感じる程、眼下のなのはに傷一つないように見えた。

「ミツシヨンコンプリート。エリオ、そんな顔しないの!ちゃんと、シールドを抜けてたよ。ほら、ここ。破れてるでしょ」

なのはさんが指し示す場所をよく見てみると、穴が開いていた。よかった……

「やったー」

どうやら、無事に早朝訓練を終えることができているようだ。

「はい、みんなお疲れさま。みんな動きも少しずつよくなってきてるよ」

機動六課の制服に着替えたなのはさんと一緒に反省会を開始する。みんな色々感じることは多かったようだ。話の中ごろ、急にフリードが鳴いた。

「フリード、どうしたの？」

キャロが疑問に思ったようで、フリードに聞いてみた。

「そういえば……」

「なにか焦げたような……」

ティアナがきよろきよろ周りを見渡していると、何かに気付いたようだ。

「スバル、あんたのローラー！」

みんなげ視線を集めると、そこには明らかにショートして煙をあげるローラーがあった。

スバルさん、ちよつと落ち込んでるかな……

「ティアナのアンカーガンも結構厳しい？」

「はい、騙し騙しです……」

どうやら二人ともこのデバイスにガタが来ていたようだ。だが二人とも丁寧に手入れをしてきたためか、ここまでもつたのだろう。

「そろそろ、みんな訓練にも慣れてきたようだし。うん、決めた」

新デバイスに切り替える時だね。

「みんな、そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えするね」

「新…デバイス？」

「まあまあ…それは、後で実際に見てもらおうから。いったん着替えてロビーに集合ね！」

「はい!!!」

後ろを振り返れば焦土と化した人工島があった。そこには泣くシャーリーの姿があったとか。

隊舎に帰ってる最中に、黒いスポーツカーに乗ったフェイトとはやてを見た。話によると、教会方面でカリムと話があるようだ。ちなみにカリムとは一応だが面識はある。

「ふう……シャーリーは頼んであったもの作ってくれてるかな？」



アセルスは独り言を終えると、制服に着替えロビーへと移動した。ロビーで集合を終えると、そのままデバイスルームへと。

「これが、私達のデバイス…」

「そーろーでーろーす!!」

シャーリー…元気だね、相変わらず…つてなんで睨むの!?

エリオとキャロは自分たちのデバイスみて変化はないかなつと率直な感想を述べる。しかしその意見は違いますよと言わんばかりの声が聞こえた。はい、リイン。どうぞ。

「セリフ取らないでくださいよ、アセルスさん!!」

ぶんぶん怒りながらも、何故か可愛さしかみえない、リイン。うん、可愛い。

「もう…では説明しますですよ。以前のお二人のデバイスは最低限のフレームと、機能しか持たせていなかったんです。でも今回は色々な内面を強化してるわけです。それに形状が変わらない分扱いやすいと思いますですよ」

「そうだったんだ…」

二人とも凄く驚いてる。私もそれを聞いたらびつくりするよ。

それぞれのデバイスを一度リインが受け取ると、リインからの助言を聞くこととなった。

「この子たちはまだみんな生まれただけですが、いろんな人の思いや願いが込められて、いっぱい時間をかけてやっと完成したです。」

デバイスをそれぞれの持ち主へと優しく返していく。

「ただの道具や思わないで、大切に。でも、性能の限界まで思いっきり使ってあげて欲しいです」

わかっているよ。リイン。みんなだつて分かっている。周りを見れば、みんなデバイスを優しくも決意を込めて握るのだった。

「そうぞう、この子たちには何段階かのリミッターをかけてあるの。だから初期では今までとはあまり変わらないかな」

「みんなが確実に扱えるようになったら、私や、フェイト隊長やリイン、シャーリーの判断で解除していくから」

「ちようど一緒にレベルアップしていく感じですね」

「ちなみに、アセルスのデバイスにも掛かっているからね！」

初めて聞いたんですけど…

「アセルスのはちよつと特別でね…解除はかなり難しいと思うけど、アセルスが成長してくれば、なんとか外せると思うよ」

はあ…そうだったんだ。

そこにティアナが思い出したかのように尋ねた。

「出力リミッターっていうと、なのはさん達にもかかっていますよね?」

「解除にも色々条件が厳しくてね。色々大変なんだよ」

絶賛溜め息の中、和やかな雰囲気斬り裂くようにアラートが鳴り響く。

「一級警戒体制!」

「グリフィス君」

はやてがモニターに現れたと同時に説明が始まる。

「教会の方から出動命令です」

「こちらははやて。なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君、聞こえてる?」

返事を返しすぐに状況を確認する。どうやらレリックらしい物が見つかったらしい。

山岳リニアレールで移動中にガジェットに襲われた模様。車両制御もガジェットにより奪われている。

「新型も出てくるかもしれない。それに数もなかなかや。ハードな初戦になるけど、いけるか?」

「大丈夫!」

「大丈夫だよ」

「みんなもいけるか?」

「はい!!!」

声を揃え判事を返す。

「現場はなのは、フェイト両隊長に、ロングアーチは私が戻るまでは、グリフィス君に指揮権を委ねます」

「それじゃ、機動六課FW部隊出動」

「はい!!!」

みんなが部屋を出ていくなか、アセルスはシャーリーに呼び止められた。

「はい、頼まれていたもの。白薔薇姫とイルドウンが徹夜で完成させてくれたの。シャーリーからカードとマガジンを受け取る。」

「このマガジンに入ってるのは……」

「分かってる。こつちの世界は使用は駄目なんですよ。大丈夫」

受け取ったカードとマガジンを収納すると、はやてから通信が入る。

「アセルス、今回は別行動や。白薔薇姫とイルドウンの三人で、山岳にある廃墟の調査をお願いしたいんや」

一瞬、何故か聞こうとしたが、表情をみるかぎりなにかあるようだ。

「はやて、その裏は・・・」

「さすがやな。実は妖魔がまた現れる可能性があるんよ。最近微量ながらレーダーに反応が見られてる。だから方向も一緒やから調査を頼もうかと思ってお願いたいんよ」

妖魔……まだ諦めていないのか。高ぶる感情を抑え、返事を返す。

「分かった、すぐに行く」

「頼むで、アセルス！」

通信を終えると後ろには二人が待っていた。

「久しぶりの実戦だな、アセルス」

「アセルス様、さあ行きませう」

一緒に戦うことができなかつた二人と一緒に戦うことができる。うん、頑張ろう。そして成長ことを認めさせないよね。

「行くよ！二人とも」

そして、静かに山岳の廃墟へと向かうのだった。

「はやて部隊長…二人を行かせて良かったのですか？」

「二人がどうしてもって言うから仕方なかったんや。それに条件で、自由にさせるって約束してしもうたからな……」

「ですが、あの二人はもう、魔法すら使えないんですよ!!!」

「分かってる。でもな二人ともみすみす倒れるわけないよ。二人とも……強いんやからな」

不安は拭い切れない。しかしそれでも二人は信用して送り出すしかなかった。

アセルス様と一緒に現地での任務……あの日以来、裏方として支えて来ましたが、今

回は一緒に居ることができません。

「アセルス様、もうすぐ目的の廃墟です」

ファーストアラートの後、私達ははやて様に頼まれていた、山岳の廃墟へと向かっていました。

「アセルス様、イルドウン、なにか感じませんか？」

「ああ、これはそうですね」

「うん、妖魔だね……」

目前に迫った、廃墟から妖魔の気配が感じられる。水の従騎士と戦って以来、妖魔が現れたことはなかったが、ここ最近になってまた活動を開始したようだ。

《アセルス様、突入の先陣お願いできますか？》

《わかったよ、フォローお願い》

《任せておけ》

ルナとソルを構え、入口に張り付き、中の様子を伺う。しかし、ここにきてから、何も感じられなくなった。

妙だ……。湧き上がる疑問に今は答えを見出すこともできず、ただ廃墟の中に進むことで何かしらの答えが得られると信じて。そう、進むしかない。

《二人とも、行くよ。3，2，1》

3カウントと同時に中に突入し、索敵を行うもすでに、もぬけのからのようだ。しばらく中を捜すと、一台のパソコンのようなものがあつた。

「二人とも……これは……？」

そこにやってきた白薔薇が操作を開始する。どうやらこっちにきてから慣れたようだ。もちろん文字も読めるようになっていいる。

「データはほとんど消されてますね……」

白薔薇が手際よくデータを解析している。そこに一つだけ残っていたデータを見つけた。

「っ!?アセルス様、どうやらレリックを狙っているのは、ガジェットだけではないかもしれません」

残っていた、データをこちらの端末に転送してくれた。データを見てみると、どうやら何者かが妖魔と接触している可能性があることが分かった。

「アセルス、白薔薇姫様、どうやら急ぐ必要がありそうだ。急いでリニアールへ向かう」

「そうだね、みんなに妖魔の相手は……急ごう!!」



三人は頷くとすぐに、廃墟から出る。しかし……

3・2・1・0

轟音とともに廃墟は爆発。廃墟のあつたと思われる場所は半球状に抉り取られ、姿を変えていた。

そしてそれを遠くから眺める影が。

「餌に直ぐに食いついてくるとは……愚かな」

その影はそのままリアールの方へと姿を消したのだった。

## 策士

アセルス達が廃墟へと向かう一方で、FW4人、リイン、なのはの6人はヴァイス陸曹のフライトの下でリニアレールへと向かっている。フェイトは六課から離れていたが、要請を受け、こちらに急行している。

「訓練通りで大丈夫だから」

なのはの声にも4人の表情に不安は隠せない。機動六課としての初任務であり、エリオ、キャロにおいては、人生初だから尚更だ。

「はい」

「頑張ります」

二人は返事を返すが、エリオとキャロはまだ表情が硬い。それを察してか、リインが声をかけてくれる。

「エリオ、キャロ、フリードもしっかりですよ！」

「はい」

二人とも少しは緊張感が解けたようだ。

「危ない時は私やフェイト隊長、リインがいるから、おっかなびつくりじゃなくて思いつきりやってみよう」

「はい!!」

ふと、キャラロを見てみると、ペンダントを握っている。それにエリオが気付いたようだ。

「キャラロ、それは？」

「アセルスさんから貰ったんです。お守りにつて」

紫紺のペンダントをギュツと握るキャラロ。

「こうすると凄く落ち着くんです。エリオ君……頑張ろうね」

「うん、頑張ろう、キャラロ!!」

二人の緊張もようやく打ち解け始め、それを見ていた、リイン、なのはも胸を撫で下ろす。一つの心配事の種が消え、なのは達の出番がやってきた。

「ヴァイス君、私とフェイト隊長で空を抑えるから」

「やっと出番が……って了解つす。なのはさんお願いします」

後方のハッチを開放を確認すると、最期に一声。

「みんな一人じゃないってこと………忘れないで！」

改めて、FWを確認すると、そのままハッチから降下。空中へと身体を解き放つのは桜色の魔力が包み込む。それは一瞬に霧散し、ガジェット殲滅へと向かった。

ここからは、早かった。なのは、フェイトが空を抑えている間に5人が降下。隊長達を参考にしたバリアジャケットを纏い、新型デバイス達の性能を確かめるように、次々とガジェットを破壊していった。ただレリックのある車両に新型のガジェットが現れ、エリオガリニアから放り出されてしまった。だが、それを救うべくキャロが追いかけて、自らのトラウマを克服し、フリードの使役に成功した。そのせいもあり、ライトニングの連携で新型は無事に破壊することができ無事に任務を終えることができた。レリックも無事に回収することができた。

現在、ライトニング分隊が引き継ぎのため残っている。

「二人とも、怪我はなかった？」

フェイトがエリオとキャロを抱きしめる。そんなこんなで、引き継いでいる最中だっ

た。

まがまがしいフィールドが形成される。フェイトは気付いた様だ。これは、あの試験の日以来見ていなかったが……幼いライトニングを引き連れ、戦いに臨まなくていけなくなつた。

「二人は絶対守るから」

この決意をどこかの部屋で眺める者がいた。

「さあ、見せてもらおうか。Fの残骸……くつつくく」

リアアレールガジェット襲撃の事後引き継ぎの最中、それは突如として訪れた。ぞく

ぞくするような嫌悪感。これと同時に、異質のフィールドが形成された。

「エリオ、キャロ!! 気を付けて」

「フェイトさん、これは……」

「フリードも怖がってます」

二人とも、まだ妖魔のことについての知識は、ほとんど無いと言っても間違いではない。ましてや、二人は今日が初陣でもあり、激戦があつたばかりだ。

「私も戦ったことないけど、やるしかないね……」

決意を固めると、愛機のバルデイツシュを構える。先ほどから通信を試みるが連絡が付かないこともこの警戒の要因でもある。増援は当然計算できない。

数分経つただろうかと思う程に神経をすり減らす。実際にはほんの数秒しか経過してはいないだろう。しかし、護りながら戦うことほど厳しいものはない。二人をかばいつつ、周囲に警戒を払っているときだった。

これが我の標的か……くっくっ……

「誰だ!？」

猟奇的な声に瞬時に反応する。直接頭に響くように、不快な声は木霊する。

不意に後ろを振り向くが何も居ない。が……

どこを見ている……Fの残骸

正面から杖のようなものが空気を切り裂く音と共に、頭部目がけて正確に振り下ろされている。

「はあああ」

杖が振るわれる場所にはもうフェイトはいなかった。杖を振りおろしてきた何かの背後に回り込み、バルデイツシュを振り切っていた。しかし……手ごたえはまるでなかつ

た。

「幻影!？」

「フェイトさん、後ろです!!」

エリオが対象を確認すると、ストラダーダを手に突撃する。しかし、これもまた手ごたえがなかった。

「!?、キャロ、後ろ!!」

すでに対象はキャロの頭部目が杖を振り下ろしている。

ブレインクラッシュ

当たってしまえば即死といっても過言ではない。実際、キャロは避けることは不得意であり、異端の存在に飲まれていた。

「きゃあああ」

[Protection]



悲鳴と同時に、ケリユケイオンがプロテクションにより防御を図る。訓練のおかげだろう。咄嗟の防御で、即死は免れた。

「キャロから離れなさい」

自分の持ちうる可能な限りの速度で突撃するが、それに気付いたのか、キャロから離れ、距離を置く。

これはこれは……くつくつくつ

紹介が遅れましたね。私は森の従騎士と呼ばれる者。以後、お見知りおきを……いや、ここで、さようならですかね？

「妖魔!!」一体何が狙いなのか？」

それは、貴女とその坊やですよ……プロジェクトFの残骸達。私も、異界の技術には興味がありますね……生体サンプルとして捕えようと思いましたが。それに……邪魔者は消しておきましたよ。

森の従騎士が指を鳴らすと、アセルス達が向かった廃墟が爆発する映像が映し出され

る。

餌を撒けば必ず食いつくと思っていましたよ。貴女方の司令官も大したことはないですね……

「はやてを馬鹿にするな!!!それにアセルス達も生きてる。絶対に」

怒りの形相で、従騎士に突撃する。しかし距離が詰まるにつれて、身体が重くなる。

「まさか……AMF!?!」

ほう、さすがですね……しかし、こんなもので、ここまで抑え込めるとは。あの科学者も大したものですね……

おどけたように、話しかけるこの妖魔に怒りしか感じない。ただ、親友を侮辱したことで、エリオヤや私のことについて……許せない。

貴女にも人並みの感情があつたんですね。いやいや、これは驚きですよ……

「貴様、黙れ!!!」

私やエリオが関わっているFについてここまで露骨に言われることは久しぶりだった。久しぶり過ぎたためか、激昂している。いつ以来だろうか、この感情に支配されたのは。ただ、もうこいつを許すわけにはいかない。

「バルドイツシユ、殺傷設定に」

「Yes, sir」

「フエイトさん……」

エリオから声が聞こえる。こんな私を見たことが無かったからかな……怯えている。

「大丈夫。守るから、二人とも！」

怯えを取り除くように二人に笑みを浮かべると、再び、怒りの形相へと変える。そして魔力を込めて、愛機を振り切る。

「Haken Slash」

魔力斬撃が従騎士へと迫る。だが、目前で何かに接触し、爆散。

「AMFがこんなに強いなんて……ん!?!」

周囲に何か粉のようなものが漂っている。そしてバリアジャケットに粉のようなものが触れると、触れた部分が溶けていた。

もう少し前に出ていけば、簡単に楽になれたものを…本当に貴女は運がいい。

「毒か……どこまで卑怯なんだ、貴様は!!」

二度、三度、バルディッシュを振るい、斬撃を飛ばすも、すべて直前で消えてしまっている。

無駄ですよ…我の胞子には通用しない…

「毒、そして魔力を打ち消すこの能力…AMF!？」

ほう、気付いたようですね…だがもう遅いんですよ…

気が付けばこの空間の九割は毒とAMFの力を持つ、胞子で満たされていた。どうやら、爆散したときに撒き散らしていたようだ。

大丈夫、生け捕りにしたいので、殺しませんよ…ただ、生きてるとは言える状態で留

まるかは分かりませんがね。

淡々と話す従騎士に怒りは滾々と湧き上がる。だが、それを排除しうる策を準備はしている。

「勝ったつもりなのかな？これくらいで」

胞子に気付いたときから、すでに時間は稼いでいた。そう、焔を扱う竜を召喚するた  
めに。

「フェイトさん！お待たせしました。フリード、ブラストレイ!!!」

咆哮と共に、火球が放たれる。フェイトは気付いていた。焔ならば、この状況を打開  
できるはずと。

フリードは首を振りながら広範囲に焔を撒き散らし、胞子を焼却していく。フェイト  
の予想通り、焔には弱かったようだ。

おやおや、そんなに苦しみたいのですか？くつくつ……ほんとに物好きな方々だ。

「おしやべりはそこまでだ」

[Sonic Move]

二つの雷鳴が両サイドから同時に斬りかかる。

「消えなさい!!」

エリオと私は同時にデバイスを振り切る……しかし、急に身体が自由が利かなくなつた。

「エリオ!!つく」

よく見てみると、網に絡まったようになっていた。当然、エリオも同じ状態だ。

エクトプラズマネット。切り札は隠しておくものですよ……

やられた。警戒が足りなかった。ましてやここまで策士じみた相手ならなおさらだ……。そしてこの後悔は最悪な形を迎えることとなる。

ここまで生きがいいと我も苦勞する…。狂気じみた声がこの空間を支配する。途轍もなく嫌な予感がする。

貴女の心を破壊させてもらいますよ……

もちろん、少年……君もだよ。ただ、君には働いてもらうがね……

従騎士は笑いを浮かべながら二人に近づいてくる。もちろんキャロもネットに捕らわれている。

そして、二人の横に達すると、頭に手を触れる……

切り札は一枚だけとは限らないんですよ

「やめろ……触るな……!? いやあああああ————」

手が触れた瞬間、二人が急に苦しむように声をあげた。

「フエイトさん、エリオ君!!」

二人が急に苦しみ、叫んでいるのがよく見える。あの妖魔の手が触れたときからこうなっているのだ。

貴女は、さらに苦しんでください……貴女の犯してきた罪と後悔すべき過去に捕らわれて……

「いやあああ、やめて……あああああ……」

「フエイトさん!!!」



声は聞こえていない、ただフェイトはかなり苦しんでいるようだ。そして、同様に……エリオも苦しんでいる。

「嫌だ、僕は、あああああ……」

二人ともがかなり苦しんでいる。そう肉体的に追い込めないなら、精神面から……そう考えたのだ。

くくく、やはりヒューマンはもろい……もろすぎる

私の方にゆっくりと近づいてくる。足音はしない。ゆっくり……ゆっくり……近づいてくる。

「いや、来ないで……来ないで……」

錯乱するキャラ。当然フリードは口を封じられている。

貴女には興味はないので……壊れて死んでください。

そう言つて、頭に手を触れてくる。そうこれが従騎士のもう一枚の切り札。

カウンターファイアー

心の闇に漬け込み、錯乱させていくこの能力。二人が苦しんでいるのはこれが原因である。

さあ……逝きなさい……

しかし、何も起こらない。キャラは何も苦しんではいない。

馬鹿な!? ヒューマン如きに破られるはずが……

相当な自信があつたのか、または人間如きに破られたことがショックだったのか、少し狼狽している。そして、これを防いだ原因が明らかとなる。

「温かい……」

キヤロが呟くと、胸のペンダントが光っている。それは朝、アセルスからもらつたものだった。

何故、それを!? 命の結晶を何故貴様が……

アセルスにもらつたペンダント。これのおかげで助かっているらしい。

命の結晶と呼ばれたそれはトウテツパターン。アセルスの命の一部……そういつても過言ではない。

思わぬ持ち物に狼狽するも、通用しないならば別の手を使うまでと、従騎士は淡々と

事を進める。

「どうやら、貴女にはこの方法は通用しないようだ……では、こういうのはどうでしょうか？」

急に、身体が自由になる。急に開放されたことに、不信感を覚えつつ何とかして二人を助け出す方法を考えていると……

「エリオ君!？」

エリオもまた開放される。そして、ゆっくりとこちらに向かってきている。

「エリオ君、大丈夫!？」

近づいて様子を伺おうとした時だった。ストラダーダが真一文字に振り払われる。

〔Protection〕

またしてもケリユケイオンに助けられる形になった。が……エリオは間違いなくキャロを攻撃してきた。

「エリオ君!?!私だよ、キヤロだよ!?!分からないの!?!」

必死に呼びかけるも返事がない。眼にも光が感じられない……

「操られてるの……!?!」

その通りですよ。ははははは……くうくつつ……

あの小娘を殺りなさい。命令ですよ。

「は……」

生気のない声で妖魔に対して返事を返すエリオ。完全に心が支配されているようだ。

「エリオ君、しっかりして!!」

私の声は届いていない。ゆっくり、ゆっくり近づいてくる。その手に握られているス  
トラーダは殺傷設定のようだ。

[Sonic Move]

突如、眼前に現れるエリオ。躊躇することなく、ストラダーは振りぬかれる。

「エリオ君!!」

[Protection]

魔力とデバイスの激しいぶつかり合い。魔力が火花のように飛び散る。現在はなんとか均衡を保っているが、キャロの心は揺れている。

「攻撃なんてできないよ」

3分ほど経ったころだ。徐々にだが状況に変化が見られた。キャロが押されている。

防御に徹して、疲れを誘うつもりだったのだが、一向に攻めてが緩まない。むしろ増

してきている。

「はあはあ……魔力が、もう持たない。それにエリオ君も限界を超えてるよ……」  
無理やり動かされているようなものだ。エリオは自分で疲れを感じていない、ましては、魔力も無尽蔵に使っている。当然、身体に掛かる負担は計り知れない。

必死に考えた。エリオ君を止める方法を。そして見つけたのだ。苦肉の策をひとつ。上手くいく確証なんて全然ない。でも……やらなきや。

おやおや、何かするみたいですね……ほら、貴女も見なさい。

隊長は伊達ではない。ここまでの精神汚染にも耐えている。意識もかろうじて残っていた。

「はあはあ……」

しかし、喋る気力もない。過去の事件などを記憶の奥底からかき回されれば、こうなってしまうの当然だ。

「…め…て…一人…と…も」

氣力を振り絞りなんとか声を発するも、聞こえるわけもない。

そして…なにか私のなかの何かが壊れてしまった。

肉を貫いた音が聞こえた。

ゆつくりと前を見つめる。



キヤロを貫いた、エリオが立っていた。

「あ、あ、あ、いやああああー」

「エ……………お、君、ケホッ」

フエイトの叫びに涙し、口から血を吐き、眼の前の男の子の名前を必死に呼ぶ。まだ、無機質な表情を崩さないエリオ。しかし、これはキヤロが賭けにでた苦肉の策だった。力の入らない手でペンダントを握りしめる。そして顔をゆっくりと近づけていく。その瞬間、二人の唇は重なっていた。

「…オ…君……きだよ…」

## 死神

握られたペンダントが一段と光を放つ。命を賭けた願いに応え、紫紺のペンダントは光輝く。やがて光は二人を包んでいった。

光はエリオを悪夢から解き放った。F. A. T. Eから始まった過去からの呪縛にようやく心が光を取り戻す。しかし、エリオは現実との著臆面を余儀なくされる。濡れている身体……そして、鼻に付く血の匂い。

「キャロ!? キャロー……」

付きつけられた現実にはあまりにも辛い。ストラダーに貫かれた「同僚であり、心を許せる家族」キャロが居たのだから。

目の前に現実……自分がキャロを刺してしまった……このことが理解できず、認めることができず。エリオの心が軋み、砕けそうになる。唯一、キャロに息があることがエリオの精神崩壊を踏み留まらせた要因だろうか。

くくくつつつ…愉快愉快

これで、目的は果たせましたよ。さて、回収しますか。

「悪趣味」の一言しかでない方法で3人を戦闘不能へと追い込んだ従騎士は当初の目的、フェイトの回収の為、ネットに絡まる彼女の元へと、無い足を運ぶ。だが、それを良しとせぬ人物の襲来が歩みを阻む。

小気味良い銃声とともに従騎士の身体の一部が爆ぜた。

「遅かった・・・っキャロ!？」

血まみれになっていているキャロ、そして、愕然としたエリオ、そして網に捕らわれたフェイトを視界に捉える。

「貴様!!何をした!？」

現在の状態を把握した瞬間、激昂していた。許せなかった。仲間をここまで……追い詰めるなんて。

ルナとソルを構え、トリガーを引く。従騎士はAMFがあることで油断していた。フェイトが苦戦していたこのAMF下ならばと。だが、マガジンに入っているのは、魔力ではない。実弾である。

放たれた弾丸は杖に着弾すると、易々と貫通し、爆ぜる。

貴様……こちらの世界で実弾を使用するとは

「貴様らを葬ることにそんなルールは関係ない」

実弾を受けた杖は真つ二つになり、従騎士にもダメージはあつたようだ。この隙に後退し、キャロとエリオの治療にかかる。

「ひどい……キャロ、我慢してね」

本来なら刃物など傷口から抜くのは、完全に処置出来る状態でない限り、逆に危険だが、今は選んでなどいられない。手に力を込めストラダを一気に引き抜く。それに伴う出血はなんとしても防ぐ必要があつた。

ルナのマガジンを魔力弾へと入れ替え、3発分ロードする。

陽術 スターライトヒール。暗く淀んだ空間に、太陽の光が舞い込んでくる。

光は、傷ついた、少年、少女を優しく癒していった。

「駄目だ、止血程度にしかならない……資質的なものあるし、このAMFはかなり辛

い」

「白薔薇が助けを呼んでるから…二人とも…もう少しの辛抱だよ」

治療が終わると同時に、イルドダウンが駆けつけてきた。よく見えなかったが、衣服が少しボロボロになっていた。

「すまない、遅れた。二人は我に任せろ。貴様は奴を倒せ！」

「わかったよ、二人をお願い」

二人ともかなり危険な状態には変わりない。急いでこの外道を倒さなければ……

ほお……あの爆発でも生きていたか……

「訓練と比べればあんなもの、可愛いものだ。それより、貴様は生きては返さないから」

重苦しい雰囲気次第に周囲を支配する。お互いが隙を窺い、仕掛けるチャンスを探る。アセルスには時間が無いことは明白だが、仕掛ければ、「やられる」と肌で感じ取っていた。だから迂闊には踏み込めない。

微動だにせず、ただ時間が流れる……はずだった。

貴様は、我らの敵だ。だから貴様も狂い死ぬがいい。

張りつめた空気が一瞬乱れた瞬間に仕掛けられ、完全に不意を突かれた形になってしまった。防御も間に合うのかわからない。ただ心の中で私は叫んでいた。「死ねない」と。

「ああ、同意見だ。だから、貴様が死ぬ」

突如、この空間内で聞き覚えのない、暴力的で、無機質な声が響く。声が紡がれた次の瞬間には目の前の従騎士の頭が身体から永遠の別れを告げる。

ひゃあああははは……一体何が……

私も何が起こっているのか、全く理解できなかつた。不意を突かれどうすべきか思考していた矢先、奴の頭が落ちたのだから。

頭を無くした妖魔の後ろ。よく見てみると、死神を思わせるようなフェイトが立っていた。ただ、髪はほどかれ、髪の色、虹彩、バリアジャケット、魔力光など黒色になっている。

「フェイト……隊長……？」

死という今までにないプレッシャーを感じながら、私は問いかけた。しかし……答え



は何も返ってほこない。

我は死ぬのか……ひゃああはあは……

狂ったように叫びだす、従騎士。しかし、もう身体と頭は繋がっていない。それが意味するのは死。

慈悲という言葉は存在しない。切り離された従騎士の頭に、黒色の魔力刃を展開したバルディッシュが振り下ろされる。

「消えろ、屑が……」

高速でバルディッシュを振るわれる度、妖魔は細切れへと姿を変えていく。数回振るわれたころにはもはや原型を留めてはいなかった。

[Plasma Smasher]

バルディッシュからの濃密な魔力砲撃が何も語らせる事もなく妖魔を消滅へと導き、消滅と同時にフィールドが解除される。

これまでに見たフェイトさんのものを遥かに凌駕していた。

「あの、フェイトさん……?」

恐る恐る、声をかけるが、直ぐ身体を竦め、回避行動を取った。自分の首元が有った位置を正確にバルディッシュの鎌が通過していた。

「何をするんですか!？」

当たり前のことを当たり前に言う。しかし返ってきた言葉は違った。

「ふん、貴様はやつと同じだ。人間の形をしてるが、貴様も同じなんだよ」

言葉が消えるやいなや、またしても、首を刈り取らせろというわんばかりに、距離を詰める。

「ちよつと、まって!!……速いつ」

しゃがみ込みと同時に懐を走りぬけ、距離を取る。が、距離を取ったのがいけなかった。視線の先では、地面に倒れ込む、イルドダウンが見えた。弱ったものから狩って行く。自然の摂理と同じだ。

「イルドダウン!?フェイト隊長は!?貴女は一体誰なの?」

事態が飲み込めず、思いつくままの言葉を投げかけていく。とりあえず情報もなく、黒いフェイト隊長と戦うことになり、一方的に攻撃を受けている。フェイトさんなのかさえも分からない状況で反撃に出るなどもつての外だ。だから苦し紛れに言葉を投げた。そして、返ってきた答えは予想だにしないものだった。

「私は、アリシア。アリシア・テストアロッサ。フェイトの姉だ」

えっ!?!お姉さん???

駄目だ、状況が全然理解できない。

「はっはっは……そりゃわかんねーだろうな。まあ、一応フェイトの仲間っぽいしな。説明してやるよ」

フェイトさんとは性格が全く違う……それに、凄い威圧感……いや、殺意といったほうが適切だろうか。

私はしばらくプロジェクトFについての話を聞いた。またフェイトの過去を。

「つまり、フェイトさんはアリシアさんのクローンだと……?」

「そうだ。しかし、私の人格が表立つことはなかった。そう、生まれるはずのないフェイトの人格があったからだ。だが、私もこんなことをして、現世に戻るほどの未練はなかった。だから、私は、フェイトの姉として、そして影となり、支えていくことにした

んだ。後は話した通り。過去に母親から受けていたことや、管理局からの扱い。ここでのストレスを私が代わり引き向けることで、人格の崩壊を防いでいた」

そんなことがあるのか……。しかし話が続く。

「だが、今回はあまりにもストレスが集中しすぎた。そう、先ほど葬ったやつおのせいだ。やつは、フェイトの心の傷を抉った。だから、心が崩壊する前に私が表に出てきた。それだけだ」

「つまり、フェイトさんは、今眠っている……」

「物分かりがよくて助かるよ。そういうことだ。ちなみに、フェイトのことは心配しなくてもいい。大丈夫だ。それとこの事は、他言はするな。フェイトにも言うな」

「わかった……」

とりあえず、フェイトさんは無事のような。よかった……。それなら次は、エリオとキャロだ。

「また、使うことになるなんてね」

バックパックからカードを取り出し、力を解放する。

「秘められし力を解放せん。祖は癒しの象徴なり。出でよ」

カードをエリオとキャロの二人にかざす。するとカードから金色の杯が現れた。

「二人とも…もう少し我慢して…」

杯から水がこぼれていく。こぼれた水は二人に沁みわたって行く。そしてうなされていた二人の表情が和らいだ。表情の変化に気付き、ようやく安堵の表情を浮かべる。

「後は、救助が来るのを待つだけ。イルドウンも気絶してるだけだし」

なんとか無事に事件を解決できたと…一息付いていた矢先だった。またしても首に鎌が掛けられている。

「っ!? アリシアさん、一体何のつもりなんですか?」

内心焦りは感じている。どうしてアリシアが私の首を再度狙って、こうなっているのか分からないからだ。

「私達の敵は妖魔でした。それに私達は、仲間なんですよ?」

「ああ、そんなことぐらい分かっている。私は、お前から感じられる、その感じが嫌いなんだ。それにな、フェイトの負の感情を代わりに受けてんだ。私にも、ストレスのはけ口ぐらい欲しいんだよ」

「私が妖魔であることがそんなに気になるの?」

「貴様は妖魔とか呼ばれるものの気配が半分だ。後は、人間だろうか」

……？私は妖魔なはずなのに、何言ってるの……？

アリシアの言葉に疑問を浮かべる私。なにか違和感を感じる。なにか……

「つつう……」

突然訪れた、激しい頭痛に、思わず声を漏らしてしまう。痛い……頭が割れそうだ……

「苦しんでるところ悪いんだけどさ……相手してくんない？飢えてんだよ。こっちはもう我慢できなくてうずうずしてんだ」

苦しむ私をよそに、アリシアはバルディッシュを突きだし、こちらに話しかけてくる。「……一体、何の相手を」

返答を待たずして、アリシアは突っ込んできた。ご丁寧にフォトンランサーも同時に展開している。

「戦いに決まってるだろう!!それ以外になにかあるってんだよ」

黒い死神……アリシアとの戦いの幕は揚がる。

なんとか頭痛が収まってきた。アリシアと戦闘に頭痛があつては致命的だ。ただ、状況は思わしくない。一方的に攻め続けられている。まず一つ目、攻撃が当たらない。フェイトさんとの模擬戦は嫌というほどやってきた。でも、このスピードはそれをも軽く凌駕していた。

「くう、速い……」

モードブレイズで現在立ち回り、飛んでくるランサーを回避、撃墜に手を焼いている。それに二つ目。防御ができない。これは私がプロテクションを使えないというわけではなく、プロテクションの意味がないということだ。アリシアの斬撃を防御した時、プロテクションが斬られたのだ。どうやら、防御を貫通する性質をもっているらしく、防ぐことができなくなった。

最期に……アリシアはデバイスを殺傷設定で使用している。そのために回避に今は全力を注いでいるのだ。

「逃げてばかりじゃ、面白くねーだろ。ほら攻めてこいよ」

バルディッシュをルナとソルで受け止める。だが、押し切られそうさ。ほんとに、



フェイトさんとは違う。何もかもが数段上だ。

「強い……押し切られる……」

「私にリミッターなんて関係ない。そんなもので私は縛る事はできないんだよ」

フェイトに掛かっているリミッターを解除した状態ということ。そして、アリシアのセンスも加わって、一方的に押し込まれている。

状況はかなり不利であった。だが、これも訓練のおかげか、少しづつだが状況を押し返せるようになってきた。数十回の剣劇の後に、少し癖が分かってきた。アリシアは力を入れすぎる癖があるみたいだ。この癖を狙っていくしかない。そして、また罅迫り合いに持ち込んでいく。そして実行へと移す。

「……はああ!!」

アリシアが力をかけた瞬間に力を抜き、なんとかいなすことに成功した。そして、ここに生まれた一瞬の間……姿勢が崩れるのを狙っていた。

「そっだよ!!」

疾風迅雷。フェイト得意の高速攻撃。そしてアセルスが最初にマスターした閃光の

一撃「稲妻突き」

アリシアのデバイスを奪う為に狙うのは手だ。もちろん非殺傷だが、まともに当たれば少なくとも今は、動かせなくなるのだが……当たらなかつた。

「惜しかったね。でもそんな速度じゃ止まって見えるよ。残念」

回避不能の技さえも回避するアリシア。そして……

笑みを浮かべながら、背後からバルデイツシュを振り下ろす。

「消えちまいな!!!」

「諦めない!!!」

ルナから伸びる魔力刃で、バルデイツシュを受け止めると、そのまま、回転し、魔力刃を滑らせる。そして回転を利用したまま、ソルを振りぬいた。

「かすみ青眼」

シグナムから教えてもらったカウンターだ。これなら……

ソルは、バルデイツシユを吹き飛ばすことに成功していた。弧を描きながら、後方へと飛び、地面に突き刺さる。

「……はあはあ」

張りつめた戦いで気付かなかったのか、ものすごい量の汗が身体を覆う。身体も重い。命を賭けた戦いはこれほどにきついなんて……妖魔との戦いとは全く違う。人と戦うことがどんなに恐く、大変……!?

「がはあつ」

……!?!何が起こったか分からない。ただ強制的に息が吐き出される。遅れて腹部に痛みがやってきた。どうやら殴られたようだ。

「なかなかいい線いってたけどよ、最期に油断したのはいけないね」

意識が飛ぶ瞬間に、理解できた。どうやら、アリスアの拳はアセルスに深々とめり込

んでいた。

「そん……な……」

痛みと酸欠で意識を失い、倒れ込んだ、私をアリシアが支える。

「面白かったぜ、お譲ちゃん。フェイトもお前のことが気になるらしいからな……」

そういつて、アリシアは頬に唇を落とす。

「私も気にいったよ……」

「そろそろ、フェイトも目が覚めるだろう。それじゃあ、私も眠るとしよう。ただ、フェイトを悲しませるな。その時は、私がお前を狩ってやるからな」

アリシアは眠りについた。それから数分も立たずに、白薔薇をはじめとした、救助部隊が駆けつけてきた。すぐさま、搬送準備がなされ、搬送が始まった。そして、私達人人はすぐに治療ポッド送りとなった。幸い、イルドウンは軽い、打撲だけだったが。

「ほう……やはり面白い。Fの残骸……ここまでは」

博士のような青年が興味深そうに答える。隣には長身の女性が立っている。

「それにあの少女、アセルスとか言ったかな？ 実に興味深い」

アセルスの写真を見ながら、にやりと笑みを浮かべる。

「彼もまた面白いものを持ってきてくれたものだ。彼に連絡を取ろう」

そう言い残すと、ドクターと呼ばれた男はそのまま部屋を後にした。

## 焦燥

現在、六課の前線メンバーに加え、はやて、シヤマル、リイン、ザファイラは、ヴァイスの操縦するヘリの元、今回の現場へと移動している。

はやてが情報ディスプレイを操作し、今回の事件の再確認を行っている。ディスプレイには、ある男の写真と履歴が映し出されている。が、これをおとなしく見ることができない方が一人。そうフェイトだ。だがフェイトもライトニング分隊長である。そのため、今は拳をぎりぎり握っている。

「現状ではこの男。違法研究で広域指名手配されている次元犯罪者「ジェイル・スカリエッティ」の線を中心に操作を進める」

「こつちの操作は、主に私が進めるんだけど、みんなも一応覚えておいてね」……グシャ「はい!!」

フェイトちゃん……天井の一部、握り潰さないでね。ほら、エリオとキャロがびくついているよ。

しかし、内心では、フェイトさんすごい。なんて思っている二人であるが。だが、ヴァイスだけは泣いていた。

「俺のヘリが……」

そんなボヤキは誰にも聞こえるはずもなく、説明が続けられる。ラインがはやての横に移動し、説明を始め、なのはが続けて説明に入る。フェイトも続けて説明する。

「ホテル・アグスタ」——今回はこちらで行われるオークション会場の警備。それに、レリックも絡めば、ガジェットも動いてくるとの予測から、六課が担当することになった。

「この手の大型オークションだと、密輸取引の隠れ蓑にもなったりするし、色々と油断は禁物だよ」

「現場には昨夜から、シグナム副隊長とヴィータ副隊長と、アセルス、白薔薇姫、イルドウンははっててくれてる」

「私達は建物内の警護に回るから、前線は副隊長達の指示に従ってね」

「はい!!」

さきほどから、きよろきよろしていた、キャロはついに我慢できなくなったのか、質問をすることにした。

「あの、シャマル先生、さつきから気になってたんですけど、その箱って?」

「ああ、これ? 隊長達のお仕事着」

満面の笑みを浮かべて答えるシャマル先生。お仕事着ってなんなのかな?

「いらつしやいませ、ようこそ」

受付担当が来客に対していつも通りの挨拶を行っている。次々と客が流れていき、ある客がやってきた。受付に出されるのは、身分証明書。機動六課部隊長「八神はやて」のものであった。受付が困惑するのも無理はない。三人ともが、誰が見ても墮ちるであろう、美貌と容姿を兼ね備えている。シャマルが準備していたドレスがなお美しさを引き立てている。

受付に挨拶を済ませると、そのままホテル内を見て回ることに。なのはとはやてはホール内を。フェイトはホールの周りを確認することになった。

ホール三階付近から、開場内を確認している、なのはとはやて。そこに昨日から来ていたイルドウンが合流した。ただいつもと違って、正装だが。

「昨日からお疲れやな、イルドウン。なかなか決まってるやん」

「普段とあまり変わらんだろう。中を昨日から調べてみたが、特に変わったことはない。



警備も問題なからう」

「そうやな、六課のみんなが外を固めてるし、万が一でも、私たちでなんとかする」

「油断禁物だよ、はやてちゃん。それじゃ、周りを見てくるから、ちよつと行つてくるね」  
言い終えるとホールの外へ。そしてなのはから念話が。

《仕事申中だから程々にね》

《あははは、なんのことかな》

流石はスターズ分隊長。色ごとに鈍感なフェイトちゃんの嫁だけあるわ。一人で解釈を終えると、イルドウンの横へと移動し、

「なあ、イルドウン。その、なんや、あの……」

「何をまごついている。部隊長とあるものがそれくらいで狼狽するな」

「あう……」

なぜだろう。はやてが小さく見える。が、そこはイルドウンも分かっている。何を言いたいのか、そして欲しい言葉を。

「似合わない服を探すのも、お前なら難しいのではないか？」

少しの間、静寂が支配する。彼が言った言葉を理解することに時間が必要だった。そして、理解できたとき、彼女の胸には喜びが満ち溢れていた。

「イルドウン、ありがとな」

「いつまで惚ける気だ。はやて、お前は、この隊の隊長だろう。我は、我の役割を果たす。お前はお前に役目を果たせ」

そうして、手を取り、手の甲へ *k i s s* を落とす。

「はやて。しつかりな」

「もちろんや、イルドウン」

そんなこんなでイルドウンはすうつと消えてしまう。こればかりは私も慣れない。気持ちに一区切りつけると、すぐに切り替える。仕事はきっちりせなあかんから。

「なかなかお似合いですよ、アセルス様」

素直な感想を私は述べました。高貴でかつ美しい姿。深紅のドレスが映える。私の監修の元、シヤマル様のご助力もと完成させたこのドレス——紅い薔薇を携え、アセルス様にお似合いです。

「白薔薇、なんか恥ずかしいな」

バリアジャケットや制服ではなく、このような正装をするのは久方ぶりでした。無理もありませんね。

すつと、アセルス様の手を取り、少し顔を赤らめ、お願いすることにしました。

「アセルス様……お願いしますね」

言いたいことが分かったようで、アセルス様も、顔を赤らめているようだ。けれどすぐに答えてくださいました。

「もちろん、喜んで」

すぐに手を取ると、優しくエスコートしてくれました。すれ違う人達は、私達を眺めているようでしたが、私は気にしていません。もちろん、アセルス様も。

昨日一通り見回りましたが、再度確認ということで、建物内を見回っていると、向こうからフェイト様が来られました。フェイト様も黒を基調としたドレスがとてもお似合いです。

「アセルス、白薔薇姫！昨日からお疲れ様です。二人とも、凄く似合ってるよ」

「フェイト様こそ、凄くお似合いです」

「羨ましいな……胸とか」

アセルス様、少し感想がずれてませんか？

「二人ともいいなあ。ドレスもお揃いだし、アセルスと白薔薇姫もなんかいい感じだし。

私もなのはに……」

公私混同はやめましょう、機動六課。

「と、とにかく、もうすぐオークションだしね。お仕事がんばろうね」

「フエイト様も。頑張りましょう」

「むう……羨ましい」

アセルス様、夜は御覚悟を。

「バルディツシユ、オークション開始まであとどれくらい？」

「3 hours」

「うん」

残りの時間、私達はフエイト様と一緒に回ることにしました。途中、廊下で話をされていた二人の御仁の一人がなにか気付いたようでしたが、特に危険なこともなさそうなので、そのままスルーして見回り続けることにしました。

《しかし、今日は八神部隊長の守護騎士団全員集合か》

スバルからこんな念話が飛んでくる。今は特に問題もないので警戒しつつ、会話を始めた。そこから、八神部隊長のデバイスのこと、

副隊長とシャマル先生とザフィーラ、ラインを合わせた6人のことについて少し話が進む。だがレアスキル持ちは当然、秘匿事項が多い。

《ティア？何か気になることも？》

《別に。また後でね》

気になるなんてもんじゃない。六課の戦力は無敵を通り越して異常だし、八神部隊長がどんな裏技を使ったか知らないけど隊長格はみんなオーバース。副隊長もニアSランク。ほかの隊員達だって、前線から管制管まで未来のエリート達ばかり。あの歳でBランクを取っているエリオとレアで強力な竜召喚士のキャロはフェイトさんの秘蔵っ子。それに危なっかしくはあっても、潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップもあるスバル。そしてまだ謎だらけだが、私と同じぐらいで、遙か上を行くアセルス。

「この部隊で凡人なのは私だけか」

その言葉とは裏腹に心の底には熱い想いが渦巻いていた。こんなところでは立ち止まってなどいられないと。今は警備の最中だとすぐに頭を冷静に、持ち場に戻った。

森の中で、親子にも見える男と少女は他愛もない会話をしていた。だが少女にもたらされた情報に間違いはない。ドクターのおもちやが来ると。

ホテルの屋上に待機していたシャマルのデバイス「クラールヴィント」のセンサーに反応があった。どうやら、お客さんが来たようだ。だが歓迎などはだれもしない。

「シャーリー!?!」

ロングアーチのシャーリーに確認を取る。クラールヴィントのセンサーの誤認では

ないことも確認できた。

「ガジェットドローン陸戦Ⅰ型、機影三十・・・いや三十五。陸戦Ⅲ型、2、3、4!!」  
ホテルの三方からガジェットが襲来していることがディスプレイで確認できた。すぐさま情報は各隊員に通達される。

そこからは早かった。

副隊長やシャマルの指示のもと行動が開始される。新人FW4人はティアナの指揮下でホテル前に防衛ラインの設置。ヴィータ、シグナム、ザフィーラは追撃に出ることになった。ただザフィーラが喋れたことに、エリオとキヤロは少々驚いていたようだ。

それぞれ内容を把握すると返事を返し、移動を開始した。ティアナは魔力アンカーを使い、シャマルの元に。状況を見たいとのことで、シャマルからデータを受け取っていた。

「副隊長のみなさん、デバイス、ロック解除。グラーフアイゼン、レヴァンティン、レベ  
ルⅡ起動承認」

「クラーレルヴィント、お願いね」

「グラーフアイゼン」

「レヴァンティン」

それぞれのデバイスを掲げバリアジャケットを展開する。そこにはいつもの副隊長ではなく「八神はやての騎士達」の姿があった。

バリアジャケットの展開が終わるとヴィータ、シグナムは追撃へと赴く。

「新人達のところには、ぜってーやらねえ」

それを聞いていたシグナムはやれやれといった感じで、話を聞いていた。

「お前も案外過保護だな」

そんなやりとりをしながらも、目標のすぐそこまで迫っていた。木々をなぎ倒しながらもこちらへ一直線といったところか。

それを確認したヴィータとシグナムはどちらが大型を倒すかで揉め始め、最終的に早稲者勝ちとなった。子どもですかと言いたくなるようなこの二人。ただここ最近出番がなく暇を持て余していたのは事実である。

「今度、アイス奢れよな!!」

「分かった、分かった」

そして二人と一匹は戦闘を開始した。



《八神部隊長、私が防衛ラインに参加してもいいでしょうか？》

外の状態を確認していると、アセルスから確認が飛んできた。中の警備は十分やろうし、アセルスがF Wに合流すれば、さらに安心やな。

《了解や。アセルスはそのままF Wに合流、ティアナ指揮下で防衛ラインの維持と遊撃。各ボジションのカバー頼むで》

《了解しました》

確認を終えるとすぐさま、窓へと走り出す。白薔薇は中の警護を任せて、私はラインの維持に専念することにした。

「いくよ。ルナ、ソル」

両耳のピアスを触り、外へと飛び出す。同時に深紅のバリアジャケットが展開される。二階から勢いのままに飛び出してしまったが、なんなく着地。そのまま皆の元へ合流することにした。

ホテルから少し離れた場所から、ゼストと呼ばれる騎士と少女は眺めていた。そこにドクターから通信。

「断る。レリックが絡まぬ限り、互いに不可侵を守ると決めたはずだ」

「ルーテシアはどうかかな？」

「うん、いいよ」

ルーテシアと呼ばれる少女は断る事もなくDr. そうジェイル・スカリエツテイの依頼を受けた。依頼を受けてくれたことに彼は感謝しているようで、今度お茶とお菓子を御馳走すると言ってくれた。別にお菓子とかはいんだけども言いたそうだ。依頼品のデータを受け取ると、ルーテシアは召喚を始める。そう、彼女も召喚士なのだ。

「吾は乞う、小さき者、羽搏く者。言の葉に応え、我が名を果たせ。召喚インゼクトツク」

紫の魔力陣から、卵のようなものが現れ、それが破裂するとそこから小さな羽虫が大量に召喚された。ルーテシアはオブジェクトコントロール、つまり無機物の操作を羽虫にさせるというのだ。だが、これは彼女の能力の一端にすぎないのだが。

放たれた羽虫はガジェットに入り込み、コントロールを奪いとる。そして動きは格段に良くなり、シグナムや、ヴァイータが一撃で落とせなくなった。ヴァイータがラインまで

下がることになり、シグナムとザフィーラの二人で当たることでなんとかラインの維持を優先することにしたが、さらに相手は追い打ちをかけてくる。

「ブンターヴィヒト」

これには同タイプであるキャロがいち早く気付いた。

「遠隔召喚!?!」

言葉と同じくして、眼前に召喚魔方陣が展開される。そこから転送された1機の方ジエツトが出現する。スバルやエリオが転送魔法により現れたガジエツトを見て「どこから」と叫んでいる。だがキャロは知っていた。

「すぐれた召喚士は、転送魔法のエキスパートでもあるんです」

三人のやり取りを聞いていたティアナだけは違っていた。彼女はすでに臨戦態勢に入っている。副隊長達のリミッター付きでの戦いを見せつけられ、さらに「やらなければ」の感情に飲まれかけている。

今までと同じだ。証明すればいい。自分の能力と勇気を証明して。私はそれでいいだってやってきた。クロスミラージュを正面に構え、魔方陣を展開し、迎撃の準備を整える。ライン曹長もこちらに合流することになったそうだ。ただ虫にやられたとかな

んとかで少し合流が遅れるとのことだ。

だが、ルーテシア達の目的を知る者はいない。ガジェットは囿であり、本命の物を探している最中だった。そしてそれもついには見つかる。

「見つけた」

右手を掲げると「アスクレピオス」から黒い塊が放出された。それこそが彼女の召喚虫で信頼を置くガリユードだった。すぐにガリユードは倉庫へと向かっていった。

「くっ!!」

足を止め、ガジェットに対して射撃を行うも、効果的なダメージを与えることができていない。避けられるし、当たっても破壊することができていない。ガジェットから放たれたミサイルを撃墜することに気を取られ過ぎて、背後を完全に取られていた。が、キャロの声でなんとかジャンプして回避し、二発打ち込むもAMFにより決定打にはならない。

「ティアア!!大丈夫?」

ウイングロードを滑走し、ガジェットをかく乱しているスバルから声が飛ぶ。何とか

の意味を込めて、左手を少しあげ、木に身を隠し、マガジンを交換していたとき、シャマル先生から連絡がくる。

《防衛ライン、もう少しだけ持ちこたえてね。すぐに、ヴィータ副隊長がすぐに戻ってくるから。それに左舷はアセルスが抑えてくれてるから、みんなは正面だけに注意して》

《アセルスも出てるの!?それにシャマル先生、ちゃんと全機落とします》  
《ティアナ大丈夫なの?無茶しないで》

朝晩訓練してきてますから……大丈夫です。

「エリオ、センターに後退!スバル、クロスシフトAで行くわよ!!」  
「おおお!!」

ティアナの意図とする動きを理解し、さらにガジェットをひきつける。それを確認するや、カートリッジ4発ロードする。

証明するんだ。特別な才能がなくなつて、一流の隊長達がいる部隊でだつて、どんな危険な戦いだつて……

一つ、また一つ。シューターが生成されていく。そして十数発のシューターがティアナの周りに漂っている。

大丈夫。打てる。クロスミラージュも……私も。

「ランスターの弾丸は敵を貫けるって」

スバルは準備が整ったことを確認すると、車線軸にガジェットを追い込んでいく。そしてティアナを確認すると、その場から急速に離脱した。それが合図となるのだ。

「クロスファイアーシュート!!!」

ガジェット目がけ、一斉に放たれるオレンジの弾丸。カートリッジのおかげか、易々とガジェットを貫通していく。だが、彼女の技量では、この数を正確に制御することがそうそうできるはずもなく、さらに、精神的にも不安定なら尚更だ。一発だけ逸れてしまい、それが運悪くスバルの方へと飛んで行った。背後に魔力を感じたスバルが振り返るもすでに眼前。防御するにも、魔力量が大きくて貫通されてしまう。

「ああっ……」

どうすることもできずに、ただ固まってしまう。バリアを使うこともできずに直撃す

る寸前、目をつぶってしまふ。だがスバルには衝撃などは何も来なかった。

「ティアナも無理しすぎだよ。スバルも、もう少し集中しないと、怪我だけじゃすまないよ」

目を開けると、深紅のバリアジャケットに身を包むアセルスが、シューターを受け止めていた。しかも、バリアとかじゃなくて、魔力の刃を使って受け止めているのだ。

### 十字留め

普段からの地獄のような訓練のおかげで、魔力弾も止めることができるようになった。さらにここから応用である。勢いを吸収すると同時に方向を変え、余ったガジェットに跳ね返した。左舷のガジェットを全て切り裂き破壊してきた。皿型であろうと、今のアセルスを止めることはできなかった。左舷を片づけ、急いで駆けつけた時、ちょうどスバルが誤射されるところだった。

「ふう。ティアナ、無茶は良くないよ。スバルもそうだよ。こうなるつてくらい予想はついてたでしょ？ここは私に任せて、二人は休んで。ヴィータ副隊長も来てくれたみたいだし」

普段のティアナの事を考えると厳しく言うことは止めよう。今日の事で何か変わるかもしれないから。

ティアナの身体が震えてる。自分のやったことが招いた結果……フレンドリーファイアになりかけていたのだ。できると啖呵をきっておきながら、この結果だ。無理もない。

「アセルス、今のは私がいけないんだよ、だから……」

聞きわけのない二人だねホント。前思考撤回。少し、イラッてしちやったよ。

「引っこんで」

深紅の瞳が心を抉る。圧倒的な強者が弱者を眼だけで殺すような……深く、暗い視線。

「何回も言わせせないでね。それに、私の階級は4人より上、つまり上官命令だよ」

「は……い……」

これほどの恐怖をアセルスからは感じたことがなかった。妖魔に向けられる視線はこれに近いものがあるのだろうか。押しつぶされそうなプレッシャーを感じる。それにティアナも相当こたえてるみたい……



アセルスとヴィータ副隊長に任せて、スバルとティアナは後ろにさがった。この時スバルは気付かなかった。ティアナは声を殺し、泣いていたことを。

ガリユーは何も問題なく目的物を回収し、離脱を開始した。ルーテシアからのオーダーを受け、スカリエツィイのもとへ向かっている最中だ。だが、機動六課も簡単に終わる相手ではない。ノーマークだったガリユーの前後に影が現れた。

「はやてとアセルスの読みは当たっていたようだな」

「はい、イルドウン」

前後を挟むように、イルドウンと白薔薇姫が躍り出る。完全に気配を殺し、ガリユーを待ち伏せていた。その身に輝く、妖魔の剣と妖魔の小手、具足を装備した状態で。

待ち伏せは上手くいったが、はたして抑えられるものか……が、やるしかないようだな。

だが、相手と殺りあうつもりのないガリユーは逃げることを考えている。なので、二人を避けることだけに集中している。至極簡単な方法をガリユーは選択した。そう、正面突破だ。

「……」

さらに加速し、そのまま抜き去ろうと試みる。だが、イルドウンも易々抜かれるわけにはいかない。抜刀の構えをとり、相手を見据える。空気が変わった。

「一撃で決める」

ガリユーが通り過ぎようとしたその刹那……

きいいんと、金属と金属がぶつかる音が鳴り響く。

「金属音だ?! 一体何とぶつかったのだ!?!」

土煙りをあげた後、スピードを相殺するために、足でブレーキをかける。白薔薇姫が近づくも、そこにはイルドウンしかいない。

「イルドウン……」

「すみません、逃しました。だが、一太刀は入った……がはあつ」

膝を付き、吐血するイルドウン……どうやら、すれ違いさまに貫ったようだ。

「まさかここまで、動けないとは。情けない」

膝を付きながら、少しあがった息を整えている。その目には悔しさがにじみ出ている。

「今は治療が先です。シャマル様を呼びます」

白薔薇姫から連絡を受けてシャマルがやってきた。前線はすでに全機撃墜していたので持ち場を離れることにも問題はなかった。

「二人とも、無理はしないでくださいと言ってるじゃないですか。本来の5割程度しか出せないんですから」

治療を受け、なんとか出血は止まった。治療が終わるとすぐに、イルドウンは動きだす。

「迷惑をかけた。すぐにホテル内に戻る」

「待って、まだ終わってないです……ってもう」

すでに、そこに姿はない。白薔薇姫はやれやれといった感じで笑っていた。

「何故、無茶をするんですか？二人とも」

治療データをまとめながら、白薔薇姫に問いかける。前にも話は聞いているのだが、

どうしても納得ができないのだ。誰だつてそう思う。二人の力が落ちているのは分かっているのだから。

「シャマル様、私達には時間がないのです。あの方が本腰を入れてくる前に、その時まで成さなければならぬことがあるのです」

成さなければならぬこと。それがなんなのかは二人にしか分からない。だが、命をかけるほどに、何か大事なことがあるのだろう。今は詮索せずに、私もホテルへと戻るのだった。

その後、オークションが開催され、はやては、アコース査察官と。なのはとフェイトはそれぞれユーノと再会することとなった。

## 和解

## ——屋外訓練場——

ついに始まってしまったあの模擬戦。私達が怒り、悲しみ、悔い、惑い、そして歩き始めたあの日。

今思えば懐かしく、絆を深めることにも繋がったあの日。ただあのころの私達にはその時の意味を知ることがなかった。

「どうして二人ともこんなことするのかな」

下を向きたただ言葉を紡ぐ、スターズ分隊長・高町なのは。その手からは赤い血が流れ落ちる。素手でスバルの拳を受け止め、ティアナの魔力刃を魔力を纏わず受け止めた代償。

「模擬戦で危ないことをしたら意味ないよ……私の教導何か間違ってる？遊びじゃない

んだよ」

二人ともから何も返事は返ってこない。スバルに至っては完全にテンパっている。ティアナもそうだ。だが彼女は止まれない。ただ自分の思いを吐露しながら……泣いていた。

「私は、もう迷惑を掛けたくないんです。もう……失敗して、誰かの足を引っ張りたくないんです。だから、だから、私はッ」

魔力弾を形成し、なおも攻撃を続けようとするティアナ。だが、今回の模擬戦は……いや模擬戦と呼べるのだろうか。終わっていた。

「なんで、分かってくれないの。私が体験したあんな辛いことを味わってほしくないから……だから」

なのはの目にも涙が見えた。二人の思いはまだ交差することはない。想いのベクトルは完全に逆を向いたままで。

なのはの砲撃はティアナに行動を許すことも無く、圧倒的な力を持って意識を刈り取った。

「ティアア!?!??」

バインドで縛られていたスバルがウイングロード上に落下したティアアナに駆け寄る。当然なのは対して怒りを覚え、なのはを睨みつけている。だが、なのはは冷たく言い切った。

「ティアアナにスバル、両者とも撃墜で模擬戦は終了。今日はスターズはこれまでとします。では解散」

それ以上は何も告げることはなかった。その背中からは悔しさと、悲しみが溢れていた。

アセルスはフェイトの仕事を手伝っていたため、模擬戦はライトニングに参加することになっていった。そして今起こった事を、フェイトやエリオ、キャロとともに見ていた。「なのはさんの思うことは分かる。私も、自分の事は大事にできているのか怪しいけど、仲間を思うことは決して負けていない。何より、仲間を危険に晒してまでの勝利なんて」

考えを口に出した後、フェイトさんは私の唇に指をあてた。

「アセルス……今は私達の出番じゃないよ。待つことだつて大事なんだよ。それに、なのはだつて分かつてると思うんだ。だから三人とも、なのはやスバル、ティアナのごことは責めないでね」

「分かつてます、フェイトさん」

「もちろんです」

「私もです」

フェイトさんも微笑を浮かべている。機動六課の絆を改めて感じていたのだろう。その後、ライトニングの模擬戦が行われた。フェイトさんと私は一対一。キャロとエリオはコンビでフェイトさんとの勝負だった。最近までの模擬戦ではフェイトさんの速さにもかなり慣れていたのだが、アリスアと戦つて以来、フェイトさんは強くなつてた。本人いわく、身体が軽くなつたとか。

その為か、今回も速度で完全に圧倒され終始防戦だった。ここぞといった時に魔力量と強さが足りずに、攻防に決め手を欠いている状態だった。魔力が早々に成長するわけでもなく、今は技術を鍛えているだけだ。キャロもエリオもあの日以来、トレーニングに必死だ。自分の弱さが許せなかつたのだろう。エリオ、キャロもティアナのように早朝や深夜までトレーニングを続けている。フェイトさんも、止めたいのだが、理由を実際の現場で体験しているからこそ何も言えなかつた。



六課の前線部隊はかなり追い込まれている状況といっても間違いはない。それぞれの思いが交錯し、反発している。誰もが誰も完璧ではない。ましてや完璧などないのだから。

だが、このままでは部隊はF Wは機能しなくなる。何か、静まりかえった水面に波紋を起こす、石を投げ込まなければ。ここに決断を下す三人が居た。機動六課部隊長、八神はやて。そしてイルドウン、白薔薇姫である。今回の模擬戦での一見を受けて決断を迫られていた。

「このままやと、スターズにライトニング、どちらも潰れてしまう。そろそろ、みんなに話す必要がありそうやな」

「アセルスの件についてもだ。これまでを見てきた限り、心身の成長を感じられる。はやて、白薔薇姫、第二段階に移ろうと考えているのだが」

「私も同意見です。今のアセルス様ならばきつと大丈夫です」

「せや、アセルスの件も頃合いやろうし、何より、なのはちゃんのこと、そして妖魔のことについて詳しく話す必要がある。バラバラになつてる場合じゃなくなつてきているのは事実。だからこそ教導の真意をみんなに知ってもらわんと」

今回のことを重く見ていた首脳陣——イルドウンと白薔薇はアセルスのだが、手を

うつことを決めた。機動六課が新たな一步を刻むためにこの決断は遅かれ早かれ必要なのだ。

「もう入ってもいいか？はやて」

ドアが開くと制服姿のヴィータが部屋に足を進める。なのはの教導の真意を理解している者の中でも一番といっても過言ではない。そのヴィータを呼んだのは、

「ヴィータ、お願いがあるんやけど」

「分かつてる。今から、なのはのそこに行ってくる。しづつても無理やり許可をとってくるからな。シャーリーにも準備させといてくれよな」

そういうなり、部屋から出て行つた。流石というべきか、考えていたことは同じだった。来るべきときに備えみんな考えていたのだ。

「はやてよ、優秀な部下を持つているものだな」

「イルドウン、それは違うで。部下とかやない。ここはみんなが家族なんや。だから誰一人として、家族の事を考えてない者はおらんよ!!」

はやては嬉しそうだ。志を同じくもつた家族同然の仲間が仲間を思い、力を貸してくれる。はやてもまた絆を感じている。が、

「あつ!!!大事なことを忘れとつた」

急に焦りだす、はやてを不審に思ったイルドウンが聞いたです。

「はやてよ、何をそんなに慌てている？」

「実は数日後に、六課に新隊員が加わるんやけどな、すっかり忘れとったんよ。あははは」

完全に棒読みで汗を流しているはやて。完全にだれが見ても何かを隠している事はバレバレである。

「まあ……準備は私のほうがしとくから、二人も、みんなとアセルスに話すことをまとめておいてな。それとシャーリーにも連絡しといてな」

勢いそのままに二人を追い出すと机に突っ伏すはやて。彼女を悩ますのは新加入の新人FWなのだが、

「私は反対したんやけどな……中央の連中の手が掛かってそうやな。本間にいらんことしてくれるで」

ぶつくさ文句を呟きつつも、書類の製作にかかる。腐っても部隊長とはまさしくこのことである。

「腐ってないわ!!!」

あさつての方向に吠える部隊長を尻目に、一日の終わりが告げられる。そして、数日が経過し、奇しくも全ての出来事が重なることとなった。

数日後、海上にガジェットドローンⅡ型が出現。機動六課の出勤にあたり、なのはから、ティアナへの待機命令が下った。もちろんなのはは、ティアナを思つてのことだが、ティアナはそれに当然食い下がる。それにしびれを切らしたのはシグナムだった。「隊長の命令に駄々をこねるな、馬鹿ものが。何もお前は見えていないのだから、待機命令をするのは当然だろうが」

ティアナを殴り飛ばしたあと、斬つて捨てるように言葉を吐く。彼女も我慢の限界を迎えていたようだ。その様子をなのはは、心配そうに見ていた。すぐに帰ってくるから。そうしたらきちんとお話しようって。

そこにスバル、そしてエリオ、キヤロが食い下がる。思いは違えど、ティアナが強くなるために努力している姿を知つてたからこそ、シグナムに食い下がったのだ。

「強くなるってそんなにいけないことなんですか？ 誰かを傷つけたくないから、強くなるうと努力してるんじゃないですか!!」

「ならお前らはなのはの教導の意味を考えたことはあるのか？」

不意に投げかけられた言葉に4人ともが固まる。シグナムはやれやれといったよう

に4人を見ている。準備をしていたシャーリーとともに現れたヴィータのこの発言により、この場を鎮静化することができた。

「なのはの悪い癖だな。ちゃんと話してないから、こんなにも面倒くさいことになってやがる」

呆れながらも、ヴィータもやれやれといったポーズを取っている。シャーリーは少し表情が暗い。

「会議室にFWは集合。今から見せたいものがある」

——会議室——

「これは、なのはさん……それにフェイトさん!？」

エリオにキヤロが呟く。この映像を見たことはなく当然知らなかったのだから。アセルスを除いては。

「まだ9歳のときから、魔法を使うことになって戦ってきた。それにこんな小さいときから、収束砲まで使って」

ちようどスターライト・ブレイカーが放たれている映像が映し出されている。収束砲は身体に負担が掛かるが躊躇うことなく何度となく使用してきたのだ。成長しきっていない身体に無茶を加え続け、休息が与えられることもなく、幾度となく身体を酷使し

たのだ。

「そして酷使してきた結果がこれだ」

ヴィータは涙を隠しきれなかった。あの日現れたUNKNOWNにより疲れがピークに達していたなのは撃墜されたのだ。そしてヴィータは守れなかった。

ガンツと壁を殴る音が聞こえた。ヴィータが我慢できず壁を殴っていた。この映像を見るたびに、あの日の自分の不甲斐なさを思い知らされる。

「なのはは、今までの疲労とこの重傷で、二度と空を飛ぶことができなくなるところだったんだ。だけどあいつは諦めなかった。まだ小さい身体で必死にリハビリをして、また空に帰ってきたんだ!!!この辛さがお前たちに分かるのか!?!」

修羅の如く詰めよるヴィータをシグナムが止める。ヴィータも落ち着き取り戻し、また話始める。なのはの境遇を初め聞かされたFW4人の涙が止まる気配がない。

「あいつの教導はな、どんなことがあっても、どんなに苦しい状況でも、生きて、無事に帰ってこれる力をお前たちに付けるためなんだ。だから毎日考えて・・・お前たちが一人目のFWになれる教導をしてきたんだよ!!!」

あの日以来、なのはを守ると誓ったヴィータにとってやはり今回の事は許せなかったのだろう。若干怒りが全面に出始めているが、そこに手が差し伸べられる。

「ありがとう、ヴェータちゃん」

任務を終えたなのはトフェイトが会議室に来たところだ。さらに、はやて、イルドゥン、白薔薇姫もやってきた。

「本当は私からちゃんと伝えればよかったんだけどね」

誰も言葉を発せない。なのはの教導の意味を知ったからこそ、悔いているのだろう。

「ティアナ……ちよつと外で話しよつか」

ティアナを連れて、隊舎の前の海へ。腰をおろし海を眺めながら、二人は再度向き合った。

二人のベクトルの向きはすでに同じ。何も心配することはない。ティアナは素直に謝り、なのはの胸で泣いた。

### 「絆」

目に見えないが人と人その間にある確かなもの。その力が大きいほど、数が多いほど、人は強くなれるのだろう。

《なののはちゃん、落ち着いたら会議室に戻ってきてくれる?》  
《了解。今回がタイミング的にはベストだね》

念話を終わると、二人は会議室へと戻った。

「みんな揃ったようやな。みんなに伝えないかんことが3つあるんや。まず一つ目はの隊長から」

その場にいるFWは姿勢をただして、話を聞いている。

「まずは、明日からみんなのデバイスのリミッターを一段階解除します」

それを聞いた4人は喜んでいいる。ティアナは先ほど一足先に話を聞いていたが。

「明日からセカンドモードで教導だから、覚悟しとけよ」

ヴィータの言葉にも4人は元気に返事を返す。憑き物が落ちたように、みんなの表情は明るかった。

「次に二つ目。これは妖魔についてや」

エリオ、キヤロは当然のごとく反応したが、スバルとティアナはまだピンつと来っていない。まだ妖魔との戦闘経験がないからだ。



「それについては資料をまとめてある。各自、読んでおいてくれ」

イルドウンから資料が配られる。妖魔とはなんなのか。特徴、出現について等など。「これをみんなに話したのは理由があるんや」

そう言つて、はやてがデータを展開する。

「以前、屋外の訓練スペースに現れた新型。それに昇格試験の時の大型スファイア一台に異常があつたんよ。それらを調べてみると機械のはずなんやけど、生体反応の痕跡が微かにあつた」

「つまり、妖魔との何らかの関係性があるかもしれないと考えているわけですね」

アセルスの答えに頷いて答える。断定までには至らないが、可能性としては考えられる。

「そう、考えるとスカリエッツィは妖魔と手を組んでいることになる。我らとしては、あの方が手を組むなど考えなかつたが」

「ねえ、そのいつも言っている「あの方」て誰のことなの？」

イルドウンと白薔薇姫は覚悟を決めた。アセルスならば耐えてくれるだろうと。

「ファシナトゥールの針の城の主。オルロワーージュ様だ」

5人揃つてポカーンとしている。アセルスはそのことを知らなかつた。いや、忘れていただけだが

「ちなみに、我と白薔薇姫も妖魔だ」

ここであえてアセルスのことは触れなかった。アセルスも自分が妖魔だとは言わな  
い。白薔薇姫から自分が妖魔であることを決して話さないようにと、言われていたから  
だ。

4人はさらに驚いている。エリオに、キャロは警戒しているようだ。

「大丈夫だよ。私達はみんなの仲間なんだから」

アセルスが4人に声をかける。4人も普段のアセルスやイルドウン、白薔薇姫を知っ  
ているからこそ、納得したようだ。

「っ痛」

また頭痛が、しかも今回は、頭が割れそうなほどの痛みだ。何だろう、何も考えられ  
ない。ただ、何か大事なことを忘れてる気がする。

けど……思いだしたこともある。

私は逃げ出したんだ。あの城から。でもなんで逃げ出したんだろう？それに何があつたのかも全然思いだせない。

「様、ア……ス様」

ぼんやりと白薔薇の顔が視界に入る。どうやら少し気絶していたようだ。膝の上から身体を起こし、直ぐに立ち上がる。

「ごめん、心配かけて。もう大丈夫だから」

「アセルス様、何か変わったことはございませんか？」

心配そうに尋ねてくる白薔薇を撫で、少しだけ忘れていたこと思い出したことを伝えた。それを聞いた瞬間、白薔薇の表情が少し明るくなっていったように感じた。

「それで急なんやけどな、アセルスのデバイスのルナとソルなんやけど、試作機のためか、かなりのメンテナンスが必要なんよ。ただ機能をストップして置けば自己修理機能があるから、勝手に治るから。だから一回シャーリーに預けてくれるか？」

本人も無茶をしたことには覚えがあるらしく、シャーリーにルナとソルを預けた。

「アセルスさん。自己修理にどれくらいの間がかかるかは分かりませんが、待機状態で持つておく分には問題ありませんので。直ぐに調整します」

受け取るやいなや、調整を開始するシャーリー。流石といったところか物の数分で調

整を終えた。

「できましたよ。またいつものように、耳に付けてあげてくださいね」

シャーリーに感謝しつつ、受け取ったルナとソルを耳に付ける。しばらくの間はお別れだけど、ゆっくり休んでね。

「となると、しばらくはフォートレスを使うことになるね」

昇格試験時に作ってもらったデバイスを見る。現在は待機状態の指輪だが。

「それはもちろん考えてます。ただし今回のデバイスは特注で、かなり珍しいんです」

そういつて、待機状態のデバイスをアセルス渡した。ネットワークスで剣のような形をしている。が、どこか剣とは違う作りであるのは確かなようだ。

「セットアップ」

受け取ると直ぐに起動し、確かめることにした。

「これって、刀？」

黒と銀を基調にした鞘。そして一振りの刀。直刃の波紋は、もはや芸術品である。

「そういうえば、カートリッジシステムは？」

そう、カートリッジシステムがないのだ。

「実は、今回のこのデバイスは、もともとあった刀をデバイスとしているんです。もちろん非殺傷設定はできますよ。繊細な刀をベースにしているので、カートリッジシステム

を付けることができませんでした。一応インテリジェント型なんですけど、この子全然しやべらないんです」

そうなんだと、納得して、話しかけてみるが返事も特にない。まあ、これくらいのほうが逆に頼もしいかも。

「このデバイスには名前がないので、付けてあげてくださいね。それとこのデバイスにカートリッジシステムを付けなかった理由はもう一つあります。アセルスさんのレアスキルを前提に作ってますので」

またしても事情を知らない5人は<sup>????</sup>状態である。ティアナはアセルスに、「レアスキル持ちだったの!？」と詰め寄っているが。

「イルドウンさんが内緒にしてたんですよ。魔法と縁が浅い状態で、このレアスキルは危険だからって」

一応納得して話を聞く5人。当然内容は気になるところで、

「アセルスのレアスキルと呼ばれるものは、自己強化(ブースト)と呼ばれるものだ。使用中は体力を消費するが、魔力量に威力、それに身体能力が強化される。また何故かはわからんが容姿に変化が見られるらしい」

こんなのがレアスキルなのかと思われそうだが、あくまでもこれは外見上そう思ってもらうための。当然アセルスにも。

「なのにも、これを使用した教導メニューを考えてもらっている」

実際に使ってみないと分からないが話を聞く限りでは便利そうだ。カートリッジシステムがないのも頷ける。それに容姿が変わるなら使っても直ぐに分かる。とりあえず体力と刀に慣れないとだね。

会議室が宴もたけなわ状態だが、まだ話が残っている。

「最後に三つめなんやけど……」

はやてがしぶっている間に会議室のドアが開いた。そこには六課の制服を着た、女性が入っていた。身長は170cmはあるだろうか。長身でかつ、締まっており、出るところは出るといったナイスな体型である。グレーの髪は肩まで伸びており、黒い瞳が印象的だ。がそれ以上に左目の眼帯が一際目立っている。

「失礼します。本日付で機動六課に出向となりました、エリステイン・カルヴィン二等陸士であります。エリスとお呼びください。若輩の身でありますがよろしくお願いいたします」

敬礼を終えると、姿勢を正したまま、はやてを見ている。みんなはもちろん、そのはやては溜め息である。

「エリス二等陸士。あれほど来てはいけなと言っておいたはずですよ。なのになぜ機動六課へ？」

「はっ！はやて部隊長のもとでは是非仕事をしてみたいと思いまして志願しました」

この会話を見ている大半の人はこう思っているだろう。どこの軍隊あがりですかと。しばらく、はやてとエリスの会話が続いているがなにやらエリスのほうがか何を我慢しているようである。

「だから、しつかりゲンヤさんのところで勉強してくるようになんて伝えてあったはずですよ」  
この会話を聞く限りでは二人は知り合いの様だ。だがどんな関係までかは分からない。だがそれもつかの間だった。

わなわなと震えるエリスが我慢できなくなったのか、ついにこの均衡を打ち破った。

「母上!!私が嫌いなのですか!?!」

「嫌いなわけちゃう。ただ、巻き込みたくなかっただけなんや。それは分かかってほしい」

・・・  
???

「母上!!?!?!?!」

はやては、しまったと頭を抱えている。エリスは何をそんなに驚いているといった感じだ。しかしこの二人を除いて、機動六課スタッフは腰を抜かしている。

「主、こんなことは聞いていないですよ!!」

「はやてちゃん、いつのまにこんな大きな子どもが!？」

完全にパニックになってしまった。隠していたのは悪いとはおもっていたのだが、まさかこんな形ではれるとは思ってもいなかったのだ。

「みんな落ち着いて!!!」

が、治まる気配がない。仕方ない場合の最終手段を取るしかないようだ。

「今度から食堂でシャマルを働かせるで」

「すみませんでした」

一同が謝罪の後、はやてに注目している。どうやらエリスのことを話さなければならぬようだ。シャマルが何か言っているが気にしないでおう。

「5年ほど前にな、任務中に記憶喪失の女の子を保護したんよ。それがエリスなんやけど、そのときの一件で、私のことを母親と思ってるんよ。まあ要するに養子になったことなんやけど、二歳しか違わない娘ってのは、なんとも」

「私の母上は母上だけです」

「こんな感じなんよ。それに魔導師としての資質もあつてな、ゲンヤさんとこに預かってもらってたんよ。最初は少し施設におったんやけど、一緒がいいって押し切られて、一人暮らしをさせて、たまに泊まりにいったんよ。事情が事情だけに、ゲンヤさん



くらいにしか言えんくてな」

「しかし、これからは毎日一緒です。それに八神・エリスティンといつになったら変えていいのですか!?!」

「まだ駄目や!!この部隊はできたばかりで色々と風当たりは厳しいのに、部隊長のスキャンダルみたいなものはもつての外や!!だから落ち着くまで我慢してや」

ヴォルケンリッターにさえ隠していたせいかな、はやては、もみくちやにされている。しかし、エリスがそこに割って入り、なんやかかみやまたモメている。

こんな感じで、起動六課の絆は深まり、新たな仲間と力が加わりました。ただ、はやては「奥様」となのはとフエイトにしばらく遊ばれることになるのだが。

和やかな起動六課。そして、また近づく影が。

## 姐姫

## 針の城

「来たか」

「はい、オルロワージュ様。何故か血が騒いで、目が覚めました。あなた様の血を分けた娘アセルス、それに白薔薇姫、イルドウン…奴では役不足でしょう」

「そなたが行くのか？」

「あなた様の為に戦う事が私の務めです。それに、白薔薇…、妹姫にもあつてみたいもの。何故、あなた様に逆らうのか？」

「そなたは止めることは出来ない。行くがよい」

ファシナトゥールで異様な存在感を示すのは、魅惑の君オルロワージュが主の針の城。そこからまた一つの影が、ミッドチルダへと消えていった。だが今回は何かが違う。それが一体何なのかはまだ誰も知るところではなかった。

そして、針の城では…

「ラストバン、まだあれは目覚めないのか？」

柱の陰から現れたのは、ラストバンとよばれる妖魔である。イルドウンとは色々と関

係があつたようだが、

「はい、まだ目覚める気配はありません。しかし、目が覚めるのはもう時間の問題かと」

衝撃的な事だらけだったあの日から数日が立ち、今では機動六課も上手く機能し始めている。一番は教導を行う側と、受ける側の溝が無くなったことだろう。新人F Wもデバイスのリミッターをひとつ解除し、セカンドモードで訓練を行っている。みんな憑き物が落ちたように、訓練にのめり込んでいる。ティアナや、エリオ、キャロもあれ以来、無茶のトレーニングを控えるようになった。

さて、何故私が出てこないのかというと、今は街に出ている。

「アセルス准陸尉、エリス二等陸士」

機動六課部隊長こと、八神はやてに呼び出されていたからである。となりに、グレーの髪の少女で、はやての娘である、エリスが立っている。堅苦しいことは嫌いなんだけど、エリスが口うるさく言うものだから渋々従っている。

二人とも敬礼し、返事を返す。

「本日付で、二人を私の直属の部隊に配属します。私がこの隊の隊長。普段は前線に出

れませんので、アセルスに部隊の指揮権を譲渡します。エリスはアセルスの指揮のもと行動すること。それぞれのコードは私がナイト00、アセルスは01、エリスは02。何か質問は？」

私達は独立して動きたいって言ってたけど、妖魔のこともあるし、それにエリスの事をやっぱり放つてはおけないみたい。親ばk……

「アセルス准陸尉、何か意見でも？」

「いえ、なにもありません。謹んでお受けいたします」

はやて、そしてエリスからの殺気を感じた私は、返答を即座に返す。なんか大変そうだな。

「まあ、堅苦しいのはここまで。アセルスにちよつとお願いがあるんよ」

あの顔を見るかぎり何か良からぬことが起きそうなのは誰がみても分かる。しかし、エリスが隣にいると迂闊に断るわけにもいかず、

「今日、一日休暇あげるから、エリスの買物に付き合っただけでな」

……はい?!

そんなこんなで、私はエリスと買い物をしているところだ。さすがに二人だけでは心配だったので、白薔薇とイルドゥンにもこっそり来てもらっている。

白薔薇は凄くうれしそうだったが、イルドゥンは渋々といった感じだった。だから白薔薇と二人で、「パパお願い」とか「そうですよ、あなた」といった感じでからかっていたせいもあるのだが。

「分隊長、お付き合いただき感謝します」

「エリス、分隊長はやめてよ。なんか硬過ぎて寒気がするよ」

エリスは困った表情を浮かべている。今まで、どうしてたんだろ、とツツコミたくなるのは仕方ないとして、

「そんなに、悩むことないよ。そうだね……お姉さまとか……って冗談冗談」

冗談混じりにエリスをからかかってみたのが間違いだった。墓穴を掘ったとはこのことだ。エリスという人物に残念ながら冗談は通じない。隊長命令ならば喜んでとばかりに顔が嬉しそうだ。尻尾があれば、確実にふりふりしているとこころだ。

「はい、お姉さま!!!」

「ちよつと、冗談だつてば、それに年齢だつて私と一緒だよ!？」

「年齢など関係ありません、お姉さま!!」

こうしてアセルスはお姉さまになったのだ。肩をがっくりと落とし、溜め息をつく私の横で、エリスはとても嬉しそうだ。

なんやかんやで、アセルスも諦めたようで、そのまま買い物をすることにした。

「それにしてもエリスって、服とかに興味ないの？ 私も人ごとじゃないけど、エリスだつて女の子なんだからおしゃれしなときさ」

返事がないので、横を向いてみると、顔を赤くして困っているエリスが。どうやら、この手の事には無頓着らしい。それならせつかくだし、いろいろおしゃれさせてみたい。

「ほら、エリス行くよ」

エリスの手を引つ張り、服を見て回る。エリスも初めはあたふたしていたが、やはり女の子。楽しそうに服を眺めていた。そこで、店員を呼び、エリスに似合う服をコーディネートしてほしいとお願いすると、眼鏡を光らせエリスを見せの奥へと連れて行つた。もちろん金額に制限なしだが。何故かって？ はやてに付けておくから。

## 30分後

奥から、エリスの叫び声が聞こえていたような気がするが、無事にエリスが出て来た。袋を提げているのは、数着買ったからだろう。そして今の服装はというと・・・へそ出し姿が眩しい、「ねーちゃん」にそっくりである。エリスの背が高いことや、出る場所は出るといったナイスなボディのおかげで、さらにエリスの美しさが引き立てられている。ちなみにエリスに聞いたところ、これが一番動きやすいからとのこと。何かずれている気がするのは置いておこう。とりあえず、エリスが楽しかったのならこれでいい。

そして、今日一日は街で遊ぶことにした。ゲームセンターへ行ったり、映画を見たり、食事したり。年頃の女の子が休日街で過ごすようなことをエリスと一緒に。ただ、

ナンパされたり、ナンパされたり、ナンパされたり。正直、面度くさかった。そのたびに、エリスがブツ飛ばしていたのは、予想通りだが。

そして、6時。周りもすつかり暗くなり、人気も少なくなってきた。荷物も多くなり、少し休憩することに。幸い近くの公園に公共魔法練習場があり、そこで休憩することに

した。

「エリス、今日は楽しかった？」

「はい、とても。お姉さまありがとうございます」

これが、彼女の精いっぱい努力なのだろう。これ以上は何も言わないでおこう。それからしばらくは今日の事について話していた。エリスは今までに同じ年と出かけるといったことがあまりなく、今回もかなり久しぶりなのだ。

「・・・」

エリスが黙っているの、エリスを見てみる。すると、正面を見つめている。私も正面を凝視する。人影がこちらへ近づいてきた・・・その時

「主、敵だ」

「上官、敵であります」

お互いのデバイスが警告を発する。ただ私は初めて喋ったデバイスにびっくりしていたのもあるが。

待機状態のデバイスを首から取り外す。エリスのデバイスも待機状態はネットワークレスのようだ。



一歩一歩、こちらに近づいてくる。その一歩とともに緊張感が場を支配していく。そして、この均衡を破ったのは近づく影の主だ。

「アセルス殿！」

「誰だ!？」

私の名前を知っている敵……つまり妖魔だ。だが、今まで戦った3体とは少し違う気がする。

「金獅子姫様ですね。私、白薔薇と申します。姉姫さまの御噂は耳にしておりました。最も勇敢な寵姫であつたと」

急に木の陰から現れた白薔薇にエリスはびっくりしていた。ただ、今はそれどころではなく再び金獅子と呼ばれる人物に相對する。

「白薔薇姫……あなたは最も優しい姫であつたと評判ですよ。その優しきで私の劍が止められますかしら?それにイルドゥンはいないようですね」

どうやら妖魔でまちがいないらしい。それに白薔薇を倒そうというのなら私は手加減しない。イルドゥンにも何かあるのだろう。今は私が白薔薇を守る。

「戦うのは私だ！」

「ふっ、どちらでも。この劍に屈しなかつたのはオルロワージュ様ただ一人。参る!!!」

人に獅子を足した感じの外見である、金獅子とよばれる妖魔。白薔薇と同じく奴の寵

姫。彼女は剣を抜き構えた。仕掛けてこないのを見るとどうやらこちらの準備を待っているようだ。

「セットアップ」

バリアジャケットを展開すると、一振りの刀が腰に。まだ名前はないが、シグナム副隊長との模擬戦でかなり扱いになれた。展開が完了すると、腰を落として、デバイスに手をかける。当然殺傷設定だ。

「行きます」

足元に魔法陣が展開される。すると同時にアセルスが一気に加速、そのまま抜刀し斬りかかった。タイミング、抜刀のスピードも問題無く、初見ではまず回避はできないだろう。だが金獅子には届いてはいない。

きいんん

金属の甲高い音と共に鏑迫り合いになった。しかも片手で受け止めている。どうやら力では勝てそうにもないようだ。ぎりぎり押しきられていると、金獅子が何かに気付いた。

「アセルス殿のその刀は、月下美人ですね。城の宝物庫から無くなったと聞いていましたが、アセルス殿が持っていられるとは」

そうだったんだ……多分イルドダウンが持つてきてたんだろうな、つとそれどころじゃない。このまま鏢迫り合いなら押し切られる。今は距離を取らないと。

次に力が入った時上手く力の流れを読み、押しに来た力をいなして鏢迫り合いから逃れ、少し距離を取った。

「はあはあ……強い」

正直な感想を口に出していた。これまでの三体とは全く違った強さ。少しの攻防でこれほどの力を感じるのだから、力の差ははつきりいつて厳しい。だが私も諦めるわけにはいかないのだ。

「これなら、どう?」

ソニックムーブで加速し、スピードを活かした連続攻撃を仕掛ける。斬り、突き、払い。基本動作にフェイントを加え、背後から、側面から、また正面から斬りかかるも、全てが弾かれる。完全に彼女には太刀筋が見えておりただそこに剣を出して止めているだけだった。

「大口を叩いた割りには、苦戦しているようだなアセルス殿。では今度はこちらから行くぞ!」

消えたという言葉が妥当だろう。見えなかったのだ。次の瞬間、背後から剣が振り下ろされる。

「つく!!」

反応が遅れていれば、身体は真つ二つに切られていた。幸い身体が覚えていてくれたおかげで、デバイスを割り込ませることに成功していた。だが、体勢も悪く、力も負けていれば当然弾かれる。

「甘い!!!」

太刀筋が急にずれ、下から振り上げる形で剣を受け、そのままデバイスが弾き飛ばされる。空中を回転しながらそれは、エリスの前に突き刺さる。完全に今はアセルスはノーガードで体勢を崩されている。いつ斬られてもおかしくわない。だがその状況をよしとしない者が一人。

「レグナ、緊急事態だ。いくぞ!」

「ラジャー。Standby Ready」

「セットアップ」

エリスの足元に銀色の魔方陣が展開される。見た目は古代ベルカ式だがところどころ形式が違う。そして銀の光に包まれたエリスの姿が現れる。バリアジャケットは黒

を基調とした胸当てや具足、小手が付いているが軽量そうであり、目立つのはその背中に映える銀のマントだろう。まさしく皇帝といったところか。そうしてもうひとつ目を引くのは、巨大な大剣型（クロスクレイモア）デバイス「レグナ」。彼女の身長の6割を占める長さで、なりより重そうである。

展開が完了するとすぐに、アセルスと金獅子の間に割って入り、レグナを振り回し、数合斬りあう。見た目からしてレグナは相当重そうなのだが、いとも簡単に扱っているエリスに少しびびっくりしている。

「レグナ・シールド展開!!」

「グランドシールド」

レグナを中心とした半径1mの防御壁が完成する。金獅子も様子を見ているようで、性質が分からない以上はむやみに仕掛けてこないあたりは流石といったところか。ともかく時間ができたことは大きい。アセルスはすぐにデバイスを回収して構える。

「エリス、助かったよ。しかし、エリスのデバイス凄いな」

「お姉さま、今は前の敵に集中しましょう。殺るか殺られるか……状況はかなりこちらが不利なものには変わりません。私の戦技はお姉さまには及びませんので、なんとか二人して攻略しましょう」

たしかに今は金獅子を倒すことを考えなくちゃ。ただ闇雲に戦っても有効打を与え

ることは不可能だ。何か方法は……

が、時間は待つてはくれない。金獅子はこの魔法壁はただの時間稼ぎの為に使ったのだと見るや、全身のばねを使い、渾身の一振り、スマツシュを放つ。

空気を切り裂く轟音とともに、繰り出された剣は易々とシールドを破壊するとその勢いのまま、こちらへ衝撃を伝える。今はエリスが私の前に割り込んだ状態の為、レグナで、衝撃を抑えている。だがその隙を見逃すほど金獅子は甘くはなかつた。すでに振りかぶった状態で攻撃に移っていた。

至極簡単な撃ちおろし「巻き打ち」だが、速度が出れば十分な威力になる。エリスも咄嗟に防御したが、間に合わず吹き飛ばされてしまった。

「エリス!!!」

芝生を転がるも、なんとか足で踏ん張り勢いを殺すエリス。だが、口から吐き出された血がその威力を語っている。

エリスが言った通り、こちらの状況はかなり部が悪い。だが、今のところこれといった手が見当たらないのだ。だが、ここでもエリスが光を見出してくれた。

《お姉さま、レアスキルを使う時ではないでしょうか》

すっかり忘れていた。教導のメニューではまだこのレアスキルを使ってはいなかったのですっかり忘れていたのだ。でもこれなら、やれるかもしれない。ぶつつけ本番で上手くいくか分からないけど、やるしかない。

「身体の中の血をイメージして……はあああああ!!!」

アセルスの周囲の空気が震えた。彼女の緑の髪は紺碧に、紅の瞳は紫紺に染まった。そう、ここに自らの意思で妖魔化をおこなったアセルスが居た。彼女に説明したことはあながち間違いではない。ただ真実を告げるべきタイミングではないのだ。ただ今は、この力に慣れてほしいのだ。

「これがブースト……力が溢れてくる」

金獅子は特に驚きはしない。当然このことは知っていたから当然だが。

「レグナ、私達もいくわよ」

「リミットリリース」

金獅子が注意を引きつけられる。大気を震わせている、エリスの姿があつたからだ。だが、胸当てや具足などがパージされている以外には特に変化はない。だが見る限りに軽装だ。しかしそれを感じさせない力を感じる。

「ほう………これはこれは」

金獅子がなにか興味深そうにエリスを見ている。と、そこにエリスからの念話が入る。

《お姉さま、私もブーストが使えますが、燃費が悪いので長くは持ちません。一気に決めましょう》

《わかった、ただ確実に仕留めるから、エリス何とか時間を稼いで》

《分かりました。一分だけですよ、お姉さま》

念話を終えると私は瞑想に入る。完全な太刀筋を脳裏に描き出す。エリスが稼ぐ一分でこれを鮮明にするのだ。そしてエリスは、レグナを軽々を振り上げると金獅子に突撃する。

完全に力は互角に並んだ。撃ちあいで火花を散らしながらお互い後一步踏み込めないでいた。エリスが踏み込むそぶりを見せると火炎や電撃を使い、牽制している。何とか突破口を開きたいエリスは奥の手を使うことを決意。余力を残すことは許されないらしい。

「ソニック……ツヴァイ！」

さらに速度が上がる。アセルスやフェイト、エリオが使うソニックムーブと同じものなのだが、スピードが遥かに速い。ただエリスも相当辛そうだ。実際、魔力消費量はソ



ニツクムーブより多いのだから燃費は悪いのは当然だ。

しかしこの判断は正しかった。金獅子のわずかな隙を突き、押し込めることができていた。レグナの重さにブースト状態なら、動きを止められる。

「よくも、こんな重い剣を使えますね」

「ええ、あいにく私は重いとは思いませんので」

そんな軽い会話も挟みつつだが、確実に押し込めている。だが、エリスの体力、魔力もそろそろ限界に近い。額にはかなりの汗が噴き出している。徐々に金獅子が押し返し始めたその時、エリスはバックステップで距離を取った。それはちょうど一分たった証。次の瞬間、流れるように懐に飛び込んでくるアセルスの姿が。

「エリスの作った時間は無駄にはしない！」

懐に到達すると身体を捻り、流れる様に斬り払う「清流剣」。一連の動作に無駄がなく見惚れる刀捌きだった。金獅子姫もかろうじて剣で防御できたようだが、勢いは殺せず後方へと吹き飛んでしまった。剣を突き刺し、勢いを殺すところを見据える。が、さらに攻撃の手は緩むことはない。最期の力を使ってエリスが仕掛けていた。跳躍した勢いをレグナに乗せ、おもいつき振り下ろす。

連続攻撃には剣も耐えることができなかった。金獅子の剣は真つ二つに折れた。そして喉元にはアセルスのデバイスの剣先が触れている。

「私達の勝ちの様だな」

「アセルス様！待ってください」

白薔薇が止めに入ってきた。なんで？白薔薇を狙ってたんだよ？

「姫様、私達はどうしても生きなくてはならないのです。分かってくださいとは言いません。ですが、アセルス様は」

白薔薇の思いをくみ取ったのか……金獅子は戦う意思がないことを示した。

「私の負けのようだな。白薔薇姫、あなたの気持ちはよく分かりました。私もかつて、その気持ちを胸に抱いていた日々がありました」

「金獅子姫さま」

金獅子は振り返り、アセルスをみて呟く。

「アセルス殿、妹姫を頼みますよ」

「御待ち下さい。それでは、金獅子姫さまが罰を受けます」

「構いません。あの方に罰していただけるのなら喜んで罰を受けます。さらば！」

それに、あのエリスとかいう者は……いや、私が口をはさむことではなからう。

そこに金獅子の姿はなかった。ただ色々な思いがその場には残っていた。

「金獅子姫、気持ちのいい人だったね」

今までの妖魔とは違い、話を聞いているかぎりでは、私達の見方にいずれはなつてくれるかもしれない。それに、エリスと白薔薇も無事だった。

「ええ、アセルス様、ありがとうございます」

「え、何が？白薔薇、どういうこと？」

白薔薇の言ったことが理解できずにただ聞き返すだけのアセルス。白薔薇は答えてくれず、その場から立ち去った。あとで分かったのだが、特殊な結界を張っていたイルドゥンの様子を見に行っていたらしい。

「はあはあ……お姉さまも鈍感ですね」

心身ともに完全に疲労しきったエリスが苦笑していた。一体何を言いたかったんだろう？それより、早くエリスを休ませないと。

「エリス、お疲れさま。エリスが居ないと死んでたよ」

「私一人でも勝つことは不可能でした。お姉さまの力が大きかったです」

「私達、いいコンビになれそうだね！」

「はい、お姉さま!!」

そんなこんなで、私達の休日は幕を閉じた。

そして……

「なんや!!この請求金額は!!!」

そこには、エリスの服の代金、そして公園の修理費が、はやてに請求されていたのだつた。

針の城……

「金獅子か……」

「はい、オルロワージュ様」

「覚悟は、できているのであろう?」

「もちろんでございます」

針の城——そこでは、悲鳴と苦痛に満ちた叫び、そして嬌声が木霊した。

## 休暇

「ティア、起きてよ〜、朝だよ〜、時間だよ〜」

私ことスバル・ナカジマは、二段ベッドの下で眠る相棒、ティアナ・ランスターを起こすために絶賛格闘中。ここ最近で色々な事があつたけど、それ以降は今までのティアに戻つたみたい。それに、エリオやキャロとも深い話もできるようになった。

うん！またいつものように戻れてよかった。それはそれで、このなかなかけしからんボディーをお持ちの寝ぼすけをどうやって起こそうか……

「……」

閉いた。すぐにティアの上に跨るとそのまま自己主張の激しい双丘にセクハラを開始。そして、唇を重ねていく。

「いいよね？」そんな自己解決を済ませるやいなや、セクハラ速度は上がって行く。が、ここまででされて目が覚めないわけもなく、

「何……してんのよあんたは!!!」

はい、見事にベッドから投げ出されました。だって、あんなに無防備で寝てたらさ、そりゃ襲いたくもなるよ。視界をティアに向けると顔を赤らめ、シーツに包まっているティアが凄い勢いで睨んでいる。

「ほんとにあんたは、いつになったらセクハラを止めるのよ!! 大体、私が寝不足なのは、あんたのせいでしょうが!!!」

「ええーだつて、ティアが可愛く鳴くからつい止まらなくなっちゃってさ……」  
その言葉を聞くと、夜の事を思い出したのかさらに顔を赤らめる。普段はイニシアチブを持っているのはティアだが、どうやら、夜は違うらしい。

「と、とにかく。準備があるんだし、早く着替えていくわよ」

「ティア! 実はね、今日の訓練の開始時刻は2時間遅いんだよ」

そんなこと聞いておらず、どういうこと? といった感じでスバルに問いかける。

「私は聞いてないわよ、そんなこと!?!」

スバルがマツハキヤリバーに届いたメールを展開すると、はやてからFW宛てのメールが届いていた。そこには、

「色々あったから、みんなも疲れてるし、色々と補充したいやろ? 明日の朝はいつもよりゆっくりしていいから、夜はみんな頑張つてな!!」と、こんな感じのメールが届いてい

たのだ。

それを見たティアはベッドに突っ伏すしていた。「もうやだー」つてうめき声が聞こえていた気がするのは気のせいだ。時計を見ると5:00を過ぎたところか。再び、スバルを見ると、もう何といえますか・・・手をわきわきさせている。

「まだ時間あるしね、ティア……」

これは、まずい。普段の訓練のおかげか、危機的なことに關しての察知が鋭くなっている。そのためか、この後起きるであろうことも予測はついたのでが、

「……………つ、バインド!?!」

なんて魔法の無駄遣い。それにスバル……………バインドなんて使えたの？

「ティアを逃がさないためだよ」

努力の方向性を間違っている相棒に溜め息をつきながらも、すでに諦めた。こうなつたスバルは止められないからだ。はあー、今日の訓練、身体持つかな……………

こうして朝から嬌声が木霊する。それはもちろんこの部屋だけではないのだが。流石にバインドはまずかつたのか、後ではやてに怒られることになったが。

「はい、お疲れさま。今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れ様でした」



なんとか、身体はもったけど……この後どうしよう。朝から体力を削られ、こうして訓練に臨んだけど、午後のこととか全然考えてなかった。今の状況はかなりやばい。油断すると眠ってしまいそうだ。

「でね、実は何気に今日の模擬戦が第二段階クリアの見極めテストだったんだけど。この前、みんなのデバイスのリミッターを解除したでしょ？ほんとに大丈夫か今日で確かめてみたんだけど」

え？そうだったの？でも、またこんなときにしなくても。溜め息をつく私をおいて、なのはさんはフェイトさんとヴィータ副隊長に意見を求めている。

「合格♪」

「はやつ!!」

スバルとのハモリは素晴らしいのだがそれはさておき、

「こんだけみっちりやって、不合格なら逆に大変だつてこった」

エリオとキャロも、苦笑を浮かべている。確かにこれだけやっているのだから、できて当然か。あの日以来、私も少しずつ変わろうと決意した。徐々にだけど、変わらなきゃいけないって感じたから。

「私もいい線いってると思うから、これにて二段階終了!」

「やったーーーーー」

うん、すこしずつだけど、私も強くなってるんだ。なのはさんのことを信じて、一歩ずつ進もう。

「デバイスリミッターを正式に一段解除するから、後でシャリーのところへ行つてきてね」

「明日からは、セカンドモードを基本形にして訓練すつからな」

「明日から!?!」

「ああ、訓練再開は明日からだ」

つまり、つまりですよね……つまり今日の午後は、

「今日は私達も隊舎で待機する予定だし」

「みんな入隊日からずっと訓練漬けだったしね」

4人が顔を見合わせる。つまりこれは、あのフラグが立ったわけですね。

「そんなわけで」

なのはさんがもう一度全体に通告するようにこれからの事を伝える。

「みんな今日は一日お休みです。みんな街に出かけて遊んでくるといいよ」

「はーーーーい!!!」

こうしてFW達の休暇が始まった。

休暇が告げられた4人とは別にアセルスは食堂で、FW4人を除くメンバーと共に食事を取っている。ちなみにアセルスとエリスは仕事。「この前の休暇をここで返すのが普通やろ?」とはやてに押し切られたからだ。

「まったく」

ぶつくさ言いながらも、今日の機嫌は良かったりする。何故って? 「昨日は白薔薇と……」おっと、危うく妄想にどっぷり浸かるところだった。

それはさておき、TVからはレジアス中将の表明について報道されている。

「なんか堅苦しいな、この人」

「お姉さま、レジアス中将は古くからの武闘派ですから」

隊長陣は、食事を止めて放送を聞いている。はやてもこの部隊を指揮する立場として、彼とはなにかとあるようだ。そして画面右には伝説の3提督の姿もあった。

ミゼット・クローベル　ラルゴ・キール　レオーネ・ファイルス

管理局の今の形を作り上げてきた功労者。だがヴィータに言わせれば、ただの老人会

らしいが。

「さてと。エリス、先に仕事してるから」

「私も行きます」

「それでは先に失礼します」

アセルスとエリスとそういつて食堂を後にした。これから書類を片付けるとなると骨が折れそう。まっ、やるしかないんだけどね。

私達が、仕事を始めたころ、スバルはティアナと。エリオはキャロと一緒に街へ出かけていった。私には遊ぶことが楽しいという感覚はいまだにあやふやだけど、この前エリスと一緒に出かけた時は楽しかったと思う。そう考えると、隊長達って、魔法の犠牲者でもあるのかも。

「変なこと考えるのは止め止め！さあやろっか」

「はい、お姉さま」

ここから二人は仕事に没頭し、ものすごい勢いで書類を片付けていくのであった。

そのころ・・・

スターズとライトニングの見送りを終えたのはとフェイト。ちょうど、ヴィータとシグナムとすれ違う形になった。

「ヴィータちゃん」

「それにシグナム。外周りですか？」

「ああ、108部隊と聖王教会にな」

「ナカジマ三佐が合同捜査本部を作ってくれるんだってさ。そのへんの打ち合わせ」  
「ヴィータちゃんも？」

「私は向こうの魔導師の戦技指導。まったく、教官資格なんてとるもんじゃねえな」  
「にやははは」

ヴィータちゃん、相変わらず可愛いな。……フェイトちゃん、睨まないで。

「捜査周りなら私も行った方が」

「準備はこちらの仕事だ。お前は指揮官で、私はお前の副官なんだぞ」  
あ、フェイトちゃんこういうのまだ慣れてないんだ。困ってる困ってる。

「ありがとうございます。で、いいんでしょうか」  
「ふっ、好きにしろ」

一方で、シャーリーとリインはデバイスの調整で忙しそうだ。リミッターの正式な解除に、レイジングハートのエクシードモード、バルディツシユのザンバーの調整。さらにはリインの調整とこちらも多忙である。だがこれも、みんなを守る為の大事な仕事。二人は楽しみながらも調整とチェックを行っていた。

仕事もひと段落したところで、遅めの昼食を取っているところだ。エリスと白薔薇、それにはやてだ。

「はやて、この扱いひどくない？」

「何いっとるんや、公園の修理代どうしてくれるん？」

こっちは命がけだったというのに、この人は、が、思考を読んだか読まないか、エリスがものすごい形相でこちらを睨んでいる。はあ、ほんとはやて大好きなんだから。

「まあまあ、二人とも仲良くしてや。二人も大事な家族なんやから」

機動六課、それははやてにとっては家族と同じ。少しははやての気持ちも理解しなくちゃ。

「今日一日、何も無いといいんやけどな」

だが、そんな淡い期待はすぐに破られる。エリスのデバイス、レグナ宛てに通信が届く。

「エリス、聞こえる?」

「その声は、ギンガ陸曹」

通信の正体は、ギンガ・ナカジマ陸曹。何を隠そうスバル・ナカジマの姉である。そして、エリスが預けられていた部隊の上官でもある。

「お久しぶりです、ギンガ陸曹。今日はどういった御用件で」

「久しぶりの再会を喜んでる場合じゃなくなったのよ。八神部隊長につないでくれる?」

「隣にちょうどいるところだ。部隊長」

はやてにデバイスを向けると、ギンガも久しぶりなのか少し緊張している。

「お久しぶりです、八神部隊長。実は事故の現場検証に来ているのですが、奇妙なものを見つけてまして」

映像が少し動く。飲料水や缶詰ばかりで、特になにもおかしい物はないが、すぐにそれは目にとまった。

「ガジェット!!」

「やはり、御存じでしたか。それにあちらを」

映し出された映像には何やら液体が入ってあつたであろう、ポッドのようなものが映し出された。

「ギンガ陸曹、あなたも同意見でしょう。これは……生体ポッド」

「私も……同意見です」

そして期を同じくして、キャロから全体通信が。

「こちらライトニング04、緊急事態につき、現場状況を報告します。サードアベニューF-23の路地裏にてレリックと思しきケースを発見。ケースをもっていたらしい女の子が一人」

「女の子は意識不明です」

「指示をお願いします」

六課全体に現在の状況が映像付きで報告される。これを見ていたなのはからも指示が降りる。

「スバル、ティアナ、ごめんお休みはいったん中断」

それにつづけてフェイトからも指示が。スターズ、ライトニング共に指示を受けると返事を返し、行動を開始する。

そして、食堂にいた私達は……

「全員、待機体勢。席をはずしてゐる子達は席に戻つてな。安全確実に保護するよ！レ



リックもその女の子も」

「了解」

「ギンガ陸曹、ナカジマ三佐から許可は取つてあるからすぐに現場に急行してや。現場で、この二人、アセルス准陸尉とエリス二等陸士と合流後、FWの援護を」

「了解しました。では急行します」

ギンガからの通信を終えると。直ぐに命令を下す。

「ナイト00から01へ、ナイトの指揮権を委任します。ナイト01及び02は現場へ急行。ギンガ陸曹と合流後、スターズ、ライトニングと合流すること。以上」

「了解しました」

敬礼を返すとすぐに現場へと急行する。隊長達、それにシャマルにリインも一緒だ。ヴァイス陸曹もすでに準備を整えており、直ぐに離陸することができた。

席に戻ったはやては静かに呟く。

「何かの始まりかも……」

「レリック反応を追跡していたドローンI型6機。全て破壊されています」

「ほお、破壊したのは局の魔導師か、それとも当たりを引いたか」

「確定はできませんが、後者のようです」

素晴らしい。すぐに追跡をかけようではないか。

通信越しに話をしているのは、スカリエツティとウーノと呼ばれる人物。そこに赤毛の少女がやってきた。名前はノーヴェというらしい。自分の目で確かめてみたいとのことだが、ジェイルにウーノにそれぞれ止められてしまった。しぶしぶ今回は引き下がったが、納得はできていないようだ。

「ドローンの出撃は様子を見てからにしましょう。妹達の中から適任者を選んで出します」

あとは……

「やあ、優しいルーテシア。レリック絡みだ。ちよつと手伝ってくれるかい？」

ビル屋上に佇むルーテシアは、ただ頷くだけだった。

「ありがとう、今回は別のおもちゃも用意してあるから、巻き込まれないようにしておくれよ。優しいルーテシア」

## 地下

機動六課が緊急事態で慌ただしくしているなか、シグナムは聖王教会本部を訪ねていた。そこには機動六課後見人の三人の内の二人が。一人は制服姿が珍しい、クロノ・ハラウン提督。そしてカリム・グラシアこと騎士カリム。私はシスター・シャツハに案内され二人の待つ部屋へと案内される。

「失礼します」

「ああ、シグナム。お帰りなさい」

「合同捜査の会議の方はもう」

「ええ、滞りなく」

お二方はちょうど、六課の運営面の話が済んだところらしい。ここからは任務のことについての話とのもので、私も同席して話を聞くことになった。その話の途中だ。直接通信が騎士カリム宛てに届く。相手はそう、主はやてからだ。

「そう、レリックが」

「それを小さな女の子が持っていたというんも気になる。ガジェットや召喚士が出てきたら

市街地付近での戦闘になる。なるべく迅速に確実に片付けなあかん」

「近隣の部隊にはもう？」

「うん、市街地と海岸線の部隊には連絡したよ。奥の手も出さなあかんかもしれん」

「そうならないことを祈るがな」

カリムが少し考えて後、すぐにシグナムも部隊に帰るようにと伝える。帰りはシャツハが送るとのことなので、かなり早く帰ることができそうだ。急いで部隊に戻るべく、聖王教会を後にした。

エリオとキャロにスバルとティアナが合流してから数十分後、ヘリが到着し、すぐにシヤマルが診断を行った。バイタルも安定しており危険な反応もなく心配ないらしい。それにはみんな安堵の表情を浮かべていた。

「みんな休みの途中だったのにごめんね」

「いえ、大丈夫です」

フエイトの言葉にもエリオが正直に返す。少しの間だったが、休みを満喫できていたようだ。

ヘリで保護した子を運ぶ事を指示し、FW達には残って調査を任せた。

そして、眠っている女の子を運ぶべくなのはは腰を落とす。だがその目に映るのはただの小さな女の子であった。

FWが地下水路への調査へ向かうまさにその時、ロングアーチが地下水路に現れたガジェットを捉えた。

「地下水路に数機ずつのグループで総数……16、20……30!?それに海上方面に12機単位で5グループ」

この報告にはやての第一声は「多いな……」だ。確かにこれは多すぎる。地下水路に現れたガジェットもかなりの数だ。副官のグリフィスも判断を待っているようだ。

なんとか人員を多くかけるのが最善なのだが。そこに通信が入る。

「スターズ02からロングアーチへ。こちらスターズ02。海上で演習中だったんだけどナカジマ三佐が許可をくれた。今、現場に向かっている。それからもう一人って、もう話はあるらしいけど、ギンガ陸曹も向かっている」

「さつき、通信を貰ったばかりやからな。ほんなら、ギンガは指示通りアセルス達と合流後、スバル達と合流して。ウィータはラインと合流。協力して、海上の南西方向を制圧」

「南西方向、了解です!」

「なのは隊長とフェイト隊長は北西部から」

「了解」

「ヘリの方はヴァイス君とシヤマルに、任せてええか？」

「お任せあれ！」

「しつかり守ります」

一通りの指示が飛ぶと、FW達も動き出す。アセルスとエリスは別行動になるため、いつものスターズ、ライトニングの指揮はティアナが取る。

「ここからは切り替えて、やるわよ」

4人が頷くと、デバイスを前に掲げ、声を揃えて言い放つ。

「Standby」

「セーリーツトアーツプ」

4人それぞれが異なる方法でバリアジャケットを展開していく。そして展開が終わると、すぐに地下水路へと降り、女の子が持っていただろうもう一つのレリックの搜索を開始した。

ちなみに、アセルスと、エリスは先行し、ギンガとの合流を急いでいた。ただ二人にはどこことなく嫌な予感がしていて、早くこの件を片付けたかった。

なのはとフェイトはバリアジャケットを展開、北西部の制圧を開始。そしてヘリからはバリアジャケットを展開したりインも南西の制圧へと赴くのであった。

時を同じくして、紫髪の少女ルーテシアも行動を開始。奇しくも、六課と同じ下水道へと向かうのだった。

「いこう……ガリユー」

少しの眩きと共に、少女も自身を転送するのだった。

スバル達4人が下水道へ降りたところ、私とエリスは別口から下水道へと降下。当初の第一目的のギンガ・ナカジマ……スバルの姉と合流を急いでいた。すでにバリアジャケットは展開は完了。後はお互い連絡を取り合って合流するだけだったが、予期せぬことは往々にしてある。今回も例に漏れることなく起こった。

「あれは……イカ？」

エリスもそんな馬鹿などといったように前方を見つめている。下水道と言っても問題ないこんな場所にイカがいるのだ。だがただのイカなら可愛いが問題はそうではない。

デカイ……そしてこいつは魔物である。

「まさか、こつちの世界に魔物がいるなんて」

アセルスは忘れていたが、こつちの世界に迷い込んで初めて戦ったのは魔物である。が、そんなこと置いておき、戦わざるを得ない状況になっている。

「倒さないといけないらしいね。エリスやるよ！」

「準備はできています。行きます!!」

時間も惜しく、また魔物ということと遠慮は不要。二人は最初から全力で倒しにかかる。が、二人にとって現在の状況は非常に厳しい。それはここに限られた空間だということだ。

「くっ……しまった」

巨大なイカ「デビルテンタクラ」は自慢の食腕を使い巧みに攻撃を仕掛けてくる。ただ奴はすっぽりはまっているらしく、その場から動けないのが唯一の救いか。だが食腕の一振りには想像しがたい程の威力を誇っている。

「デバイスが、使えないなんてね。ほんと二人揃って長い物を使うもんじゃないね」

「上官、申し訳ございません」

「……」



私のデバイスは相変わらずの黙んまり。レグナも相変わらずといったところか。しかし、デバイス無しで魔物と戦うことは決して楽ではない。が、足を両手で防いでいるとき、指輪が光った。そう、主の窮地を打開すべく準備を終えていた。

「Jacket Purge and Standby」  
「セットアップ」

アセルスも意図を汲み紅いバリアジャケツトをパージ、即座にデバイスを起動しバリアジャケツトを展開。純白の小手に具足を装備した白き姫——フォートレスを起動したアセルスが舞い降りる。

エリスも驚いていたようだが、直ぐに状況を把握し、自分の役割を全うし始める。レグナは振りますことができないので、今は完全に防御に徹する。グランドシールドと刃身を使い攻撃を巧みに防いでいる。そしてオフエンスはというと、

「そんな大ぶり、当たらないよ！」

デビルテンタクララーの食腕、足を使った10本の連続した振り下ろしを全て避ける。ステツプにウィービング、または局所的なシールドを使い、流れるように受け流していく。拳と脚しかないなら間合いを詰めることは必須。そして、直撃との恐怖と向き合い徐々に距離は詰まって行く。そして後一步を踏み込んだ。

「きゃあああ」

エリスも一発入ったと確信したまさにその時、デビルテンタクラは口から大量のシミを噴射し、視界を奪った。わずかの思考の混乱がまずかった。身体が硬直、防御に移れない。次の瞬間、器用に横振りされた食腕が胴に直撃した。

そして、そのままエリスに向けて弾き飛ばされた。エリスも緩衝魔法を使い、受け止めたが、背後の壁を二枚貫通するハメに。

「っ痛う」

「お姉さま、大丈夫ですか!?!」

少しぼんやりする意識で、身体の状態を確認する。痛みはあるものの、幸い以上はないようだ。直撃の瞬間、オートプロテクションが発動していて身体への直撃は避けられた。

「あのイカ……絶対に潰す!!!」

最近の恨みを晴らすとばかりに私は激情していた。本当なら切り刻みたいのだが、この状況では殴り、蹴り倒すことに専念する。身体の感じが元に戻ったのを確認すると、すぐさま突撃をかけるが、あのイカは食腕を挙げて何かしている。不審に思った矢先、

エリスの叫び声が地下に木霊する。

「お姉さま、下がってください!!! 魔力反応、かなり大きいです!!!」

その言葉を聞くと突撃を止め、防御に。イカの足元を見ると、徐々に水が溢れだしている。

「イカのくせに魔法まで使うのか?」

吐き捨てる言葉をイカには届くわけもなく、魔力で作られた水が徐々に高くなっていく。

「こんなところで、流されることになりそうなんて、冗談じゃないね」

魔力なら魔力でなんとか防ぐことはできる。集中して気功をプロテクションに練り込む。だが、イカの目がこちらを馬鹿にしたように笑っていた。そこで冷静さを完全に吹き飛ばされた。

「あまり調子に乗っていると痛い目にあうぞ!!!」

ブーストを使うわけにもいかないのだが、感情が逆なでされており、いつ使ってもおかしくない状態だ。が、折しも先ほど発言は当たる事になる。

「ええ、私も同感です」

突如、イカの側壁が吹き飛んだ。そして現れた影が、イカに渾身の左ストレートをぶ

ちかます。

ボコツツツ

なんとも表現しがたい音と共に瓦礫を飛ばしながら、イカは反対の壁を突き破り吹き飛んだ。

イカを殴り飛ばした影の正体は・・・合流すべき人物。スバルとよく似たデバイスを左手に装着した紫髪の女性。

ギンガ・ナカジマ陸曹だった。スバル・ナカジマの姉で、SAの先生で階級も歳も2つ上とかなんとか。

「アセルス准陸尉ですね。ギンガ・ナカジマ陸曹、現在よりナイト01の指揮下に入ります。よろしくね、エリス」

急な展開だが、事前に確認はされてあったことであり、今はあの憎たらしいイカを潰すことが先決だ。

「私のことはアセルスでいいよ。それよりあつちは少し広いみたい。いくよ」

イカを追って穴を進む。後ろでは、エリスとギンガが少し話していたがすぐに緊張した面持ちになった。そして、イカが吹っ飛んできた場所と思われるところに着いたが肝心のイカの姿が見当たらない。少し開けているが天井が低すぎるため、デバイスは振りませず、状況は変わらない。周囲を見渡していると、少し奥に貯水用の窪みを見つけたが、イカはそこまで飛んでいった。そしてそれはイカにとつては最大の幸運。食腕を挙げ、準備は整っていた。

地下水道に響き渡る轟音。そして巨大な波が押し寄せてきた。イカが狙っていたのはこれだったのだ。

### メイルシユトローム

よくよく見てみるとガジェットやらが一緒に流されており故障している。だが下水も流れているここで、これを直撃するのは正直嫌なのだ。なので私も対抗することに。魔方陣を展開、詠唱に入る。同時にエリスとギンガは後ろに下がった。

「眼前に贖す全てを飲み込む天より流るるは光の波」

### 「フラッシュフラッド」

詠唱が終わると、私の前から光の波が押し寄せる。これまたガジェットが巻き込まれ故障、爆発していく。お互いの波がぶつかり合い、波は天井を勢いよく貫き消滅。地上まで広々とした穴が出来上がった。これにはイカも目を見開きびつくりしていたようだが、私はすでに間合いを詰めていた。

「ほら、おとなしくしててよ」

「サミング」簡単にいうと眼つぶしだ。デカイ目に目がけて拳を一発叩きこむ。潰れるのはいやだったので軽くだったがダメージはあったようだ。これでイカの動きが完全に止まった。この機を逃すことはなく、三人がイカをトライアングルに囲む。

「エリス、格闘いけるよね？」

「もちろんです、お姉さま」

レグナを収納すると、軽くステップを踏み準備をしていた。ギンガは言うまでもない。

「ギンガ、エリス、私に合わせて!!」

「了解!!!」

三人の身体が光る。そしてアセルスから仕掛ける。三角形の一边を描くように、鋭く

蹴り込む。続けてエリスも一辺を描くように蹴り込む。最期にギンガが一辺を蹴り描きトライアングルが完成する。三人は合わせたかのようにイカに接近、そして拳を突き上げる。

「昇龍……ぶちぬけ!!!」

### 秘技 三龍旋

それぞれの魔力光 深紅、銀、群青の龍が螺旋を描き、イカを飲み込んでいく。昇龍により地上まで飛ばされたイカは、そのまま光となった。

「すごい……アセルス、今のって？」

「さあ？詳しくは良くわかんないけど、とにかく凄かったってことで」

「二人とも、先を急ぎましょう。ガジエットの反応はこちらにはありません。先の戦いでほとんど落としました」

エリスの説明に首を縦に振り、直ぐにティアナ達に合流するために駆けだした。

「ところでその人造魔導師って？」

私は疑問に思ったことをギンガに尋ねた。先ほどの会話に再々でてきているこの言葉。今回の任務にも関わっていることはよくわかった。

「優秀な遺伝子を使って人工的に産まれた子達に投薬、または機械部品を埋め込むことで後天的に魔力を強化したり、能力を持たせる。それが人造魔導師」

「もつとも倫理的な問題や技術、コストといった問題が生じるからよつぽどな連中じゃない限り手は出ささないはずだ」

ギンガの説明に加え、エリスも説明をしてくれた。なるほど、そんな技術使つて何をしようつていうのか。だが、確証は持てないが、その技術を成すことが可能な人物が裏にいるつてことだ。

移動中ながら思考に耽つていた私の後ろで、ギンガが連絡を取つていた。どうやらティアナと連絡が付いたらしく、すぐに合流できそうだとのことだ。

そしてすぐに目的の場所に到達。がそこは行き止まり。さて、道を間違つたかと思つたが、ギンガは迷うことなく壁を破壊した。

「姉妹つて似るもんだね」

聞こえないように呟くとギンガを追つて壁の向こうに。そこで、身構えていた4人と合流できた。



「ギン姉！それにアセルスにエリスも」

ここにFWの合流がなった。そのころ空はなのはさんとフェイトさんが頑張つてくれているようだ。

「みんな、再会したばかりだけど、お敵さんみたいよ」

ティアナの声で全員が戦闘体勢に切り替わる。現れたのはガジェットI型III型の混成小隊、そして刺叉を持った魚人。魔物だ。

動いたのはティアナ。多重弾核射撃を使いながら、ガジェットのコースを読んで無駄なく落としていく。エリオは狭い中で高機動戦闘をやつてのけ次々に三枚におろしていく。キャロはフリードを使役し、次々と燃やし、破壊していく。背後のIII型はナカジマ姉妹が当たっていた。

「トライシールド」

III型の放ったエネルギー弾を最低限のシールドで弾くと、アームを拳で受け、均衡状態を作り出す。

「一発で決めるんでしょ？」

「もちろん！ディバイーン」

思いっきり踏み切り、ギンガの上を越えていく。III型はこれに気付きバリアを展開す

るが振り下ろされた右腕に簡単に突破され装甲は貫通。

「バスター!!」

止めとばかりに内部に打ち込まれ爆散した。

そして、のこった魚人は、残らず壁にめり込んでいた。

戦闘後、レリックがあるであろう場所に到着。すぐに搜索が始まったがそうそうに、キャロがケースを発見した。キャロがケースを抱えているのを見てこれからどうやって地上に戻るかを考えていた時だった。

何かが柱を蹴っているような音が聞こえた。そしてその音はキャロへと近づいている。正体はすぐに分かった。イルドウンから報告を受けていたあいつだ。キャロの前に割って入り、すぐさまプロテクションで受け止める。受け止めた相手は、その通りだった。

「ぐッ!? 重い……」

じりじりと押しこまれるが、この広さなら問題はないと判断した私は、首に下げているデバイスを起動。すぐにジャケットは深紅のものに変わり、腰にはデバイスが備わっていた。

「はあああ!!」

居合の要領で、斬りかかりつた。さらにエリオがこれに合わせてサイドからの攻撃となつたが、キャロが魔法により吹き飛ばされた。それに気付いたエリオがかばう形で受け止め、柱へとぶつかる。キャロは完全に不意を突かれたので意識を失っているが、エリオはなんとか大丈夫のようだ。だがキャロをかばうことには変わりなく、その場に固定となつてしまった。そして、私は奴と鏢迫り合いになり今度は押し込めている。ケースを持って逃げようとした時、押し込められている光景が目に入ったためか、はたまたスバルの「そのこの女の子、それ危ない物なんだよ。こつちに渡して!」といったことが効いたのか、歩みをとめた。その隙を狙つてオプティックハイドを使つていたティアナがダガーモードを起動しており、その刃は首筋にあてられていた。

「ごめんね、乱暴で」

ルーテシアは表情こそ変えないも内心、どうしようか考えているところだ。そこに念話が。

《ルーラー、1, 2, 3で目をつぶれ》

《1, 2, スターレンジホイル》

爆音と光がこの空間を支配した。視力に感覚を一時的に奪われ、ティアナは拘束して

いたルーテシアを逃がしてしまった。なんとか視力を取り戻し、ルーテシアに銃口を向けるが、何者かに蹴り飛ばされた。

アセルスは相変わらず斬りあっている。エリスはすぐにその影を追いかける。そして見つけた。

「レグナ、やつと出番だ。遠慮はいらん。斬り伏せろ！」

「上官、了解です」

豪快に振り下ろすと、そこで何か避けるのが確認できた。だが肩には出血があることから、避けきれなかったようだが。

「サンダー、ガリユー。無理しないで」

ルーテシアが呟いた先にはサンダーと呼ばれるオーガがいた。すぐに引くと、アセルスと斬りあっていたガリユーと呼ばれる生物も引いた。

「たくもー、本当に心配したんだからな。でも、この烈火の劍精アギト様が来たからにはもう大丈夫だ」

リインと同じくらいの大サイズの赤髪の女の子がいた。どうやらさつきのは彼女の仕

業らしい。相手のデータがない以上は迂闊に手を出せず、みんなは一か所に集まってる。

「おらおらおら、お前らまとめてかかってこいやー」

「遠慮なく」

アギトはえっ!?!といった顔をしている。それはそうだ。眼前ですでにレグナを振り下ろしたエリスが居たからだ。

「うおっ!?!危ねえじゃねえか!!!」

間一髪かわしたようだが、エリスは舌打ちをしていた。

「貴様がかかってこいといったのだろう?」

「それにしたって汚いだろう!!」

「汚いのはそつちも同じだろうが」

言いくるめられたアギトは空中で地団駄とうなんとも奇妙な光景を演出してくれている。彼女もまた短気らしい。

「絶対ゆるさねえからな!!」

戦いは続くのだった。

## 恐惶

「うーうーああああー！」

アギトと呼ばれる女の子が火炎球を4発作りだすと、こちらに攻撃を仕掛けてきた。ただこちらには届いておらず、手前で爆発し粉塵を巻き上げた。だがアギトの狙いは攻撃ではなく視界を奪うこと。ここにガリユーが合わせるように煙を裂き突っ込んだ。

「つく!!」

エリスの奇襲を不発に終わると、全員が退路のために用意している通路の前に集まっていた。だが7人と多く、少し窮屈なこの状態を狙われた感じとなった。

「私が!!はあああ!!」

ギンガがいち早く動き始めると、ガリユーの拳と相對する。ローラーで滑りながら素早く腰を回転させると、左手のブリッツキヤリバーを前に振り抜いた。右手と左手：ぶつかり合う拳は均衡を崩すことなく、その衝突によつて生まれたエネルギーはやがて暴発——お互いは後方へ吹き飛んだ。

お互いが体勢を立て直した矢先、一人飛び出しているギンガに攻撃が繰り出されてい

た。アギトがすでに火炎球の形成を完了していたため隙を窺っていたようだ。

「ギンガさん、動かないで」

何も動いていたのはアギトだけではない。ティアナとスバルがギンガのフォローの為に打って出ていた。壁から少し身を晒すと即座に2発。放たれた火炎に吸い込まれるように命中した。スバルはギンガの前に仁王立ち、シールドを展開し攻撃からギンガを防ぐとすぐに後退した。ティアナの射撃の援護もありアギトも攻撃を中断するしかなかった。

一連の攻防の後、アセルスとスバル、ティアナが状況の確認をしていた。

「ティアナ、人数的には有利だけど、あのルーラーって呼ばれてる女の子、かなりの魔力持ってるし、あのガリユールとかいう虫とサンダーっていうオーガ。かなりできると思う。ただ私は残って捕まえる選択もありだと思うけど」

「アセルスの言うことも一理あるけど、私達の任務はケースの保護よ。後退しながら敵を引きつける」

「今こっちに向かっているヴィータ副隊長とリイン曹長と合流できればあの子達を止められるかもしれない」

「私もスバルとティアナの意見には賛成だ。相手の力が未知数な以上、無理はできない」



キャラを支えているエリオも賛成の意味を込め首を縦に。新人達の意見がまとまったところにこの会話を聞いていた待ち人から連絡が届く。

《いい判断だ、スバルにティアナ。今そつちに向かつてる》

《ヴィータ副隊長!?!》

《リインも一緒ですよ》

どうやら、こちらに二人が近いところまで来てくれている。後は、どのくらい後退するかだが、

「ルールー、こつち何か近づいてきてるー!」

ルーテシア、アギトが頭上に視線を向けたその時を同じくして、鉄槌の騎士は得物を振り下ろしていた。我が道を遮る壁を容赦なく破壊するために。

「アイゼン!!」

[G i g a n t f o r m]

「行くぞリイン!!!おりゃあああああ!!!」

轟音と共に天井が砕け、大量の粉塵がまた巻き起こる。相対していた双方が突然の状況を飲み込めておらず、固まっているなか突撃してきた二人は行動を起こしている。先に仕掛けるのはリイン。フリーレンフェッセルンでアギトとルーテシアの拘束に掛かる。一瞬で二人のいた場所が凍りついた事にたじろぐガリユをさらにヴィータが狙

い撃つ。

「吹き飛ばせ!!!」

無防備な側面にグラブファイゼンが叩きこまれたかに見えたが、左手で寸でのところでガードしていた。ギリギリと押し込み耐えきるかと思えたが気合い一喝、振り切つて壁へと吹き飛ばした。

「おう、待たせたな」

「みんな無事ですか？」

目の前で起きていたことをただ見ていたスバルやティアナからは「隊長達つてやつばすごい」との声が——「ヴィータ副隊長!後ろ」

ヴィータの頭を目がけ大きく腕を振りかぶるサンダーの姿がそこにはあった。が、狙われている本人は特に慌ててはいない。

「一応、隊長は私だけじゃないんだぜ」

その言葉を言い終える前に鈍い音が二回聞こえたと思うと、壁にまた一つ穴が増えていた。

「アセルスも結構無茶苦茶よね：居合が防がれたら、鞘で殴り飛ばすなんて」

デバイスを納刀しているアセルスを見ながらティアナはボヤいていた。

「でも局員が公共施設壊していいのかな？」

「ここは廃棄区画だからいいのよ」

こんな戦いがあつてか、気を失つていたキャラが気が付いた。心配そうにフリードとエリオがキャラを見つめている。どうやら心配は無さそうだ。

「ちっ、逃がしたか」

「こつちも逃げられたみたい」

「こつちも逃げられた、ですね」

ヴィータ、アセルス、リインがそれぞれ確認をしているが二人と二体に逃げられたようだ。なら、これからすることはただ一つ。直ぐに追いかけることだ。追いかけるだけののだが、相手も簡単ではない。次なる一手をすでに発動させている。

「なんだ……この揺れは」

地下に突如揺れが襲い、大量の召喚魔法陣が展開される。

「とにかく脱出だ！スバル!!」

地上に水色のウイングロードが螺旋を描き形成される。

「スバル、ギンガ先に行け!!私は後で飛んでいく」

「エリスも一緒に上がって！私も直ぐに追いかけるから」

先頭をスバル、ギンガの二人が務め、殿はエリスが務め、すぐに地上へとFWは脱出した。地下に残っているのはアセルスとヴィータとリイン。各々が視線を合わせるとお互い頷き、魔方阵から現れたガジェットや魚人へと向かっていった。

それは一瞬だった……

ガジェットI型、III型、魚人の魔物。総数30は居たのだろうか……だがそれは無残にも斬り、潰され、凍結。全ては爆散、昇滅していた。

「っし。ここもやべえ、すぐに上がるぞアセルス!!」

「了解です、ヴィータ副隊長」

スバルが残してくれた、ウイングロードもそう長くは残らない。地下には用はないのだから先に地上に上がっているFWと合流するだけだ。

背筋を走る悪寒。

何だろうか。何か圧倒的な恐怖といったところか。何かがすぐそこまでやってきている……ただそれだけは分かっている。

私の中に芽生えているのは純粹な恐怖。初めてかもしれないこの感覚に私は飲まれかけている……そして……

そいつは現れた。

視界に移る影。さながら甲冑に全身を覆われた操り人形といったところか。ただ不気味な存在がそこには立っていた。地上に上がろうとしていたヴィータ、リインも気付いたようだ。

「待て！リイン、この反応は、かなりヤバイぞ……」

「はい、ヴィータちゃん。この魔力、とてつもなく大きいです」

こいつだ。私が恐怖を感じている相手は。身体が竦む……足が前に出ない……動けない……怖い……怖い……

甲冑越しには相手の目線など分かりはしない。見えない。だが分かった……眼が合ったことを。

「きやあああああああああああ」

恐慌状態に陥る私。そして誘発されるようにブーストを発動していた。

「ああああああー、あああああああああ!!!」  
声にならない言葉をあげながら、その場に倒れ込む。意識が錯乱し、とてもではないが、眼前の相手に太刀打ちなどは到底できる状態ではなくなつた。

奴は一步ずつ、ゆつくりと音を立て近づいている。アセルスの元に一步、また一步。金属の音が恐怖心を煽る。アセルスの心は完全に支配されている。

「ユニゾンイン」

激しい轟音が地下に響き渡つたと同時に土煙が舞いあがる。全体的に白を基調としたバリアジャケット、そして髪。ラインとユニゾンをしたヴィータが奴を吹き飛ばしていった。

「アセルス?!大丈夫か!」

が、いまだに声をあげながら震えている状況のまま復調の兆しは見えてはいない。ヴィータも現在の状況を軽んじてはいない。最悪といつても過言ではない。謎の相手は、魔力は推定でもSSSに近い。さらにアセルスを恐慌状態に陥れるなど、不明な点

が多すぎる。

「敵であることは間違いないのは確かだ。ただ私も怖いんだけど」

ぎい　　い　　い　　い　　い　　い　　い

グラーフアイゼンと小手がぶつかり火花を散らす。吹き飛んだ場所から一瞬で詰めてきたのだから、ヴィータも驚愕している。

「くっ……こんの野郎!!!」

ユニゾンを使っているのだが完全に押されてしまっている。相性の問題もあるがそれでも、押し勝てない。ヴィータも焦っている。

「舐めんな！おらああああ」

一瞬の脱力の後に身体を捻り、相手を前に出させるとすぐに蹴りを一発。またしても壁へと吹き飛ばした。



「アセルス！いい加減に目を覚ませ!!一人じゃ無理だ、アセルス!!!」

言葉を同じく、またしてもヴィータは罅迫り合いに縋れ込む。

「主、我の名前を」

「.....」

「主、我の名前を呼ぶがいい」

「.....」

「主、叫ぶのだ……我の……我の名を」

恐れに飲まれたアセルスに語りかける一振り。まだ名前も無いただの一振り。無口で、何も喋らない彼がこうして語りかける。それは今がその時であると知っているから。

「名前……名前って。何？」

そういや、今持つてるこの刀……すごく綺麗。刃は月のようで、人でいうならば美人で

……

名……

月の光の下で輝く美しき人の如く

そう、お前の名は……

「月下」

「主よ。破魔の刀としての力を」

淡い光がアセルスを包み込む。それはアセルスの持つデバイスから発せられている。そしてその光はどこか懐かしく暖かい光だった。

「ありがとう、月下。お前のおかげで恐怖に食われる前に戻ってこれたよ」

「私の持ちうる力で務めを果たしたまで。主」

「分かっている。いくよー!」

鞆に一度納めると、地面を踏み切り、奴のもとへ。ヴィータもアセルスが復活したことに気付いたようで、距離を置くことに。

「アセルス、無茶はするな! 奴は相当手ごわいぞ」

コクツと首を縦に振ると、居合一撃。甲冑の胴に直撃を与えることができたが、傷一つ付けることができなかった。予想外なことに少し驚いたが怯ませることは成功したようだ。

「ヴィータ副隊長、天井がもう崩れそうです。一気に行きましょう！」

「ああ！合わせろよ!!アセルス」

お互いの得物を握り直すと一呼吸のずれを持って飛びだした二人。先手はヴィータ……奴目がけて頭上へ大きく振りかぶったアイゼンをぶちかます。だがそれは易々と受け止められてしまった。が、それこそがヴィータの狙うところであった。

「わざわざ受け止めてくれるなんてな。アイゼン、ぶち抜け!!!」

かめごうら割り

よほどの衝撃なのか、甲冑が震えている。ヴィータも手ごたえありといったところか。追撃せず、すぐさま距離を取った。そしてその背後からアセルスが踏み込んできた。

## 逆風の太刀

風を斬るように駆け抜け、すれ違いざまに神速の一太刀。ヴィータとアセルスの即興での連携

「かめごうらの太刀」

ネーミングはあれだが、かなりのダメージはあつたようだ。

ただ、月下が当たる寸前に手でガードされてしまったことが悔やまれる。

ばきつ・・・ガシヤン・・・

甲冑の一部分が砕け、地面に落ちる。そこに現れたのは紛れもない人の手。そして白く……華奢な。

「……なっ!？」

消えた。その場から奴は完全に消えた。気配もない。忽然と、急に消えた。そこには壊れた甲冑の一部分と、長い髪の毛が一本だけ。

「人だったのか……あれは。それに、あの手にこの髪……」

「アセルス、今は脱出だ！早くいくぞ!!」

天井が限界を迎えた音だった。

## 分岐

「ああ、やつちやつたよ……」

ルーテシアに対して止めるように助言していたアギトだったが、ルーテシアの召喚した地雷王により、先ほどまで戦っていた地下が消滅した。

「ガリユー、サンダー……傷大丈夫……？」

ルーテシアの傍らにはガリユーとサンダーが立っている。だが腕や胸からは、先ほどの戦闘の影響か赤い血が流れ出している。だが、主人を心配させまいと、気丈に振舞っているのが言葉を発せずとも分かる。

コアへと戻って行く二人を眺め、再び潰れた道路へと目を向けたその時だ。

地雷王が鎖に縛りあげられているのが視界に入ってきた。さらに何かに気付いたように顔をあげると蒼と水色の魔力の道がこちらへと向かってきているのが見えた。走るのはナカジマ姉妹。蒼水の道を駆け抜けるのはエリス。

一気に距離が詰まってきているのが分かった二人はすぐさま迎撃に移るが、

「させないー」

シルエットを解除したティアナによる牽制射撃が行われ、二人は攻撃を中断をした……かに見えた。回避間に紫のクナイと火炎球がティアナ、そしてウイングロード上の三人に放たれていた。

ティアナはすぐに飛び退き回避、スバルとギンガはトライシールドを使ってそのまま進むことを止めはしない。その影には隠れるようにエリスとエリオが居た。エリオは完全に二人の視界にはまだ一度も映っておらず完全にノーマークの状況だ。

「エリオ」

「はい、エリスさん」

「ソニック」

金と銀……二筋の閃光が駆け抜けた。

日ごろの訓練を通して息は合ってきたのは全員感じていること。全員が自分の役割をきっちり果たしている。まさに今がそうだった。カートリッジの薬莖が二発分落下。

「そこっ!! デイバイーンバスター」



なのはの代名詞といっても過言ではない砲撃。スバルも彼女を尊敬して使っているが、なにも使えたのは彼女達だけではない。彼女から直接教えを乞うティアナもまたそうなのだ。

この勝負の分岐点を逃してはならないことはセンターのポジションを任されているからこそよく分かっている。彼女にはまさに今が分岐点であると判断した。切れる手札は切るべきだ。だからだれにも見せなかつたカードをここで切つたのだ。

「なつろう!!」

「・・・」

橙色の砲撃は二人を裂くように間を貫いた。直撃は元々狙つてはいない。二人を別れさせることこそが彼女の狙い。

「いい判断ですよ、ティアナ!」

アギトとの周りを囲むように水色のダガーが無数に現れる。そして喉元にはデバイスの切っ先が触れている。

ルーテシアは道路の淵に降り立った。がそこを狙っていたかのように金銀の閃光が壁を蹴って目前に迫ってきた。

ルーテシアの目に姿が映る……がこちらも喉元にデバイスが突き付けられていた。

「(ハハ)までです」

言い放つとアギトとルーテシアにバインドで拘束。拘束を担当したのは地下に残っていたリインだ。そしてアギトにデバイスを突き付けていたのはアセルス。そして、

「市街地での危険魔法使用及び公務執行妨害で逮捕する」

アギトとルーテシアの前に降り立ったのは、紛れもなくヴィータだった。

やっぱり……あれぐらいなら死なない……

潔く諦めているアギトの横で、素直な感想を心で述べていると、そこに少しお嬢様気味な口調の女性から通信が入ってきた。

——近くのビルの屋上——

「デイエチちゃん♪、ちゃんと見えてる?」

「良く見えてる」

蒼いボディースーツの少女が二人。一人は眼鏡をかけたクアットロと呼ばれ、一人は何かを布で巻いた物を持っているデイエチと呼ばれる少女達だ。

そのうちの一人、デイエチが遠くを見つめている。ここからでは特に何も見えてはいない……が彼女の眼にはしっかりと見えている。これから狙うべき獲物が。

「しかし、この身体って便利だよね、色々」と

「まあ人であつて人ではないですしい」

人であり人ではない……彼女達は機械の身体を後天的に持つ者達

「戦闘機人だからね……。それより撃つていいのか? ケースは残せると思うけど、マテリアルの方は壊れることになる」

「ドクターいわく、本物ならそれくらいでは死なないって。それよりも、敵さんの事、過小評価し過ぎたみたい。Ⅱ型と幻影が全部落とされちゃった。だからデイエチちゃん、今すぐ落としてあげて♪」

満面の笑顔を浮かべながら全く真逆のことを口にするクアットロにはついていけないなど、デイエチは首を竦めている。だがドクターからの任務である以上、彼女に断る義務もない。

巻いていた布を取り払うと、不釣り合いなカノン砲が姿を現す。使用者は当然デイエチ。

これって目立つから使いにくいんですけど、まあドクターにも色々考えがあるんだろうけど。ただ悪気はないけど。

「IS（インヒューレントスキル）へヴィバレル」

さて、チャージ完了まで30秒。まだ気付かれてもないし60%ぐらいで十分でしょう。クアットロはウーノ姉さまと通信中か何かあったようだけど、私は私のやる事を全部するまでだ。

「チャージ完了。へヴィバレル発射」

そして同じくして

《ルーお嬢様、手助けします。セインちゃん、手はず通りに》

《はいよ、クア姉》

セインと呼ばれる少女もまたどうやら彼女達の仲間のようなのだ。そしてセインはとうとうと、地面の中から通信しているという奇妙な光景である。これもまた彼女達の能力である。

《クアットロ……》

ルーテシアは黙って頷き、クアットロからの言葉をリアルタイムで紡いでいく。

「逮捕はいいけど……貴女はまた守れないもね……」

その言葉にヴィータは形相変え、ルーテシアへと詰め寄った。彼女の心に残る傷、後悔を的確に狙った言葉だ。そして、この言葉のもう一つは——宣言布告。

「気付いたようですけど、もう遅いですわ。ち・よ・く・げ・きん」

その言葉がタイムリミットだった。

爆音ともにへりは爆風に包まれた。

「ふっふふのふくん。木端微塵ってやつね」

「黙って。今、命中確認中」

異質な眼を使い命中を確認する。そして煙が晴れたそこには健在のへりと一人。

突然の砲撃に現場、ロングアーチともに慌てふためき管制などあったものではなかった。しかし全員の気持ちは同じ。へりは無事だということ。そして無事であることを信じて疑わない者がここに。

「大丈夫。へりは落ちてない。それだけは確実に言えることだよ」

「アセルス、その証拠はあるのか!？」

若干食い気味に詰め寄るヴィータをなだめるアセルス。彼女には確信があった。何故なら、

「新モードのテストで何度もやられましたからね」

ヘリの方を見上げそう答える……そして煙が晴れたそこにはスターズ分隊隊長。高町なのはの姿があった。

「ぎりぎりまで防衛成功。ヘリも無事だよ!!」

なのは専用の限定解除。レイジングハート・エクシードモード

これにより従来よりも魔力が単純に強化されることになり、全体的なスペックが向上することになる。

「なのはさんとレイジングハートエクセリオン、共に無事です。ヘリも問題ありません」  
なのはにより防衛が成功したことが確認されると管制室がドツと沸きたった。その報告を聞いていたはやても、ホツと胸を撫で下ろし、すぐに行動を開始した。

「あらくデイエチちゃんどういうこと?」

「全力じゃないとはいえ、あれを防ぐなんて」

ヘリを破壊しようとした二人は予想外の結果に少々戸惑っている。奇襲が失敗した以上は作戦を中断し、撤退することが鉄則だ。そのことは二人も重々理解はしている。

《セインちゃん、後はお願ひね。私達は撤退するから》

《はいよ》

すぐさまセインはルーテシアに連絡を取り、ISデーパーダイバーを用いて救出を開

始した。セインはルーテシア、ケース共に奪取することに成功していた。

しかし、この二人はそうはいかなかった。

「デイエチちゃん、撤退するわよ」

「ああ、分かっている」

クアットロは飛行可能だが、デイエチは飛行することができない。なので、ビルを飛び継いでいくことになる。

「見つけた……」

突如飛来する金色の閃光……なのはと共に空を抑えていたフェイトだ。

「市街地での危険魔法使用及び殺人未遂で逮捕します」

「遠慮しときます〜」

踵を返し、すぐさま逃亡を図る二人。当然これを黙って見逃すわけもなく追撃に出るフェイト。しかし敵も愚かではない。フェイトのスピードに勝てないとみるや、デイエチをクアットロが抱えこみ、彼女のISを発動させる。

「ISシルバーカーテン」

ISが発動と同時に、二人の姿が景色に同化していく。どうやら光学迷彩の類のよう



だ。

「はやて!!」

しかし二人の思惑とは違い、フエイトは離脱していく。ビルの影に降り立つとすぐにシルバーカーテンを解除し、後方を振り返る。

「離れた?」

「クアットロ、上!」

「ほんま、苦勞させてくれたなあ……おかげで何発のフレーズヴェルグ撃つたと思ってんねん。しゃあないから、これで憂さ晴らしさせてもらうで」

はやての詠唱が完了すると、黒紫の球体が頭上に浮かぶ。だがこの球体の大きさは尋常ではない。

「遠き地にて、闇に沈め」

シユベルトクロイツを振りかざし、最期の詠唱を完了させる。

「デアポリツク・エミツション」

見えないなら広域殲滅であぶりだすまで。フエイトもこの事を理解していたからこそ直ぐに退いたのだ。

「広域魔法く!!!」

広域魔法の拡大からデイエチを抱えなんとか範囲外に逃げることに成功し、何とか一息付こうとした矢先……二人を桜と金色が挟みこむ。同時にカートリッジが一発ロロドされる。

「エクセリオン・バスター」

「トライデントスマッシュヤー」

桜色と金色の砲撃が二人を強襲する。逃げることもできずにただ、直撃コースなのが……着弾間際に何かが二人を連れ去った。そして二色の砲撃は相殺され爆ぜた。

「避けられた!?!」

「なのは、何かが割って入ったのを見た? アルト、追って!」

どうやら何者かが砲撃に割って入り、二人を連れ去って行ったようだ。間もなく反応をロストしたことが前線に伝えられた。

《すまない、なのは、それにはやて。こっちは完全に持つて行かれた…FWは悪くなかった。あたしのミスだ》

《私もです、はやて、ごめん》

今回は敗北に近いものがある。敵の能力を知る事ができたことは大きいだが、隊長3人の限定解除を使ってまで敵を逃してしまった。そして捕えていたアギト、ルーテシアに逃げられ、レリックも奪われてしまった。

《今回は私達の負け……やな。ただ女の子とみんなが無事でなによりや》

F W達もその言葉を受け少しは気分が楽になったようだ。ひとまず、現場での報告書をまとめることと、病院に女の子を搬送するため六課に戻る事を選択した。六課に到着したころシャツハと、シグナムも到着した。だが二人も戦闘後の様子だった。

一方では

「全く、セインはケースにルー御譲共に助けたというのに、お前たちはなんてざまだ」

「ごめんなさいトーレお姉さま」

「感謝……」

トーレと呼ばれる長身の女性……彼女のISライドインパルスによる高速移動で二人を救出したのだ。

「それよりセインちゃん、ケースを確認してちょうだいな」

はいはいと答えるとケースを開封。中には11番のレリックが。

「これも違う……」

自分の欲しい番号とは違う為少しがっかりした様子のルーテシア。だが他人から見ればポーカーフェイスの為、普段とそんなに変わらないが。

「セインちゃん。このレリック、ドクターが実験に使うからって。持って行ってあげて」  
「はいはい」

少女の代わりに奪われたレリック。そして病院で眠る女の子。物語は混迷を極める  
ことに。

## 複製

人造魔導師素体の少女。そしてレリック。

彼女とレリックを巡る戦いの後、六課は少しの休息を迎えていた。たび重なる実戦に加えて、今回保護した少女「ヴィヴィオ」と少しでも触れ合いたいことから、多忙な業務から時間をつくりこうしてピクニックに来ているわけだ。とはいっても、六課を留守にするわけにもいかず、敷地内の森でゆっくりと行っているのだ。

「うーん。いい天気。ピクニック日和だね」

「なのはさん、ちよつとのんびりし過ぎじゃあ……痛つ!？」

なのはの膝の上にちよこんと座るのはヴィヴィオ。一輪のタンポポのように可愛くもどこか凛とした印象を受ける彼女の髪をなのはは、優しく撫でている。事情を知らない他人が見れば普通の母娘だが、正しくはまだそうではない。「仮」という言葉が正しいだろうか。彼女を幸せにできる家庭が見つかるまでの……今はまだそんな思いの最中に彼女はいるのだ。

そして、思慮が一步足りなかったスバルはというと、頼もしい相棒から脳天に一撃を

加えられていた。当然、ヴィヴィオには気付かれないように。

広げられたシートの上には、スターズ、ライトニング、ナイトのメンバーが揃っている。部隊長から隊長達が勢ぞろいしていて問題ないのか。そこはバックヤード陣の多大なる協力というなの犠牲で成り立っているのはお約束だ。そしてレイジングハートのメンテナンスでなのはが前線に出られないということもあるのだが。

「こんな風にゆつくりできるなんて思わなかったわ」

「主はやて、偶の休みも良いものでしょう。後でシャマルとザファイラには感謝しておかないといけないな」

どこかでクシャミが聞こえたのはさておき、目の前に広げられたオニギリやサンドウィッチ、フルーツタルトなどが用意されている。これはなのはやアイナさん、はやて、フェイトが協力して準備したものだ。この4人が調理したとなれば味も保証済みである。

眼の前の料理に瞳を輝かせ、我慢できなくなつたヴィヴィオが取り皿に分けられたサンドウィッチを一つ、口に運ぶ。トマト、ハム、レタス……なじみ深い素材で作られたシンプルながらも味の歴史が感じられる一品を少女は初めて口に運ぶ。

トマトの酸味、ハムの微妙な塩加減、レタスの食感、それら具材をふんわり包むパン。口の中に広がる様々な味が少女に様々な喜び、感想をもたらす。頬を深紅に染め、口いっぱい頬張るその表情はどこか至福に満ちているようだった。

ほんとにこの子が人造魔導師素体なんて信じられない。こうして見るとホントに可愛い女の子なの……あつ!?喉詰まってる!!

膝の上のヴィヴィオがサンドウィッチを喉に詰まらせていることに気付くとフェイトちゃんがコップに入ったオレンジジュースをヴィヴィオに渡してくれていた。流石フェイトちゃん、私の自慢だよ……//

コクコクと喉を鳴らしながらオレンジジュースを飲み干し一息付くと振りかえり満面の笑みを浮かべて感想を述べてくれた。

「なのはママ、すつごくおいしいよ」

「うん。ありがと、ヴィヴィオ」

周囲のみんなも微笑ましいこの光景を見つめている。はやてちゃんも、うんうんと頷いているようでとても嬉しそう。エリスは、はやてちゃんの方を見つめて何か企んでいるようだけど、感づかれたみたいで項垂れてる。うん!見なかったことにしよう。

その横ではスバルとエリオが大食い勝負してたけど。ホントに食べざかりだね、二人とも。

食事も一段落して、各々が思い思いの時を過ごしている。アセルスとエリスがヴィオと遊びたいと言ってくれたのだが、何故だかヴィオが怖がってしまい、代わりにフェイトちゃんがヴィオとボール遊びをしている。クールなタイプが駄目なのかと思ったけど、シグナムさんは大丈夫だったし……なにが原因なんだろう。

リズムよく跳ねるボールをキャッチしようとして手を伸ばしたその時、運悪くバウンドが変わってしまい、吸い込まれるように顔へと跳ねる。絵に描いたような展開に思わずフェイトちゃんも駆けだしていた。

ゴムボールといえど顔に当たれば痛いものである。幼ければ尚更だ。瞳には涙が溜まっているのが分かりフェイトちゃんが側に寄ると堰を切ったように涙があふれ出した。

「ヴィオ、大丈夫だよ。痛くない、痛くない」



「ふええええええ」

少し赤くなつたところをフェイトちゃんが優しく撫でてくれている御蔭か、ヴィヴィオもすぐに泣き止んだようだ。私が側に来たのが分かると直ぐに飛びついてきたあたり大丈夫みたい。

「ヴィヴィオ、えらいよ。すぐに泣き止んだもんね。よしよし」

ヴィヴィオの目線まで顔を下ろし頬笑み頭を撫でてあげる。私に抱きつきギョツと力を込めていたヴィヴィオは声を上げ泣き出してしまった。

「どうして泣くのヴィヴィオ？」

困った私にフェイトちゃんは優しく声をかけてくれる。

「安心しちゃったからまた泣いちゃったんだよ」

エリオやキャロの小さいころを知っているフェイトちゃんと言うんだからきつとそうなんだよね。まだ泣き続けるヴィヴィオをそつと抱きあげて耳元でそつと呟く。腕の中の少女を心配させないがために。

ママはここに居るからね。

うん……

こどもは感情の起伏が激しい。喜怒哀楽を全身で表現するのだ。そして一日に全力を費やし、静かに眠る。先ほどまで泣いていた少女は何処へやら。今はなのはの腕の中で静かに眠っている。

「なのは、ヴィヴィオの事、まだ考えてるの？」

「まだ、自分じゃ分からないよ」

フェイトちゃんの言いたいことは分かっている。でも私にはまだ……わからない。

一方

和やかなこの場から森の奥で周囲の警戒をしていた人物がいる。彼の世界で見覚えのある生物から報告を受けるとすぐに血相を変え移動を始めた。

普段は冷静沈着だが、此度はそうではない。まだ信用していないといった表情を浮かべずぐさま全体に合流すべく森を駆けていた。

「いやああああ、怖いよ、ママ!!!」

眠っていたはずのヴィヴィオの悲鳴が和やかな空気を切り裂く。突然の出来事なのはやフェイトも慌てている。

「痛っ……」

次の瞬間、右足と左足の痛みが走った。

この感覚はいつ以来だろうか……自分では見ずとも理解できていた。負傷したこと。そして血が流れていること。

両足に矢が2本ずつ刺さっている。

「ママ!？」

事態に気付いたヴィヴィオはパニックを起こし泣き叫び、私に抱きついてくる。

「大丈夫だよ、ヴィヴィオ」

心配させまいと、優しく抱きしめヴィヴィオをかばう体勢を取っている。フェイトちゃんも警戒体制に入っており、次の矢を全て撃墜してくれていた。

「こんな時に襲撃だなんて、一体誰が……」

矢の軌道から襲撃者の位置を把握しようとするが、前方には森が広がっており目安も儘ならない状態だ。

「なのは、足は大丈夫?」

反射的にかばいながら防御を試みたものの、デバイスの補助なしでは咄嗟に魔法を發動させることもできなければ、強度もまた然りだ。

「なんとか。レイジングハートがないから、防御も全然通用しないみたい」

苦痛の表情を浮かべ矢を引き抜く。抜き終わると血が鮮やかに吹きしぶる。止血程

度ならば補助無しでも行えるため、なんとか出血は止めることができたのだが……

泣きつ面に蜂。悪いことは続けて起こるもの。見覚えのある異質な空間がなのを中心には展開され始めた。

「これは……妖魔!」

本格的にマズイ状況だ。このままだとフェイトちゃん一人で戦うことになる。はやてちゃんや、みんなも気付いてるみたいだけど距離があり過ぎる。

二人して覚悟を決めかけた矢先だ。

「高町、テストタロツサ!!」

空間が完成する一歩手前、風を切り、異質な空間に割って入るのは烈火の将「シグナム」だ。

——「これは余計な邪魔者が入ってしまった」——

重苦しい空間が完成を迎えると現れたのは白髪の男。そして例にもれずこの男もまた妖魔だ。

「セアト!!!」

叫びと共に空間に飛び込んできたのは緑髪に宵闇の覇者「イルドウン」だ。

妖艶に輝く剣を振り抜くもセアトは後退し回避すると、姿を眩ます。虚無の空間に声は木霊する。

———「ラストバンの力を吸収した後だ。お前など敵ではない」———  
「やはり、お前だったか！セアト!!!」

次に姿を現した時、それは今まで見聞きした妖魔そのものだった。だが今回は今までとのタイプが異なる。右手には弓が装着されている。どうやら私もそれで射られたみたい。

「許せない……こんな小さな子を狙うなんて」

——「動けない女が何を喚くか。目的はあくまでもイルドウンとその幼子だけだ」——

「尚更……許せないよ!!」

「なのは、私達が何とかするから。ヴィヴィオのこと、お願いね」  
「悔しいけど……お願い」

分かってはいるものの、状況はかなりシビアだ。防衛戦となれば尚更当然だ。なのは魔法が使えないうえに動けない。さらにヴィヴィオを守らなければいけない。護衛対象が増えることはそれだけ不利になる事は間違いない。

——「必要ないものだが今回は使つてやるとしよう」——

空間の外には、5人を除いたFWが取り残されており、この空間を直接突破できるのはアセルス、白薔薇姫だけに限定される。はやてとしてはすぐにアセルスを送り込みたかった。だが状況が許してはくれない。

「いっつらは?」

なのは達が飲まれた空間の前に3つの影が出現した。見覚えのあるものは身構え、額に汗を掻いている。

倒したはずの妖魔達。炎の従騎士 水の従騎士 森の従騎士

エリオ、キャロからすれば因縁の相手も存在している。ましてや、スバル、ティアナ、ヴィータ、はやては妖魔との戦闘経験は無い。

「こいつら倒したはずやなかったんか!？」

「ええ、倒したはずなんですが」

はやてとエリオのやりとりを遮るように、空間を声が支配する。



——「私の土産だ。妖魔のクローンを存分に味わってくれたまえ」——

妖魔がクローンを。機械などを嫌う妖魔がそのようなこと独自に製作することなど到底不可能だ。

アセルスが思考に耽り、そして一つの答えにたどり着く。だがそれはここではまだ言うべきではない。そう判断するとすぐに行動に移る。

「八神部隊長、グループによる各個撃破が最適だと判断します」

アセルスからの提案を受け直ぐに答えを導くは、総指揮官である八神はやて。彼女も同意見であることは間違いなかった。

「私とエリスがああ森の従騎士を。スターズ、ライトニング、ヴィータは水の従騎士を。アセルス、白薔薇姫は炎の従騎士を。いけるな!？」

「了解」

グループに分かれるとすぐに対象に走り出す。従騎士は空間を作り出し、それぞれが空間に飲まれていく。

「ヒューマンとは本当に脆いものだ。では大人しく死んでいただく——

セアトの完全に見下した言葉に内心怒りを燃やしているフェイト。だが、それを戯言と嘲笑う者がいる。

「セアト。貴様はヒューマンというものを甘く見ているようだな。それでは貴様は我に勝てん。ましては我らにもだ」

どういふことだと言わんばかりに顔を顰めるセアト。そして堂々と宣言する。

「そんなものに屈しないといふことだ。そうだろう……はやて!!!」

聞こえなくとも気持ちは通ずる。思いが同じだからこそ分かるのだ。

「私達はこんなことに屈しはしない!!!」

己が相棒を掲げ全てが光に包まれた……

「セットアップ」

## 母子

六課始まって以来の総力戦といっても過言ではないだろう。なのはの状態を除けばF W陣が戦闘に参加していることになる。だが状況は、決して好ましいモノではない。戦力は4つに分散され、ある者は個人で、あるものは仲間と。ここでの敗北は許されない。

——「ほう、中々どうしてやる。だが私は奴等とはワケが違うぞ」——  
バリアジャケットが展開された彼女達を見たセアトの気配が変わった。言葉はそれを示している。油断ならぬ相手だということを示す。

「セアト、1つ聞いておく。ラストバンを殺つたのはお前で間違いないのだな」

——「ふん、私の力の前に屈してくれましたよ。そして今は私の力になつてもらいましたが」——

それ以上の言葉は必要なかった。その言葉を皮切りにセアトとの戦闘が開始された。

戦力的には、なのはとヴィヴィオを守らなければならぬことを含めても、こちら側が有利だ。フェイト、シグナム、イルドウン。対して相手はセアトただ一人。だが、見かけと事実は大きく異なることは世の常でもある。状況は現在五分五分といったところか。イルドウンがなのはとヴィヴィオのフォローに入っているものの、高速戦闘を得意とするライトニングの隊長陣でも中々距離を詰めることに至っていない。

「相手もかなり速い。テストアロツサ、視界も悪い。見失うなよ」

「シグナムこそ。なのは達との距離を離し過ぎないようにしないと」

状況は一進一退の攻防が繰り返り広げられている。セアトの武器が右手の弓「ボウガン」以外にも剣を使用するため、接近戦に持ち込むも、いなされ、距離を空けられ、矢で牽制されている状況だ。度々なのは達を狙っているようだがイルドウンが対応してくれているため、大丈夫のようだ……が相手も馬鹿ではない。従騎士達を束ねる長として君臨するセアトは気付いた。

イルドウンが攻めてこないことに。

——もしや、奴は——

動きが変わった。先ほどまではフェイト、シグナムを相手にしていたが、完全にこちらに狙いを変えてきた。

「セアトめ、どうやら気付いたようだな。だが、我とて遅れを取るつもりはない」  
右手に妖艶に輝く妖魔の剣を静かに握り直し、セアトへと目を向ける。

動きの変化にフェイト、シグナムも対応し、すぐに追いかける。六課でも1、2のスピードがあれば追いつくことは容易い。しかしセアトの目的は違っていた。

慣性を見殺したかのような急停止と共にフェイトに斬りかかった。これにはフェイトも驚いたのか、反応が遅れ、相手に前のめりの形で鏝迫り合いに移行する。ただフェイトは速度が乗った状態なので状況的には有利なのだが、

「テストタロツサ!! 眼を見るな!!!」

事の成り行きを知っている者からの言葉は無情にも空を切る。

「身体が…動かない…」

妖術　ファツシネイション

シグナムは経験したことがある為、すぐに分かったのだが、フェイトにも伝わっていったのだが、情報と経験で埋められない差が、この土壇場で結果として現れてしまった。

—— 「貴様には用はない」 ——

ガードもできず、脱力しきった状態から腹部に強烈な蹴りの痛みがフェイトを襲う。オートプロテクションでの軽減があり、意識を刈り取られるには至らなかつたが、吐血と意識混濁の為動けそうにない。

—— 「防御を疎かにすると、こうなる」 ——

「テストタロツサ!? 貴様!!!」

爆発的な加速と共にレヴァンティンを振りかぶる。その剣閃は軽く見積もっても腕一本は持つていけるタイミングだったのだが……セアトの翼がそれをよしとはしなかった。

——「この翼は飾りではない」——

火花を散らし、こちらも不可思議な鏢迫り合いに持ち込まれる。同じ轍は踏まないのは当然のことで、妖術には警戒している。だがこれもセアトの狙いだ。身体を捻り鏢迫り合いを切ると、直ぐに急加速を始めシグナムへと突撃した。この間の行動中にシグナムが取れた行動はよろけずに倒れることを堪えることしかできなかった。

全ては一瞬。高速戦ならば一秒にも満たない隙が致命的だ。

グラインダースバイク

高速の体当たりは容赦なくシグナムに直撃し、その身体を無残に吹き飛ばした。その衝撃にはシグナムを持つてしても耐えることができず意識を手放した。



「容易い。仲間など思っているからこうなるのだ」

フェイト、シグナムを一瞬のうちに戦闘不能まで追い込み、なのは、ヴィヴィオ、そしてイルドゥンの前に降り立つ。圧倒的な力……セアトを知るイルドゥンにとってこの状況は危機的状況だった。

なのははヴィヴィオを庇い、動けない。實質動けるのはイルドゥンのみ。だがイルドゥンからは諦めは感じられない。この状況を抜け出せる……そういつているようにも見える。

この表情を面白くないと思うものは当然いる。相対しているセアトだ。以前からイルドゥンの事をよく思っておらず今回の機会はセアトにとつては千載一遇なのだ。考えることは一つ。イルドゥンを肉体的、精神的に追い込み倒すことである。ならばセアトが起こす行動はこうだ。

「貴様に絶望を見せてやる」

その言葉の意味することはすぐに分かった。無機的な空間に映し出された映像。そ

れは外の映像だった。そしてそこに移っていたのは、

「・・・!?み、みんな……」

なのはから漏れる言葉からはまさしく絶望が漏れ出している。それこそ漏らすなどいうほうが難しいのではないだろうか。

肉塊になった新人達……首が胴体と分かれてしまった隊長達。そして六課が無残にも燃えている……

「いやああああああ」

なのはの叫びが空間に空しく響き渡った……

心が折れ掛かっている。それはこの状況からすれば当然なのかもしれない。ヴィ  
ヴィオはただ、なのはにしがみ付き泣いているだけだ。

「情けないぞ高町なのは!!!しっかりしろ」

想い……それだけが今、イルドゥンを突き動かしている。例え一人になろうとも、戦

いぬくことは決めていた。なにより、

「はやてや、アセルス達がそう簡単に負けるとでも思っているのか？ 貴様が育ててきた新人達を何故信じない。そのことは、高町なのは！ お前が一番分かっているはずだろう」

折れかけた心を見事に支え、彼女の心に火を燈す。闘うことができなくとも、仲間を信じる心を忘れてはいけない。改めて自分に言い聞かせるように。

「ありがとう……イルドウン。ヴィヴィオは絶対に守るから！」

「ああ、任せた！」

一歩を踏み出しセアトへと距離を詰めにかかる。精神面を砕くどころか逆に燃え上がった二人を、やはり面白くないと見つめていたセアトは苦虫を潰したような表情で、怒りを表していた。

——「イルドウンを片付けたら次はその女！ 貴様だ」——

「そう易々とできると思うなよ」

両者の剣が交わり火花を激しく散らし互いの思いが交差する。一見すれば互角に見

えるが、完全に力負けしている。

——「思った通り、力を失っているようですね。そんなアナタなど取るにたりません」——

バレていたか……が、ここで易々と負けるわけにもいかないのでな。はやてとの約束の為にもな。

「力だけで事が運ぶと思うなよ」

——「何をほざくかと思いきや……ん？」——

セアトの動きが止まる。薄暗い空間に張り巡らされた銀色に光る糸……刃の糸を先の攻防の前から準備していたこの仕掛けが、戦力の差を埋める切り札でもあった。

「貴様とて楽には動けまい。動けば身体を糸が切り裂いていく」

——「ブレードネットとは考えましたね」——

何十本の糸が無数に絡みつくことでその存在を感じることが出来るほどの細さ、そし

てその切れ味を持って動きを封じることが成った。一端距離を置くと、間髪入れずにセアトへと迫る。糸に触れることなく、その速度は爆発的に増加し、その距離はもうすでに存在しない距離までに。

——「動くことはできなくとも、矢を放つことはできる」——

セアトの右手から矢が放たれた……それは正確にイルドウンを捉えるコースだが、造作もなく対応され、矢は地面へと叩き落とされた……のだが。

「セアト……一体何を考えている」

矢が地面に落ちる刹那、直観的に身体が動いていた。

今までの経験、そして危機的状况に晒され研ぎ澄まされた刃の如き集中力が無意識に身体を動かしたのだ。

「つく……」

握られていた剣は力なく手からすり抜け、乾いた音を立てた。次に襲ったのは全身の激しい痛みと脱力感、そして痺れ。咄嗟に動いてしまった身体……それは同一射線軸に居たなのは庇うため。右肩に深々と突き刺さった矢が全ての元凶だった。

「がはっ」

激しい嘔吐感と脱力感により、その場に膝を付き、蹲る……だが彼の眼はまだ死んではいなかった。だが、意思に身体が付いてこない。

——「二本の矢に気付くとは流石と行ったところか。だが二本目こそが本命。貴様が庇わなければ今頃あの女は楽に逝けただろうに」——

妖魔であったことを喜ぶべきか。この程度の毒ならば死ぬことはない。だが人間ならばどうか……奴の言うとおり耐えることは不可能だ。

「ハハ」で……やらせるわけには……」

動け・・・動かなければ・・・守れは・・・しない・・・

力を失っている代償は大きすぎた。この大事な局面において結局は力になれていない。事情があるとはいえ、彼にここまで苦汗を舐めさせることはそうそうないだろう。

そしてイルドゥン蹴りを放ったセアトはついになのはとヴィヴィオの前に。

ブレードネットも無残に引き千切られ、傷一つ付いていない。

——「こんな子供騙しな糸で私を抑えられるとも思っていたのか？イルドゥンには笑いしかでませんね。さて、後は女。お前だけだ。」——

泣きわめくヴィヴィオを優しく抱きしめると、なのはは口にする。「ヴィヴィオを守る」と。

セアトの表情が歪む。そして激痛がなのはの身体に走った。見なくても分かる。矢が刺さっていることぐらい。分かっているからこそ、声をあげて痛がることなどできない

い。ヴィヴィオがさらに怖がらせてしまうから。

2本、3本、4本……次々と矢はなのはの身体に突き刺さる。だが彼女は決して痛がらない。不屈の心を持つ彼女ならば、一度心に決めたことを易々と挫くことはない。なによりなのはが実感していること……「私は、ヴィヴィオの、ママだから」

「マ、ママ……」

「はい、ヴィヴィオ……」

ヴィヴィオの視線がなのはの表情を捉える。そこには普段となんら変わらない、なのはの優しい笑みがあった。恐怖と不安に押しつぶされそうなヴィヴィオをこれ以上心配させまいと振舞いヴィヴィオに応える。すでに背中や手には何本の矢が刺さり、血は休むことを知らず流れ落ちていく。

身体は限界を超えている。それでも仲間が来ることを信じて、そしてヴィヴィオの為に。なのはは痛みを見せなかったのだ。しかし限界をいつまでも超えていることは不可能なことは明白の事実。そして、



——「さようなら」——

一筋の軌跡は、赤い血潮を伴って描かれた……

「……イオ……だ い じょう ぶ だ から ね」

温かく優しい手が、ヴィヴィオから離れていく。それは幼い彼女にも十分理解できる  
こと

幼い子を守る為に、庇い続けたなのは……意識は……断たれた。

「アマー……!?」

うつ伏せに倒れ込むのは揺すり、泣きじやくりながらなのはの事を必死に呼び続ける……その間にも、命の欠片は流れ落ち、終焉に一步ずつ近づいていく。

——「ここまで容易いとは正直がっかりですね。まあいい。さあ後はこの娘を連

れ帰るだけだが」――

「ママー――起きて。ママー――!!」

なのは必死に揺らし声をかけるもなのはからは何も返つてはこない。それでも必死に呼びかけることしか彼女にはできなかつた。

――「無駄だ小娘。すでにその女は死んだ。さあこつちに来い」――

「やだ――、なのはママー――」

涙で目元は腫れ、声は枯れ始めてきているもなのはを呼ぶ声は決して止むことはない。それにしびれを切らしたセアトは暴拳にでる。

――「いつまでも、こんな死体に喚くな小娘が」――

新たに矢を倒れているのはへ放つ。肉を突き刺す音がひどく耳に響く。

「あ、あ、あ、」

嗚咽と共に身体の奥から鼓動がはつきりと聞こえる。それは確かに知っている、懐かしい響きでもあった。そしてその鼓動が身体を撃った。

「ママー————!!!」

何かが弾けた。その幼子の身体の中で確かに弾けた。

そして——彼女が目覚めた。

「永き時の中で、私は多くと戦ってきた………だが、これほどにまでない暴挙、そしてこの仕打ち。許しては置けぬ」

言葉を発するのは紛れもなくヴィヴィオだ。だがヴィヴィオであつてヴィヴィオではない。

そんな彼女が今まさに、暴拳を尽くしたセアトに対峙している。これには少々セアトも焦つてはいるようだが別段表情には出してはいない。ただそれだけ。すでに動けないのだ。

彼女からあふれ出る威圧感……それだけでセアトは縛られている。

——「何故動けん!?! くっそ、動け、動かんか!」——

「無駄だ。私は永く戦つてきたのだぞ。これくらいのことなど造作もない。」

無機質に淡々と答え、ある程度の距離を取った。そしてこれがセアトの見る最期の景

色になった。

「b p b l o, r y n u v y j p j u, s p b l p u b i e i l p e u i q i n i r r  
w, a u r i b p a y」

聞きなれない呪文の詠唱が完了すると、セアトの四方に紫紅の十字架が現れた。四方の影を、十字架は射ぬき、徐々にセアトへと近づいてる。影を殺されたセアトはすでに喋ることもできなくなっている。

「汝、罪あり」

無情に落下する最後の十字架はセアトへ。黄金はセアトを貫き、そして四方の十字架は中心へと集まり、5つの十字架は一つへと。

高々と聳える紫紅の十字架。そしてそれは………光となった。

禁忌　ロザリオインペール

セアトは消滅した。

消滅と同じくして空間は解かれた。

ヴィヴィオオも意識を手放した。誰にもこの事は知られることなく。

セアトが見せたあの映像は当然フェイク。全員が従騎士を撃退していた。そして、この空間にはアセルスをもつても侵入することができずに手を拱いていたところだった。

「……………なのはさん!?!みんな!?!」

すぐに医療班が駆けつけ、アセルス、白薔薇も応急処置に躍起になった。

そしてこの惨状から救うべく、六課の命を繋ぐ戦いが始まった。

この戦いにより——高町なのは……………彼女は生死の淵を彷徨った。

「素晴らしいじゃないか。やはり私に狂いはなかった。さあ、後は彼女を手に入れるだけだ。もうすぐ私の傑作も返ってくる」



「さあ！決別といこうじゃないか」

## 開戦

命、通貨、血。通貨により弄ばれた者達、絶望に打ちひしがれることなかれ

カリム・グラシア 預言者の著書 白紙の一行より

セアトと呼ばれた妖魔との一戦から一ヶ月程。あれ以来、六緊急出動の回数も何故だが全然減つちやいました。その間に、六課に正式に出向してきたギン姉。マリエル・アテンザ技官。二人とも本当に凄くて今の六課にとつては本当嬉しいことなんだよね。まあギン姉は凄くて当然なんだけど……つとそんな姉自慢してる場合じゃなかった。この一ヶ月の間、なのはさんは入院していて私達の教導に付くことができなかつた。なのはさん……無理してでも働こうとするから、みんなで止めたけど最後に、ヴィータ副隊長が泣きながら止めてくれたお蔭で、ヴィヴィオと一緒に療養中です。その間、私達の教導は、ヴィータ副隊長、シグナム副隊長、そして……エリスでした。

「・・・・・・・・・・」

今でも、彼女の豹変ぶりには驚かされます。なんでも、部隊長が面白半分に見せた地球のある映画の影響だとか……体力面のトレーニングは地獄だったよ。肉体的にも精神面にも。でも、充実してたし、みんなの調子も良いみたい。これならどんな事件が起きてても大丈夫みたい。だからお父さん、私もギン姉も元気です。心配しないでね。また連絡します。

スバルより。

機動六課隊舎

「というわけで、明日はいよいよ公開意見陳述会や。明日14:00からの開会に備えて現場の警備はもう始まっている。ヴィータ副隊長、アセルス隊長。ライン曹長とFW4名はこれから出発、ナイトシフトで現場の警備に当たってもらう」

地上本部 レジアス・ゲイズ中將による公開意見陳述会の警備の確認を行うため、前

線メンバーと確認を行っている。機動六課に対するレジアスの風当たりは決してよくはないのだが、これといった妨害などは今のところは無い。それにカリムの予言……内容覆す為に。これがこの部隊の有様だ。

「私とフェイト隊長、シグナム副隊長、アセルス、エリスは明日の早朝に中央入りする。それまでみんなよろしくな」

「はいー」

正直なところ、なのはちゃんが動けんのは誤算やった。本来ならば、六課にアセルスとエリスを残していきたかった。なのはちゃんが抜ける穴は大きい……この穴を埋めるにはアセルスとエリスを動かすしかなかった。正直嫌な感じはある……でも地上本部を危険に晒す訳にもいかん。予言がそうならないことを願うしかないんか。

先行するみんなの見送りを終え、シグナムに後発の部隊への通達を頼むと、隊舎の病棟へと足を進める。まずはここへ。

101 高町なのは様

「なのはちゃん、失礼するで」

「はい、どうぞで」

言葉を待つて、ドアを開けるとベッドで身体を起こして、外を眺めているのはちゃんが見映える。うん、身体の調子も良さそうやな。

「なのはちゃん、身体の方は大丈夫？」

「傷の方は何とか。ただリンカーコアが弱つてるみたい。もうしばらくすれば完治するからつて」

病棟に運び込まれた時のことを思い出すだけで寒気がしてくる。それだけなのはちゃんは重傷やった。あれだけの重傷にも関わらず、医療スタッフ、それに白薔薇姫、それになのはちゃんの体力、精神力もあつてここまで驚異的な速度で回復してきてる。不幸中の幸いといったところか。

「はやてちゃん、大事な時に動けなくてごめんね。こんな時に動けないなんて」

ヘリが出発するところが見えていたらしく、スターズ隊長としての責任を感じていることは誰にでも感じる。

「大丈夫や。この一ヶ月でまたみんなも大きく成長しとる。それにギンガも来てくれとるし、人数的には問題なし。それになのはちゃん普段から働きすぎな面もあるし、今回くらいはヴィヴィオと一緒にいてあげてな」

なののはのすぐ横に用意されている小さいベッド……そこでは規則正しい寝息を立て

る可愛い少女の姿が。

「実際、あの時何があったのか誰も分かってない。情報としてはフェイトちゃんがかろうじて見えていたっていう、金色の光。それだけしか情報はない。でもそうになると、あの空間を排除したのはヴィヴィオになる」

現場のデータ、戦闘したメンバーからの情報をまとめ考察した結果、ここへ行き着いた。ならばこう考えるのはどうか。今回、ヴィヴィオの近くにエースを置いておけると。

「今回、何が起こるかはわからんけど、なのはちゃんは無理せんといてな。大事な人を絶対失いたくはないから」

「はやてちゃん……うん」

なのはちゃんも私の意図を汲んでくれたみたいやな。最後にビシッとサムズアップ。なのはちゃんも笑顔で返してくれた。

無理せんといてな……絶対。

そしてさらに奥へと足を運ぶ。

108 イルドウン様

1時間程であるにしろ、二人は時間を共有することに……

そしてなのはもまた……訪れた大切な人と、時間を共有していた。

---

地上本部

---

到着したメンバーに加え、ギンガが合流し、それぞれが警備に当たる。警備といっても端っこの方だからそこまで張りつめることもなく、のんびりやっている。警備部隊の方がお茶を差し入れてくれたことはこの寒さからすると有難かった。

「ヴァイス陸曹、お茶の差し入れに」

「おお、ありがとうよ」

色々とお世話になったヴァイスのところにティアナがお茶を差し入れにもっていく。そこで彼女は思い切つて聞いてみることに。

「ヴァイス陸曹のこと、失礼ですが少し調べました。アウトレンジの狙撃の達人で、エースクラスの力があつたつて」

「俺の魔力値なんざ、お前の半分しかない。それにそんなこと聞いてどうする。気にしてたら、また大事なところでハマするぞ」

お茶を飲み干すと、紙コップを潰し私に返す。やつぱり聞くべきじゃなかったのか。「すみませんでした」

「分かればよし、さっさと行け」

警備に戻るティアナの背を見つめ、一言彼は言葉を漏らす。

「全て昔の話なんだよ」

彼は全てを語る事なく、ティアナを警備に戻らせる。全てを知るのは彼のデバイスだけだった。



日も上がり、後発組も警備に合流した。なのはが本部内を担当していたが、欠員部分をアセルスが担当することになった。本部内はデバイスを持ち込むことができないため、スバルに預けることに。

「はやて部隊長、フェイト隊長、シグナム副隊長の分もそれぞれ預かっておいて。それじゃあ、スバル、よろしく」

「まかせて、アセルス」

お互いの拳をこつんと合わせ、私とスバルはそれぞれの持ち場へと離れていった。なのはさんの分も私がカバーしないと。あの時セアトに何もできなかった分の借りをここで返さないと。

《アセルス、妙だと思わないか》

陳述会が始まり、内部警備にあたっていた私にヴィータ副隊長から念話が入った。

《妙とは?》

《狙いがわかんねえ。予言のことは聞いていると思う。予言通り事が起こるとして、

内部のクーデターの線は薄いはずだ》

《部隊長の協力者のアコース査察官が調べた範囲では、その線は薄いと聞いています》

《そうすつと、外部からのテロだ。だとしたら目的はなんだよ》

《それは……》

《犯人はレリックを集めてる連中。スカリエッティ一味だっけか。奴らならさらに意味がわかんねえ。局を襲って何の意味がある》

《兵器開発者なら、自分の兵器の力の誇示。管理局を潰せるほどの戦力を準備できると証明できるなら、その兵器を買いたいと思う連中はいくらでもいると思う》

《力を証明したいなら、他の場所だっていいはずだ。リスクが高すぎる》

《それは、そうですけど》

ヴィータ副隊長の意見はその通りだ。そんなことをしていったい何のためになるのか……それに、今回はスカリエッティだけじゃなくて、別の何か。たとえば妖魔だって関係してるんじゃないかと。私は思っている。だけど今みんなに何一つ確信のないことを伝えるのは逆に不安を煽るだけだ。

止そう。

《とにかく、何があっても、対応できると思います。それだけ六課は準備をしてきたわけだし》

《そうだな。はやて達もいる。とにかく気を抜かず警備するだけだ》

念話を終えると外へと視界を向ける。すでに陳述会が始まって4時間が経過していた。

外は茜色に包まれていた。

「ナンバーズ。No.3トールレからNo.12デイドまで、全機配置完了」

コンソールを操作しつつ準備が整ったことを告げる女性。ウーノはスカリエツティに告げた。全ての準備ができたことを。彼女等の前には巨大モニターが展開されており、ゼスト、ルーテシア、地上本部が映し出されている。

「お譲とゼスト殿も、所定の位置に着かれた」

「攻撃準備も全て万全。後はGOサインを待つだけですう〜♪」

トーレ、クアットロの通信にウーノが答え、状況を再度確認する。すぐ傍らでは座するスカリエツティが笑い声を静かに発していた。

「楽しそうですね」

「ああ、楽しいさ。この手で世界の歴史を変える瞬間。研究者として、技術者として、心が沸き立つじやないか。そうだろ？ウーノ」

狂人とも呼べるこの男。だがウーノは愛おしそうに頬笑みを返す。

「我々のスポンサー氏にとくと見せてやろう。我らの思いと研究と開発の成果をな」

椅子から立ち上がり、始まりを告げる。全てを歪ませる。そんな笑みを浮かべ彼は宣言する。

「さあ、始めよう！」

「はい……」

コンソールに彼女の指が落ちる……それは崩壊への調べ。

音色が壮大に響き渡った。

「来た!？」

平穩を破り外が騒がしくなる。予言通りといったところか。この気だるい感じからすると、ガジェットが来てるみたい。情報からすると本部の防衛機能はそう簡単に破れないってことだったけど……これは、予想外だったかも。

A M Fで会場を破ってくるなんて。

突然会場内の電源が落ち、緊急用の隔壁が降り、会議室が孤立する形になった。会議

室には、はやて部隊長、シグナム副隊長。シスターシャツハに騎士カリムが残っている。「フェイト隊長！」

会議室への道を模索している時、事態に気が付いたフェイト隊長がこちらに駆けつけてきた。

「完全に会議室は孤立しています」

「他の道もロックされてるみたい。とにかくここで見つとしてるわけにはいかない」

フェイトさんの視線を追うとエレベーターに向いていた。

「ちよつと手荒だけど、アセルスも着いてきてね」

「もちろんです」

エレベーターのドアをなんとか開け、男性職員に礼をいうとすぐに飛び降りた。AMFの濃度が濃くても身体に魔力を纏わせることは可能である。

「こんなこと陸士学校の訓練以来だけど、色々とやっておくものだね」

「魔力にこんな使い方があとは思いませんでした」

二人は両手に魔力を纏わせ手をブレーキ代わりにワイヤーを伝って降下している。

「緊急事態に備えて合流地点も決めてる。合流ポイントは地下のロータリー」  
「フェイトさん、急ぎましょう」

慎重かつ大胆に。二人は地下へと降下していく。そしてその地下にはデバイスを預かっていたFW4人が戦闘機人2体と。そしてヴィータは空でオーバースの魔導師と。そして北のエントランスの地下では、

「ギンガさん！」

「エリス！」

ギンガとエリスが眼帯を付けた少女と対峙していた。

その少女……ヴィヴィオの保護の際に相對した。名前は確か、チンク。

エリスとギンガー―それぞれが思い出し、デバイスを構えたとき……彼女は言った。

「あと、5分だ」

その言葉の意味を理解できていれば……。しかしそれは分かるよしもなかった



## 零姉

地上本部への攻撃が開始されて幾分かの時間が経過しているだろう。建物の揺れも一層大きくなっていくように感じる。・アセルスとフェイトは共に合流場所へと急いでいる。だが相変わらず連絡が取れずに少々困惑を隠せない。

「フェイトさん、ここです」

封鎖的だった通路を抜けると少し開けた交差点のような場所に出る。デバイスからの情報と照らし合わせても、ここで間違いないようだ。

「アセルス、フェイトさん！」

対面の通路から私達を呼ぶ声が聞こえたので眼を凝らしてとまでいかないが、見てみると、バリアジャケットを展開したFW4人がこちらへと走ってきていた。

「フェイトさん、アセルスさん」

そして右手を見ると会議室にいたはずのシスターシャツハがこちらへと走っていた。

「みんな！それにシスターシャツハまで」

「会議室のほうは有志によって開放することができました。ただ騎士カリムをはじめとする皆さまはまだ会議室に残って事情説明をしているところですよ」

「グイータ副隊長からデバイスを預かってきました。それにフェイトさんとアセルスの分も」

アセルスとフェイトさんはスバル、エリオから預けておいたデバイスを受け取ると、すぐさまバリアジャケットを展開する。デバイスなしでの戦闘は流石に心もとなくなってきたているの事実。それには関してアセルスは、この世界に慣れ過ぎてるのかなと思ったりもする。

時間は費やしてはいけない。すぐさま私達はお互いの情報を交換、共有を図った。ここで挙がった名前は「戦闘機人」。ここに向かう途中にスバル達は戦闘機人二体との戦闘があつたようだ。不意打ちという最悪な形から入ってしまったのだが、ティアナの機転……もとい戦闘機人に対するデータを持つていた為に難を逃れることができたらしい。

「状況は大体のところは分かりました。戦闘機人が本部内に侵入してきている以上は見過ごせる状況ではないということ」

この場での指揮官はフェイトになる。フェイトはこの状況下でのような判断を下すべきか慎重に、だが思考を最大限に稼働させ最良の案を模索していたようだ。だがそんなとき。

《……たら、ロング……チ。現在、てkせん……ry……に……しゅう……きを》

「グリフィス君!？」

この場にいる全員に緊張が走る。敵の狙いはここだけではなかったのだ。地上本部襲撃という大いに目立つこの一件を囿に使ってまで、六課を襲撃するなんて……一体何が狙いなんだ……

「なのはや白薔薇姫、イルドウン達が六課に残っているとはいえ、ほとんどがバックヤードの面々ばかりだ。なのはだってまだ完治はしていないし、もしも戦闘機人が襲撃しているとなれば、万全じゃない、なのはじゃ厳しい」

顎に手をあてすぐさまプランを練り直しているフェイト。そしてすぐにそのプランは私達に告げられた。

「ライトニングとアセルスはすぐに六課へと戻ります。スターズはシャツハと共に部隊長達と合流。指示は部隊長から直接仰いで動くように」

「待つてください!」

フェイトさんの説明にスバルが割って入る。普段ならこんなことしないのにどうしたんだろうか。だがスバルから告げれたこともまた見逃すことはできない事実だった。

「さつきからギン姉との通信が繋がらなくて……なにかの妨害があるにしろ少しは繋がってもいいはずなのに」

「……ギンガと連絡が着かない。ならエリスは!？」

すぐに念話やデバイスからの通信を試みるもやはり返事はなく、また酷いジャミングのようで、砂嵐のような音しか聞こえてこない。

「フェイトさん、すみません私行きます!!」

「ちよつ、待ちなさいスバル! フェイトさんすいません。私もギンガさんやエリスのことが気になります」

判断を待たずに駆けだしていく二人に戸惑うもすぐに「追って」と命令を出せるあたり隊長は伊達じゃないと改めて感じる。けどエリスやギンガと連絡が取れないことには私も何か嫌な感じがする。でもエリスにギンガ……二人ならば戦闘機人でも決して遅れはとらないと思っている。いや大丈夫。

「フェイトさん、私達も行きましょう。シャツハ、部隊長やシグナム副隊長のデバイスをお願いします」

「はい、任せました」

シユベルトクロイツ、レヴァーティン。会議室で待つ二人の愛機をしっかりと受け取つ

たの確認するとそれぞれはまた、三方に分かれそれぞれの役目を果たすことに。

そして

ここに額にうつすらと汗を浮かべながらも必死に走る者が一人。我武者羅にただを前を見て目的地へと突っ走っているといったほうがいいだろうか。何故ここまでして走っているのか。それはただ嫌な予感がしたから。だが彼女からすれば理由などどうでもよかった。ただ……微かに感じた一抹の不安を払拭したかった。走っている最中誰かに出会った気がした。彼女は手に何かをぶら下げ私に声をかけているようだ。だが私にその声は入ってはこない。代わりに下げられていた物を受け取るすぐに呟いた。「セツトアップ」

一瞬の閃光と共に彼女は甲冑を纏う。右手にはシユベルトクロイツを、左手には夜天の書を携え……八神はやては床と別れを告げる。

目指すは北。ただそれだけ。一心不乱に彼女は飛んだ……

その北では……

「はあああああ」

「せいっ!!」

大剣と拳が入り乱れ、確実に相手を追いやっている。北で連絡が着かなかった二人は、現在進行形で戦闘機人と交戦中であった。状況は2対1。決して悪い状況ではない。チンクと呼ばれていた戦闘機人も状況は判断できているようだ。

「後、3分」

ギンガはずっと気になっていた。チンクと交戦に入る前に放った「5分」という言葉。それが3分に。あと3分経てば援軍が到着するのだろうか。それならば早くチンクを倒すことが最良であることには間違いない。幸い彼女はそこまで強くはない。先ほどから投擲されるダガーのような物はシールドで簡単に対応できる。うん。行ける

「はあああ!」

ブリッツキヤリバーのローラーが煙を噴き上げる。グツと力を込め足を前に踏み出

すのを合図に一気にトップスピードへと加速する。チンクも虚を突かれたかのように、対処が遅れていたようだが、身体半分横にズレることで、ギンガの突撃を難なく対処する。

「避けて当然よね」

「ああ、それくらいは避けて当然だ」

「なっ!?!」

チンクが驚くも無理はない。やり過ぎたと思った矢先、自身の正面にはすでにデバイスを振りかぶったエリスが居たのだ。

「残念だったな。私に気付かなかったのか?」

振り切られたデバイス「レグナ」は止まらない。非殺傷設定とはいえ、確実に骨は粉砕するであろう勢いだ敵対する者には容赦はしない。それがエリスの信念でもあった。

『パチン』

指を鳴らす音が聞こえたの覚えている。だが次の瞬間だ。急に何か爆ぜたのだ。あまりに急な事で防衛も間に合わずに爆発の直撃を受けてしまった。誰だっけそうだろう。急に眼の前が爆ぜるといふ現象を理解できるはずもない。この爆発の原因がチンクであることは分かった。それだけ分かれれば十分だ。ぶすぶすと焦げる身体に鞭打ち、口に溜まった血を吐く。辛いのは私だけではない。相手も爆発に巻き込まれて無傷ではない。それで十分だ。ギンガに眼をやればどうやら無事なようだ。ならば協力してチンクを倒せばいいだけのこと。それで十分だ。

額から垂れる血を拭いラグナを握りしめ一歩前に踏み出していく。そこで眼帯が無くなっていくことに気がついたが今はそれほど重要ではない。

「エリス、無理しないで」

ギンガから声が掛けられるも軽く手を挙げる程度の返事に止めると相対する敵を仕留める為に一歩ずつ歩みを進める。

急な爆発の原因も予想はついた。チンクが投擲していたスティンガーというダガーのようなものだ。あれが床に突き刺さっていたのは覚えている。後は何かしらの方法



で爆発させているといったところか。なら話は早い。それだけに注意していればとるに足らない相手には変わらない。それよりも……

「ギンガ、何か2つほどこっちに近づいている。そっちの相手は任せたぞ」

「ちよつと、エリスまた勝手に!?!」

なるほど……先ほどから数えていた時間は向かって来ている者達のことか……だがこちらの味方、それにこの感覚は……母上。来てくれている。それなら安心だ。

「私は全力を尽くして、貴様を倒すのみ」

距離を考えても十分に耐えられる。そう判断したからこそ私は一気に突っ込みチンクの意識を刈り取ることだけに専念する。大丈夫、どこも問題はない。

よろけるチンクのもとに肉薄し、まさに彼女の思考を奪い取れる距離まで接近したとき……彼女の口は確かにこう動いた。

「5分だ……」

「ティアナ!？」

不意に名前呼ばれた彼女はクロスミラージユを構える。がそれも徒労のようだ。呼んだ主は、甲冑を身にまとった八神はやてであった。

「部隊長!？何故ここに」

「お話は後や、スバルはこの感じやと先行してる見たいやな。ティアナ、急ぐからつかまっときな」

「えっ!？きやつ!？」

飛行魔法を使えないティアナにこれ以上の速度は出せない。代わりにティアナを持ちあげる形で支えそのまま通路を飛行する。これでティアナを連れて先を急ぐことができる。それでも狭い屋内では飛行よりもスバルの方が遥かに速い。早く追いつかな

ければ何か大変そうな気がして。

「見えた!!」

ティアナが叫ぶその前方には白いバリアジャケットを羽織るスバルの姿がはつきりと見えた。

《スバル、私達も合流するから無理せんといてな》

《ぶ、部隊長!?それにティアも!?!》

《話は後や。それより早くエリスとギンガと合流や。なんかごつつう不安で仕方ないんよ》

《私も同じです。でもギン姉とエリスなら大丈夫です。絶対に!》

スバルはスピードを緩めない。落とせと命令する方がおかしいものだ。だから私も出せる範囲で最高の速度で飛行する。そして、向こうに明かりが見えた……。

「はあはあ……」

肩で息をしつつ、同じく肩で息をしている戦闘機人2体を見据える。私やスバルと同じようなデバイスを使う「ノーヴェ」ボードのような物を使う「ウエンディ」。正直ここまで私がここまで相手をできるとは思ってもいなかった。だが六課に出向して以来、私は確実に強くなっていった。前の二人も相当この状況に焦りを感じているようだ。幸運はまだ続く。ブリッツキヤリバーがマツハキヤリバーの位置を確認できていた。距離にして700mといったところか。このままなら形勢を逆転する準備は整ったも同義だ。

突如聞こえた轟音が私の耳を劈く。後ろを振り返ると、チンクが壁にめり込んでいた。そしてエリスがこちらへと走り出していった。

戦闘機人がこれで二人。行ける！

「ギン姉!!!」

そして待ちに待った声が聞こえた。スバルがもう視界で捕えられる距離まで近づい

てきている。さらに奥には八神部隊長にティアナまで来ている。至れり尽せりつてこ  
ういうことを言うのかな？とにかく状況が一変したため正直ホツとしているのだ。だ  
けど油断は禁物。しつかりこの二人を捕まえないとね。

「ギン姉ーーーー!!!」

「スバル！やるわよ!!!」

「えっ……………!？」

急にお腹辺りが熱くなって……あれ、なんでだろう？スバルの姿が見えたから興奮し過ぎちゃったのかな。私ったら任務中に……

静かに規則正しく命の音色は響き渡る。

一滴……一滴……また一滴

「なんで……」

視界が急に霞み始めた……霞む視界で熱い腹部を見る。腹からは……エリスのデバイス、「レグナ」が生え出していた。いや正確には背部から貫通しているが正しい。

「ギ、ギ、ギン姉!!!!」

突然のことに思考が付いていかないスバルはただギンガの名前を叫び続けている。その視線の先では、レグナにギンガが突き刺さったままの状態で、まるで血糊を払いのけるように振るう。当然ながらギンガは吹き飛び壁に無防備のまま衝突し、赤い線を壁に描いた。

「エリス!? 一体何を!」

予感は当たってしまった。

ティアナを降ろすと直ぐにエリスの前にはやてが立ち塞がる。

「これは一体どういうことや? いくらなんでも冗談が過ぎるで……」

言葉に力が籠っている。私も正直なところこの状況を認めたくない。でも認めざるを得ない……。エリスの持つレグナから鮮血が垂れているのだ。そしてその右の壁には血塗れのギンガが力なく横たわっている。

「黙ってないでなんか言ったらどうや」

何も言わない我が娘に対してイラつきを含みながらも尋ねるが一向に何も話そうとはしない。

「うわあああああああ  
!!????」

スバルがこの状況に耐えることができずにエリスに突っ込んでいく。それを止めようと、デバイス達は必至だ。

「バディ、お気を確かに」

「上官、一体どうなされたのだ」

だが、何一つ状況は好転はしていない。ティアナはギンガの元へ駆け寄ろうとするも、ノーヴェ、ウエンディに睨まれ動くに動けない状況だ。

風を切る音が聞こえた……そして遅れてはやての頬が切れた。次に聞こえたのは壁に何かが刺さる音だ。はやては分かっていた。投げたのはレグナだということ。

次に、スバルとエリスの拳がぶつかりあう。スバルは魔力を前回に放出し、その全て



を拳に宿しエリスへと放っている。だがエリスはどうだろうか。何も力を入れていないようにすら感じる。それがスバルに火を付けた。

「エリスうううううううう  
!!!!!!」

スバルの瞳が黄金に変わった。それは彼女が戦闘機人でもある証。そして魔力はさらに開放される。だがスバルがここまで魔力を解放できることを今のマツハキヤリバーには計算に入っていない。当然その代償はやってくる。少しずつだが亀裂が生じている。だがマツハキヤリバーの静止を今のスバルが聞くはずもなく何とかスバルを守ることに全力を注いでいる。

今まで、表情を変えなかったエリスの表情が変化した：気がした。ほんの一瞬だった。そして沈黙を保っていた彼女の口から言葉が漏れた。

「これはこれは……」

大気が震えた……大げさではない。そう感じた。その中心はもちろんエリスだ。ス

バルがI S振動破碎を使用したと同じくして、エリスの様子も変わったのだ。何か、纏うオーラが変わったような……そして確信にかわる。

「エリス……その眼……」

眼帯が取れたその左眼。いままで瞼の向こう側を見たことはなかった。そして初めて眼にすることとなった。

その左眼は……禍々しい紫の瞳をしていた……

「リミット、リリース」

その言葉を皮切りに大量の魔力が溢れだす。その魔力を掌に集めると、スバルの拳を掴んだ。

「爆ぜろ」

爆ぜた……血管が中から詰まったように……スバルの左腕、マツハキヤリバーが爆ぜ

た。

「ああああーっ!?」

そしてまた魔力を集めた掌が右手を掴みにかかる。今度は腕を確実に吹き飛ばすつもりようだ。先ほど感じた魔力量より明らかに大きい。

「穿て、ブラッティダガー」

エリスはその場から飛び退き、チンクがめり込んでいた壁の辺りまで飛び退く。それに呼応するようにノーヴェ、ウエンデイもエリスの側まで退く形になった。最後によろとしながらもなんとかチンクがエリスのもとへたどり着いた。

「姉上、お帰りなさいませ」

チンクから語られた言葉に、はやては我を疑った……エリスが戦闘機人の姉であることを。だがそれは間違いないではなかった。

「ああ、今帰った」

言葉数は少なかった。だがそれだけでも、3人は震えていた。私も正直震えそうやった。あのエリスがこんなことになるなんて思ってもなかった。それだけ今のエリスはとんでもない存在だということだ。

「エリス……」

「私はエリスなどではない。ノーリだ」

「何いつてるんや、エリスはエリスやないか」

「くどいぞ、女。いや、八神はやて。私の名はノーリ。それ以下でもそれ以上でもない」  
わからん……なにが起きてるのかさっぱりや。でもどうやらやるしかないみたいや  
な……

「おい、見ているのだろう。さっさとリンクを回収しろ。私は帰るからな。後は任せる」

そう告げるなりノーリは去って行く。タイプゼロの確保に関してはとのノーヴェエからの問いには、「死にかけを連れて移動するなど時間の無駄」との返事があった。それだけだ。

ノーヴェとウエンデイもすぐに撤退を始め、チンクが一人取り残された状態になっていた。私は即座にバインドを掛けようとしたが、天井から現れた女によつて取り逃がすことに……残されたこの場所には無傷な私とティアナ。そして瀕死のナカジマ姉妹が残された。ただ……私は何もできなかった。ただなにかが過ぎていくことを見るだけしかできなかった。

何のための力か……

右拳を壁に意味もなく叩きつけた。そしてその拳からは血が滴り落ちた。

「最悪や……何もかも」

そして……機動六課では……

## 吉凶

みんなが出動してから半日以上は経過しているだろうか。病棟の窓から見える世界はすでに夜の帳が降りている。ふと、視線を移せば、ベッドの横に用意されている小さなベッド。そこでは規則正しい寝息を起てるヴィヴィオの姿があった。

「ヴィヴィオもお疲れだね」

ベッドから腰を降ろしヴィヴィオの側へ。決して起こさぬよう、優しく髪を撫でた。

「んんんにゆう……ママ……」

「ドキッ」という言葉がこもも当てはまる状況はそうそうないだろう。でも、この可愛い少女は私の心臓を簡単に慌てさせる。

「ヴィヴィオったら……もう……」

びつくりさせないでよ、と思うも内心どこかでは嬉しがつている自分がいる。この子が幸せになれる家庭は探し続けるとは言ったものの、ヴィヴィオはもとい、私の心は妖魔との一件以来大きく揺らいできている。

「私があの子の母親になる……ね」

まだ気持ちは、はつきりしたわけじゃない。でもこのままにしておくわけにはいかな問題であることには違いはない。とにかく今は、もう少しだけ待ってて欲しい。

どこか寂しげなヴィヴィオの手を握れば、頬を寄せて握り返してくる。そこには母親に甘える少女の姿があった。こんな穏やかな時間が続いてくれればいい。そう願ったのも束の間、この貴重な時間は唐突に終わりを告げた。

「WARNING WARNING」

六課内に警報音が鳴り響く。警報に続いて間髪入れずグリフィス君からの緊急通信が届いた。

「なのは隊長。正体不明の高エネルギー反応が2つ。高速で接近しています。それに先ほどからジャミングが酷く、地上本部のメンバーと連絡が付きません」

こつちを狙ってくる事に何の意味があるのか……予言通り事が進んでいると考えると、こちらに向かってくるのはスカリエツテイ一味……データにあった戦闘機人の可能性が一番だろう。自分の力を示したいだけなら、戦力の出払った六課を狙う意味な

んて無い。

うん、色々考えるのは後。今は六課を守らなくちや。みんなが帰ってくる家を黙って壊されるわけにもいかないしね。

「グリフィス君、すぐにバックヤード陣に避難命令を。シャマル先生とザフィーラと私  
が外で追撃します」

「了解しました。ですが、なのは隊長。傷はもう完治していますが、まだリンカーコアの  
治癒が完璧ではありません。リミッターの解除もできませんし、シャマル先生の見積も  
りでも魔力ランクがAに届くかどうか」

「それだけあれば十分だよ。そうそう遅れを取るつもりはないよ。それに、仮にも「エー  
スオブエース」は伊達じゃないってところを見せないと、FWのみんなにも申し訳が立  
たないよ」

「なのはさん……分かりました。すぐに指揮系統をまとめ、対応にあたります。では、気  
を付けて」

そうして通信を終える。やっぱりグリフィス君も不安と緊張に張りつめてるって顔  
してた。でも最後は和らいだみたいで、なのはさんになってたね。……さてと、通信で



はああ言ってはみたけど、正直どこまでやるか分からない。けどここで士気を下げられるわけにはいかない。そしてこれは自分を奮い立たせるため。

「エースオブエースは伊達じゃないってね」

不安に潰されそうになる心に喝を入れ、病室を後にしようとする歩みを進めると同時に、寮母のアイナさんが見えた。どうやらヴィヴィオを迎えに来てくれたみたい。

「アイナさん、ヴィヴィオをお願いします」

「お任せください。なのは隊長こそ、御無事で」

「ママ……」

母親を求めるような細く、寂しげな声。視線を落とすとヴィヴィオが足元へと来ていた。

「ママ……いつちやいや」

制服のスカートをギュッと握り、私が離れることを拒んでいる。その紅と碧の瞳には少し涙が滲んでいた。

「こら、なのはさんの邪魔しちやいけませんよ」

「……………めんなさい」

ぼたぼたと少女の瞳から涙は零れる。我儘などでは決してない気持ち。私もこの気持ちは知っている。一人ぼっちは嫌だって……。

すつと腰を落としヴィヴィオと目線の高さを合わせる。涙で揺れる瞳……そつとその涙を拭い優しく語りかける。

「ヴィヴィオ、アイナさんといい子にして待っていてくれたら、後でヴィヴィオの大好きなキャラメルミルク作ってあげるね」

「うん……」

私の気持ちが伝わったのかどうかは分からない。でも、ヴィヴィオの表情からは不安が感じられなかった。

「うん、いい子だよヴィヴィオ。じゃあ、なのはママ、行ってくるからね」

「うん、いつてらっしやい」

最後に頭を軽く撫でてやる。ヴィヴィオの手がスカートから離れ、その手はアイナさんがしっかりと繋いでくれた。アイナさんは分かってくれていたようで、すぐにヴィヴィオを連れて避難所へと走り出した。

「さて、行きますか」

部屋を駆けだし、向かうは階段。だが下には向かわない。目指すは屋上だ。少し鈍った身体を慣らすかのように階段を駆け上がって行く。二階程上がればそこは屋上。すでにドアは開かれており、通り抜ける風は心地よかった。

「屋上の端までは約50mってところかな」

迷うことなく駆ける。ただ前を向き、全力で。身体が風を切り裂いていく……今はそれが気持ちいい。

周囲は平穏をまだ維持している。物音一つなく逆に不気味なくらいだ。そこに私以外の足音が加わる。軽快で早いテンポを奏でる主は、

「高町、届け物だ」

「ザファイラさん！ありがとうございます」

疾走する私の横に並ぶザファイラさんの口元には私の大切なパートナー「レイジング

「ハート」が唾えられている。

「調整は終わっている。だが無理はするな」

「ありがとうございます。でも大丈夫ですよ」

「そうか、なら何も言うまい。受け取れ」

首を振りレイジングハートを空中へと解き放つ。レイジングハートは弧を描き私の掌に包まれる。

「Standby Ready. My master」

「レイジングハート……お願いね!!」

「All right」

速度を落とすことなくさらに速度を上げる。屋上の終わりは近づいているそんなこと知ったことじゃない。そのままフェンスに足を掛け、空へと身を委ねる。重力に引かれ、地上へと加速していく。そして、私は声を上げる。

「セットアップ」

光に包まれた私。すぐにバリアジャケットが展開される。それは重力からの解放。

ヴィヴィオやみんなの為に……守ってみせる。絶対に。

「スターズ01高町なのは。行きます!!」

闇を切り裂き、白銀のエースが空に降臨した。

「デイベイーンバスター」

最も得意とする砲撃による広域殲滅。空中戦力のガジェットⅡ型の姿は確認できない。けれど、

「ちよつと疲れたかな」

胸の奥を鎖で巻かれているような気分。どこか自由になれず、じわりじわりと締め付けるように。リミッターとリンカーコアが完全じゃないだけで普段とここまで違うなんて……でも、ここを抜かせるわけにはいかない。

《グリフィス君、そつちはどう?》

《なのは隊長のおかげで本部に問題はありません。それよりも、もうすぐ高エネルギー反応と接触します》

《うん……どうやら到着したみたい》

念話を終了させ、レイジングハートを構える。マガジンは後2つだけ。これでこの場を何とかする。いや、させる。

先制攻撃でどちらかでも落とせれば……当たらなくとも牽制にはなる。カートリッジを一発ロード。海に葉莢は静かに落ちていく。着水音と同時に桃色の閃光が放たれた。

事は私が思ったよりも上手く進んでいるように思える。先ほどの砲撃も片方に命中が確認できていたからだ。けど、甘い期待は簡単には持ったりなどしない。それが気の緩みに繋がり、最悪、命を落とすことに繋がるからだ。

「アイナさん……」

「ヴィヴィオ、大丈夫よ」

六課内のシェルターに避難しているバックヤード陣にヴィヴィオ。入口には、六課の防衛メンバー他に、ヴァイス陸曹が警戒にあたる。ヴィヴィオはやはり、不安がつているようで、アイナに身体を預けている。アイナもそれを重々承知の上でヴィヴィオを抱きしめている。だが、ヴィヴィオの様子が一変する。それは強大な力を持つ何かに恐れられているように。

「アイナさん、こわいよ!?!? なにかこわい人がこつちにきてるよ」

「!? ヴィヴィオ、大丈夫だから。心配しないで」

怯えるように泣きはじめるヴィヴィオの様子になにか一抹の不安を感じずにはいられなかった。だが今は外の様子を知る事も叶わない。ただ不安がるヴィヴィオを心配させまいと抱きしめることしかできない。

嫌な予感はやはり当たるもの。外ではまさにヴィヴィオが感じていたことが起きていた。

「きゃあーっ!!」

側面からやってきたのは突然の衝撃。咄嗟のプロテクションも効果をあまり成さず、六課から数百メートル離れた場所までふきとばされた。何があつたのか何一つ分からぬまま、私は地面へと着弾した。

「……………」

言葉が出てこない。でもそれ以上に……無様なのは今の私。無茶して落とされて……これじゃあの時と同じだ。何も進歩していない。このままじゃ……



「飛べなくなる」

意識を放しかける自分自身に、この想いをもう一度自分に味わせるものかと鞭打ち、意識を覚醒させる。手で身体を起こすと視界が戻ってきた私の上空には1つの影。そして六課には2つ。

「あれくらいじゃ…やっぱり」

甘い期待はしてはいなかったけど、ちよつとマズイかも。

向こうはザフィーラさんとシャマル先生がなんとかしてくれてるみたい。けどこっちはそうはいかないみたい。

静かに、無機質に。ただ聞こえたのは金属特有の音。

初めてかもしれない。眼の前の相手を怖いとはつきり認識するのは。それだけ眼の前から放たれる重圧は凄まじいものがある。まだ自由の利かない身体を振るい立たせ、レイジングハートを杖代わりに身体を起こす。

「出来るか、出来ないかじゃない。やるしかないんだ」

「ヴィヴィオ、絶対守るからね」

地上本部から六課へと戻る最中に戦闘機人と遭遇した。エリオとキャラを守る為に、フェイトさんは単独行動に出た。あの戦闘機人……トーレと呼ばれていた者を引きつけるために。次いで、エリオとキャラはブーメランプレードを持つセツテと呼ばれた者と相対していた。

「フェイトさん!? エリオ、キャラ!!」

「アセルス、先に行つて。ここは私達が何とかしてみせるから」

フェイトさんの判断は正しかったのかも知れない。地上本部から六課へと戻る最中に戦闘機人と遭遇した。流石にこればかりは私も引き返そうと思つたが、空戦ができないうえに、アウトレンジにも対応できない。それに二人の決意を無駄にするわけにもいかなかった。

ならば私がすることは、六課に急ぐだけだ。背後で聞こえる戦闘音を後にひたすらに走つて行つた。

「酷い……」

燃えていた。

六課は所々倒壊しており火の手も挙がっている。だが悲しんでもいられない。こうなつた元凶がどこにいるはずだ。警戒しつつ周囲を見渡すと、屋上の方から爆発音と硝子が吹き飛ぶ音が。

「おちおちおちおち」

「なかなかしつこい」

上空に飛び出してきたのは、ザファイラとデイドと呼ばれる戦闘機人。

「ザファイラ!!」

「アセルス、高町の援護に回ってやれ。俺は構わん」

「余裕ですね、あなた」

「簡単に落ちるわけにはいかんのでな」

ザファイラ喋れたんだ。という感想はさておき、ザファイラが示す方向に急ぐことに。シャマル先生はオットーの攻撃を防ぎきっているようだが、疲れが隠せない。また、シャマル先生もなのはさんの援護をと。

「なのはさん、一体どこに……いた!」

白いバリアジャケットを視界にとらえると直ぐに横に並ぶ。そこには禍々しいオーラを放つ、あの地下であった甲冑が。

「イルドダウン!?!白薔薇!!!」

血だらけで倒れている二人を呼び掛けるが返事がない。

「アセルス……一人は大丈夫だから……」

「なのはさん!？」

背中からは分からなかったが、正面は血に塗れていた。レイジングハートにも亀裂が入っており、相当な負荷が掛かっていたようだ。

「アセルス、私行かなきゃ……ヴィヴィオを守らなきゃ……」

「なのはさん!？」

幽鬼のような足取りで、隊舎の方へと歩み始めた。だが私にはそれを止めることができない。「甲冑」がそれを許してくれない。

「月下!？」

「主よ、気を付けろ」

金属と金属のぶつかり合い。月下と手甲が火花を散らす。ギリギリと押し込めるなか、何かを呟いている。

「……けた」

何を言っているのか正確には聞き取れない。だがこれで確信した。こいつは生きている何かだと。

「主、私の硬度ならあの甲冑は問題ない」

力勝負だと少々分が悪い。ここはデバイスというアドバンテージを利用しないわけにはいかない。

距離を取り、間合いを測る。

一步、一步、近づいてくる。何か愛おしいものを見つけたように、私を付け狙うように。

「あ・せ・る・す・さ・ま」

劍閃一光

「燕返し」

太刀筋は相手には見えなかっただろう。神速の太刀筋は的確に甲冑を捉え、鞘に帰る。

甲冑は真つ二つに切り裂かれ、地面に落ちる。中まで斬ったはずだったのだが、斬れたのは甲冑のみ。中から現れたもの、

「君は……!!」

衝撃と邂逅。突然の暗転。私の意識は突如奪われた。

——余に逆らう不屈きものたちよ。この迷宮で永遠に迷い続けよ。——

「ヴィヴィオ…ヴィヴィオ…」

本来ならばアセルスと一緒にあの甲冑と戦うべきだったかもしれない。だけど、私に

は約束がある。燃える隊舎の前に、なんとか足を引き摺りながらも入口にたどり着く。そこに立っていた紫の髪の少女と人型の何かをヴィヴィオを抱いていた。

「待って……ヴィヴィオを……どこに……」

「……邪魔」

ヴィヴィオは気を失っている事に気付き、引きとめようと試みるが、少女から放たれた衝撃波に身体は耐えきれずに、壁に吹き飛ばされる。

魔力は底をつき、身体もガタガタ。私の身体は動かない。その間にも少女達は消えていく。

「待って……」

涙は勝手に流れてくる。でも身体が動かない。泣く力があるなら、身体を動かしてほしい。でも、もう動かない。

「ヴィ……ヴィ……オ、守るって……言ったのに……」

視界から完全に消えた。六課は破壊され、みんな傷ついてしまった。それにさつきか



ら何か聞こえてる。でも、私にはそんな気力ものこっていないかった。眼の前でヴィヴィオを攫われてしまった。そしてそれをどうすることもできなかった。

私は・・・わたしは・・・

自責の念と後悔に押しつぶされる。

あれほど啖呵を切っておきながら私は何も守れてなんかいない。エースオブエースなんて言われているし、自分でもそう言った。だけどこのありさまだ。

何も守れてなんかいないんだ。

何かが欠けてしまった。大事な大事な私の何かが…。

「ああ、おつきい竜だ……」

突如現れた竜は上空を赤く染め上げる。どこか悲しい叫びのようで、その竜は吠えた。そこからの記憶は私は覚えてはいない……。

## 迷路

余に逆らう不届きものたちよ。この迷宮で永遠に迷い続けよ。

「アセルス、アセルス。起きろ、アセルス」

私を呼ぶ声は意識を覚醒へと導く。閉じていた瞼を開くとそこには広がっているのは闇。そしてこの場に似つかわしい無機質な扉が数十枚。異様な光景の中、身体を起こした。立てるということから、地面という概念はこの場には存在しているようだ。

「アセルス様、大丈夫ですか？」

「いつまで寝ている気だ、全く」

視線の先には衣服が所々破れ、まだ止血も儘ならないイルドゥンと白薔薇の姿があった。気を失う前、最期に見た二人の姿は、気を失った状態だった。どうやら私が気を失っている間に、二人が目覚めたようだ。

「無事だったんだ……二人とも。良かった……」

無事であつたことに安堵を覚えるも、見覚えのない空間が余韻に浸る事を許してはくれない。今、私達がどんな状況に置かれているのか把握することが先決なのだが、如何せん情報が無さ過ぎる。強いてあげるならば、私に語りかけてきたあの言葉。

「とうとう、あの方がお出ましになられたのですわ」

「どうやらそのようだな」

どうやら二人ともここが一体何なのか知っているらしい。少し疎外感を覚えてしまったのは内緒だが。

「ここはオルロワージュ様が産み出した「闇の迷宮」。簡単には出られん」

「闇の迷宮?なにそれ?」

「簡単に言えば、歯向かうもの閉じ込めるための牢獄といったところだ。とにかく今回はばかりは主も本気らしい」

「ここから出られない……わけじゃないの?」

「出られないわけではない、が難しい。まずこの扉の中を正しい順に通過する必要がある。それに」

「なんだ、絶対出れないわけじゃないんだね。それを聞いたら安心したよ。早くこんな暗いところ抜け出して、みんなと合流しなきゃ……六課のみんなが危ない」

瞳を閉じると足元には魔方陣が展開される。詠唱されるのは度々世話になってきた陽術「スターライトヒール」。無機質で闇が支配する空間に燈されるのは生命の象徴といつてもよい太陽の光。その優しく暖かな光は二人の傷を癒してゆく。

「ここまで成長されているとは……アセルス様」

「これならば……白薔薇姫」

アセルスの成長振りに二人して何かを決心したように頷いた。これを機にと、白薔薇姫が話を切り出す。

「アセルス様、まずは正しい順序を探しましょう。その間お話したいことがあります」

特に何か思うことなく、三人は揃って歩みを始める。数十枚の扉から正しい順序を見つける途方もない作業だが、いつかは終わりがくることさえ分かっていたら、アセルスとて歩みを止めることはなかった。それに六課が襲撃を受けていたことを考えると一刻も早くこの現状を打開することが最優先だ。

何枚かの扉を潜って行くうちに白薔薇が口を開いた。

「アセルス様、まずは謝らなければならぬことがあります」

「どうしたのさ、白薔薇？謝られるようなことなんて無いよ」

何も無いと言つてはみたが、薄々気がかりな点は幾つかあった。だけど、白薔薇やイ

ルドウンには数えきれない迷惑をかけていたのは事実。こちらの世界に迷い込んだあの日から……私は二人に見守られていた。だからこれからの話は二人を信じて聞くことを決めた。

「順番を追って話をしていきましょう。まず、デバイス「リーサルドラグーン」のことで。アセルス様が使われていた、ソルとルナは現在無期限の自己再生中の為、待機状態になっていと思います。ですが、それはあくまでアセルス様がドラグーンを使用しないようにするための口実。実際の理由は別にあります。まずは、私とイルドウンにデバイスを」

二人の話を聞くと決めたアセルスは、待機状態のデバイス「ソル」と「ルナ」を二人に手渡す。受け取った二人はデバイスを胸にあてた。次の瞬間デバイスから光が溢れ胸に溶けていった。

「ソルとルナには、私達二人のリンカーコアが使用されていました。と言いましても、アセルス様はどうやら薄々お気づきの様でしたね」

「なんとなくだけどね。初めて従騎士と戦ったときに不思議な感じがしたんだ。それに二人が簡単に遅れを取ったりするわけないって知ってたから、もしかしたら戦えない何かがあったのかなってさ」

アセルスの言葉に二人から心配し過ぎだったとも取れる笑顔が浮かぶ。これならば大丈夫であろう……。

「アセルス様の考えておられることと相違ないと思われます。次に、ブーストの事についてです。アセルス様が使われているブーストの事なのですが、あれには正しい名前が「ございます」

アセルスが困ったように首をかしげる。正しい名前を今さら教えられてもといったところか。

「あれは妖魔化。半妖の存在が妖魔側に傾き自己の能力を引き上げるもの。差し詰めブーストという言葉は適当であつたかもしれない」

素直に頷いていたアセルスにもまたしても疑問が頭に残つた。

「半妖」

アセルスにはこの言葉がどうしても懐かしく、また納得ができなかつた。

「白薔薇、僕は半妖じゃない、妖魔じゃないか。それは白薔薇だつて分かつてるはずだ。なら白薔薇の言つてゐることはおかしいよ?」

「アセルス様、今から話すことをしつかりと受け止めてください。私達は今のアセルス様なら大丈夫だと判断しました。後はアセルス様次第です」

白薔薇姫にイルドウン。二人の意思に圧されそうになった。先ほどから胸の奥が熱く、頭が痛む。がそれでも続きが知りたい。

「分かった……なにがあっても受け止める」

一同視線を会し、それを合図に最後の言葉が紡がれる。

「アセルス様がこちらの世界に来て直ぐに、ある物と契約されました。それは半妖のみ扱うことが許され、代償として人としての記憶などが奪われます。そして……それは貴女様の命の塊でもあります」

徐々に頭痛や胸の熱さが増してきている。頭が割れそうだ。胸が焼けつくような感じ……それでも決して言葉を聞き漏らすことの無いように……最後まで集中して。

「その名は幻魔……アセルス様が従えてこそ発揮する強大な力。アセルス様、今がその時なのです」

——プロテクト解除 幻魔を解放します——

胸の奥からの不意の衝撃はアセルスを宙に跳ねあげる。

アセルスにかけられていたプロテクトの開放。

開放の条件はアセルスが忘れていた記憶を伝えること。そして幻魔が開放されると、アセルスは幻魔を従えなければならない。できなければ……

「幻魔に身体を奪われます……」

宙に浮くアセルスの胸から一振りの剣が生え出している。そしてそれは剣から形を変え、閃光を放った。

剣の正体こそが幻魔であり、幻魔が身体から抜け切ると痛みは無くなっていた。そして幻魔の開放により無くしていた記憶は蘇り……

「やっぱり、あれは……あの子は……」

何かを思い出したかのように言葉が漏れるもそれは止まってしまった。閃光の後に



視界に入ったのは…僕自身。ただ髪は燃え盛るような深紅であるが、それ以外は鏡を見ているかのようなだった。

「あれは、私なのか……」

顔を下げたまま、一歩ずつゆっくり歩んでくる私。そして1mあるかないかの距離で歩みを止めた。

熱く滾る胸の奥とは対象的に凍るほどの殺気に背筋が縮む。

身体は反応している。鞘から滑るように月下を抜き放つ一撃と直ぐに鏢迫り合いへと持ち込む。そしてその顔へと視線を向ければ、

狂気に歪む私の顔。まるで私の欲が全て集まったかのような顔つき……。視線が交差した瞬間お互いの力が弾け距離を取った。

動きが私そっくりだ…それに私より速くて剣圧が重い。それにあの剣。あれが、幻魔。私の意識の中で契約を交わした正体。不敵な笑みを浮かべる私は私へと飛び込ん

できた。何度刃を交えたのかは定かではない。いやむしろそんなことに意味はない。あるのはただの命のやり取り。

助けを借りたい気持ちもある。だが幻魔を一人で従えてこそ意味がある。だからここは私一人で倒してみせる。そう決めたのだ。

「例え相手が私であろうと負けるわけにはいかない」

剣をかわし、相手を中心にゆっくりと円を描くように回り始める。緩急をつけながら一定のリズムを保ち、徐々に円の幅を狭めていく。歩行技術のみで相手に錯覚を与える技法を用いて、死角からの連続攻撃によりダメージを与える作戦のようだ。力や速度が同じでも、技術までは真似はできないと判断した結果だろう。流れるような刃の煌きは神々しく儚い美しさだった。

まずは背後から一振り。この一振りで決まるなどとアセルスは思ってたなどいない。あくまでも本命までの繋ぎ。狙い通りに、背後からの攻撃に私はみごとな剣さばきで対応した。当然その場にいた私も真つ二つだ。だがそれは私ではなかった。

押し寄せるは波の如く。アセルスの幻影が次々の四方八方から押し寄せる。が、ただそれだけ。これもまた罠。私は的確に幻影を処理しているが、数の多さにアセルスを発見できていない。このわずかな時間にアセルスは集中力を研ぎ澄ましていた。技術の勝負ならば機会は一度。外すことなく確実に仕留める必要がある。だから選んだのはこの技。

気配を殺し幻影に混ざり、そして距離を詰めていく。そしてアセルスの前の幻影が斬り伏せられた時、可憐な花が咲きほこった。

### 「三花仙」

花卉が散るような可憐な太刀筋は確実に対象を消滅させるほどの威力を備えていた。だが……私はどうやら一筋縄ではない相手だったようだ。

「効いてない……か……」

驚愕の事実には思わず声を漏らすアセルス。それもそのはず、首をはね飛ばす一撃で放った刃を私に握られていた。そして月下は弧を描き、私の背後へと突き刺さった。

「まさか、これほどとはね……つく」

さらに驚くはフォートレスの起動を阻害されてしまったことだ。指輪を砕かれ、さらに、組みつかれ押し倒されてしまった。そして私に馬乗りされた状態になり逃げ出そうにも、身体が動かせない程の力で押さえつけられ、デバイスも手元にはなくどうすることもできない。白薔薇やイルドウンに力を借りることもできるだろうが、その方法は無しだと決めればかり。

「耐えてみせる」

そこからは無残だった。狂気に揺らぐ私は口元を上げ笑うと、アセルスの顔面を数十回にわたり殴打。なんの躊躇もなくただ殴り続けるだけだ。アセルスも顔面を防ぐことは流石に出来ず、途中で意識を手放してしまった。抵抗することもできずにただ殴打されつづけたアセルスの顔は見るも無残といったところか。そして、私はアセルスの

ジャケットを引き裂き、身体の全てをむきぼりはじめた。

身体から力は抜け落ち、白い肌は腫れ、赤く染まっている。眼に光が宿っておらず、瀕死なのは間違いない。

「幻魔に敗れた者は幻魔に身体を奪われる」

白薔薇がアセルスに伝えたことが今まさに起きようとしていた。私の身体の一部がアセルスに溶け込み始めていた。これが全て終わった時、アセルスの存在は死と同義を意味する。

駄目だ。勝てない、勝てっこない。一人で勝つと決めたばかりなのに。力が入らない。それに白薔薇以外に見せた事も、触れさせた事もない身体を私に似た何かに奪われるなんて。

この世界に迷い込んだ時以来、感じたことがなかった気持ち。「諦め、恐怖、絶望」それは簡単に心を塗りつぶし、希望を奪い取る。

数奇な運命に捕らわれたこの少女も、1人の女の子なのだ。気持ちを強く持ち、今ま

で諦めることなく戦えたこと。それは仲間の存在。

だが、今は1人で戦う。それはアセルスのとつて重く、苦しい決断だったはず。

だからこそ、

「立ちなさい、半妖の姫。貴女にはやるべきことがあるはずです。貴女は王にも届く資質を持つ者。ここで倒れるような貴女ではありません」

何もない、ただの光の中で、アセルスは何者かの声を聞いていた。だけどこの声は知らないはずなのにどこか懐かしく感じる声だった。

「貴女は王となることを拒むかもしれませんが。貴女には人として、半妖として、妖魔として。生きてもらわなければなりません。そして、貴女には成し遂げてもらいたいのです。私達ができなかつたこの想い。半妖の姫として狂わされたこの私達の無念と想い。貴女に叶えてほしいのです」

その想いは確かにアセルスに届いていた。この想い……それはアセルスも変わらな  
い。そしてなにより同じ目にあっていた者達の無念を……晴らすためにも。

「道は貴女自身が決めるのです。今だけは、力を……欲するのです。何にも負けない  
……王としての力を」

「願うよ。この気持ちを叶えるために。何より私自身の気持ちに応えるために！」

「妖魔化」

「鎧、具足、小手、召喚」

アセルスの身体から妖気が溢れ、容姿は色を変え、妖魔へと。鎧、具足、小手が召喚、  
装備された。殴られていた顔は腫れているが、その出で立ちは正しく王のもの。

アセルスに溶けていた私は強制的に排出され、幻魔を構えていた。意識を取り戻した  
アセルスの手には妖艶に輝く剣が握られていた。

「私が王として生きるかどうかは分からない。だがこの想いを果たすために。幻魔、私は負けるわけにはいかない!!」

火花飛び散るほどの激しい剣圧。凄まじい音と共に何度も斬りあつていく。途中、剣から何か爪のような斬撃も垣間見れた。今度は力も速さも同等まで引き上げられた。なら結果をもたらすのは己の気持ちのみ。負けたくないという強い気持ちだけ。

「アセルス様……本当にお強くなりました」

涙ぐむ白薔薇の隣、アセルスの妖魔の剣に浮かぶモンスターの姿がイルドウンには見ええた。

「あいつはとんでもないものを……」

それには白薔薇も気付いたようで、嬉しく驚愕する事実を目の当たりに。

「麒麟を宿していらつしやるのですね」

妖魔の剣に宿したモンスターは持ち主の能力を底上げする。アセルスの剣に宿るは、この世界でも稀少な麒麟。アセルスの優しさを体現するかのように、その剣に宿っていた。



「はあああああ」

剣を滑らせ、掴の部分まで走り、そのまま当て身で私の身体をぶらし、バックステップ。剣に魔力を込め、剣が地面をするようにアセルスが私へと走りだす。体勢が悪いなかでも反撃に移る私だが、振るわれた剣の先に姿はもうない。地面を走っていた剣が振り上げられ、私を空中へと持ち上げる。剣に込めていた魔力が私を包み込む。そして魔力球体に捕らわれた私をアセルスは下から切り裂いた。

「魔力と剣の融合技。ライジンググノヴァ」

魔力の球体は私の断末魔と共に消滅した。

もう一人の私は姿を消した。同時に幻魔が空中に静止しているだけ。そして力なく落下した剣は金属音と共に地面と思わしき概念に突き刺さった。同時に剣、鎧、具足、小手は音もなく消失していた。アセルスともう一人のアセルスとの戦いを見守っていた二人もやはり心配をしていたようですぐに駆けつけてきた。

「アセルス様、お見事です」

「流石だな、とでも言っておこうか」

相変わらずの二人に思わず笑みがこぼれる。それだけの激戦だったのだから無理はない。だがこうして幻魔との戦いに勝利することができたのは、ひとえに二人のおかげでもあったと言えるだろう。

「二人のおかげだよ。こうして勝つことが出来たのも二人が今まで私を見捨てなかつたからだよ。感謝してるよ」

二人に屈託のない笑顔で返すと幻魔を何気なしに引き抜く。すると、幻魔が光を放ち始めた。そしてまた視界が一瞬光に包まれ、次に視界に入ってきたのは私と同じくらいの女の子だった。

「この姿では初めましてですね、我が主。私は幻魔。主の命の結晶であり主の矛であり盾である存在。どうか私に名前を下さいませ」

先ほどの戦闘の後で、この話の為に急すぎて全然理解できていない私に、白薔薇が色々と教えてくれた。幻魔とは人を模した剣であり、従えると新たな名を与え、将来を主と共にする存在らしい。幻魔には主の能力を増幅させる力も備わっているらしく、便利なものらしい。ただ…不便なのは分からないが、幻魔が人型になった時、主にかな

り容姿が似てしまう。ただある程度は調整が効くらしいのだが、それでもかなり似るらしい。実際、前にいる幻魔もまた私に似ている。髪の色が深紅なぐらいか。

「ということはさつき戦つてた時は人型だったの!？」

「はい、そうなります。主なき状態では獣と同じです。先ほどは大変失礼いたしました」

色々あり過ぎて赤面なのだが、今はこの子に新しい名を与えなければいけない。さっきのことなんて結局はどうでもよいこと。私が私自身を従える為の戦いだったのだから。色々考えてはみたが、この子はいわば私の一部。ならばこの名がいいのではないのだろうか。

「幻魔、今から貴女の名はシシエル。シシエル、これからよろしくね」

手を伸ばし握手を求めればシシエルは満面の笑みを浮かべ抱きついてきた。よほど嬉しかったのだろう。

「貴女のような主で私は幸せです。シシエル……名をありがとうございます。我が主アセルス様」

私の唇はシシエルに奪われていた。そしてkissが終わりを告げるとシシエルは私の中へと溶けていった。

いつでも必要な時はお呼び下さいアセルス様。

なにやら色々かき回されたがこれにて幻魔の一件は終わった。後はこの迷宮から出るだけだ。

「アセルス、後はあの扉から外に出られる」

「なんだ、イルドウン。もう出口まで来てたんだ。早く教えてよね。さっ、早くこんなところ出てみんなと合流しないと」

シシエルが加わり、それに出口もそこにあると分かれば、これ以上に嬉しいことはない。疲れた身体も今はすっかり元気なようだ。

「アセルス様、一つお聞きしたいことがございます。よろしいでしょうか」

「何？白薔薇、そんなにもつたいぶらないで聞いてよね」

「では、アセルス様は今や妖魔の王にもなろうとできる存在になりつつあります。アセルス様……アセルス様は貴女様の未来をどう見ておられるのですか」

すぐに言葉は出てこなかった。実際に意識をしたこともなかった。でも私にしかこればかりは選べない。でも、最初から決めていたような気がする。私のこれからの選択を」

「私の気持ちは

だよ」

「アセルス様の気持ち。確かに受け取りました。アセルス様ならきつと素晴らしい未来を描かれることでしょう」

「アセルス、その気持ちを忘れるなよ」

二人の言葉に素直に頷き、最後の扉を開けた。そこには機動六課が映し出されている。

「ここをくぐれば、みんなのところに戻れる。さあ二人とも、行こう！」

「ああ、アセルス」

「はい、アセルス様」

扉をくぐると光に包まれた。もうすぐみんなの所に帰ることができる。白薔薇にイルドウン。力を取り戻した二人にシシエルがいれば、なんだって大丈夫だ。同意を得ようと後振り返り二人へと声をかける。

「扉が……消えていく!?!」

くぐった扉が消えていく。まって、まだ二人の中に。だがアセルスの気持ちを踏みにじる様に扉が消えてしまった。そして、

「アセルス様、私とイルドゥンはここに残ります。これが私達があの方に反逆した罪なのですから」

「ちよつとまつて、みんなで出るつて約束したじゃないか。それにそんなこと聞いてないよ」

「言つてなかったからな。ここ闇の迷宮は出ることは可能だ。だが、出る為には大切な人を置いていかなければならない。だからアセルス。お前を行かせた」

「どういうことか意味がわかんないよ。白薔薇、イルドゥン、私を一人にしないでよ」  
突如告げられた別れ。先ほどもまでの明るい気分はどこかへ。代わり、困惑が押し寄せる。

「アセルス様、決して貴女様は一人ではありません。六課のみなさま、それにシシエルも。決して一人などではないのです。それにアセルス様も御存じでしょう。我ら妖魔の時間は永いのです。気長に私達は待っています」

訳が分からな過ぎて、頭の中が真っ白だ。涙も止まらない。幼子が駄々をこねるかのように、「嫌だ、嫌だ」と泣き叫ぶ。しかし私は確実に元の世界へと引き戻される。二人の声も聞こえなくなってきた。どんなにあがこうともそれは決して変わらなかった。

「私を……僕を一人にしないでよ。まだ一人じゃ、なにもできないんだよ。ねえ、イルダウン……なんとか言つてよ。ねえ白薔薇……優しく微笑んでよ……ねえ……」

「白薔薇————」

涙で霞む視界の先に二人が見えたような気がした。二人はこう言っていたと思う。

アセルス様……どうかお元気で……と。

最後に見たのは、優しい二人の笑顔でした。



## 解明

地上本部並びに機動六課襲撃から一夜。たった数名の戦闘機人とガジェットにより管理局は半壊状態まで陥れられた。完全なる敗北。世界の法を握る者達は一人の思想の前に脆くも崩れ去った。

「全く脆くて仕方がない……そう思わないかい……ウーノ」

「ええ、ドクター。そう思います」

昨夜の感想を率直に述べる元凶でもある男、スカリエッティと戦闘機人ウーノ。二人は昨日の勝利など微塵も感じさせることなくコンソールを叩き続けている。二人の目の前には無数の調整ポットが並んでおり、どれもが調整液で満たされている。その中で浮かぶ裸の女性――ノーリ。

「ドクターも苦労されましたね」

「5年前から仕込みは完了していた。いずれ私の邪魔になるであろう八神はやてのもとに、記憶を封印しておいたノーリを送り込み、時間を記憶が解けた昨日に作戦を合わせること、こうして素晴らしい結果が得られたのだから」

肩を震わせ、狂気に満ちた笑いを浮かべるスカリエツティ。ただ今回、不満があるとすれば、タイプゼロを捕獲しなかったことくらいだろうか。

「だが、今となつてはそんなことなど、どうでもよい」

小さく笑みを漏らし最後の入力を終えた。ポットから調整液が排出され、調整を行っていたノーリが瞼を開く。ポットが開放されると、一糸纏わぬ姿のノーリは二人の前へと悠然な歩みを進める。

「ドクター、それにウーノ。調整は終わったのか？」

「ええ。身体の検査、及び、「眼」の調整は完了しています。いつでも戦線に復帰できる状態です」

「5年の間、調整を行っていなかった割には、問題無く作用していたみたいだ。我ながら自分の技術に惚れ惚れする」

「ドクターは相変わらずだな、そのナルシストは。それより、ティエラとラピスはどこにある」

「あるではなく、『いる』の間違いではないのかね。隣の部屋に軟禁してある。如何せん、君がいけないと意味がないのでな」

鼻であしらうとすぐに部屋を出ていくノーリ。5年前と何も変わらない様子だとお互い感想を述べる二人。

「やれやれ、私の研究の成果をノーリに聞かせたかったのだが……仕方ない、ウーノ、また聞いてくれたまえ」

「またですか？仕方ないドクターですね、ほんと」

「研究の成果は人に知ってもらってこそ意味があるという物だ。では、最初から話そうか」

今を遡り7年前、私の秘密研究室の入口前に一人の少女が倒れていた。身体中酷い傷と出血、それに左目が完全に無くなっていた……いや、抉り取られていたが正しいか。私はその少女を助けた。良心が痛んだのか……いや、私に良心などという物は存在しない。あるのは人体実験の良い材料が手に入ったと思っただけだった。

当時、稼働していたのはウーノ始めとする3体のみ。私はウーノと共に身体に有効なウイルスまたは移植など必要な人体実験を行った。だが、ここで信じられない事態が起こった。それは私の欲望をさらに沸き立てた。

瀕死の少女の身体は何に対しても拒否することなく適応したのだ。ウイルスに対する免疫を即座に生成し、また移植に対する拒否反応も自ら抑えていた。

この結果から…彼女の身体が特異体質であること。レアスキル「神に愛された身体」  
でも言ったところだろうか。さらに詳しく調べていくと、どうやら拷問に近いものを  
受けていたようだ。それが左目を失った原因でもあるようだった。普通ならば痛まれ  
ない気持ちなどが出るのだろうか、私には探究心が止まなかった。

ある書物に記載されていた事実。我ら人間がある生物と長らく戦い続けてきたとい  
うこと。そしてその生物の血液が偶然にもこの時代に保管されていることを知った私  
は、戦闘機人を用いて血液を奪取していた。

私は人の手で、化け物を作り出すことを長年試みていた。だが、今まで満足のいく結  
果は得られるどころか、全ての人間が制御の利かないただの化け物になり果てるだけ  
だった。だが、ようやく神は私に微笑んだ。残っていた血液をこの少女に輸血すればど  
のような結果が得られようか。だが私も貴重なサンプルをみすみす失う程愚かではな  
い。ならば今回この特異的な少女には是非試してみたいことが1つ。

## 化け物と機械の共存

この血液が例えこの少女であっても大丈夫かどうかは分からない。だが、1つだけ少女に足りていないもの……左目。ここならば問題はないだろう。私の考えは決まった。人間の眼球に戦闘機人の技術を使い、耐久や機能の充実を図った。そして少女に眼球を移植した。例え瀕死であろうとも、少女の身体は何も異変を起こすことはなかった。そして最後のサンプルを眼球へと注入した。

素晴らしい……その一言につきる。

少女は化け物になり果てることなく、ただ受け入れるのみにとどまった。ならば私がすることはただ一つ。少女の治療だ。

私の技術力を持てば、瀕死であろうと問題はなかった。少女は2日で元気な姿を取り戻していた。だが困ったことに、少女は喋ることもできなければ、私から逃げるばかりだ。こどもというものは扱いが難しいものだ。だが、ウーノはこの少女に懐かれることとなった。

私の力をもってすれば睡眠学習や刷り込みなどいくらかでも手段はあった。行動に移せばすぐに結果はあった。

少女には名前も無ければ親もいなかった。だから私は名前を与えた。番号無しの意味を込めた：「ノーリ」という名を。

しかし、ここから何も変化は得られなかった。ノーリは成長はするが身体に飛躍的な影響をあゝの血が与えている様子は見られなかった。移植した左目にもこれといって変化が無かった。

それから2年が経過した。私は来るべき時に備え着々と準備を進めていた。この間にも戦闘機人の数は増えていった。ノーリを家族といった形で一応育ててはいた：がほぼウーノに任せきりだが。戦闘機人達との戦闘訓練は毎日欠かさず行わせた。何かの足しにはなるだろう：その程度にしか考えていなかった。

だが……ある日を境にそれは一辺した。

私のラボに堂々と侵入してきた者が居た。そいつは私にこう言った。血を受けた者に力を欲させよ……と。

それだけを残してその侵入者は消えた。人の言うことを素直に聞くことなど癩だが、

探究心には勝てなかった。ノーリと戦闘機人達の連続の訓練。負けても負けても止めることはなく……ただ続けられた。

何も無ければ殺して構わない。それが私が下したオーダーだ。期待はしてはいなかった。だが、またしても期待は裏切られた。もちろん良い意味で。

死を直前にしたノーリから溢れだした魔力。

爆発的な魔力の上昇、そして突如現れた2本の剣。そしてなにより顕著な変化は左目。

顔をあげたノーリの左目は妖々しく紫紺に染まっていた。

「素晴らしいじゃないか！」

私の胸は躍るばかり。そしてその侵入者は私のもとにまた現れた。

「少女が力を求めたことで、血が目覚めた。それにあの娘は特異なようだな。ふむ……面白い存在になりそうだ。それにあれを2本従えるとはな」

言いたいことを言うともたしても消えてしまった。だが私にはそんなことはどうでもよかった。何も変化が無かったノーリに爆発的な変化が得られたのだから。

そこからの訓練は立場が一辺。ノーリ一人に誰一人として勝つことができなくなっていた。だが、力に目覚めたばかりではレアスキルありでも辛いところだった。だがそれも予想はしていた。眼帯型のリミッターと眼球に組みこんでいた魔力調整装置。この二つを持って、力のコントロールに成功した。

私のプランは急展開を見せた。ノーリが戦力として計算が立つこと、なにより人としての機能を左目以外完璧に保持していること。これが意味するはつまり……長期間に渡る潜伏が可能であること。

最近私を調べ回している者がいるらしいので気になって調べたところ、なんとあの「フェイト・テストロツサ」だった。これには私の心が震えずには居られなかった。さらに、テストロツサと親交の深い、この「八神はやて」。これもまた体内にロストロギアを保持するレアな存在だった。この少女がみるみる出世をしているところからすると、近いうちに私に牙をむく存在になりかねん。そう判断しうる最近の現状だった。



だから私はノーリを八神はやてのもとに潜伏させることにした。ノーリに作戦を説明すると、すぐに承諾はした。だが、どこからか連れてきた男の子と女の子がノーリの傍らにいた。ノーリは、この二人も連れて行きたいといったが、私は怪しまれる可能性があるために断り、得体のしれない二人を軟禁した。

ノーリの記憶を封印。そして記憶喪失の少女へと作り上げていく……さらに眼帯を人前で外さない、身体検査を受けないことを刷り込んだ。最後に記憶の復活を時間指定。時間はそう……5年後の今。

最後に事件に巻き込まれ、一人身になったという状況を作り上げるために、これを使った。

ジュエルシード

小規模な次元振を伴う大規模な爆発を起こさせ、そこにノーリを送り込んだ。

そして思惑どおり、ノーリは八神はやてに保護され、今に至ったというわけだ。

「どうだい、ウーノ。やはり完璧ではないだろうか・・・ん？誰もいないではないか」  
どうやら途中で飽きた様子で、ウーノは出て行ったようだ。それには激しく同意した  
いところだが。

「まあかれこれ100回くらいはウーノには言ってきたものだ。さて、ノーリは隣か」  
モニターを開くと隣の部屋の様子が映し出されていた。

鎖で縛られている幼い二人の男女……「ティエラ」と「ラピス」

二人とも疲れた様子でぐったりとしている……が、ノーリを見た瞬間、それは一気に  
変わった。

「ご主人様!!」

鎖に捕らわれた二人は鎖を忘れたかのように身体を振って、ノーリに近づこうとする。  
だが鎖といつてもスカリエッティ特製なために見た目以上に頑丈なのだ。

「ふふ……二人とも、私が留守の間、いい子にしたかい……まあ我慢の限界のようだけ  
ど」

「ご主人様、5年も待ったんです。早く……ご主人様……」

双子とも見えるそっくりなティエラとラピス。ノーリが二人の元へと近づき、そしてノーリが二人の頬へと手を差し伸べた……それが合図になった。

三人は5年の空白を取り戻すかの如く、舌を絡め、唇を貪っていた……

ティエラとラピス……5年前に現れた謎の人物……だが主の帰還に伴いあるべき姿へと戻った……

二対の剣……ただ剣にしては少々大きいのだが……それに、重さが尋常ではない。だがノーリからすればなんの重さも感じてはいないのだろうか。軽く素振りを行うだけで部屋の中の鎖やコンテナは両断されていた。

「ノーリ、忘れものだ」

急に部屋に来たドクターから投げ渡されたのはバッテリーのような物。だがこれの使い方は分かった。

「こんなもの私にしか使える者はいないからな。ありがたく貰っていく」

「ああ、君なら大丈夫だろうが、無理はしないでくれたまえ。まだ本番ではないのだから

な。それと部屋をあまり壊さないでくれ」

「それと眼帯はもう必要ないだろう。つねにあの力を使ってくれたまえ」

そう言い残し、部屋に戻れば、そこには懐かしい侵入者の姿が。

「久しぶりだね、ドクター」

「久しぶりだね、君」

そんな他愛もない挨拶を終えた二人はすぐに用件を言い終え、また部屋にはスカリエツティ一人となった。

「私のほうは何も抜かりはない。後はそちらだけだ……」

それに……私の手にはジョーカーもあるのだな……

裏切りは……なしだよ。

黒い笑みを浮かべ、狂気に酔う科学者の姿があつた……。

## 死別

「アインヘリアルルの破壊を行う……か」

ぼつりと言葉を漏らした男「ゼスト・グランガイツ」は歩みを進めた。

八年前の事件の真相を聞く為に、こうしてスカリエツティ達に渋々ながらも協力している。だが、時間の経過と共に、彼の心境には変化が見られた。ルーテシア、アギトと過ごした日々。そしてレジアスが何も目立った行動を起こしていないこと。

「レジアスの口から真相を聞くまで……この身体が持てばよいのだが」

今回のレジアスが先頭に立つて開発を進めてきたアインヘリアルルの破壊。スカリエツティからも参加の要請はあった。だが、今回の機会は千載一遇の機会でもあった。レジアスの周囲の警戒が薄れる今ならば、奴に接近するのも容易であろう。回答は至極簡潔、「断る」であった。

「この時間ならば、ちょうど破壊が始まる頃合いだろう。先ほど流しておいた情報で、部隊も出払っている今が好機」

フードで頭を覆い隠し、魔力を抑えながらも急いで裏口から地上本部へと。

予想通り、警備も手薄な状態な為に、これといった障害も無く、レジアスの部屋まで到達することができた。

「あの日から、二度と此処には来るまいと思ってはいたが……、最近の地上本部には幼子までいるとはな……。しかし、それも今日で終わる」

1つ呼吸を置いて、目の前の扉を開ける。そこには、八年前の親友の姿がそこにはあった。

「ゼストか……遅かったな」

「勘の良さは流石といったところか」

背を向けるレジアスはこちらを見ずとも、訪問者がゼストであることを見抜いていた。まるで待ちかねていたかのように。ゆっくりと踵を返し、二人は漸く八年ぶりの対面を果たした。

「聞きたいことがある」

「八年前のことだろう」

もはや何も言うまい。奴は覚悟を決めているのだ。ならば俺自身、奴の言葉を聞くしがあるまい。八年前の真実。それを知る為に生き永らえてきた。

それから10分程、俺は八年前の真実を聞いた。予想していた通りではあった。だが、奴にもこの八年間の間に、心境の変化があったようだ。何よりも……自らの罪に對しての後悔。これは奴の行動を変えた。

「なるほど……。俺が生かされていることを知っていたから、ここまで目立った事はしなかったわけか」

頷きを確認すれば息を吐き、気持ちを整理する。憎しみ、恨みなどは捨ててきた。今の気持ちには何も無い。俺の生きる意味はここで終わったのだから。

「俺が聞きたかったのはそれだけだ。邪魔をした」

八年前の真実、それに奴の心を知る事ができたならば、俺に思い残すことはない……ただあるとすれば……

「はああああ!!!」

槍型デバイスを緊急起動し、背後をなぎ払う。少し音立て床に有機物が落ちた。視線を先にやると、すでに人の姿を捨てた親友の変わり果てた姿があった。

「ぐふふううう、八年……我慢したのだ……、親友（とも）よ……俺を討て……人として、俺を殺……」

常に冷静沈着な彼も、この状況に戸惑いをみせていた。何故、このような姿になっているのか理解できなかった。だが、レジアスは俺を殺しに掛かってきている。それに最後の言葉……

レジアスという人間は死んだのだ。

「……すまぬ」



腕から伸びた鋭い爪とデバイスがぶつかりあう。ステップと、デバイスを組み合わせ、間合いに入ろうとするが、爪の長さ、重さ、振るう速さ。どれにも手こずり、決定打を与えられずにいた。

アギトを置いてきたのは幸いだったか……。だが、友として、成すべきことは一つ。

「真向勝負」

身体の内側に力を込め、全ての力を開放しよう……

そんな矢先

レジアスだった物の首が落ちた。

構えを解き、状況の把握に務める。床に倒れ、血を流す胴体の後ろには、爪に付着した血を舐める女性が一人。

「……戦闘機人か」

「騎士ゼストですね？お話はお姉さまから聞いていました」

秘書としてこの部屋にいた女性。しかし、その姿は青いボディスーツ、桃色の髪へと変わっていた。

こんなところまで、戦闘機人を忍ばせていたか……ジエイル・スカリエツティ。

レジアス……今は静かに眠れ。いずれ……俺もそちらに逝く。

「1つ尋ねたいことがある。いつからレジアスのもとに居た」

「確か、8年前からですか」

デバイスを持つ手に力が籠る。全ては今繋がったのだ。

「太古の昔から、人間との抗争が続いてきたとされる存在。そして奇しくもこの時代に残されていた物。そしてそれを人体実験として使用した計画……。人と人成らざるも

のとの共存、そして支配」

「八年前のあの日より以前から、レジアスに何をしていた!？」

デバイスを突き付け問いただすと、彼女は全てを吐露した。妖魔の血を永い時間かけて人に投与し、その結果を観察していたこと。そして、役に立たなかった物を始末すること。

「八年……この事実を伝える為に……。レジアス、待たせたな」

「フルドライブ」

正確無比の神速の一突きは、戦闘機人の心臓のみ体外へと突き出していった。

「え……何?!、一体何が……」

胸に開いた穴に手を当てる……そして心臓が鼓動を止めた。

鼓動が消えたことに連動するように、目から光が消え、その場に彼女は崩れ落ちた。

「ぐっ」

フルドライブを解除したと同時に胸に激しい痛みが襲いかかる。今回は今までとは比べ物にはならない……限界が目前にまで近づいていることを告げるかのように。

「限界……のようだ。だが、ルーテシアを……まだ助け出してやらねば……」

残された想いのみが身体を支え続けている。まだ彼にはやるべきことが残されている。今はつきりと自覚したのだ。ルーテシアを救うこと。残された命はそのためにおうと……。

「感動の再会は終わったのか？」

全身で感じ取れる程の殺気……。振り向くこともなく距離を取った。禍々しいまでの殺意……。今までにも相対したことがあるかどうか……。それほど殺気だ。

痛みに耐え、デバイスを構える。その視線の先に立っていたのは、

「ノーリといったか。何故ここにいる」

「何故？もちろん反逆者を始末するためだ、騎士ゼスト。これ以上語る必要はあるまい」  
スカリエツティも抜かりはないということか。どうやら俺の成すべきことはばれていたか。だが、それは承知の上。

ノーリが手にする大剣……。それは生物と機械の融合が成した歪の物。見た目よりもその剣から感じられる魔力……。そして鼓動。

「生きている剣とはまた奇妙なものを使う……。だが俺はまだ死ぬわけにいかぬので

な」

視線による視線の誘導によって一瞬の隙を作ると、壁を破壊し、廊下へと飛び出す。それについてノーリも廊下へと飛び出してきた。

ゼストに映るは死体の山。出払っているとはいえ、警護の者も少なくないはずだったが……先程から来ない理由はこの死体の山が答えだ。

「勘違いをしては困るな。私は何もしてはいない。それよりも、貴様もこの山の一部に変えてやろう」

得物と得物の衝突が沈黙を破った。大剣を振るっているとは思えない速度で扱うノーリに驚くも、技術的な面においては差があることをゼストは感じ取っていた。攻撃のパートナーが数種類程しか存在しないこと。また魔法を使用しないことから、対処は容易であった。

フェイントの使い方が甘い。視線が全てを教えてくれる。それに捌きもまだまだ。だが幼稚とはいえ、実力が未知数な以上は先手を取って終わらせるのみ。

上段をわざと空けておき、そこに攻撃を誘い込む。当然、その空間を狙い、大剣は振り下ろされる。それを狙い、刃で逸らすと、石突で、ノーリの腿を貫いた。機動力を削ぐことは今の状況下では必要不可欠。ならばこちらから仕掛けて削ぐまで。

「悪いが、まだ成すべきことがあるのでな。死ぬわけにはいかん」

腿から血を流すノーリに告げるとその場から立ち去ろうとするが、それを許してはくれないのがこのノーリだった。

「やはり、技術は勝てないか……。それに魔力量が少ないのは困ったものだ。だが……」  
腰から取り出したのは首にちょうど取り付けれそうなバッテリーのような物。そして躊躇することなく、首に装着した。

溢れるは莫大な魔力……。この廊下……。いや、建物自体に溢れそうなのこの魔力は!!  
「レリックを使ったか!？」

「流石は騎士ゼスト、これもドクターが作ったもの。ただこれは私専用だ。他が使うと死ぬことになる」

レリックから溢れる魔力を受け止めることがノーリにはできた。彼女のレアスキルとも呼べる体質のおかげで。これにより、ノーリの魔力はEXと判定されても問題ないレベルにまで達する。そしてこの魔力を身体の強化に充てれば……

「魔力を身体強化に用いたか……」

傷は塞がり、また動きが一段と軽やかに感じ、振る大剣もまた心地よい風を切つていた……のだが。

ノーリは大剣を自らの心臓の位置へと躊躇なく付き立てる。だが、血は飛び散る事もなく、身体を貫通することもなく、ノーリの身体に飲みこまれていった。

肌を感じるの、歪んだ魔力。それは人成らざるものの証。

「テイエラ、シンクロだ」

はい、ご主人様

紫紺の左目に妖艶な光が灯った……。髪の色もまた、銀から紺碧に染まった。人によつて生み出された妖魔と人、そして機械によつて繋がれた姫。ノーリもまたそうなの



だ。

「妖魔化」

妖魔としては不十分で、妖魔の血が通ったのは眼だけであるが、それでも効力は全身に及んでいる。

軽く指を曲げ伸ばし、床を蹴った。

「さあ、続きを始めようか」

今度は小手のみで、ゼストを強襲する。だが、大剣を使っていた時とは違い、速さ、重さが半端ではない。柄でいなし、ステップで避けるが、重く、寸前で辛うじて避けられているといった状況に置かれている。

廊下という空間で戦っている以上、速度はそこまで気になるものではない。だが、大剣のほうがこちらとしては都合がよかったが、素手となると何かと辛い。

「懐にさえ入らせなければ、どうということはない」

身体能力を強化したといっても、技術が解消されるわけではない。ならば、相手にあわせて、カウンターを取る。それが有効だ。右拳廻打の後、回し蹴りが来るのがパターンに見えていた。ならば、その右拳廻打の為に距離を詰める瞬間に合わせる。

攻撃をギリギリでいなし続け、パターンに入る行動へと持つていく。そして、足に力が入る瞬間を逃さず、同時に飛び出し、デバイスを心臓への確に突き出した。視線が交錯し、ノーリのしまったという表情が見ていた。ノーモーションから突き、それに飛び出しに合わせたこのカウンターならおいそれと避けられることはない。

繰り返されたデバイスは的確に心臓の位置を貫いていた。

「はあ、はあ、手ごわい相手であった。しかしまだこの命、くれてやるわけにはいかんでな」

デバイスを引き抜き、建物から出ようと歩みを進めた……その時だった。

「私は今、欲しいんだ。騎士ゼスト、貴様の命がな」

苦痛に顔が歪む。何が起こったのか分からない。ただ、右の脇腹に死んだはずのノリの拳が叩きこまれていた。

「がはあああ」

油断したその身体は床を二度跳ね、壁にめり込む形に。

「油断するとは貴様らしくもない。そんなに私の心臓を刺したことが気にいったか？」  
デバイスで身体を支え、なんとか立ちあがる。脇腹の激痛からすると、骨は持っていないかたようだ。

「確かに、心臓を貫いた感触はあった。だが何故貴様は生きている……」

「教える必要はない。貴様の身体は一撃で悲鳴をあげている。立つこともままならんだろう……早く楽にしてやる。逝け」

渾身の右拳廻打がまさに叩きこまれる寸前。ゼストの姿は無かった。

「貴様を倒さんことには、俺に未来はない。ならば貴様を倒して絶対に生きて目的を果たすまで」

ゼストの選択は二度目のフルドライブ。身体は軋み、満足に呼吸も儘ならない。持つて一分が限界だろうか。だがそれだけあれば十分だろう。

「真向勝負！」

軋む身体に鞭を打ち、倒すべき相手に相対する。まずは、突きを持って、間合いの主導権を取りにかかると。だが、それを嫌って、一気にインステップで懐に飛び込んできた。脇腹の痛みがどうしても一瞬の動きを鈍らせる。そしてフルドライブの反動が確実に身体を蝕んでいく。懐に入られるも、慌てることなく、全てデバイスで処理を行う。肉体で受ければ、骨は持っていられる。

裏拳を刃の面で受け、足払いを石突で止める。止まった瞬間に、デバイスを支えに回し蹴りを顔面へと放つ。手でガードされることを見越し、そのまま回転を利用してデバイスで斬りかかるも、バックステップで避けられてしまう。

ゼストは読みとカウンターを。ノーリは速度と破壊力で。相反する二人の戦いは30秒にも満たない間だが、すでに二人には数分は闘ったように感じる。

激戦の中、場所を扉の近くへと少しづつ移動している最中に、扉から少女が現れた。

「あれは、先ほどの幼子か。くっ！」

ノーリの放つ拳を避けるように庇い、扉の向こうへと転がりこむ。

「大丈夫か？ここは危ない、早く逃げろ」

残された時間は20秒足らずというのに、庇ってしまうのはやはり、ルーテシアの存在が大きいこと。なによりまだ自分に人としての心が残っている証拠でもある。

「ふえええ、おじさん大丈夫？」

「ああ、それより早く逃げろ。次は庇ってやれん」

「おじさんは、私を守ってくれるの？」

「ああ、そうだ。時間がない……急げよ……」

ルーテシアの一瞬重なるも、すぐに現実を見つめ、幼子を逃がそうとする。すぐ目の

前にはノーリが現れている。

「騎士ゼスト、最期に言い残すことはあるか？」

「勝ったつもりでいるのならば、油断というもの」

去りゆくであろう幼子を背中で見つめ、倒すべく相手に残りの時間を全力でぶつける。そう決めた。例え、一分経とうとも、命涸れるまで闘い抜かなければ……ルーテシアの命も救えはしない。

「いざ、尋常に勝負!!」

「ならおじさんは私の敵だね」

生温かいものが身体の表面を伝わって行く……そしてゆっくりと、地面へと垂れていく……。

背後から心臓への確な一撃。騎士ゼストの命を幼子の刃が貫いていた。

「……がはあ、な……なぜ……」

「遅かったなラピス。いままで何をしていた」

「あ、ご主人様！今まで、人間さんと遊んでもらってたんだよ。ほら、ご主人様!!」

振り返れば、そこにもまた転がるは死体の山……。どうやら増援がなかったのは、この幼子が原因か……

吐血、出血によりまともに喋ることはもちろん、意識は薄れ、命が尽きる寸前まで来ている。

「はあ……はあ……」

「ここまで苦しめたせめてもの情け。首を落として終わりにしよう。ラピス！」

「はい、御主人さま!!」

二人の唇は重なり、お互いが貪るように絡めあつて行く。そしてラピスと呼ばれる少女は人の形を捨てた。次に現れるはまたしても大剣。だが、形状は少しことなっている。

「これが私の可愛い下僕達。では、騎士ゼスト。さようなら」

振り下ろされた大剣が首元に降ろされる。

だが……

よしとしない者はこの場に間に合っていた。



突然の閃光。視界が奪われた瞬間、大剣が金属音を響かせた。

そして……視界を取り戻したときには、騎士ゼストの姿は無かった。

「……逃げられたか。だが、もう助かることはないだろう」

バッテリーを外し、シンク口を解除し、妖魔化を終える。さすがに疲労が押し寄せたように、膝を着いた。

「ご主人様!？」

「大丈夫だ。それよりも帰るぞ。ここに用はない」

「はい！」

地上本部……出払っていた者以外、今日を持って、命を手放すこととなった。